

# 鹿児島県史料

旧記雑録拾遺  
神社調二

## 解題

本書は昨年度に引き続き、東京大学史料編纂所蔵『神社調』「薩摩国西部二六」を『鹿児島県史料 旧記雑録 拾遺 神社調二』として刊行するものである。『神社調一』の解題では、薩摩藩における廃仏毀釈と『神社調』編纂との関連性や刊行の意義、『神社調』の構成と編者の問題、使用された資料などについて解説している。今回は、これと若干重複するところがあるが、別の角度から『神社調』の全体にわたる問題について述べていきたい。

まず始めに『神社調』がどのような意図をもって編纂されたのかを、構成の面からみていこう。『薩藩名勝志』や『三国名勝図会』のような薩摩藩編纂の地誌の場合、あらかじめ諸郷に調査項目が通知され、各郷から書き上げられた冊子（名勝志・再撰帳）を基に、実地調査、絵図作成等がなされていたが、項目の種類や配列の仕方など一定の基準があったことが見て取れる。このような計画的な編纂方針が『神社調』においても立てられたのかどうかということが問われる。

本解題では『神社調』を「府内及各郷」とそれに続く「鹿児島部」「薩摩国西部」「大隅国西部」「日向国諸県郡西部」の二つに分けて、それぞれについて構成とそこから見える編集意図を検討してみたい。

まず「府内及各郷」であるが、これは鹿児島城下とその近郊、および薩摩国・大隅国・日向国諸県郡内の各郷に鎮座する神社を、神社名、祭神、祭日、神主・別当、石高、祭料、由緒、社殿などの基礎的な情報を、精粗はあるが一定の基準で配列している。寺院の記述はあるもののそれは限定的であり、まさに『神社調』という名にふさわしい内容になっているとも言えるだろう。神仏習合の時代であるから、別当寺の名前が出ているが、あくまでも神社を主体において記述がなされているからである。しかし一方で、記述がない神社は多く、府内および諸郷の神社が網羅的に書きつらねられているかというやや疑問が残る。例えば、ここには、諏訪、祇園、稲荷、春日、若宮

という島津氏が尊崇した、いわゆる「鹿児島五社」が網羅されておらず、春日神社と若宮八幡宮が見えないことである。また、下伊敷村の宇治瀬神社（現在の鹿児島神社）も登場しない。諸郷のうち取り上げられている神社数にもばらつきが見え、例えば、大隅国の国分郷では正八幡宮など十一社、末吉郷は憶大明神を筆頭に七社が挙っているが、数多く掲載する郷がある一方で一、二社しかない郷がある。

こうした不均衡・不完全さは他にも多々見られるところであるが、編纂意図を考える際には、このような不完全な形をどう捉えたらよいのであろうか。これを編纂途中段階のものとする見方もあり得るであろうし、明確な編纂意識を持たない（たとえば備忘的な）記録とみることもできるかもしれない。いずれにしても右のような不完全さについては『神社調』の性格を考える上で押さえておくべき要点であることを指摘しておきたい。

さて、この「府内及各郷」の部分はそのように配列されているのだろうか。表1は各郷の配列を、『三国名勝図会』、『神社考』（枚聞神社蔵）と比較したものである。この『神社考』が本田出羽守親盈の著作であることは前回の解題にあるとおりで、別名として「三州神社考」「三国神社考」ともいう。なお、現在本文が確認できる枚聞神社蔵本『神社考』は三巻のうち、上巻に当たる薩摩国の分を欠いているため、中巻の大隅国、下巻の日向国で比較している。これを見ると、『神社考』の配列と「府内及各郷」の配列がほぼ一致していることがわかる。一方、『三国名勝図会』の配列はこれらと大きく異なっている。両者とも鹿児島・吉田・伊集院までは共通するものの、「府内及各郷」は日置郡の伊作に飛び、薩摩半島西海岸を南下して田布施・阿多・加世田と続き、以下反時計回りで薩摩半島を一周しその後北上する。これに対し、『図会』は永吉・吉利・日置・市来と続き北薩を回った後、谷山から薩摩半島南部を時計回りに配列している。大隅国では「府内及各郷」『神社考』ともに重富郷から始まり、始良郡のあと、湯之尾・馬越など北に向かい、その後南下して国分、福山を経て大隅半島の中部から鹿児島湾沿岸を通り東に向かう点で共通する。『図会』は国分を最初に置いている点で大きく異なっている。こうして比較すると、「府

解題

(表1)『神社調』『府内及各郷』と『神社考』『三国名勝図会』との郷の配列の比較

神社考 (枚聞神 社藏)	同・巻	神社調 「府内及 各郷」	同・巻	三国名 勝図会	同・巻	神社考 (枚聞神 社藏)	同・巻	神社調 「府内及 各郷」	同・巻	三国名 勝図会	同・巻
		府内	(上巻)	鹿兒島	(二～七巻)	湯之尾		湯之尾郷		噌喚郡 (一)	(三十三巻)
		吉田郷		吉田	(七巻)	馬越		馬越郷		噌喚郡 (二)	(三十四巻)
		伊集院郷		伊集院	(八巻)	曾木		曾木郷		敷根	(三十五巻)
		伊作郷		永吉		栗野		栗野郷		福山	
		田布施郷		吉利		横川		横川郷		財部	
		阿多郷		日置	(九巻)	日當山		日当山郷		末吉	(三十六巻)
		加世田郷		市来		踊		踊郷		恒吉	
		坊泊郷		郡山	(十巻)	吉松		吉松郷		市成	
		鹿籠郷		串木野		國分		國分郷	(中/下巻)	加治木	(三十七巻)
		山田郷		百次	(十一巻)	噌喚		曾於郡郷		帖佐	(三十八巻)
		川辺郷		隈之城		清水		清水郷		重富	(三十九巻)
		知覧郷		高江		敷根		敷根郷		蒲生	
		穎娃郷		平佐		福山		福山郷		山田	
		山川郷		山田		末吉		末吉郷		溝辺	
		指宿郷		樋脇		恒吉		恒吉郷		日当山	(四十巻)
		今和泉郷		入来	(十二巻)	市成		市成郷		踊	
		喜入郷		中郷		財部		財部郷		横川	(四十一巻)
		(知覧郷)		東郷		櫻嶋		桜島		栗野	
		谷山郷		水引 (一)	(十三巻)	牛根		牛根郷		吉松	
		川辺郡 碓黄島		水引 (二)	(十四巻)	垂水		垂水郷		本城	(四十二巻)
		川辺郡 黒島		高城		大根占		大根占郷		曾木	
		川辺郡 竹島		阿久根	(十五巻)	小根占		小根占郷		湯之尾	
		郡山郷		野田		佐多		佐多郷		馬越	
		野田郷		高尾野		田代		田代郷		櫻島	(四十三巻)
		市来郷	(上/中巻)	出水	(十六巻)	鹿屋		鹿屋郷		牛根	(四十四巻)
		日置郷		長島		新城		新城郷		垂水	
		永吉郷		大口	(十七巻)	始良		始良郷		小根占	(四十五巻)
		吉利郷		山野		大始良		大始良郷		大根占	
		串木野郷		羽月		花園		花園郷		田代	(四十六巻)
		高江郷		鶴田		高隈		高隈郷		佐多	
		山田郷		佐志		百引		百引郷		百引	(四十七巻)
		入来郷		宮之城	(十八巻)	串良		串良郷		高隈	
		樋脇郷		黒木		高山		高山郷		新城	
		東郷郷		山崎		内之浦		内之浦郷		花園	
		中郷郷		大村		屋久嶋		馬岡田郷		鹿屋	
		平佐郷		蘭牟田		吉田	(下巻)	吉田郷真幸		串良	
		隈之城郷		喜山	(十九巻)	馬岡田		加久藤郷		高山	(四十八巻)
		山崎郷		谷山	(二十巻)	加久藤		飯野郷		始良	
		蘭牟田郷		知覧		飯野		須木郷		大始良	(四十九巻)
		黒木郷		指宿	(二十一巻)	須木		小林郷		内之浦	
		大村郷		今和泉		小林		野尻郷		屋久島	(五十巻)
		宮之城郷		山川	(二十二巻)	野尻		高原郷		種子島	(五十一巻)
		佐志郷		穎娃 (一)	(二十三巻)	高城		高崎郷		吉田	(五十二巻)
		鶴田郷		穎娃 (二)	(二十四巻)	高原		庄内都城郷		馬岡田	
		羽月郷		川辺	(二十五巻)	高崎		大崎郷		加久藤	
		大口郷		山田		都城		松山郷		飯野	(五十三巻)
		山野郷		鹿籠		大崎		志布志郷		小林	(五十四巻)
		高城郷		坊泊	(二十六巻)	松山		山之口郷		須木	
		百次郷		久志秋目	(二十七巻)	志布志		勝岡郷		野尻	
		水引郷		加世田		山ノ口		高城郷		綾	(五十五巻)
		阿久根郷		碓黄島	(二十八巻)	勝岡		高岡郷		高岡	
		出水郷		黒島		高城		綾郷		倉岡	(五十六巻)
		瓶島		竹島		高岡		穆佐郷		帖佐	
		出水郡長島		七島		綾		倉岡郷		高原	
		重富	(中巻)	阿多	(二十九巻)	穆佐		倉岡郷		高崎	(五十七巻)
		帖佐		田布施		倉岡				高城	
		蒲生		伊作						山之口	
		山田		瓶島	(三十巻)					勝岡	
		加治木		國分 (一)	(三十一巻)					都城 (一)	(五十八巻)
		溝辺		國分 (二)	(三十二巻)					都城 (二)	
		本城		清水						松山	
										大崎	
										志布志	(六十巻)

内及各郷」が『神社考』の影響を強く受けていることが窺えよう。

『神社考』（枚聞神社蔵本）

惣領守  
天満大自在天神 在諸県郡吉田郷水流村薩城ヨリ北ニ  
去事十五里

祭神

北野二同

十月廿日

一祭料一斗七升五合

一当社勸請之年曆不詳

一義久公御筆拾首之和歌アリ

一忠平公光久公御連歌アリ

一神領高二十斛目錄アリ慶長十九年七月副状

社職  
押領司氏

「府内及各郷」

水流村惣領守  
天満大自在天神 社司  
押領司早太左衛門

祭神北野同 祭祀十月二十日

一祭米一斗七升五合

一当社勸請年曆未詳

一義久公御筆十首和歌有、 忠平公 光久公御連歌有、

且神領高二十石目錄有、慶長十九年七月副状有、

右は日向国諸県郡吉田郷真幸水流村の天満大自在天神の記述を並べたものである。細かい違いがあるがほぼ同じ内容を有していることがわかる。「諸県郡之部一」の吉田郷の同神社の項にも『神社考』が引用されているため、「府内及各郷」の記載でも『神社考』を踏まえて書かれたことが推測される。

「府内及各郷」においては直接的に『神社考』を典拠として掲げていない。これは、後述の鹿児島・薩摩国・大隅国・日向国諸県郡の記述においてしばしば典拠を示しつつ『神社考』を引用するのとは著しい対照を見せて

いる。また、「府内及各郷」に見える祀官、社司、社職、大宮司、神主、祝の名はいつの時代のものであるのかを探ることによって、この『神社調』の当該部分の成立時期あるいはその性格が明らかにならないであろうか。編纂時から見て過去の情報を記しているのか、それとも同時代の情報を収録したものであるのか、それによって由緒などの過去の記録を重視したものか、それとも由緒などを記しながらも現在の状況を記そうとしたのかを推測する手がかりとなるであろう。

本稿の執筆に際しては資料の限界もありこれについて十分に調査することができなかったが、右の点に関していくつかの例を示しながら考えてみたい。

近世期、神職を務めた家の史料から、「府内及各郷」の記述について探ってみよう。大隅国肝属郡高山郷の惣鎮守、四十九所大明神の社司を代々務めていたのは『守屋舎人日帳』で有名な守屋家である。「守屋家系図」(『守屋舎人日帳 十一』所収)によれば「府内及各郷」に名が出る守屋和泉は宝永元年(一七〇四)生まれ、明和三年(一七六六)に没した守屋立国に当たる。その子良国は舎人・靱負、孫の良易は弾正、曾孫の重克は舎人・靱負といずれも「和泉」と称していない。これは「府内及各郷」の神官の情報に幕末以前のかなり古い情報が入っている可能性があることを示唆している。

もう一例、加世田郷の惣鎮守である鷹屋大明神の例を見てみよう。同社は「府内及各郷」では「社司 鮫島和泉 当家督 市正」となっている。また、同郷片浦にある野間権現も鮫島和泉が社司を務め、「郷士社家片浦居住」と肩書して「宮原大助」が現地に詰めている。薩摩藩の地誌『薩藩名勝志』(文化三年序)巻六には「社司 鮫島三 太夫 代宮司 宮原大助」とある(因みに『三国名勝図会』では「鮫島氏」)。「薩藩名勝志」編纂のために書き上げが行われた『(加世田)名勝志』(上東三郎編『加世田名勝志』、平成十七年、加世田史談会)では、「社司 鮫島市正、大供司 宮原大助」と見える。神職は郷士の有力者が務めていることが多く、ほとんど世襲で継承される

ものと考えられる。『川邊郡地誌備考 下』（鹿兒島県史料 地誌備考一）所収）鷹屋三社大明神の項には「司仁禮覺兵衛 社司 鮫島直衛」とある。代替わりの際に通称（受領名）が受け継がれる場合（本田出羽守など）があるため判別が難しいが、右の守屋家や鮫島家のように代によって通称が異なる場合にはおおよそ通称によってその時代を特定することができる。加世田の鮫島家の場合は、和泉↓市正↓三太夫↓直衛と受け継がれていたことが推測され、市正が当主（当家督）となっていたのは寛政期あたりではないかと推定される。したがって「府内及各郷」は、十八世紀後半から十九世紀初頭あたりまでの情報が収録されている可能性が高いことになる。

『神社調』の編者が新納久仰であるとして、『要用集』のようにその時点での神社に関する最新の情報を網羅的に収集したいと考えるならば、少なくとも同時代の情報を収集しようとするであろう。しかし「府内及各郷」の実態はむしろ十八世紀後半に本田出羽守の編纂した書物の内容にかなり依拠した内容であった。また、今見てきたように神社を中心に各地の情報が集められている「府内及各郷」が古い内容を持つものであることは、後続の史料を中心とした「鹿兒島部」「薩摩国中部」「大隅国中部」「日向国諸県郡之部」と対照的であると言える。「府内及各郷」は典拠を示さないことから領内の神社を概観する目的で編集されているとも考えられよう。ただし繰り返しになるが、神社が網羅されていない点でその不徹底さ（緩さ）を否定できない。

では次に「鹿兒島部」「薩摩国中部」「大隅国中部」「日向国諸県郡之部」についてみてみよう。

「薩摩国中部」の郡山郷花尾権現の項には「要用集しらべ」として、次のような記述がある。

福ヶ追諏方神主

井上右京

花尾山

大宮司

井上駿河守

右右京亡曾祖父左膳并駿河守亡祖父駿河守事、天明七年未八月神主職被仰付、家順者諏方大宮司者官有無之

無差別両家上ニ被仰付、福ヶ追諏方神主・花尾山神主右之通被仰付、座順者時々可為官順旨被仰渡候、(下略)

「府内及各郷」の鹿兒島福ヶ追にある諏訪大明神は「祝 井上左膳」となっている。前に見たようにここでも「井上右京」の曾祖父が「左膳」であつたのであろう。右の「要用集しらべ」を典拠とする花尾権現の記述は、天保ごろのものとおぼしい。

『要用集 上』(鹿兒島県史料集 28、鹿兒島県立図書館、一九八八年)では、「鹿兒島諏訪大宮司 本田加賀守 右出羽守ニ而候処嘉永二酉四月蒙 勅許加賀守と致改名候」とあり、郡山郷の花尾山大宮司は「井上駿河守」で同じである。さらに、『要用集』には次のようにある。

鹿兒島福ヶ追諏訪神主

井上出雲守

- 一 右出雲守亡曾祖父左膳事、天明七年未八月神主職被仰付、家順ハ諏訪大宮司ハ官有無之無差別両家上ニ被仰付、福ヶ追諏訪神主・花尾山神主家順右之通被仰付、座順ハ時々之可為官順旨被 仰渡候
- 一 右出雲守事致欠落候付、本田加賀守神前向御祈禱共外万端兼帶同様相心得候様被仰付候旨、嘉永二年酉十二月被仰渡候

福ヶ追諏訪権神主

一往兼職

村山肥後

水引新田八幡宮執印職

執印吉左衛門

嘉永二年（一八四九）の段階での『要用集』の神職と、『神社調』の神職とを比較してみると次のようになる。

（『要用集』）

（『府内及各郷』）

（『薩摩国之都』）引用『要用集しらべ』

正一位諏訪

本田加賀守

本田出羽守

—

福ヶ迫諏訪

井上出雲守↓本田加賀守

井上左膳

井上右京

花尾山

井上駿河守

井上駿河守

井上駿河守

右の引用中の「井上出雲守」は、いわゆる嘉永朋党事件（お由羅騒動）に関わって福岡藩主の黒田長溥を頼って亡命した井上出雲（後の藤井良節）のことである。『神社調』の編者は『要用集』のうち嘉永初年の情報が入ったものを閲覧していないことがわかる。右の井上出雲守の出奔についてはその部分だけ書き加えられた可能性もあるため一概には言えないが、『要用集』の調査が行われた段階のものを写していること、それはおおよそ天保末あたりの情報であろうということが推測できるのではないか。

ここで少し脇道に逸れるが、『神社調』の引用書としてその基礎になっている『神社考』『神社撰集』、その著者である本田出羽守親盈の他の著作について補っておきたい。

鹿児島県立図書館には『薩隅神社誌』と題された神社の記録が二十一冊所蔵されている。これは昭和四十八年（一九七三）五月二十日前後に受け入れられたものであるが、鉛筆や赤鉛筆で小社に対して「不要」などの記載が残っていることから昭和十年（一九三五）の『神社誌』（孔版）編纂時に参照されたものと見られる。外城（郷）ごとに一冊となっているように見受けられるが、標題とは異なり実際には複数の郷が一冊にまとめられている場合もある。すべての郷が揃っているわけではないが、以下に地域別に列記してみる。

大隅国

桑原郡

栗野郷

肝属郡

高山郷・始良郷・鹿屋郷（新城郷）・花岡郷（百引郷・高隈郷）・内之浦郷・申良郷

始羅郡 加治木郷（日当山郷）・帖佐郷山田（溝辺郷）

曾於郡 敷根郷（恒吉郷）・福山郷（末吉郷・市成郷）

大隅郡 <sup>\*</sup> 垂水牛根郷（桜島郷・佐多郷）（二冊）・小根占郷・桜島郷

薩摩国 出水郡 野田郷（阿久根郷・高尾野郷）

阿田郡 田布施郷（伊作郷）・阿田郷（川辺郡坊津・泊・久志・秋目・鹿籠）

川辺郡 硫黄島（竹島）

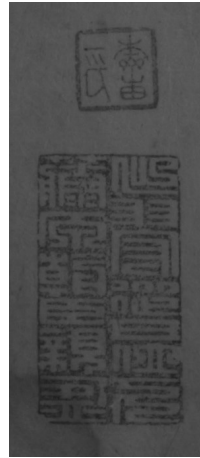
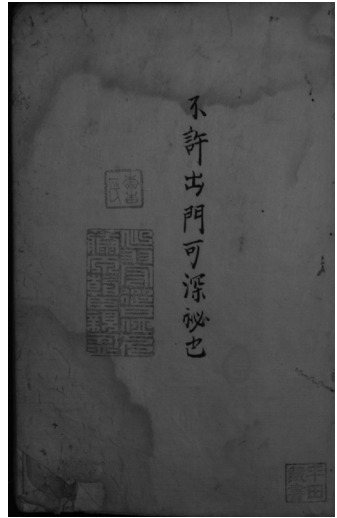
日置郡 伊集院（二冊）

（\*は垂水郷と垂水牛根郷の二冊であり他と筆跡が異なる。後の筆写。なお括弧内の郷はその直前の郷の名が外題にある郷の冊に記載があることを示す。）

この『薩隅神社誌』には一部を除き本田出羽守親盈のものとと思われる朱印（「正一位諏方神主」「出羽守従五位下藤原朝臣親盈」「本田氏」「藤親盈印」）が各所に見られる。また野田郷と伊集院郷の冊には「不許出門可深秘也」との書入れが見える。

『薩隅神社誌』はすべて県立図書館で裏打ち・改装が行われており、内題もないため元々どのような書名（外題）だったのかを確認することができない。しかしながら本書は本田出羽守の自筆か（あるいはその手許にあった本）とも推測されることから鹿児島島の神社史を研究する上で貴重な資料といえる。

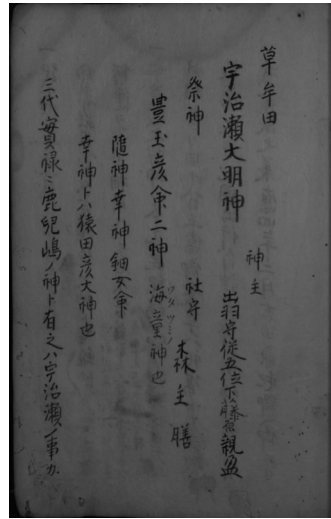
本書にも各地の神社の記録が連ねられているが、地方の小社までは記録が及んでおらず、中には項目のみあつて内容が空白のものも見られる。つまり、本田出羽守は薩隅（日向は見つからず）の各郷の神社を網羅的に編集することを目指したが明和年間ではまだ完成には至らなかつたと言えよう。



本田親盈『鹿兒島神社考』（平田家蔵）の書入れ（上）と印（下）

右の『薩隅神社誌』と同じ筆跡と思われる資料がある。それは鹿兒島市の平田正勝氏所蔵の『鹿兒島神社考』（大本一冊）である。表紙外題には「鹿兒島神社考 三」と墨書。扉の位置には「不許出門可深秘也」とありその左に「本田氏」「出羽守從五位下 藤原朝臣親盈」の朱印が押されている（図版）。右に見た『薩隅神社誌』と形態、筆跡とも酷似している。平田正勝氏の曾祖父に当たる彦五郎（天保八年〜大正九年）は磯天神（現菅原神社）の社掌を務め、その子の平田猛は薨城史談会員として吉野村および鹿兒島市の史跡保存に尽力した人物で『吉野之史蹟』（私家版）の著作もある。彦五郎は鹿兒島の新納氏の出身であり平田家に養子に入った人物である。その父新納美庫は日向の鵜戸神宮の神官を務めたとされるから、神職のつながりから本田出羽守の著作が所蔵されることになったのであろう。いずれにしても、『鹿兒島神社考』のすべてではないものの、その一部が出てきたことは喜ぶべきことで、薩摩国の神社を記した本田出羽守の著作の残存状況が悪いことから『薩隅神社誌』ともども十八世紀の神社の実態を知る有力な材料であることは間違いない。平田家の『鹿兒島神社考 三』に記載のある神社は、福ヶ迫の諏方大明神（現在の長田神社）を初めとして、大磯天神宮・草牟田の宇治瀬大明神（現在の鹿兒島神

社）・多賀大明神・荒神社・船魂神社・鹿兒島城護摩所内稻荷神社・築地神明宮・大磯蛭子宮・同白山神社・萩原天満宮の計十一社である。題簽の巻数表記や収録神社の様子を勘案すると、「鹿兒島神社考」が複数巻にわたって存在したことを示している。



『鹿兒島神社考三』（平田家蔵）  
宇治瀨神社の冒頭部

一方、『鹿兒島県史料 神社調』で参考文献としてしている鹿兒島県神職会編輯『神社誌』（一九三五年）はその緒言の中で、次のようにうたっている。

一、本書は明和五年より同六年に亘り当時鹿兒島稻荷神社祠官たりし出羽守從五位下藤原朝臣本田親盈氏が編輯筆写せられ門外不出の秘書として伝えられたる薩隅二州内にある神社の記録三十五巻を主としその欠くる所を同氏編鹿兒島神社考、元島津家寺社奉行所藏薩隅日神社考より補足し尚現神社明細帳を配記して彼此参看の便に供せり

本田出羽守によって編纂された複数の神社に関する書（たとえば伊地知季安『旧記題苑』に載る本田の著作は「三州神社考」（五冊）・「日隅御巡詣神社記」があり、この他に『神社考』『神社撰集』が知られる）の相互の関係

は不明な点が多い。『神社調』には「異本神社考」なる書も典拠として見えるが、これも同人の著作なのかそれとも別に著者が存在するのかなども解明すべき事項である。写本の常として構成の変更、内容の増補や削除が繰り返されていくということ、良質のテキストの欠如などがその解明を阻んでいるが、この『神社調』の刊行を機に解明が進むことを期待したい。

再び『神社調』に戻り、「鹿児島部」「薩摩国部」「大隅国部」「日向国諸県郡部」がどのような資料をどのように配列しているのかを見ることにする。これによってその編纂意識や編纂意図がどのあたりにあったかを推測することができるように思う。本巻収録の串木野郷を例として、『神社調』の構造について考えてみる。

串木野郷は市来郷の次に配置され、「一串木野 串木野三郎忠通」で始まる短い記録が冒頭に置かれている。鳥津家の始祖忠久の時代に居城した武将の由緒を記したもので、出典は『亮洲随筆』である。続いて、白尾国柱『鹿藩名勝考』串木野郷上名村の「冠嶽」、下名村の「照島」の見出しと割注の引用が続く。続いて、宗廟である「猪之日太大明神」が奥州伊沢之郡から入枝という苗字の者が下ってきたことを『神社仏閣帳』によって示す。その後、同社を「神社考」、「寛保二年五月申出（書出）」によって記し、続いて、諏訪大明神を『神社仏閣帳』『神社考』、さらに羽島崎大明神の記載がある（これについては典拠を明示していないが、『神社考』に依るものと思われる）。続いて、郷内の末社の一覧を『神社考』によって示す。芹ヶ野金山の「山之神」について「寛保二年五月申出」により示す。さらに東嶽熊野権現・中嶽熊野権現・西嶽熊野権現について『神社仏閣帳』を基に造立年代や座主、造立奉行など名、祭日を示す。同じく『神社仏閣帳』によって頂峰院鎮国寺の概要を記したあと、「文化十一年十二月書出」に基づいて末社を含めた詳細な記述が続く。その後に「頂峰院御文書写」があり、『旧記雑録』にも収録された中世の文書類の写しが列記される。次に良福寺を『元禄十年閏二月書出』『神社仏閣帳』『寛保二年五月書出』で紹介、「良福寺古書留」として良福寺などが差し出した文書を掲げ、最後に寺院の名とその石高を記した「串木

野寺地改」を載せる。

以上煩雑にわたったが、これを表にまとめると以下のようなになる。郷によっても構成が異なり、比較のため野田郷を併せて掲載している。

(表2)

〔神社調〕「薩摩国三部三」申木野郷の構成

項目 (神社仏閣名など)	典拠
一 申木野 申木野三郎…	・亮洲随筆 ・名勝考
猪之日太大明神	・神社仏閣帳 ・神社考
諏訪上下大明神	・寛保二年五月書出 ・文化十一年十二月書出 ・神社仏閣帳 ・神社考
松尾大明神	・神社考
羽島崎大明神	・(神社考カ)
申木野郷末社	・神社考
芹ヶ野山之神	・寛保二年五月書出
東嶽・中嶽・西嶽熊野権現	・神社仏閣帳
冠嶽山 頂峰院 鎮国寺	・神社仏閣帳 ・文化十一年十二月書出 ・頂峰院文書写
岩水山 良福寺	・元禄十年閏二月書出 ・神社仏閣帳 ・寛保二年五月書出 ・良福寺古書留
申木野寺地改	

〔神社調〕「薩摩国三部五・六」野田郷の構成

項目 (神社仏閣名など)	典拠
熊野権現	・神社仏閣帳 ・神社考 ・別本
伊勢大神宮ほか	・寛保二年五月書出
白山権現	・寛保二年五月書出
若宮大明神	・寛保二年五月山内寺より申出
若宮大明神	・?
若宮大明神	・神社考 ・寛保二年五月山内寺より申出 ・寛保二年五月所役々より申出
野田郷末社	・神社考
鎮国山 感応寺	・要用集しらべ ・神社仏閣帳
宝寿山 極楽寺	・神社仏閣帳
感応寺文書	・寛保二年五月書出
鎮国山 感応寺	・元禄四年十二月書出 ・感応寺文書写※ ・[或書]
亀翁山 西性院 山内寺	・要用集しらべ ・神社仏閣帳 ・寛保二年五月感応寺より申出 ・寛保二年五月書出
後寛僧都墓所	・寛保二年五月書出
亀翁山 山内寺 西勝院	・元文五年閏七月
野田寺地改	

※「弘化三年午夏於社奉行内々写置也」とある。

『神社調』では各郷の冒頭に現在では所在が確認できない『亮洲随筆』なる書物を引用することが多い。この『亮洲随筆』の著者について、春山直人氏は「管見の限り未詳である」としつつ、「伊地知季安の『旧記題苑』に『桜島炎上記』の著者として興国寺亮洲和尚の名があるが、同人であろうか」との指摘をしている(『伊佐市郷土史誌史料集 二』伊佐市教育委員会、二〇一六年、「神社調」解題)。「神社調」の編者と目される新納久仰の家の菩提寺は興国寺であるので、そうした縁もあるかもしれない。引用の内容は当該郷や古城の由来を述べたものが多

く、併せて引用されることの多い『薩藩名勝志』ともども、マクラとして置かれておられるように思われる。これは串木野郷に限ったことではないので『神社調』の編者の編纂意識の現れであると言えるだろう。

続いて宗廟（惣鎮守）の神社から関係する種々の資料が引用されていく。そのうち『神社仏閣帳』は頻繁に使用される資料であるが、当該神社の殿舎・仏像・額・棟札や石高に関する情報を記載したものである。成立年代など詳細は不明である。

『神社仏閣帳』とともに各時代に行われた寺院の調査記録が引用される。主なものは以下のとおりである。

元禄四年末十二月書出 元禄十年丑二月申出 元禄十年閏十二月書出 元禄十五年午四月書出（申出）

元文二年巳七月書出

寛保二年戊五月書出

文化十一年戊十二月書出

表2によって串木野郷や野田郷の配列を見ると、『神社仏閣帳』が置かれる位置は必ずしも一定しておらず、例えば串木野郷の諏訪上下大明神や鎮国寺では、文化十一年の書出の後になっているが、良福寺では寛保二年の書出より前に来るなどしている。また『神社仏閣帳』は宮之城のように寺院毎に記す場合もあれば、数寺（数社）をまとめて記載する郷もあり一様でない。さすがに書出の資料の年が前後することはないものの、以上のように資料の配列についてはかなり緩やかであったことが窺えるものとなっている。

こうして杜寺ごとの記録類を配列していくが、中には文書を独立して引用する場合も見られる。串木野郷で言えれば「頂峰院文書写」「良福寺古書留」、野田郷では「感応寺文書写」である。

串木野郷の冠嶽は修験道の道場として栄えたが、『旧記雑録前編』にも掲載される文書と同じものが『神社調』に写されている。また、薩摩国の臨濟宗の古刹である野田感応寺の文書を引用するに際して、朱書で「右紙数六枚

ハ現之文書一卷也、弘化三年午夏、於寺社奉行内々写置也、此紙數六枚ハ、是ヨリ頭五拾五通目、感應寺文書薩摩国卜有之候迄ニ相当リ候事と記している。この他の例としては、伊集院郷で「右拾一通円通庵文書ニテ、当分妙円寺へ格護相成居候故、一覽写取もの也、嘉永四年亥三月廿四日 季直（花押）」とある。これは伊地知季直（後の季通）が妙円寺に保管されていた円通庵文書十一通を写したことを注記したもので、このような実地について調査した内容が追加されていることが『神社調』のひとつの特徴となっている。

以上本巻所収の郷を例にとりながら、記載内容の配列などの問題について述べてきたが、各郷の中の記載内容の構成については一定の構成意識、たとえば、マクラのような形で当該地域の由来や古城、名勝などを置くこと、宗廟（惣鎮守）を先に出すといったことなどが窺えるものの、全体として厳密な配列意図といったものはなく、資料を適宜配置したというのが実態のようである。これを編纂過程の段階のものと見るのか、それとも編者（新納久仰説が有力）が個人的な編纂物としてまとめたことによるものとするのか、はたまた別の理由を考えるか、いろいろと議論の分かれるところであろうが、恐らくは編者個人の手控え的な資料であるという性格に由来するのではないか。

それに関連して『神社調』全体の構成についても触れておきたい。前述したように、「府内及各郷」の配列は本田出羽守の著作の影響を受けているものであった。では、「薩摩国之部」「大隅国之部」「日向国諸県郡之部」の同書の本体部分の配列はどのようになっているのだろうか。底本の東大史料編纂所本『神社調』「鹿児島部」「薩摩国之部」は表3のような構成になっている。

(表3) 『神社調』『鹿兒島部』と「薩摩国之部」の構成

神社調	郷	丁数
鹿兒島部 一		97
鹿兒島部 二		101
鹿兒島部 三		92
鹿兒島部 四		54
薩摩国 一	吉田	103
	郡山	
	伊集院	
薩摩国 二	伊集院	142
薩摩国 三	市来	95
	串木野	
	百次	
	山田	
薩摩国 四	隈之城	161
	高江	
	平佐	
	佐志	
	黒木	
	樋脇	
	入来	
	藺牟田	
	大村	
	中郷	
	東郷	
鶴田		
宮之城		
薩摩国 五	水引	152
	高城	
	阿久根	
薩摩国 六	野田	215
	高尾野	
	出水	
	大口	
	羽月	
	山野	
	長島	
甌島		

神社調	郷	丁数
薩摩国 七	谷山	80
	喜入	
	今和泉	
薩摩国 八	今和泉	101
	指宿	
	山川	
	穎娃	
	知覧	
薩摩国 九	鹿籠	87
	久志	
	秋目	
	坊	
薩摩国 十	泊	103
	加世田	
薩摩国 十一	加世田	103
	川辺	
	山田	
	硫黄島	
薩摩国 十二	伊作	84
	阿多	
薩摩国 十三	田布施	71
	永吉	
	吉利	
	日置	
	島方	

〕 …… 「薩州神社詣 二」

〕 …… 「薩州神社詣 三」

〕 …… 「薩州神社詣 五」

〕 …… 「薩州神社詣 七」

〕は前後の冊にまたがって記載されていることを示す。

糺合スミ

今和泉 指宿  
山 川 穎 娃  
知 覧 鹿 籠

薩州神社詣 二

るのであるうか。そもそも「薩摩国之部」の配列は、先述の「府内及各郷」とは異なるものになっており、『三國名勝図会』に近づいていることが見て取れる（前掲表1参照）。

原『神社調』があつたと仮定すると、編者はまず谷山郷を起点にして薩摩半島を時計回りに回り、東シナ海側を北上、北薩に接続する予定であつたのではないかとすれば「十三」の離島を除いた日置郡（田布施・永吉・吉利・日置）と「二」の日置郡（郡山・伊集院）が連続することで説明がつく。もしこの仮定が正しいとすれば、本書は何らかの事情で題名の変更が行われたことになるが、注意すべきは各冊を跨いで郷の記述が連続することが既起きていて、題名が変わってもそこに変化がなかったと推測されることである。底本の『神社調』でも表3で示したように冊を超えて次の冊に連続する事例が数多くみられる。丁数のバランスを考慮したものとも考えることは可能であるが、それだけでは説明が難しい。その理由を明確にすることはできないが、藩の編纂物ではまず考えにくい。こうした巻・冊の意識が極めて乏しいという実態は前述の不完全性と相俟って本書の性格をよく現している

『神社調』『薩摩国之部』の八、九、十一、十三の巻末には上記図で示したような一紙が綴じられている。

これは扉に相当するものだったかと思われるが、右隅に「糺合スミ」と校正が終わったことを示す記載がある。注目すべきは題名で、「薩州神社詣」となっている点である。しかも、薩摩半島南部の諸郷が「二」に当たるとすれば、その直前の谷山郷から「薩州神社詣一」であつた可能性が高まる。そうすると現在の「薩摩国之部一〜六」に当たたる薩摩国北部の諸郷はどうな

『神社調二』 掲載文書点数

史料名	文書数		掲載文書数
	(収載)	(未収)	
薩摩国之部二	79 (53)	〈26〉	78
薩摩国之部三	39 (18)	〈21〉	38
薩摩国之部四	37 (1)	〈36〉	37
薩摩国之部五	116 (88)	〈28〉	106
薩摩国之部六	44 (7)	〈37〉	44

注1 収載とは「旧記雑録」収載文書を示し、未収とは「同」未収載文書を示す。

2 掲載文書数とは『神社調二』に掲載した重複分を除く文書数を示す。

と考えられよう。なお、「薩摩国之部七」の谷山郷から筆跡が「六」までと変わっていることも指摘しておきたい。

本稿では本冊に収録された個々の史料の分析をすることができなかつたが、『神社調』の成立や性格の問題について問題を提起しようと試みた。『神社調』は大きく二つの部分に分けることができるが、基本情報を収録する「府内及各郷」は本田出羽守の著作に依拠したものであり、史料を配して寺社の由緒や石高など細かな情報を並べる「鹿児島部」「薩摩国之部」「大隅国之部」「日向国諸県郡之部」とでは異なった配列が見られること、内容的に時代が古い前者と天保期以降の情報も入っている後者とは著しい対照をなしていると言えよう。これは題名の変化とも関わっているものと推測されるが、「神社詣」から『神社調』へと、いつ誰が変更したのかについては今後さらに検討を進めていく必要があるだろう。

本稿の執筆に際しては平田正勝氏には貴重な史料のご提供を頂いた。また、橋口亘氏には、神官の年代考証につきご助言を賜った。ここに、付記して感謝の意を表する。

(丹羽謙治)

## 例言

一 本書は、東京大学史料編纂所所蔵「神社調 薩摩国之物二六」を底本とし、『旧記雑録拾遺 神社調二』として刊行するものである。

一 文書・記録等は、原則として底本に従って掲載し、文書・棟札・金石文には通し番号を文首に付した。重出文書にも番号を付し、重出の旨を注記して本文は省略した。

一 掲載した文書を他の文書や写本等によって補充または校訂する場合は、次のようにした。

ア 補充・挿入箇所は▽ △及び◇で示した。

イ 底本が原文書または校訂史料と相違する部分は、原則としてその右側に典拠史料を記した。相違する部分が二字以上の場合等は、その範囲を明確にするため該当部分を「」で囲んだ。また、漢字・かなの相違については、原則として読みが同じであれば、底本のままとした。

ウ 他に補充や校訂に使用した史料は、次の略記号で示した。

旧記雑録（東京大学史料編纂所所蔵）㊦

島津家文書（東京大学史料編纂所所蔵）◎

新編島津氏世録正統系図（東京大学史料編纂所所蔵）㊧

新編島津氏世録支流系図（東京大学史料編纂所所蔵）㊨

伊集院由緒記（『鹿兒島県史料拾遺Ⅳ』鹿兒島県史料拾遺刊行会発行）㊩

入来村史（入来村史編纂会発行）㊪

感応寺文書（『鹿兒島県史料旧記雑録拾遺 家わけ九』㊫

- 『甕藩名勝考』（東京大学史料編纂所蔵）<sup>〔覽〕</sup>
- 国分文書（『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ十』）<sup>〔国〕</sup>
- 薩州出水郡出水高山大川神社仏閣名所旧跡産物帳（出水市歴史民俗資料館所蔵）<sup>〔高〕</sup>
- 薩藩名勝志（『鹿児島県史料集44』鹿児島県立図書館発行）<sup>〔薩〕</sup>
- 薩摩国地理志（鹿児島大学附属図書館所蔵）<sup>〔サ〕</sup>
- 三国名勝図会（青潮社発行）<sup>〔図〕</sup>
- 神社誌（鹿児島県神職会編輯）<sup>〔誌〕</sup>
- 神社撰集（枚聞神社所蔵）<sup>〔撰〕</sup>
- 地誌備考（『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 地誌備考二・三』）<sup>〔備〕</sup>
- 新田神社文書（『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ十』）<sup>〔新〕</sup>
- 日本三代実録（『新訂増補国史大系4』吉川弘文館発行）<sup>〔三〕</sup>
- 日本書紀（『新訂増補国史大系1』吉川弘文館発行）<sup>〔紀〕</sup>
- 本田家記文書及系譜（『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ十』）<sup>〔本〕</sup>
- 町田氏正統系譜（『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ三』）<sup>〔町〕</sup>
- 要用集（『鹿児島県史料集28』鹿児島県立図書館発行）<sup>〔要〕</sup>
- 一 刊行にあたって、文書の体裁をおおよそ次のように統一した。
- ア 原注や文書中の異筆・補筆、また出典を示す箇所は、原則として「」（墨書）、「」（朱書）で囲んだ。
- イ 文書の年月日・差出所・宛所の位置等は、原則として底本の体裁に従ったが、ある程度の統一をした。
- ウ 文中には、適宜読点「、」および並列点「・」を付した。

- エ 原注に移動指示がある場合は、原則として該当箇所に移動した。
- オ 頭注や行間の書き込みは底本の体裁に合わせたが、長い場合は※印を該当箇所に記し、関連箇所の文末に適宜まとめた。
- 一 原本の摩滅虫損箇所は、字数を推して□または□を以て示し、判読不能な文字については▨で示した。
- 一 見消は、その文字の左側に「々」を付した。
- 一 編者の付した注は、原注と区別するために（ ）で囲んだ。
- 一 欠字・平出・台頭等は、原則として底本の体裁に従った。
- 一 原文中の送り仮名及び返り点は、原則として省略した。
- 一 変体仮名は現行の平仮名に改めたが、江、茂、者、与等はそのままだ。
- 一 漢字は原則として常用漢字を使用した。が、底本の用字を活かすことが望ましい場合は、そのまま用いた。
- 一 一部の年号・官職・用語等については次のように表記を改めた。  
元録↓元禄 太閤↓太閤 愛宕↓愛宕
- 一 本文中に、不明箇所や虫損、省略等の理由で空けられたと考えられる箇所について、□□、□□、、、、、、  
等があるものは、原則として底本の体裁に従った。
- 一 『鹿児島県史料 旧記雑録』との重複文書については文末に注を付した。なお、記事の場合には、原則として重複注は逐一付さなかった。
- 一 目次は、見出しとして郡郷名を掲載した。
- 一 文書目録は見出しとして郡郷名及び寺社名を掲載した。



旧記雜録拾遺 神社調二 目次

解題	1
例言	19
目次	23
薩摩国之部二	一
日置郡伊集院郷	一
薩摩国之部三	
日置郡市来郷	六三
串木野郷	八七
薩摩郡百次郷	一〇〇
山田郷	一〇一
隈之城郷	一〇二
薩摩国之部四	
薩摩郡隈之城郷	一〇五

高江郷	一一〇
平佐郷	一一二
(伊佐郡)山崎郷	一一九
伊佐郡佐志郷	一二一
黒木郷	一二二
薩摩郡樋脇郷	一二三
入来郷	一二六
伊佐郡蘭牟田郷	一三四
大村郷	一三七
薩摩郡中郷郷	一三八
東郷郷	一三九
伊佐郡鶴田郷	一五一
宮之城郷	一五五
高城郡水引郷	一六一
薩摩国之部五	
高城郡水引郷	一七三
高城郷	一九二
出水郡阿久根郷	一九六

野田郷	二一〇
薩摩国之部六	
出水郡野田郷	二三九
高尾野郷	二三九
出水郷	二四三
文書目録	二七九

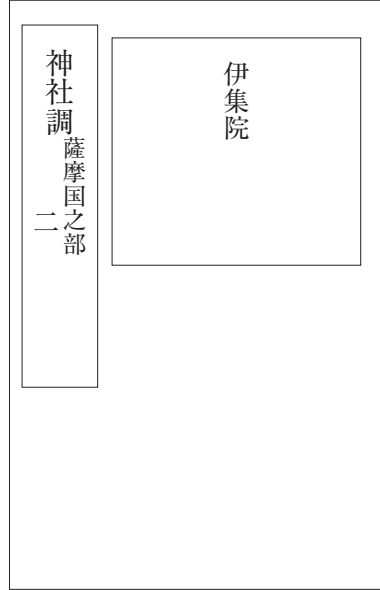
神社調

薩摩国  
之部

二



(表紙)



伊集院町田村  
福島大明神

祭神大覚寺義昭大僧正

三月三日祭

祭料三斗

当社ハ文明年中町田家之先祖勧請、

右神社考

伊集院之内石谷村  
末社

一鎮守大明神

一天神

一天神

一氏若宮

一諏方大明神

一天神

一春日大明神

一熊野三所権現

一諏方大明神

一伽羅(藍)

一熊野三所権現

一諏方大明神

一天子

一熊野三所権現

一山王

一山之神

一鎮守大明神

一鎮守大明神

一熊野三所権現

一諏方大明神

一鎮守大明神

一稻荷大明神

一青敷大明神

一鎮守大明神

右神社考

伊集院嶽村

知迦尾六所権現

祭神熊野本宮

新宮会号六所

事解男神

伊弉冉尊

速玉男神

一 崇神天皇十六年始建熊野本宮、又景行天皇五十八年建同新宮、

一 三代実録、薩摩国貞觀二年三月廿日庚午、從五位下知賀尾神亦從五位上、

祭祀九月十九日<sup>◎氏</sup>子中出米、又北郷家より分立祭料

五升為進獻、但嶽村ニ熊野三社勸請あり、三社共ニ同シ、

一 右嶽村ノ内ニ熊野権現ヲ三所ニ祭、本宮・新宮・那知三所ト崇、本宮・新宮六所ヲ会知賀尾ニ祭、外ノ二社ヲ添テ十二宮ト勸請シタルトモ云、又以前ニハ知賀尾三所トモ唱タリ、今ハ六所ト見ヘタリ、三代実録ニハ<sup>◎只</sup>知賀尾神ト計記サレタリ、

右神社撰集  
祠官 永尾式部

伊集院苗代川  
清泰山普慶寺  
南泉院末  
来迎院

当寺ハ正徳四年<sup>(吉貞)</sup> 総州様御再興、開山知周僧正、一高式拾石

正徳四年 総州様御寄附、

一同九石九斗六合六勺七杓

右自分求之儀、享保五年御免被仰付、本行之通代官所ニ而御買入、

一 寛陽院様御牌<sup>(光心)</sup>

右智周自分ニ奉願、正徳六年奉安置候、

一 住替入院之御礼中紙三束進上仕、御目見被仰付候、右寛保二戊五月書出、

一 来迎院ハ高原神徳院末寺廢寺之号を以正徳五未年再興、

伊集院  
竹林山  
一遍派  
龍泉寺

奉造立伊集院龍泉寺無量寿如来仏殿一字 大檀主藤原貴久朝臣、當寺七世其阿敬白、  
天文十八己酉年卯月廿六日

高七斗 但門前地

右当門派古御先祖御菩提所之刻御建立之由候、伯圍<sup>(貴久)</sup>様御代ニ奉堂客殿御再興、為被遊由候、今ニ御牌御座候、寛永八年ニ本堂御修理有之候、本尊金仏尺迦弥陀、

右神社仏閣帳

一 中興開山其阿了義以来当世迄十五世、惣而年数三百九拾年々々、

一本尊弥陀脇立觀音、運慶作と申伝候、

一 境内横卅九間御免地

右元禄十五年午四月龍泉寺峰岩書出之内、

伊集院 無量寿院 時宗 藤沢山末寺  
竹林山 龍泉寺

当寺者嘉曆三戊辰年 貞久公御建立之由、開山重阿知

道開基ニ而候由申伝候得共年間不知、

一 寺号前代ハ称立寺龍共ニ而候得共、度々火災有之、龍泉寺と改候由、

一 高七斗

古代ハ八町五反并廿四町之寺領有之、其後琉球国為和

睦、慶長七年当寺十一世住持兩度為使僧渡海仕、首尾

能罷帰候由ニ而 伯囿様より高百八石御寄附候処、其

節之住持出銀未進ニ而一節御取上有之候由申伝候、外

ニも御寄進物并御文書等余多有之候由、然共兩三度火

災有之焼失之由、

一 大中良等庵主御牌 (貫久)

右御物又ハ自分安置之訳不知、尤前代ハ 御元祖様御

五代様迄御牌も被為立候得共、火災之節焼失之由、

一 鑄仏釈迦座像壹体

長四寸弍部

一 善光寺如来写鑄仏之像一体

長八寸弍部

右弍行 伯囿様市来御出陣之節本尊江御誓願、首尾能

御帰城之時右之通御寄付之由申伝候、外ニ駒鞍御寄付

為有之由候得共焼失之由、

一 当寺前代ハ薩州之触頭と申伝候、右之訳を以代々其阿

号本山より免許仕来候、尤遊行上人廻国之節茂宿寺相

成候、

右寛保二戊五月書出、

要用集しらへ 高七斗

い十院  
千秋山

田布施  
常殊寺末  
石屋派  
雪窓院

御靈屋 但宅間余、三方様小板葺  
外屋茅葺

奉造立客殿一字、三州太守義久公御武運長久、御当家  
繁栄、然南呂十有一日命工運斤、隣里郷党借凡流之力  
運数林、爾来以降依郢妙手功而至小春二十有三日營立  
柱、則及極月十有六日修造之功畢、

千秋山雪窓禪院字山叟謹誌

永祿十年丁卯窮極吉日

当地頭 税所越前守篤家

小屋奉行 山田伊予守有貞

田実筑後守保広

大工 西郷志岐守景盈

白井和泉守

同名飛彈守

鍛冶 有馬玄蕃亮

小藏新左衛門

高百斛

右者 龍伯様御懷雪窓妙安大姉御寺として 龍伯様御

建立也、

右神社仏閣帳

寛保二戊五月書出

一開山二株林

一高百石

一永祿十年 龍伯様当寺御建立、妙安様為御仏餉料被召

付置候由、

一雪窓妙安大姉 御廟山中ニ在リ、御牌立ツ、

天文十三年甲辰八月十五日御死去、

龍伯公 惟新公御実母也、入来院彈正重聡女、

薩陽谷山郡帝釈寺觀世音堂下所施与之金鐘者、薩隅

日三州賢太守藤氏島津梅岳潤和尚投志大明国命商客而

所求之金鐘多々来我朝矣、乃寄進封内諸寺院然又此鐘

其数也、蓋依 △此願力瑞雨西北闕祥雲鎮西海矣、 伏以

諸行無常響答西嶺千秋之峰寂滅為樂声興南方大悲之願

永々保長生殿裡之齡寿似南山常々歆補陀岩下之流福知

如東海万歳々々珍重々々、歳次天文丁未二月時正日、

勅仏照大円禪師忍室老謹書

勸進沙門阿闍梨覺尊敬白

奉鑄薩摩国谷山郡帝釈寺鐘事、長三尺口一尺七寸、

厚一寸五分、沸錢三十八貫文、大工功用十貫文、

大施主沙弥光信并妙女房

前木工助朝臣忠義并女大施主沙弥西念并女大施主結縁

衆廿三人

右人間宝者三宝為最、三宝中仏宝為上、仏儀中鐘為重、

彼毗舍離国之石像焉、瑟影僅殘祇陀園寺之鐘声四句頌

元絶誠知仏靈住鐘、是以上奉為金輪聖主天長地久、下

為結縁檀那等現当悉地成就、別者為弟子又女師長成仏

得果乃至為法界衆生平等利益遂宿願而已、

建長四年壬子十二月朔日

大工紀守忠

金剛仏子覺尊

開基応永九年壬午十月十八日、開山字堂覺卍禪師ニ  
而候、

一花室清忻大姉

右、大中様前之御前様ニ而候由申伝候、御位牌之後

ニ、于時天文十八年己酉七月十四日、花室清忻大姉

入滅為年忌記置之、御所領二町寄進実也与庵主全隆

代と□付有之、当時迄右之御石塔御座候付、前代ハ

七月盆ニ御灯炉迄御物より相懸り来候由、

一高八斗

右慶長六年十月十五日鎌田出雲守政近・比志島紀伊

守国貞・平田太郎左衛門増宗・図書頭忠長御連判ニ

而、高式石式斗八升被下置候由御目錄御座候得共、

当時ハ右之通相殘候、

一法花壺部

右 日新公御寄進、

一住替之節ハ御証文を以被仰付、中紙壺束代銀進上、寺

社奉行所迄御礼申上候、

右寛保二戊五月書出、

伊集院  
久木山

川辺  
宝福寺末  
雪峯派  
破鞋庵

右之鐘帝釈寺との銘あれとも雪窓院ニ在と云、

一御靈屋茅葺礎

一高八斗

右 (貴久) 大中様御前華室清忻大姉御寺宇堂開基也、

右神仏閣帳

右神社仏閣帳

一鰐口ノ銘

奉 鰐口島原村王代殿御宝前、大檀那平澄光同諸

人等、大願主源家定、文安六年己巳八月吉日、

右ノ裏ニ

長祿二年十月吉日 願主右衛五郎 女

敬白

4

伊集院 大勝山 聖御院 大乘院末 宝莊嚴寺

右寺者一畔上人下野国より善光寺之如来之写金仏弥陀三尊并弘法之御作之不動之三尊持来良範上人ニ付属、良範上人此寺を開基ニ而右之本尊安置也、左候而、当国蜜宗に三宝院方之門主并御祈願所相定、其

後当寺八代之俊盛代ニ 殿様鹿兒島へ御城移ニ付、

從伊集院御祈念難成ニ付、大乘院如仮屋開基而俊盛・

頼岳・盛久迄三代御祈念被相勤、拾一代之盛秀之代

より大乘院為本寺御祈願所ニ相定之由申伝候、御作

之不動者当護摩所へ安置也、

脇坊中

一原田坊 諏方座主

一内田坊

外ニ脇坊十但明坊也、

右者弘治二年鹿兒島小城権現之麓江被召移、 (貴久) 伯圍様

より其節之住持俊盛遠方江罷居申候而ハ急成御用不相

濟由ニ而、鹿兒島へ被召移御祈願被仰付候由、当寺十

二世盛秀之時灌頂道具并知行等大乗院江被召移候、依

之俊盛大乗院開山ニ而候由申伝候、

一当寺応永年中開基良範上人ニ而候由申伝候、

一高四拾三石

内拾三石ハ当寺八代住持賢雄 伯圍様御 (ママ) 依之ニ而、

国家安全御祈願所と被仰付置候処、 伯圍様御前様御

不例之砌、右賢雄呪咀被致之由ニ而誅伐被仰付候由、

右ニ付而如何様様子有之哉、賢雄仏餉料として内書之

通御物より被召付置候由申伝候、

三拾石ハ御寄附之訳不知、

一地蔵堂 壺字

但町頭ニ有之、

右者賢雄法印を崇地蔵 伯圀様御建立之由、

伊集院 一千手観音堂 一字

但麓上之馬場ニ有之、

右当寺末寺之跡ニ相残候本尊ニ而候得共、年間ハ不

知、

一春日社 一字

一阿弥陀堂 一字

一地蔵堂 一字

右三行清藤村莊嚴寺之跡ニ有之候得共、建立年間等

不知、

麦生田村  
末寺平等寺内

一薬師堂 秘仏 木像 一体

右 伯圀様御建立之由、薩州之三薬師と申候而御崇

敬為被遊之由申伝候、近代 光久公御不例之砌、及

両度白銀式拾枚御寄附有之、于今平等寺江御座候、

上谷口村  
末寺内田坊徳昌寺内

一正観音 立像 壺体 長五尺六寸三分

但日羅上人作

協立 天毘沙門天立像 長五尺式寸ツ、

但右同作

右天正三年 伯圀様御建立之由、其節者内田坊上谷

口村へ有之、住持憲盛と申伝候、当寺住持昌津代下

谷口村へ寺家引移、当時ハ右之堂上谷口村江御座候、

右同堀内

伊集院 一多賀大明神 神鏡一面

右元龜元年 庚午二月 貴久公より依御願内田坊開山

憲盛勸請之由、右為神楽田田方大田名ニ一反、徳重

名一反、永祿元年 戊午二月御寄付為被遊候由古板札

見得候得共、当時右田方無之候、天文十六年 丁未閏

七月 虎福丸様と多賀之神鏡裏ニ彫付御座候、先年右

堂再興之御訴訟申上候節、右棟札地頭三原左衛門殿  
宅へ差出置候処出火有之、焼失仕候由申伝候、

一 神護院

右諏方大明神別當ニ而御座候、

以上都而寛保二戌五月書出、

右葉師并多賀文化十一戌十一月書出、寛保二戌書出同

断故略ス、

嘉靖三十八年己未正月十一日

〔永祿二年ニ当ル〕

中山王朱印

進呈島津日新軒近習中

伊集院  
高七拾五石

当寺天文・永祿年中 日新公御建立ニ而開山三枝舜有、

忠良公  
一 梅岳寺殿常潤在家菩薩御牌

一 右同御影

忠良公御前様  
一 梅岳寺殿寛庭芳宥大姉御牌

永祿六癸亥十一月九日御卒去  
一 右同御廟所当寺ニ有之、

一日新公江中山王より年頭之書翰モ通当寺宝物として格

護仕候、嘉靖三十八年己未正月十一日之日付ニ而御座

候、

5 春頭之慶賀珍重曼福

鼎国之都督御封内干戈偃息千秋万歳多幸々々、然而調

飾文船為使節差天男寺登叔長老並ニ世名城領主良仲令

渡海攄祝釐於麿府同尊府雖為微少之方物

一式捨端線織物進呈之叱焉為幸、委曲天男寺長老可被

達台聴者也、恐々不備、

6 一 護国如意珠經 但般若箱三箇小箱六十 全部為梅岳常潤在家菩

薩於梅岳禪寺奉寄進之、此書付箱蓋ニ有之、次翼 忠長公武運長久子孫繁

昌寿齡億千歳々々、藤原朝臣島津図書頭忠長謹誌、(伏力)

于時天正十五年丁亥開水時正吉旦

梅岳現住在隣叟代

右此經者昔日在肥之高來時為雨滴破損者數十卷、就中此内夜字箱函三卷字々悉糜随句々皆敗却者也、当寺現住在隣叟手自修補而以令書写之、伏願經中如道或降伏一切大魔、或現世怨敵皆起慈心、或生善処受請妙樂必也、伏冀依此經功德力仏法師資相統而到尽

未來際莫令断絶沙門敬白、此箱本願宗性成就之、

右此大小箱板野崎对馬守光善公奉寄附、先專冀君恩

如海歡娛如山、吹冀武運長久子孫有慶并眷属無災無

難者至祝至禱々々、

此大般若經曾 安德村在勝善寺、

応永龍集 壬寅二月時正日

応永壬寅癸卯之年比丘契瑋真誦校正

今梅岳寺

常住在隣代

禁制

梅岳寺立山之竹木伐執事堅被停止訖、若令違犯輩者可被

処嚴科者也、

寛永元年九月十七日

中務少将書判

(花押)

一耕翁田大和尚画像 一幅

但從御公儀画像被召上写<sup>二</sup>而表具共出来、時寛文十<sup>年</sup>一年庚戌四月十一日福昌寺現住持峰叟和尚添書左之

通、

夫前梅岳耕翁田和尚素性質朴而追慕地藏禪師之家風、

平日手負鍬子耕荒田不踐仏祖之履跡去留如雲、故自以

耕翁之二字為号矣、一日不意逢着於秋月老漠就耕翁之

二字需没後遺像、於茲秋月揮筆画了耕翁策犂牛鍬田之

真容矣、对其像則憔悴如生耕翁見觀爾如表粧残置梅岳

室中殆百年于此乎、然近大守 光久公知秋月章筆愛以

藏公庫、且又使画師新写耕翁之像而飾以金欄軸做黑漆

以補於梅岳空欠也、開而覽之則画師雖異世筆跡直不異

秋月可謂依本画葫芦者歟、誰以管見可分別哉、於茲耕

翁先師德香溢縑素誠知実吾門之名師也、予亦依鳥津園

書老命為後拋添着些々鄙語以寄附梅岳禪寺、願代々伝

到後孫矣、

時寛文十庚戌年四月十一日

福昌現住持峰叟謹誌

梅岳寺

一金六尺屏風 一 双

右 綱久公御寄進、島津凶書殿・堀四郎左衛門殿添

書有之、

相添進之候条可有御受取候、已上、

寛文十戌十二月廿四日 堀四郎左衛門判

梅岳寺

一日新記 一卷

但當寺九代賢宅和尚寄附、

右都而寛保二年戊五月書出、

10

一書令申候、然者先年御寺校割屏風被差上御繕候而、

狩野家之衆へ御究候処ニ秋月筆ニ相究り候、就夫替之

屏風被仰付御寄進候間、慥ニ請取置、住持替之時分ハ

次渡可被置候、於様子堀四郎左衛門より可被申遣候条

不能詳候、恐惶謹言、

庚戌

十二月廿四日

島津凶書

久通判

梅岳寺

覺

11

御寺校割之六枚屏風一 双花鳥之絵狩野法眼逐一覽、秋

月筆ニ相究候、綱久様被召上繕被仰付御屏風ニ罷成

候、為替金屏風一 双被成御寄進候、島津凶書殿御付状

一福寿山由緒記 全

右明和七年庚寅九月祖海亮洲和尚筆記ニテ梅嶽禪寺宝

藏也、

日新公伊呂波歌弁解ヲ著シ全冊ニ載ス、

福昌寺門中曹洞宗

丹州永寺末寺

伊集院 妙円寺

法智山 開山石屋 明德元庚午年創建

一義弘公 天和五年己未七月廿一日御逝去、御法名松齡

自貞庵主、御牌御影妙円寺、御廟所福昌寺、

一高三百七拾五石

一京都相国寺内林光院へ 義弘公御木像被成御座候、子細ハ泉州境田那辺屋道与と申者平生被掛御目ヲ、其上

関ケ原乱後別而御懇意申上候、夫より節々御国江罷下

候、道与老衰仕罷下儀難成由申上候得共、御肖像御作

せ可被下与被仰聞、仏師康嚴と申者を被召寄、毎日御

鎖之間ニ御出為御作御名判迄被遊被下候、 惟新様御

逝去之後庵室ヲ建立仕号松齡院奉安置御肖像道与一世

奉拜候、道与死後俗家ニ奉安置候事恐多奉存候間、道

与孫栗津右近弟致出家、右林光院住持ニ候付、彼寺へ

奉安置候由、

一右御木像御取返相成、大乘院へ御安置相成候段、天保

十二年十一月九日被仰渡候趣大乘院之所へ記ス、

一高百三拾三石八斗八升四合七勺九才 伊集院

但明德年間開山石屋 妙円大姉菩提料買入、応永十

二年二世竹居代所領惣坪付并二年貢物成帳巻册格護

仕候、 惟新公御菩提所ニ被召定候節、御寄附高之

内江被召加申候、

松齡様御前之道具 品立略ス

正真様御前 右同断略ス

寛永八年辛未十月廿三日

川上左近将監判 (久国)

喜入摂津守判 (忠政)

下野守判 (島津久元)

妙円寺参

一大般若経巻部

但肥後川尻長徳寺常住物と書記有之、

右般若之内間々妙円寺常住願主住持比丘正猷と竹居自

筆ニ而被記置候、其外奥書ニ檀那藤原道音并夫人源氏

是光、此手跡竹居自筆ニ而候、道音・是光之儀者法名

ニ而位牌等茂有之候、且又加治木但馬守修甫と書付候

本茂余多相見得申候得共、竹居手跡ニ而者無御座候、

一仏殿中尊釈迦 右葉師 左阿弥陀

但安置之年間不知、施主明清禪定門・明性禪定尼と

書付御座候、此兩人般若施主同位牌ニ書載有之候、

右三尊之儀大般若同然肥後より参候由申伝候、

右寛保二戊五月書出、

鐘銘

13 一奉再造法智山妙円寺客殿并侍衣寮・厨庫・風呂・山門・

廊下・衆寮・方丈・鐘樓、護持信心檀那薩隅日三州賢

太守藤氏家久公、、、、、

寛永三柔兆撰提格小春吉日

妙円小比丘全珠謹誌焉

修造奉行

三原左衛門佐重饒

市来五兵衛尉家昌

新納仲左衛門忠紹

和田拾介昌定

所之囑

四本佐渡守為延

宮原才兵衛尉景綱

森山主膳正重増

普請奉行

大迫主水助元共

大工

柴山与五郎吉次

客殿大工

武元兵右衛門清方

田中助次郎州貞

薩州伊集院法智山妙円禪寺本有樓鐘、小而又破大不便

音聞、応永丙申孟夏月住持比丘正猷尽囊倩工匠再作之、

偶開山大和尚賜青銅十緡于寺充乳母真正禪尼永季追薦

治具之捨田惣費數十緡鑄鉅余者皆余囊底所尽而護之、

、刻銘告晁氏、

右神社仏閣帳

伊集院  
一立田百六拾五畝

但高ニシテ百三拾三石八斗八升四合七勺九才

右明德年間当寺開山石屋和尚以妙円大姉菩提料買入、

応永十二年当山二世竹居和尚代所領坪付并年貢物成

帳一冊格護仕候、慶長年間 惟新公御菩提被召定候

節、御寄附之内ニ被召加候、

右者当寺開闢明德元庚午年、開山石屋大和尚、右由緒

之儀者長州之太守之息女法智妙円大姉因縁有之、長州

之太守石屋和尚之法儀を感慕し当国江下向有之、伊十

院大寺江息女因縁之始末を被告依願当寺建立有之、

長州より之施入銀を以立田百六拾五畝、伊集院家より

も立田拾町寄進ニ而殿堂全備仕、当寺開基五年之後、

応永元年甲午年福昌寺御建立ニ而石屋開山として入院ニ

而、当寺後住之儀ハ石屋弟子竹居和尚被相勤、廿三年

之住職ニ而候処、元久公御跡目一卷之以後伊集院領

御藏入ニ罷成、其上竹居和尚ニも様子有之福昌寺入院、

其以後四拾余年之間無高ニ而寺宇及廢壞候故、福昌寺

六代兼丘和尚当寺へ入院ニ而、妙円大姉施入高依願被

返下漸寺立候得共、天下一統御改易勘落以後又々殿堂

衰廢仕為申由候処、慶長九年 惟新公御菩提所被相定、

御威光を以漸々殿堂全備仕候由旧記相見得申候、但妙

円寺施入高百三拾三石八斗八升四合七勺九才之高を開

山高と申伝候、東門名頭儀者永代諸殿役御免ニ而年中

当寺江日詰仕来申候、右名頭先祖之儀、当寺建立相濟

喜悅之余り家臣小倉氏なる者耆人施入高為世話人当地

へ被召残置候由、左様成筋目を以前代より寺高之内為

給分拾八石取来申候、

一 寺領高五百石

但惟新公 忠恒御寄附御判物奥ニ記、

内五拾石 先年御物より御借入、

七拾五石 芳真軒へ差分、

三百七拾五石妙円寺所務

内百三拾三石八斗八升四合七勺九才、開山石屋和尚

へ長州之太守施入銀を以買入被置候処ニ、御寄付高

之内ニ被召加候、

14

妙円寺領之事、依天下一統御改易勘落以後、大伽藍之

修理難成悉及破壞之間、号惟新菩提所知行五百石相付

者也、若自今以後國中雖有如何様之沙汰、右知行之儀

者不可違變、然ハ役儀免許旨三拾石、是又永代所定置

也、仍状如件、

慶長九年十一月廿七日

惟新御判

忠恒御判

妙円寺

(本文書ハ「旧記雜録後編三」一九六四号文書ト同一文書ナルベシ)

一 糶百俵

但寛永年間為三了和尚從御物御寄附、

一同三拾六俵

但寛永年間為大川和尚從御物御寄附、

一同式拾五俵

但惟新公為御菩提御妹様より御寄付、

一惟新公御影 一尊

但御在世之内於加治木彫刻被仰付候由、元和五年己

未七月廿一日御逝去、殉死拾三人、御影様之左外

御仏壇ニ位牌有之、

一同公御位牌 一本

但御凶師後ニ島津下野寄進と書付有之、

惟新公御前様

一実窓芳真大姉位牌一本

同公御嫡女島津市正猶母帖佐之御屋地様と為申上由、

一笑清正真大姉位牌 一本

一殉死十三人之位牌 一本

一惟新公元和五年己未御病氣ニ付、秀忠公より上使篠

崎吉右衛門殿下向、同年七月廿一日御逝去付、秀忠

公より御書并御香奠銀子千枚、上使花房五郎左衛門殿

下向、

一惟新公御廟所并御灰塚六地藏福昌寺境内に有之、

一本尊三体 中尊釈迦 右薬師 左阿弥陀

但安置年間不知、施主明清禪定門 明清禪定尼と書付

有之、右三体ハ九州御手ニ入候節肥後より給ふ由申

伝候、

一鐘楼撞鐘 一口

但鐘之銘応永丙申孟夏住持比丘正猷と書付有之、

一堂前撞鐘 一口

但薩州牛屎院若王権現永徳壬戌年九月廿八日願主律師

永超と書記有之、

一東坡竹絵 二幅

但朝鮮より御持參之由申伝候、

一霰鐘子 一口

一韋駄天図師 一字

但右式行播州太守法名慶叟幸公庵立(マツ)為妙円大姉施入と

有之候、右庵主ハ妙円大師舅之由申伝候、右霰鐘子

ハ寛延三年当寺回祿之節及大破申候、

一惣金天目 一ツ

但蓋台共ニ惣金、右者加治木より參候由申伝候、

一寬永二乙丑年当寺回祿二付、家久公被遊御再興候由、

右回祿之時、大迫源五為奉守上 御影様客殿御影之間

へ馳參候処、御影様源五肩ニ被遊飛移候故 出御、

右ニ付從御物為御褒美青銅三百疋源五へ被成下候由、

一寬延三庚午年六月又当寺回祿寺宇不殘燒亡仕、同四年

辛未御再興有之候得共、御仮殿ニ而寺家惣而御減少、

其上仏殿も御再興無之、当時屋地石口迄本之儘有之候、

当山勝跡志

一寺之西数丁有山謂大円山、有堂安釈尊瑞像、不知何人

作之也、

一過寺之龍門可半丁有村之稱広瀬締構一字而安三十三体

之像觀世音菩薩也、土人伝謂義弘公起之小心以為三十

三所之巡礼所也、

一寺之南有一神社、嘗祭諏方大明神也、

一寺之大門側数歩而有一盤石、呼曰虎森石、

一寺之東將到広濟之境堺而路傍有一字安地藏薩埵木像、

一又堂上有石地藏立像也、

一寺之小門脇有荒神堂、禪師昔嘗之為寺中之守護者也、

一寺之南龍橋之辺有堂安薬師、曾禪師所手彫刻云々、為

延寿堂本尊 義弘公為土民結縁安于今処也、

一祖堂之内所安石地藏一尊、長一尺余、禪師所手刻者也、

一寺之後有石祠、安天照大神・久多島大明神、乃禪師為

寺中除災敷、

惟新公追悼記

粵島津十七代藤氏之義弘公者武名馳三国、文道奮天下、

其德也燕金有価、其名也趙壁無礙⑩、外吾堂并

入吾室、統箕裘業誦父書并有父風梧桐閣上鸞翔鳳舞、

藕糸竅裡、鯉化鵬騫胸中、数万甲兵掃除濶寧元豊余党、

扶起文德、清和末孫、匪啻藤氏之柱礎、矧亦有梵刹金

陽双乎、雖然何豈得免天地榮衰人間無常之難、越元和

五年從文月十二日臥疾病之室、同到廿一日子刻、唱無

生三昧、其訃音至処無貴無賤、呼蒼天泣無淚号哭無声、

木人吞氣石女橫眉⑪、山野亦在傍辺、老淚湿却破袈裟之

余、雖招他嘲哂、年来之御芳恩難忘之儘、乃至自初七

日到七之日之光陰、賦小伽陀七章弥陀宝号六字、於置

上下製卑語六篇、或奉献酬、前三州之太守妙円寺殿松

齡自貞庵主真机下云爾、伏乞照鑑、初七明王猛火中、  
心身歷々旧家風、金剛正体不凋相、月落西山日又東、  
二七釈迦大導師、靈魂救尽涅槃岐、乾坤悉地無他物、  
千百化身不減姿、三七文殊坐五台、智光普照獄門開、  
一獅吼破仲秋月、処々楼中見善財、四七普賢薩埵恩、  
峨嵋銀界度亡魂、尊靈正眼滅何滅、一朵芙蓉笑不言、  
五七地藏菩薩緣、推開六道祐哀憐、宝珠携去作垂手、  
普濟衆生般若船、六七下生尊仏場、四千万露堂々、  
逢三会晚高靈位、心月孤円月将高、七々医王除病難、  
瑠璃妙術九還舟、①丹楽音樹下成正覚、寒暑由来総不干、

起龕

玉棺举起任遨遊体露金風絶繫留端の要知帰去路有無照  
破月明秋窃惟新捐館妙円寺殿松齡自貞庵主、

万軍将師 九族棟桴

興家愍庶民則万邦咸靡弗懷其惠治国夷怨敵、則千兵僉  
無不同其謀再入朝鮮揚譽三国又還本朝振威九州誠千歲  
為紀綱至理宣金正万舌中規矩 至言吐球、加之參禪覺  
道風雨夕 吟詩詠歌花鳥調 始翫興国山頂月 照仏祖  
玄脈 終湛妙円深処水汲曹洞末流真諦俗諦無差別、

16

有髮無髮無両頭惜哉靈四大離散風払廬山頂五蘊空尽月  
照湘水洲 直透過龐蘊及弟選仏場速超越黃龍念讚上鐘  
楼 左転右転明歴々順行逆行冷湫之 這箇是尊生前沒  
後之閑伎倆、即令於生死岸頭得大自在底之一勺以甚麼  
相酬勺云、  
唯依脚底無四輪絆去住縱橫得自由、

漸写銘

大乘妙典全部奉獻 松齡自貞庵主尊靈前者也、其頌云、  
徧擊心肝漸写筵、毫端功力直通天、経王六万余言妙、  
水墨花開朵々蓮、

松齡自貞庵主一周忌之塔婆銘

寿益書之

突兀部多現目前靈光分影到経筵観音微妙端嚴相勢至威  
神之力憐夜雨淒涼芳草色曉風吹徹燒香煙無量功德無差  
別平等供養普本須弥南畔閻浮樹下大日本国鎮西路隅州  
加治木居住菩薩戒大功德主、元和六年夷則雖相当松齡  
自貞庵主小祥諱之辰矣、預林鐘從中九日同到念六日就  
于妙円精舍莊嚴檀於八面九重高積五味珍菓金銀為襯飾

尊靈前拜請遐邇、諸尊宿本山淨侶等營弁伊浦淨膳以備深厚禮尊矣、六和清衆其數憑一千三百指看說大乘妙典一千部、同奉頓写全部刺通夜商量祖師公案、或諷演水

陸供一会、或順札円通懺摩法令當散筵之日諷誦大仏頂万行無上神呪之次建一基高顯樹以表先仏儀相矣、夫塔

婆者今日教主都市大王之化現得大勢至之尊像也、窃聞彼薩埵以其各言詮表本有自性功德故各云大勢至矣、広

以威神力用感動大千婆界以普照之光明撰取大八地獄云々、又觀經云但見菩薩一毛孔光者即見十方無量諸仏

淨妙光明也、故号菩薩各無辺光以智恵光普照一切含類令離散一切癡暗令脱脚三塗大苦、是故各云、大勢至

殊彼勢至菩薩宝瓶中入甘露智水洗除衆生三毒熱令生菩提覺芽者也、即甘露王如來是也、無量功德不可勝計、

誠可仰可尊、又兼日所誦經王者円頓一実之真界、諸仏出身之本源一切衆生成仏直道也、又法華有本迹二門、

亦門者說不變真如之妙理、本門者明隨縁真如之法門而演說一切衆生皆共成仏道理矣、又蓮華者一切衆生心性

一理自性清淨本有之心蓮也、是即妙法也、以是聞此五字之名文者能治無明之三毒速踏断生死窠窟出離煩惱之

圈圍、况也於一千部之功德乎、故經云、若有聞法者無一不成仏云々、由是觀之郡類得度之根本、衆生援苦機權也、

夫惟自貞庵主藤氏一族源家大賢

胸旨尖直文武双全如隨芳草來今遂落花返出、此今時

境遊彼久遠阡清風自生涼夜月正嬋娟、

化城早透過室処到既過雲飛運月岸軛船去來恰如過風之

空裡往還常似照月之山川這箇是尊靈平日受用三昧即今

臨真法供養之齊筵底之有一句子作麼生理詮去結句衆流

截斷窮源底百川依旧勢朝天

于時元和六曆上章涪灘季夏念六日

經之銘但頓写也

頓写功成衆力全、化龍端的扨塵縁、經王六万余言妙、一々金文字々詮、

三年忌之塔婆銘

壽益和尚書之

三年流景利那中、妙法花開誦誦功、五道軛輪千變諱、無量寿仏再来同、巍々実相伴霖雨、皓々靈光輝大空、

要見今朝真面目、浮囟突死出雲崧薩訶世界南胆部洲扶桑国西海路隅州加治木居住奉三宝弟子、元和七曆来孟夏秋念一日雖相当、松齡自貞庵主大祥諱之辰矣、預修季夏從十有六日到念五日就于妙円精舍光賁法筵高積五味珍菓節尊靈前矣、拜請避邇諸尊宿命本山淨侶等一百余員晨香爇画誦夜禪諸般法事之次建一基高顯樹在於僧官回向之文不能再举矣、夫塔婆者五道轉輪王本地弥陀如来化躬也、忝改九品者<sup>(教力)</sup>主之仏体仮称五道轉輪王悲心深重応用伴冥官冥衆早質脱無為之法衣隱大尊恃聖容著有漏之塵眼、依之五逆猶不捨一念必撰取小流之直如婦巨海大陽之似照高低来迎有憑往生不可疑矣、又約方則西方約部則蓮華部之主也、西方者菩提之方也、是者一切衆生万善万行、終大覺果滿仏陀円証方所也、又蓮華部者弥陀自証之蓮花一切衆生本有性德之心蓮是也、又大論云、婦命尽十方無碍光如来故弥陀有十二異号謂無量光仏・無辺光仏・無数無対光仏・炎王光仏・清浄光仏・觀喜光仏・智恵光仏・不斷光仏・無称光仏・難思<sup>(歎)</sup>光仏・超日月光仏、十二異号是也、皆以光明為名号、此弥陀如来光明其数七百五俱胝六百万光明云々、如是

功德不可勝計、又兼日所誦法華者諸仏出身之本源一切衆生成仏直道也、妙法蓮花有当体譬喻二義以草花蓮花喻妙法也、蓮者妙義、花者法義、妙者心、法者色也、以蓮華因果同時故喻無明之法性同体也、故一切諸仏菩薩浄土皆在此蓮華故云法界帰一心々々、帰法界豈有別浄土哉乎、直見妙法之体此即阿字本体三世諸仏出世间懷是也、如此善修力皆以尊靈諸渡苦海為船幢者也、共惟松齡自貞庵主万人英傑三軍英雄、弄弓絃而得妙則欺季広・由基、執御轡而入神則凌韓哀・良公、梅檀香<sup>(梅力)</sup>煙悅可衆心之清涼、蓮華妙法露出諸仏之威風、邪見稠林即得毘盧華藏、円覚伽藍全変炉炭玲瓏自然合轍無非穹窿築著碯著全機独脱逆行須行即処梵宮到裡說甚生死去来吹毛元不動論凡聖迷悟露柱絶盛隆、此是庵主生前死後做得底之自由三昧、即今臨斯斎筵如何脱却生死羅籠去云快哉不貴纖毫力万里家鄉咫尺通、于時元和七年重光作墨林鐘念五日 經筵比丘謹書之、

一妙円寺殿松齡自貞庵主之追悼為冠松齡自貞四字云爾、松齡千年長碧空、齡胡為属椶花紅、自身遥猷梵秘、貞

女勇夫皆促仲、

右ノ外段々アリ略ス、

一寛永三年之上棟文アリ略ス、

竹居・大田共称二世伝論

竹居禪師応永改元繼開山席住妙円者の然矣、厥後開祖

勇退福昌婦休慧灯是故曰西方丈使大田董後席也、及元久恕翁公

薨公族両家争国爵竟至両軍蹙兮生死決千手堂合戦、于時大

田左祖其家族伊氏者甚矣、開祖罵之便逐福昌、故蟄居

于伊集院神殿村縛庵扁常樂後改曰常寺也、応永丙申竹居応

師檀之命兼任福昌而三歳之間跨居両刹居屢訴祖將還田

於福昌、然祖不聽三更葛裘而居白祖以自意請任田於妙

円祖似半領以故繼席、然則竹居於妙円二世、於福昌三

世、大田亦於福昌二世、於妙円三世也、蓋大田者以開

祖命銷福昌世牌、苟大田立二世、則竹居者法兄、豈得

為三世哉、大田者法弟得為妙円三世而可也、若以銷大

田於福昌而銷竹居於妙円則不可也、然何以大田為二世

耶、以慢習其徒成之乎、是特禪雜々々者之事非大田所

宜致何故愚兵復興而復不改之并合為二世而分以前後乎、

自以統席於竹居之意立弟三世之牌也、其如秀翁・寛室亦以前後而分世牌則可也矣、

今模索陳編以書記永流方來者也、

一開基法智妙円大姉長州太守息女

一広濟寺開基無等道忍大禪定門者伊集院長州忠国也、建

長庚戌十二月十三日誕、元亨壬戌十月十日逝、寿七十

三、是乃石屋老父也、道忍ハ石屋より誕生前々廿四年已前死去也、是ハ年間相違有之、

一月庭宗円大禪定尼生于阿多氏禪師慈母也、塔在于円福

牌在于広濟、

一妙円建立大道觀了庵主伊集院大隅守久氏也、父者忠国

也、

一円通開基義山性公尼、庵主者禪師之姉也、牌并堂在円

通、

一延慶寺殿大用道応庵主者伊集院藏人頭頼久也、父則久

氏也、州之太守氏久公之曾也、

伊集院家系

忠経五郎 常陸守 俊忠 侍從 法名道貫

久兼弥五郎 圖書頭 久親法名道智

忠親法名道助 忠国法名道忠 此時称伊集院

久氏法名觀了 賴久法名道忠

熙久法名定山道渠

妙円寺住持記

一 開山石屋真梁大禪師 受業蒙山 嗣法通幻

世姓藤原氏伊集院、貞和元乙酉誕于州之伊集院、明

徳元庚午創妙円寺於伊之徳重村、而置法智妙円大姉

牌焉、事詳于原委、茲秋省幻和尚於越之龍泉、辛未

還錫於妙円也、応永元甲戌退院開基於福昌、而丙申

歲搗退鼓去而創西來於作州居之七歳矣、応永三十年

癸卯五月十一日示寂於丹之永沢、俗寿七十九、曰塔

於智日矣、

一二世竹居正猷

世姓長氏時崎、永和(マ)戊午誕于伊集院、応永元甲戌

董席於当山而同廿三丙申歲遷于福昌、寛正辛巳歲十月念五

日示寂於太寧室、八十四歳、

一三世大田真用 薩州人伊集院氏

応永廿三年申從福昌寺当寺へ入院、同廿八年丑八月

十二日死、

一四世秀翁昌旭 薩州人

一五世寛室本有 薩州人

一六世愚丘妙智 受業竹居 嗣法仲翁

世姓藤原氏島津、応仁二戊子歲掛錫於福昌而及応永廿

八辛丑退院矣、於是至文明庚寅歲半百載之間秀翁・寛

室両和尚各董席於当山、雖然徹底孤貧而諸堂悉荒廢也、

故愚丘以為当山則石屋之聖跡宜可措、乃退福昌来当山

再興絶繼廢鼎新之功堂宇乃成、由是称中興而居于第三

住居之十三霜径行于伊作邑、創善勝而寓居之殆五白、

然後丙午歲還錫於当山、以長享元丁未十月念四日示滅、

一七世虎溪昌隆 薩州人

姓不知、長享元丁未入院、明応五辰退院、永正二丑八

月九日川辺松尾山延慶寺二而遷化、

一八世物外春超 薩州人

姓平氏堀、明応五年辰入院、永正九申二月十五日常(マ)

寺へ隱居、同十三年子八月十二日死、

一九世雲龍桂文 薩州人

氏大重、永正九申入院、大永六戌二月廿五日於市頭庵遷化、

一十世桂巖永昌 薩州人

氏指宿、大永五酉入院、天文 辰七月十四日死、

一十一世祥山瑞可 薩州人

氏大馬場、享祿四卯入院、天文十丑四月八日死、

一十二世茂岩慶繁 薩州人

氏不知、天文十丑入院、同廿年亥十月廿六日死、

一十三世日山慶就 右同

天文十九年戌入院、永祿七子十一月五日死、

一十四世真屋慶淳 薩州人

永祿七子入院、天正八辰五月十三日死、

一十五世能山守慶 右同

姓藤原氏喜入、天正八辰入院、慶長四亥十二月七日死、

一十六世丘屋梁傳 薩州人

姓氏不知、慶長四年亥入院、同八年卯九月廿八日死、

一十七世太宗存可 右同

姓氏不知、慶長八年卯入院、同十一年午九月三日死、

一十八世昌庵祐繁 薩州人

姓氏不知、慶長十一年午入院、同十四酉四月廿六日死、

一十九世三了麟達 右同

氏前田、天文十四年卯誕生、慶長十四酉入院、天和元

卯三月朔日入院、翌辰二月八日死去、六十二、

一二十世大川長益 右同

氏兎玉、天和元卯入院、同二辰福昌寺へ入院、同三巳

二月廿三日死、

一廿一世想現清曇 右同

元和二辰入院、同八戌三月廿日死、

一廿二世日鑑壽益 右同

氏折田、元和八戌入院、寛永四年卯福昌寺へ入院、

一廿三世通天宗意 右同

寛永四卯入院、同六巳四月廿二日死、

一廿四世奪叟全珠 右同

姓紀氏桑波田、寛永六巳入院、同八年未二月十一日福

昌寺へ移、同十九年午六月廿四日死、五十五才、

一廿五世天室聚紋 薩州人

氏黒木、天正丙子誕生、寛永八未入院、同十四丑福昌

寺へ移転、同十七年辰心岳寺へ隠、明曆 乙未五月十

二日死、八十才、

一廿六世静賢正鎮 右同

氏左近允、寛永十四丑入院、同十八年巳三角庵へ隠、

明曆二申十一月六日死、

一廿七世日旋寂岱 右同

姓藤原氏佐田、寛永十九午入院、同廿未丹州永沢寺へ

転住、明曆二申本正院へ隠、寛文二寅五月十七日死、

一廿八世得水寂龍 薩州人

氏鬼丸、明曆二申入院、寛文四辰収六軒へ隠、同十戊

十二月十四日死、

一廿九世蘭谷芳郁 日州秋月人

氏河内、万治三庚子住越之前州南仲条丹生郡岩永村太

平山龍泉禪寺、寛文四甲辰正月十六日入院、同十庚

辰二月廿九日当地ニ而死、

一三十世月巢慶鶴 薩州人

氏田辺、寛文十庚戌入院、延宝六年卯六月廿六日死、

一三十一世心聞全授 右同

氏横山、延宝二寅入院、元禄二巳芳真軒へ隠、同六西

八月七日死、

一三十二世天運淳鶴 右同

氏和田、元禄二巳入院、同十丑九月二日死、

一三十三世尽天索吸 隅州人

姓橘氏藤崎、寛永九申五月五日誕生桜島、元禄十一寅

十二月廿四日入院、宝永三戌二月廿五日芳真軒へ隠、

正徳四午正月廿三日死、八十三、

一三十四世快庸良吟 右同

氏山元、山野之産、宝永三戌二月廿五日入院、同五子

十二月廿日死、

一三十五世聖灯宗賢 薩州人

氏川崎、日置之産、宝永六丑八月六日董席於日新寺、

享保二丁酉七月十五日示寂於当山、其間宝永七庚寅輪

住総持於能故晏座于当山来往九年、寿七十一、「異本

宝永六丑八月六日入院」

一三十六世無參石門 隅州人

氏川枝、隅州大始良産、享保二酉十月二日入院、同六

丑六月五日死、

一三十七世海門玄珠 薩州人

氏 鮫島、阿多産、享保六丑十一月十七日入院、同十三

申十一月十一日芳真軒へ隠居、同廿卯十月七日死、

一 三十八世光州淳海 薩州人

氏 日高、鹿兒島産、享保十三申十一月十三日入院、同

十八丑八月廿二日死、

一 三十九世大光常寂

氏 是枝、鹿兒島産、享保十八年丑九月十八日入院、元

文二年巳十一月廿五日福昌寺へ移転、宝暦二申七月廿

日但州弥勒寺<sup>二</sup>而遷化、

一 四十世脩門龍鱗

氏 中山、川辺産、元文二巳閏十一月十四日入院、宝暦

二申九月七日死、

一 白朮一円

平佐産、奥氏、延享二丑正月廿八日入院、寛延三年能

州総持寺移住、六十六才、同四未三月十八日能州<sup>二</sup>而

一 台嶽宗吾

加世田産、愛徳氏、宝暦二申五月朔日入院、同十一年

巳三月廿日芳真軒へ退院、明和二酉十二月十八日死、

六十四、

一 州屋光易

鹿兒島産、加藤氏、宝暦十一巳三月廿一日入院、明和

元申十二月十七日死、七十二、

一 橘州慈芳

入来院産、斧淵氏、明和二酉三月廿五日入院、同六丑

十二月六日死、六十六、

一 競天大喜

加世田産、大神姓緒方氏、明和七寅二月十一日入院、

一 得岩寂随

一 覚本性徹

一 源龍潭禅

一 恕源寂宥

市来崎野産、大迫氏、文化六巳四月廿九日死、八十七

一 道林仙州

市来産、塚田氏、文化六巳三月入院、同十一戌九月四

日死、六十四才、

い十院  
芳真軒

妙円寺塔頭

御玉屋小板葺九尺方

右者慶長十五年庚戌霜月、為実窓芳真大姉且又為妙円

寺隠居所 家久公御造立、昌庵和尚開山也、其後寛永

十五年戊寅小春再興有之、

右神社仏閣帳

い十院  
一高七拾五石

但妙円寺御寄附高五百石之内

右者芳真軒、慶長十五年庚戌、惟新公御建立ニ而芳

真様御位牌御安置被遊候而、妙円寺御寄附高之内御配

当之由、

一実窓芳真大姉御牌 一本

但惟新公御前様ニ而、慶長十二年丁未二月朔日御逝

去、宰相様と申上候、家久公御母堂、

一右同公御廟所 一字

但芳真軒客殿東脇ニ有之、

惟新公  
一御影 大仏師光嚴作 一尊  
惟新公御子様 康下七一  
一御牌 一幅

幻生院殿凉山幻生大禪定門

鶴寿様と号ス、天正四子年御早世、

皇徳寺殿一唯⑧怒亭大禪定門

又市郎久保公、文祿二巳九月八日於朝鮮国唐島

御逝去、

慈眼院殿花心琴月大居士

中納言家久公、寛永十五年二月廿三日御逝去、

宗江院殿湖月宗江大禪定門

万千代様と号、天正十六年於泉州境御逝去、

徳元寺殿蘭桂純香大禪定門

久四郎忠清、文祿四年御逝去、

⑧桂樹  
〔樹木〕院殿虚窓⑨從白大姉

右 惟新公以御下知御安置、

一稻百俵 為実窓芳真大姉 蘭桂純香大禪定門 御物よ

り御施入、

伊集院郡名  
菩提所

妙円寺末  
静賢院

前名三角庵敗壞之後静賢和尚中興、為寺地石地妙円寺  
知行之内也、

伊集院入佐名

大円庵

右者妙円三世愚丘和尚開山所寺地御免、

伊集院大内山

常帝庵

同神殿名

多福庵

同所

常栄庵

右三ヶ寺ハ寺地御免、

伊集院桑波田名

<sup>⑩</sup> 城福寺

右之寺地石地妙円寺知行之内、

同所黒葛原

聴松庵

同所麦生田名

侍聖院

右二ヶ寺ハ寺地石地芳真軒知行之内、

同所町頭

市頭庵

同所麦生田

生田庵

同所郡名

花栄庵

右三ヶ寺御支配之時分成公領、

右元禄十丑閏二月書出、

18  
18の1

奉寄進

南郷内中園門付水田九反廿部并中園一ヶ所<sup>⑩少</sup>二切水

畠一所事

右件所領者、觀了為重代相伝所領之間、奉寄進円通軒

畢、限永代可有知行候、於于子々孫々不可有他妨候、

伊集院之内  
伊城山

妙円寺末  
円通庵

開基義山性公庵主

仍為後日状如件、

応永四年丁丑十一月二日

(伊集院久氏)  
沙弥(花押)

(本文書ハ「旧記雜録前編」二五九四号文書ト同一文書ナルベシ)

奉寄進

南郷内田園等事、水田坪付在所々并園五ヶ所号名、

一所はね田園、一所田中園、一所た、ら口、一所ほ

うくわう園、一所原園、

右件所領者、觀了為重代相伝所領之間、奉寄進円通軒

畢、限永代可有知行候、於于子々孫々不可有他妨候、

仍為後日状如件、

応永四年十一月二日

沙弥(花押)

(本文書ハ「旧記雜録前編」二五九三号文書ト同一文書ナルベシ)

譲与

南郷之内こくれうの門水田一町三段の内あまみ并居屋の二反加定

敷園一所之事

右件の田園之事、觀了重代相伝の所領たる間、心さし

をもつて「スリ切レシレス」一期の程たのさまたけなく

ちきやうあるへく候、いさ、かかの在所ニおいていら  
んわつらひをなすへからず候、仍為後日状如件、

応永二年六月十八日

(伊集院久氏)  
沙弥觀了(花押)

(本文書ハ「旧記雜録前編」二五四六号文書ト同一文書ナルベシ)

ゆつりたてまつる

なんかうのうちほうくわうその一所の事、くわんれう

ゑいたいさうてんのしよりやうなり、しかれハ心さし

あるによて   なかくさうてんの地として知行あ

るへく候、仍為後日ゆつり状如件、

応永二年きのとの十一月廿日 沙弥觀了(花押)

(本文書ハ「旧記雜録前編」二五五三号文書ト同一文書ナルベシ)

奉寄進

薩摩国満家院郡山名之内常葉門付水田一町一反・園山

野用作分ミたらい五反・河山三反・迫田三反、都合二

町二反事、

右件の所領者、道応(⑩為)の重代相伝所領間、限   代奉寄進

円通庵処也、然者無他妨任先例、可有知行候、於此所

18の7

成違乱輩者、道応不可有子孫之儀候、仍為後日寄進状  
如件、

応永廿七年二月三日

(伊集院頼久)  
道応(花押)

(本文書ハ「旧記雜録前編二九八九号文書ト同一文書ナルベシ」)

18の6

円通庵寄進状 飯田二町

奉寄進

薩摩国伊集院内飯田村柗木壺町・樋脇五段・小河田□  
并ニ園壺所奉寄進円通庵処也者、無他妨任先例、永代  
可有御知行候、若違乱煩輩頼久不可有子孫之儀、仍寄  
進状如件、

応永七年八月十八日

(伊集院)  
頼久(花押) 「スリ  
キレ」

(本文書ハ「旧記雜録前編二六六一号文書ト同一文書ナルベシ」)

たまりの園一所・馬<sup>(場園)</sup>一所、合三ヶ所事

右件の田園等者、道応重代相伝之為所領間、限永代奉  
寄進円通庵処也、然者無他妨任先例、可有知行候、於  
此所成違乱輩者、道応不可有子孫之儀候、仍為後日寄

進状如件、

応永廿七年二月三日

道応(花押)

(本文書ハ「旧記雜録前編二九九〇号文書ト同一文書ナルベシ」)

18の8

ミつへのみんなかのまた名内のすいてんしもしんかい  
七反并ゆの木のまる三反、以上壺丁内、ほりのうちそ  
の一所、御ちきやうあるへきよし申さるへく候、あな  
かしく、

「正平十五  
延文五年二当ル」  
二月十一日

(伊集院忠国)  
道忍(花押)

大隅守殿

(本文書ハ「旧記雜録前編二六九九号文書ト同一文書ナルベシ」)

18の9

ゆつりたてまつる

さつまの国ミつゑのみんなのうちかまか原村事<sup>このうち、</sup>  
かの所におひてハ、くわんれうちきやうたりといへと  
も、その心さしあるにて、犬太郎母ニこのあひた  
ゆつりたてまつり候ところなり、他のさまたけなく知  
行あるへく候、た、し一期の後ハ、犬太郎丸はから

ひたるへく候、よて為後日ゆつり状くたんのことし、

おうあん七ねんきのへ十一月廿三日

(伊集院久氏)  
沙弥観了 (花押)

(本文書ハ「旧記雜録前編」二二七二号文書ト同一文書ナルベシ)

又大道道応寄進在所共、熙久為重代相伝所領候之間、

懸判於相副奉寄進処也、於此在所違乱候する仁ハ、熙

久不可有子孫候、仍無相違可有知行状如件、

永享六年十二月十五日 (伊集院) 熙久 (花押)

伊城山

円通庵 寄進状

(本文書ハ「旧記雜録前編」二二六六号文書ト同一文書ナルベシ)

薩摩国伊集院石谷之内たかひ一町二反并屋敷一所、限

永代奉寄進円通庵候処也、早任先例、可有知行之状如

件、

永享八年卯月十六日 熙久 (花押)

円通庵寄進状

(本文書ハ「旧記雜録前編」二二八六号文書ト同一文書ナルベシ)

円通庵開山義山性公尼庵主

右者伊集院家五代伊集院大隅守久氏之女メ、渋谷右馬

之助雖結婚未嫁内、右馬之助興国中之一揆久氏ニ使シ

テ曰、近々庄内合戦ニ為敵味方可致防戦之間、未致出

陣内、今一度可致今生之対面与、久氏答曰、対面者近

々庄内蓑原合戦首実見之節可致対面与返答有、応安六

中二年癸丑年右馬之助於庄内蓑原合戦遂戦死、首実見之節久氏

有対面、誠ニ武士之一言不変事如金鉄与、敵味方是を

感しける故ニ、久氏之女為尼剃髮染衣して、永和五年

己未三月結一庵、円通庵と号し弔右馬之助菩提、昼夜

読経不敢怠と云々、

右拾一通円通庵文書ニテ、当分妙円寺へ格護相成

居候故、一覽写取もの也、

(伊地知季通) 嘉永四年亥三月廿四日 季直 (花押)

臨濟宗五山派

京都瑞雲山大平興国

南禅寺末  
当分大龍寺兼帯  
廣濟寺

泰定山  
要集  
開山蒙山知周

同

開基年月不詳、二代南仲開基ニ而蒙山ハ勸請開山之

由、

高式百三拾三石壹斗壹升七合七勺壹才

別書  
一大檀那道忍大禪定門  
島津氏三代下野守久経公也、  
一開基檀越無等忍公大禪定門  
島津氏族臣伊集院長門守忠国広濟創建南仲父也、

19

神社仏閣帳

一高三拾石

一当寺七代雪岑和尚 龍伯様御代永祿十三年琉球へ渡海、

同 同七月十四日帰帆、為其忠賞末寺被寄附証文写、

(本文書ハ「旧記雜録後編」二五四〇号文書下同「文書ナルベシ」)

20

(本文書ハ二五号文書ト同文ニツキ省略ス)

右日本伽藍記に、我開山南仲和尚也、湖月和尚ハ大<sup>(患)</sup>

嶽様御子也、

但先住

広濟寺塔頭

一取得庵

一如々院

一梅林庵

一風月庵

右明寺也、

百石者当寺十四代守賢御訴申上候者、当寺之儀南禪寺直末十刹之官寺、殊ニ御当国ニ而ハ一派之門首ニ而候得共、慶長十八年丑六月十日出火以後、御寄進高并伊集院家より寄附高迄も公領ニ被召上、当分被下置候高迄ニ而ハ寺役勤行内外難統訳を以、守賢之師より付囑貯銀有之、正徳二年辰二月廿七日買高之願申上候処、同五月五日麿島高之内買地御免被仰付候、然共相究候寺領之外寺高ニ相重候儀不被仰付候法ニ而、何方ニ成共附高ニ可被仰付旨被仰渡候付、伊集院藏人殿儀ハ開山ニ付而格別之由緒御座候條、藏人殿附高ニ御願申上候処御免ニ而、守賢代ニ五拾

石余買入、且又当隠居代四拾石余買入百石相満其首

尾申上候処、享保廿年卯十二月晦日百石自分買入高

藏人殿付高御免御証文頂戴仕候、

下野守様(久懸)  
一 大檀那道忍大禪定門

右御牌 貞久公御安置之由

(忠國)  
一 深固院殿太嶽誉公禪定門

(立久)  
一 龍雲寺殿節山忠公禪定門

一 境巖光公居士

一 月窓明公大師

一 月淑光照禪定門

一 前安国海樵超大和尚

右湖月大和尚手作六角之位牌ニ而安置之由、

一 当寺事貞治二年伊集院長門守忠国建立ニ而開山前住南

禪南仲景周大和尚開基ニ而候、伊集院長門守殿実子ニ

而候、仏殿建立之儀、応永五年戊寅四月十三日住持景

周大檀那藤原彈正弼頼久与当寺年代記ニ茂相見得申候、

一 寺格之儀南禪寺直末十利之官寺西堂改衆之地、於本山

兼弘執行仕候得ハ、公方様より当寺住持職公文頂戴

仕儀御座候、開祖より十代迄ハ公方様より皆共ニ公

文頂戴仕、殊南禪寺再住迄相勤候僧茂御座候、然共慶

長年間出火以後寺高をも減少被仰付候故、寺格之通於

本山出世開堂も貧地ニ而不罷成候、然処、元禄六年南

禪寺内当寺宿院帰雲院東海祖津当寺住持職ニ而公方

様より公文頂戴被致、同十六年(マママ)卯十月為開堂被罷下候

付、御物御物入ニ而首尾相済申候、尤御当家様御代

々様より茂住持職之節ハ公文頂戴被仰付、西堂改衣仕

来先格ニ御座候、右ニ準末寺伊作多宝寺・山川正龍寺・

阿久根蓮花寺・当所善福寺、右四ヶ寺西堂改衣之節、

当寺之寺格を以 上様より公文頂戴被仰付事御座候、

一 書本大般若六百卷全部

箱蓋銘書

大日本国西海道肥州益城之郡六ヶ庄桑原村広谷門地福

禪寺

大願住持比丘榮喜

同 宇佐公忠

同 小野氏之

同 広瀬掃部助種作

右大般若慶長年間出火散々焼失仕、相殘候本茂大破罷成、当时用相違不申候、

一雲板沓ツ

銘書写

奉施入

西街道筑後州西牟田靈鷲禪寺、于時永徳二曆壬戌南呂上漣住持沙門元簡誌之、

右雲板ハ破損不仕當時迄寺用相違申候、

右両種者 龍伯様九州御出陣之節、当寺七代雪岑和

尚御婦依僧ニ而、別而御懇之被蒙 上意候故、御跡

より御見舞被罷越、其節雪岑ニ御拝領被仰付候由申

云書御座候、

一当寺之儀往古者古城山園勝寺与申候而、当所之内古城

村ニ御座候、開山勅号を勅諡泰定広濟禪師と贈候ニ付

而、境地を替寺号を改而泰定山広濟寺と申来候由、宗

旨者往古より臨濟宗ニ而御座候、

一寺家之儀承応二年巳十一月十八日咲翁と申僧看坊ニ而

罷居候処、少訳為有之由ニ而退院仕、明暦元年迄三ヶ

年無住ニ而御座候、巳十二月、伊作多宝寺仁室江当寺

住持被仰付入院仕候得共焼失之寺跡、殊ニ三年之無住

ニ而荒廢仕居候ニ付再興之志願有之、右之趣申上候得

ハ、三年無住之内高三拾石之物成御公儀ニ被成置候を

仁室江被成下、其外寺山之杉并人夫等迄入用次第被仰

付候ニ付而、客殿・開山堂・書院迄其節再興仕候由、

大門之儀寛文十年御建立被仰付候由、延宝六年午正月

茶堂造立之願申上候処、白銀三枚・寺山杉大小廿本被

成下其節再興之由、

一当寺前住剛外和尚と申候を、慶長十年巳五月 義久様

より京都東福寺龍眠庵より被招呼、当寺へ住持被仰付

置候処、同十八年丑六月十日出火有之、伽藍・宝物等

文書迄皆焼失仕候、其節高七百三拾石有之、剛外和尚

之儀ハ御暇も不被申上候而京都之様罷登り、昌藏司と

申僧を留守ニ被召置、如本之寺家再興被仰付候て罷下、

住持可相勤由ニ而不被罷下候、然共右高七百三拾石之

物成四年程京都より取納仕候由相聞得候処、不被罷下

候ハ、後住可被仰付旨御物より被仰遣候得共、後住之

儀何分ニ茂御返答不申上候故其通ニ而、慶長十八年丑

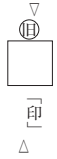
六月より明暦元年迄看坊ニ而御座候、 龍伯様より忝

拾四町之内高三拾石被召付置候外ハ皆共公領ニ罷成候、  
一 龍伯様御袖判式通

天正廿年九月六日

町田出羽守

久倍判



当国寺社領事以御下知令勘落候、雖然異于他候条、寺  
領別録在紙事如先々被仰出候、被全寺納可被專興隆事肝  
要之由、恐惶謹言、

一 伊集院長門守殿并一家衆より田畠寄進状拾九通于今格  
護仕居申候、  
一 御老中状

天正廿

町田出羽守

九月六日

久倍判

廣濟寺

貴寺就于炎上今度被相掛七分出銀御免許候間、出物奉  
行衆江以此相紙可被仰達候、恐惶謹言、

(本文書ハ「旧記雜録後編」二九六一号文書ト同一文書ナルベシ)

慶長十八年

三原諸右衛門

十月廿三日

伊勢兵部少輔  
重恒判種

▽  
㊦御判△

廣濟寺領目錄

貞昌判

一 田方五町

分米五拾石

廣濟寺

玉机下

一 畠方四町

大豆式拾石

一 山畑拾五町

大豆三拾石

田畠山畑合式拾四町

分米大豆合百石

一 当寺十一代住持咲翁、慶長年間出火以後昌藏司看坊之  
後、正保二年酉二月十二日、末寺当所大田村之報恩寺  
より転住被仰付入院被仕、茅屋之仮寺家相調門首之義

規迄を相勤被申、如前代寺高可被仰付旨段々御訴等被申上候処、百石ニ相定候由ニ而伊勢兵部殿より被遣候書状、

24

貴寺御免許之地百石相定候、従老中之墨付者重而可被進献候、先々吾等前より如此候、恐惶謹言、

十一月五日

伊勢兵部少輔

貞昌判

広濟寺

侍者御中

一当寺五代前真如湖月英功大和尚

右忠国公御子ニ而、自作と申候而木像之影御座候、

一当寺七代住持再住南禅雪岑和尚博識高德之僧ニ而、其

節尚寺格茂被転十刹、三ヶ国一派之僧祿職を茂被致許

容候由ニ而、南禅住持靈山和尚より之雪岑ニ被遣候書

翰御座候、龍伯様別而御帰依僧ニ而、琉球国ニ御使

僧ニ被遣候、其後琉球御征伐之刻も雪岑和尚御頼ニ而、

御勝利之程周易之下筮考等被仰付、軍兵発船之吉日迄

茂考被仰付候由、其上当寺於山門観音を本尊と請シ、

三拾三座懺法御祈祷被仰付候由、其外御祈祷等被仰付  
訳段々御座候、雪岑和尚忠勤之次第左ニ相記候、

25

一薩州伊集院之内谷口善福寺、城之河内宝聚寺并市来院  
水月寺之事、従往古雖為広濟末寺、世上転変之時節中

絶、仍至琉球国渡船之刻、御懇望之条、令寄付広濟当

住雪岑東堂者也、任先例、於永代可被成執務状如件、

永禄十三年庚午

修理大夫義久御判

正月拾一日

広濟寺雪岑東堂

(本文書ハ「旧記雜録後編二」五三八号文書ト同一文書ナルベシ)

但城之河内宝聚寺・市来院水月寺当分無御座候、

一永禄十三年庚午正月廿七日発船ニ而、雪岑琉球御使僧

被仰付候而、同七月十四日帰朝、委細之儀ハ、御両殿

様より中山王江被遣候尊翰并御老中衆より琉球国三司

官江被遣候書簡ニ見得候、

26

去歳春、天龍寺長老以貴命持華緘、遥航南海来至西鄙、

審說厚意感戴々々、抑近年拙解印休官、付囑薩隅日三

州州職於修理大夫義久、因茲広濟住持雪岑長老為伸更

始之儀、詣于殿下、謹捧一書、獻微物略表陋志、件數

録于別楮、伏願、自他和好共全唇齒之邦者也、至祝々

々、恐惶不宣、

永祿十三白暮春初一日

島津入道伯嗣

琉球国王殿下

〔本文書ハ「旧記雜録後編二」五五二号文書ト同一文書ナルベシ〕

〔本文書ハ「旧記雜録後編二」五四八号文書ト同一文書ナルベシ〕

28 謹以呈一翰、仍広濟和尚就于当家改職之儀、謁于陛下

每件奏達所仰、抑近年往来之商人持印判致私渡、非

沙汰之限、尚以令違犯者、船財等可為貴国進退、万端

付和尚之口達、恐惶不備、

季春一日

〔本文書ハ「旧記雜録後編二」五五五号文書ト同一文書ナルベシ〕

29 準先例、為述伝家之旨趣、雪岑東堂令渡海、仍捧短札

表祝儀、頃聞、処々商賈不帶真印、自由往還無其隱、

向後如此輩者令点檢之、被処重科者所希也、余期後音、

恐惶謹言、

三月一日

〔本文書ハ「旧記雜録後編二」五五六号文書ト同一文書ナルベシ〕

日本永祿十三年季春初二日

修理大夫義久

進上拜呈

中山王閣下

30

為当国改政之礼儀、広濟雪岑長老朝覲之次、謹以呈片

楮、蓋伝聞、比年商船不常当家印判、檀犯旧制者惟多、

仰望、後日若有違<sup>⑩</sup>輩者、加細察究刑治、堅可被停止狼

藉奸党、委曲詳長老舌端、恐惶頓首、

暮春初一日

川上入道(忠亮)意釣判

呈上三司官館下

(本文書ハ「旧記雜録後編」二五五七号文書下同「文書ナルベシ」)

31

夫務旧礼之本、広濟雪岑東堂応尊命、持芳翰遙凌滄海  
着岸于琉陽、昭伸祝詞、吉兆々々、仍多種万物、殊修  
隣好之交儀、倍聯綿事、此方以可為同意者也、委曲東

堂可有演說而已、余者別紙載之、恐惶不備、

大明隆慶四年庚午季夏廿有七日

中山王

進獻島津修理大夫殿

回章

(本文書ハ「旧記雜録後編」二五五八号文書下同「文書ナルベシ」)

32

一雪岑和尚琉球国御使僧首尾能相勤婦朝仕候節、為忠賞  
高百石被成下候由、右高ハ雪岑隱居領被致、当所善福  
寺江被引移、善福寺後住を弟子永果与申僧ニ高共ニ付  
嘱仕、被致遷化候処、善福寺永果より右之高を肉縁之

甥ニ被遣候由ニ而、当時無御座候、尤代々雪岑より弟

子譲りと為被申置由ニ而、当分迄も弟子譲りニ而御座

候、

(本文書ハ「旧記雜録後編」二五五九号文書下同「文書ナルベシ」)

一雪岑住職之時分、於当寺 義久様御詩会被遊候、御短

尺拾式枚御座候、

33

一義久様琉球御征伐之以後、中山王為 御目見上国有之  
候節、 義久様御意ニ而、当寺末寺当所之内大田村報

恩寺ニ中山王到着ニ而、数日御滞在有之、其後雪岑同

道ニ而御出府被成、 御目見首尾能相濟婦国被成候由、

申伝書御座候、其節より中山国主之上国始申候由、右

報恩寺只今廢寺ニ而御座候得共、王居之地与申伝候而、

御免地之寺跡ニ而御座候、

(本文書ハ「旧記雜録後編」二五六〇号文書下同「文書ナルベシ」)

一義久様御誕生日ニハ、雪岑一生之内月次御祈禱被相勤

候由、書付之回向御座候、其節より只今迄、御代々

太守様御誕生日ニ者、檀那誕生と申候而、月并御祈祷  
仕来申事御座候、

一久保様関東之御戰場ニ御出陣之刻、於当寺一百余員之  
僧を集、十日を限り法花千部御祈祷雪岑ニ為被仰付由、  
天正十八年庚寅二月吉辰与御座候、

一義久様より、慶長十三年三月四日、法華壹万部御祈祷  
を当寺住持剛外和尚ニ満散之導師を為被仰付由、回向  
之書付相見得申候、

一龍伯様春雪之御詠歌被遊候を 忠恒様御自筆御状之写

頃春雪之めつらかなるを 龍伯様入御詠吟御歌被遊、  
隨之各詠歌共從富隈送給候、御返歌なくてはありかた  
く候間、当所衆へも少々申触候、然者一両 相加候者  
可為珍重候、則 龍伯様之尊詠書付進候、必和 待人  
候、不宣、

武士のこゝろひかる、あつさり

春とはいはしけさのしら雪

仲春初六日

忠恒御在判

広濟寺

玉机下

(本文書ハ、「旧記雜録後編三」一四六九号文書ト同一文書ナルベシ)

一当寺九代之住持断際和尚、応 義久公嚴命、庄内乱陣  
僧被仰付、当所之衆中大迫大藏与申壹人召列為参由、  
旧記ニ相見得申候、

一家久様より、法花壹万部之御祈祷満散之導師を断際和  
尚ニ為被仰付由、旧記相見得申候、

以上都而寛保二戊五月書出、

35 一高百石

右者当 太守様より先住玄察代ニ拝領被仰付候高目

録之写

右知行高、御国中之僧侶宗門之法式を不乱、道義不衰  
様可心掛旨、御代々被仰付置候処、広濟寺兼任大龍寺  
玄察東堂御領内臨濟一派ニ而者修学道儀為相勝由被聞  
召上、思召を以新田御藏入之内より御寄付被仰渡置候  
処、宝曆十年辰三月、郡奉行黒田次郎兵衛例竿ニ而致  
門割差出候帳面之通、同十一年巳正月廿七日、御家老  
衆任御引付令支配候間、可有取納、尤寺法勤行無緩怠

可相勤者也、

本田久米右衛門

宝曆十一年辛巳六月十日

寄

島津求馬

新納四郎

泰定山広濟禪寺由緒略伝

薩州日置郡伊集院泰定山広濟禪寺者、五山之上瑞龍山  
 太平興國南禪禪寺末派之禪刹也、此寺往古号円勝寺而  
 在於同郡古城村之麓矣、今復易地改名而号泰定山広濟  
 禪寺矣、此地之初有峨々山岳渺々大池也矣、開師卜此  
 所而欲創建精舍故懷基址凸凹之難夷日既久矣、然一夜  
 大雨切而山鳴谷響陷為平地也、実奇哉、是師之弘德也、  
 故堂舍仏閣悉皆莊嚴具足矣、依之山号泰定寺名広濟、  
 総門之額字泰定山、々門者彩鳳樓、仏殿者大宝巖殿、  
 法堂者摩訶衍堂、方丈者少室、禪堂者梅里堂、衆寮者  
 蘆蔔林、食堂者法喜堂、浴室者水因室、経藏者伊集閣、  
 開山塔者収得軒、檀那塔者無量寿院各銘之、又塔頭之  
 院々者如々院・是々庵・風月庵・梅林庵、如斯創宮大  
 伽藍也、曾奉仰請前往南禪蒙山大和尚為当山第一祖、

誠是南禪第二祖 詔創建本寺南院國師之適孫也、可

謂子能繼父業者乎也、况又如圭如璋令聞令望、因康永  
 年間住南禪而大振祖風也、此時尊氏將軍創立天龍寺而  
 行大勝會、時請師令居第一位云々、

一開山蒙山智明大和尚

勅諡泰定広濟禪師、貞治五丙午八月二十日示寂、立塔  
 南禪寺内上乘院安牌婦雲院、

一当寺創前南禪南仲景周大和尚

島津氏族臣伊集院長門守忠國子也、蒙山嗣法之神是  
 也、 応永二十八辛丑十二月十九日示寂、立塔円福  
 寺、

寺、

一当寺二世前南禪桃隱崇悟大和尚

嗣法南仲、 応永廿三丙申住当山、 応永三十二乙巳  
 四月廿一日示寂、四十六才、隱処不詳、

一当寺三世前南禪海樵真超大和尚

嗣法桃隱、姓氏不詳、先住中郷安國寺、 享徳三甲  
 戊隱風月庵、寛正三壬午四月七日示寂、  
十七日卜毛

一当寺四世前南禪玉圃英種大和尚

嗣法海樵、姓氏不詳、享徳三甲戊十月廿日住当山、

文明十六年甲辰二月十六日隱梅林庵、大永三癸未九月十八日示寂、

「イニ三月十五日遷化、無等道忍ノ裔也」

一当五世前真如湖月英功大和尚

嗣法玉圃、氏鳥津、太守忠国子也、文明十六甲辰二月十六日住当山、永正十三丙子隱如々院、大永四月廿八日示寂、五十四才、

母飛驒入道息女也、天祐和尚兄也、自刻影木像安置当寺戒壇也、

一当寺六世前南禅天沢佐津大和尚

嗣法湖月、薩州人、氏佐多、永正十三丙子二月十六日住当山、天文九庚子隱円福寺、同十一壬寅二月廿九日示寂、四十四才、

「イニ鳥津氏ト云」

一当寺七世前南禅雪岑津興大和尚

嗣法天沢、薩州人、氏町田、天文九庚子三月三日住当山、同廿一壬子二月十一日隱居円福寺、慶長六年辛丑五月十八日遷化、八十才ト云、

「神ト云」

一当寺八世前建仁景渭津勝大和尚

嗣法雪岑、薩州人、氏川上、天文廿一壬子二月十一日住当山、永禄十丁卯隱円福寺、慶長元丙申十月十六日示寂、「本ま、ト有」

一当寺再住前南禅雪岑大和尚

永禄十丁卯雪月十五日再住当山、時受国命使琉球国事詳于当寺記録也、天正十三乙酉隱善福寺、慶長六年辛丑五月十八日示寂、「降ト云」

一当寺九世前建長断際慈運大和尚

嗣法雪岑、薩州人、氏市来、天正十三乙酉五月十五日住当山、時和尚為出世上京登山之時、東福寺剛外和尚約於広濟寺後住而帰国之時、慶長九甲辰九月廿四日示寂播州、剛外和尚遠来当山住殆九年乎、慶長十八癸丑六月十日当寺有災、惜哉、古昔之伽藍及前住和尚出世之公帖・記録・宝物悉化烏有、故和尚去東福寺、称病再不帰山、自慶長十八年至明暦元年無住四十年許、其間看坊也、昔雖有田畠二十四町、今領三十石余、以為仏餉也、

一当寺十世前正興咲翁光索和尚

嗣法多宝寺桂隱和尚、氏山口、正保二乙酉二月十二

日住当山、明曆二丙申十一月廿七日示寂、

一当寺十一世前国泰仁室守勇和尚

嗣法天勇、薩州伊作人、氏黒川、明曆元乙未十一月

朔日住当山、罹災之後只建客殿而已、和尚深憂廢壞、

大起志願再造於大門・茶堂・開山堂・小方丈・書院・

小門・二王、且再建於末下中郷安国寺、伊集院法泉

寺・神福寺等、因称当寺中興、延宝七未十月十九日

隱居神福寺、元禄十一戊寅正月初八日示寂、

一当寺十二世德雲守沢和尚

嗣法仁室、薩州人、氏九山、延宝七己未十月十九日

住当山、南禅寺内帰雲院東海西堂秉弘転住、将

軍綱吉公賜広濟寺住持職、公帖、故西堂為拜開山塔

元禄十二冬遠来于当山留滞居多日、寺有 公帖写、

元禄十五壬午十月十二日于当寺示寂、

一当寺十三世達道守賢和尚

嗣法德雲、元禄十五壬午十一月自多宝寺転住、享保

十四己酉二月隱円福寺、同年八月十四日示寂、

一当寺十四世祥山玄臻和尚

嗣法京都東福寺雲岩和尚、享保十四己酉自山川正龍

寺転住、

広濟寺文書

36の1

伊集院寺脇内円福寺阿弥陀堂免園壺所并小山下田二反  
事、件園苧桑代地利物公事檢断加徴米等、阿弥陀堂仁  
所奉免除也、但於大犯者除之、仍状如件、

天和三年三月十五日

沙弥判

「正和ノ誤」

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」二五二号文書ト同一文書ナルベシ〕

36の2

伊集院脇内円福寺阿弥陀堂免①聯下園壺所并小山下田  
三段事、件園苧桑代地利物公事檢断加徴米等、阿弥陀  
堂仁所奉免除也、但於大犯者除之、仍如件、

建武式年十一月廿七日

〔伊集院家三代図書助忠親ノ  
助久判 弟左兵衛尉助久コトカ〕

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」一七五二号文書ト同一文書ナルベシ〕

36の3

奉寄進

薩摩国満家院小山田中俣内水田伍町并園九箇所加之、  
野島

限永代於円勝寺所奉寄進也、仍狀如件、

〔七代〕伊集院大隅守  
熙久判

貞治二年五月六日

〔六代〕伊集院彈正少弼頼久  
沙弥道忍判

〔五代〕伊集院大隅守久氏  
沙弥観了判

〔四代〕伊集院長門守忠国  
沙弥道忍判

円勝寺都寺 御寮

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」一三八号文書ト同一文書ナルベシ〕

36の4

竜泉庵之知行分田畠山野、開山懷聞和尚広濟寺方丈景周藏主被讓与申候上者、重代御知行不可有子細、仍為後日之狀如件、

応安六年八月十七日

〔大隅守久氏ノ法号〕

沙弥観了判

〔頼久ノ法号〕

沙弥道忍判

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」二二五六号文書ト同一文書ナルベシ〕

広濟寺积迦本尊銘

謹奉造立积迦三尊、依諸願已成就心中如意吉祥、各記名字為後代之者也、大檀那沙弥観了・同頼久等、大願

36の7

宗高大徳・明性禪門・同明清禪尼、作者大仏師大藏大眼、筆者景周万寿当寮後板年五十四敬書之、

侍者僧崇是当歳二十

嘉慶二年戊辰九月十四日

奉寄進広濟寺田畠之事

薩摩国伊集院内おりわし㊦ミやうの内今寺二町式段、同

園山野之事、同山内堂地五段、園一所并山野事、同辻

之堂㊦おしわし㊦七段、園一所、同くさみつ松本五段、

園一所、同山野之事、

右彼於田畠等、雖為有久本領、為先考景雲追贖、所

奉寄進狀如件、

応永三年正月十一日

〔有屋田氏父子〕

有久判

〔清久判〕

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」五六一号文書ト同一文書ナルベシ〕

奉寄進田畠之事

薩摩国伊集院大田名内松脇伍段并進月庵跡之園一ヶ所

36の9

薩摩国伊集院内柿本門五段・同岩屋谷五段事  
右彼所領者、任道忍之讓、依有志、崇悟書記仁限永代

(本文書ハ、「旧記雜録前編二」五九九号文書ト同一文書ナルベシ)

36の8

者、右彼在所者、為養父母了念禪門・真光禪尼之追膳、  
限永代奉寄進広濟禪寺、因頼久加判之上者、所可停止  
万雜公事也、特於久勝子々孫々不可致違乱、仍寄進状  
如件、

▽⑩広濟寺衣鉢侍者禪師△

応永三年丙子十月廿六日

〔頼久弟大田伊予守久勝コトカ〕

藤原久勝判

加判藤原頼久判

(本文書ハ、「旧記雜録前編二」五七六号文書ト同一文書ナルベシ)

広濟寺仏殿兩牌

右恭冀乾坤覆載保綏挿草靈区积梵鑑光賁布金勝概大檀

那藤原彈正弼頼久敬白

左伏惟 皇風浩蕩資助祖道隆興仏日高明照鑑擅心貞固

応永五年戊寅四月十三日 住持景周謹誌

36の11

奉寄進  
薩摩国伊集院持丸名内辺牟木門水田一町八段十并郡新

(本文書ハ、「旧記雜録前編二」七三〇号文書ト同一文書ナルベシ)

36の10

奉讓之処也、若於此所領違乱煩申者候者、頼久不可為  
子孫候、仍為後日讓状如件、

応永九年十二月廿七日

〔彈正少弼〕  
頼久判

(本文書ハ、「旧記雜録前編二」六九六号文書ト同一文書ナルベシ)

薩摩国伊集院広濟寺御領事、西山〔長門守忠国ノコト〕  
參町并古城  
山野在之無等寄進、

高別府〔伊集院久氏  
野在之〕庭寄進、満家院〔伊集院久氏  
小山田〕無等寄進、中保〔伊集院久氏  
野在之〕庭寄進、

町無等寄進、下土橋四段無等寄進、寺前田八段大道寄

進、大窪鎮守田九段頼久寄進、松脇五段久勝寄進、麦

生田所々在之、有久寄進、寺脇式町南仲自領彼田園等、

雖為無等・大道寄進状、為後日頼久加判事於か寺領致

違乱輩者、頼久不可有子孫之儀候、仍後証寄進状如件、

応永十一年甲申八月廿二日 頼久判

〔熙久初名カ〕  
為久判

広濟寺

開一町四段事

右彼田地者、頼久雖為本領、依有志、広濟寺仁奉寄進之処也、但満家院所々御寺領帰付之時者、此在所無等塔頭延慶庵仁可寄進申候、若又於此所領違乱煩申者候者、頼久不可為子孫候、仍寄進之状如件、

応永十五年四月十三日

(伊集院)  
頼久判

(本文書ハ、「旧記雜録前編二七七二号文書ト同一文書ナルベシ」)

南仲御影贊

薩摩州泰定山広濟禪寺中興開山南仲和尚肖像威儀棣之(タ)文質彬彬々、家世有老父曰上乘、祖曰靈祐、人才出類、産薩州族于島津、中興伽藍、則改円勝而号広濟、啓迪(也)緇侶、則立大典而叙彝戒珠瑩兮絶類定水落兮無限微塵裏出五千赤軸兜率宮付一炊黄陳広利人而約乎、已遐齡何止逾八旬、時応永廿一年龍集甲午蜡月初吉、小師与侍者請贊南禪梵芳薈拜書、

奉寄進

薩摩国伊集院直木内坂上門水田六段并園三ヶ所事

右彼田地者、道応雖為本領、依有志、崇梧西堂仁限永代奉讓之処也、若於此所領違乱煩申者候者、道応不可為子孫候、仍為後日讓状如件、

応永廿五年十二月十三日

「頼久」  
道応判

(本文書ハ、「旧記雜録前編二九九七五号文書ト同一文書ナルベシ」)

奉寄進

薩摩国日置新御領仁賀田三段・同園一ヶ所事

右彼所領者、自道忍(伊集院忠國)靈樹庵崇利比丘尼雖讓(也)、重依有志、崇梧西堂仁奉寄進候処也、彼比丘尼一期之後、為

寺領可有御知行候、若於此所領違乱煩申者候者、道応不可為子孫、仍為後日寄進状如件、

応永廿五年十二月十三日

「頼久」  
道応判

(本文書ハ、「旧記雜録前編二九七六号文書ト同一文書ナルベシ」)

奉寄進

薩摩国満家院内寂照庵之遣路田畠等之事

右依有志、広濟寺之長老崇梧西堂ニゆつりあたへ申候、但長老と申談、子細ありて、了円都寺之寮之しゆり料

として、限永代寄進申候也、此在所において、一言之  
いらんわつらいお申候するものは、道応か子孫たるへ  
からず候、仍為後日如件、

応永廿九年八月十八日

道応判

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」一〇二号文書ト同一文書ナルベシ〕

御書畏拜見仕了、抑龍泉庵之事、蒙仰候之間、千万之  
所仰候、愚身子々孫まで、御一筆之趣不可有申候、仍

為後日証文如件、

〔頼久ノ弟南郷遠江守忠氏、後久重ト云〕  
応永卅一年 甲辰 十二月十八日 久重判

広濟寺侍者御中

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」一〇三二号文書ト同一文書ナルベシ〕

薩州伊集院寺脇名内円福寺開山和尚讓与、先師南仲以  
為師資之相続、因之先孝無等以自筆証文、相加田畠等  
讓于南仲、南仲南仲任彼讓於其崇悟、是專先考之遺愛  
而先師之相紹也、依有志不殘寺領一ヶ所所讓小師聖春、  
凡寺院之繁興者、能紹法運禪道為最、而不論土地之多  
少、仍就室設禪床、以坐為勤寺、曰、伴道余本意也、

始先考重開山道行起円福、臥開創円勝一基、後改円勝  
作広濟、々々以故息山為開山初祖矣、開山忌四月十一  
日、南仲十二月十九日、無等十月十日、月庭正月八日、  
毎月以四ヶ月齋次諷誦、大非呪一返不可怠者也、

一為聖春後紹者、不扞自他之門派、為寺家以修理造宮可  
為人、而法眷中談合可定、不可私好本、思之思之、

正長二年 酉八月二十二日

住定山桃隠判

〔伊集院〕  
照久判

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」一〇九三号文書ト同一文書ナルベシ〕

薩摩国折原名内今寺并林園山内辻各々堂地同草水等田  
畠并山野之事、坪付在別紙、彼三ヶ所者、有屋田有久  
広濟寺仁寄進たりとゆへとも、子息清久退出候上者属  
欠所候間、あらためて帰付申候処也、於為久子々孫々  
いらんわつらいなく可有御知行候、仍為後証状如件、  
〔照久初名也〕  
永享六年六月廿六日  
為久判

広濟寺衣鉢侍者禪師中

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」一六〇号文書ト同一文書ナルベシ〕

奉寄進

薩摩国給黎院下長吉之内鈴源兵衛か塩屋公料一貫三百文  
早任先例、可有御知行候、仍寄記進状如件、

永享六年九月廿日

伊集院光濟寺沙弥天用判  
〔義久ノ法名天用道応トアリ〕  
〔マヤ〕

〔本文書ハ、旧記雜録前編二二二六二号文書ト同一文書ナルベシ〕

薩摩国日置之靈徳寺者、奉願興仙之建立也、最初南中〔中〕  
和尚を開山祖と定処、爾来広濟寺之末寺たる事

〔百〕  
不余年、雖然寬忠自興仙退出上者、属欠処旨、重任先例、

桃隠西堂讓与申候也、於熙久子々孫々無相違可有勤行候、於寺家檢断并雜務等事免除申候処也、仍寄進状如件、

永享六年甲寅十月五日  
〔伊集院〕  
熙久判

〔本文書ハ、旧記雜録前編二二二六三号文書ト同一文書ナルベシ〕

「忠国之法名」  
円福寺寺領田島等之事、任無等并道応寄進状、重寄進申処也、於熙久子々孫々無相違可有御知行、仍後証一筆如件、

永享六年甲子十月廿九日  
〔寅ノ誤歟〕  
熙久判

〔本文書ハ、旧記雜録前編二二二六四号文書ト同一文書ナルベシ〕

当寺山林之松、於剪代堅禁制之状如件、  
永享十一年二月初五日  
熙久判

広濟寺侍衣役中〔禮〕

〔本文書ハ、旧記雜録前編二二二三二号文書ト同一文書ナルベシ〕

奉寄進

薩摩国給黎之下永吉鈴源兵衛塩屋一所之事、広濟寺寄付申候処也、右為不尽用公禪門追膳〔延〕意元也、久景か子々孫々、仍此旨不可在相違候、仍寄進状如此、  
永享十一年己未三月二日  
〔忠国三男日置美作守久景ノコトカ〕  
藤原久景判

〔本文書ハ、旧記雜録前編二二二三三号文書ト同一文書ナルベシ〕

円福寺住持職之事申定上者、田島山林等不違一所可有知行者也、聊不可有他妨、特於彼在所成違乱煩之輩、不可為熙久之子孫也、仍為後証之状如件、

36の25

嘉吉元年 辛酉十二月十三日

大隅守熙久判

廣濟寺住持真超長老

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二二七六号文書ト同一文書ナルベシ)

廣濟寺諸末寺・諸塔頭之事、延慶寺・宝寿寺・靈徳寺・龍泉庵・如々院・聚星軒・無量寿院・取得軒、彼諸末寺・諸塔頭之事者、自開山南仲和尚中興桃隱和尚以來為廣濟寺之末寺上者、自今以後末寺而可為本寺之御計、去年以老者共堅雖申定、為後証重調此狀収寺家、若此外雖有文書、不可用兎角之儀、殊於彼諸在所成違乱煩背此証狀之旨輩、不可為熙久子孫之狀如件、

嘉吉三年八月廿八日

熙久判

真超長老

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二二九二号文書ト同一文書ナルベシ)

一日妙円寺御使節御出候、御意趣の通其時(◎こそ)承分て候へ、根元山王・諏訪の寄進と存候て、とかく申候つる御物語(◎よ)、委細存知仕て候へハ、いそき御

36の27

知行可目出候、満家へもやかて此謂可申遣候事候、恐々謹言、

小春五日

熙久判

廣濟寺

新符之御方へ

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二二九三号文書ト同一文書ナルベシ)

態令啓候、就其者円福寺の事、於度々承候之間、凡可任御意由申候、雖然以面御物語如申候、忠書記・春蔵主此兩人ニ被仰付候する事者、不可然候よし申候キ、於于今も其分候、只夫より御覚語(◎悟)より可目出存候へ、猶々忠書(◎記)へ被仰付候へは、春蔵主之恨もあるへく候之間、如此候、令啓候、外見あるましく候、恐々謹言、

九月廿七日

熙久判

侍者之御中

廣濟寺へまいる

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二二九四号文書ト同一文書ナルベシ)

東堂之御一期の後ハ、順職之ことくに寺家向之事、可

申談候、其の間ハ、如何にも御堪忍可目出候、心事以  
面拜可令申候、恐惶謹言、

極月廿九日

(伊集院)  
熙久判

広濟寺へまいる

(本文書ハ「田記雜録前編二二二九五号文書ト同一文書ナルベシ」)

一 島津御庄薩摩国泰定山広濟禪寺住持職事、早任先例、

可被執務之状如件、

長祿四年十月二日

(忠國)  
陸奥守判

崇薫首座

(本文書ハ「田記雜録前編二二二二九〇号文書ト同一文書ナルベシ」)

一 広濟寺ハ、無等道忍之開基也、最前ハ伊集院之内古城村

(伊集院忠國)

へ為有之由申伝候、依其古城村広濟寺領与御文書ニ有

之候、

一 何年間相立為申事知不申候、

一 広濟寺開山南仲和尚ハ、無等道忍之御息六番目也、六

拾三ニして、応永廿八年辛巳十二月十九日遷化、

(五)

一 雪岑事、義久公為御使僧、永祿十三年庚午三月廿七

日出船ニ而琉球へ渡海、同七月十四日帰朝、琉球利運  
ニ罷成事、雪岑和尚周易爻ニテ御安堵被成候、其易ノ  
本尊爻ノ道具至于今広濟寺ニ有之候、此由雪岑ノ孫弟  
子善福寺隱居ト申伝候、

一 肥後御手ニ參候事も雪岑和尚易ノ爻ニテ為召取之由候、  
其忠として地福寺雪岑ニ被給、其印ニ大般若經一部広  
濟寺へ參候、大般若銘書、

大日本国西海道肥州益城郡六ヶ庄桑原村広谷山地福禪  
寺

大願主住持比丘榮喜

同 宇佐氏忠

同 小野氏之

雲板銘

奉施入 西海道筑後州西牟田靈鷲寺

于時永徳二曆壬戌南呂上澗

住持沙門元簡誌之

広瀬掃部助種作

一 万部会ノ本尊広濟寺江有之候、

一 広濟寺家数七拾式為有之由申伝候、

一 廣濟寺炎上慶長十八年六月十日也、

諸官並轡逞威來 箭已離弦勢勇哉 不啻能騎又能射

漢家九逸是塵埃

題犬追物 天三乙亥  
孟夏念二 易足

佳士風流世諷來 犬追物志氣雄哉 一場技芸兩般意

射御兼并共不埃

人馬無端相得來 逐風追電是時哉 天公息露海西遍

射御試場曾不埃

射御從躬習以來 三良執轡却遲哉 薩西名士芸遊処

不是洛陽兵馬埃

犬追物旧有由來 為國禳災是功哉 相得只今人与馬

馬騅千里後乘埃

放箭通馳追犬來 勇豪意氣最高哉 洛人見此莫誇說

賀茂風流競馬埃

犬已離繩入殼來 無端射前甚奇哉 當頭不屑王良手

鞭起試場群馬埃

追犬當陽馬試來 千鈞之弩廢概哉 号猿聞昔養由射

今比諸公脚 埃

予幸陪琉球 專使之雅席、慢綴野語一章以述卑裝云  
爾、  
四月十七日也 (撰九)

薩隅日三州々 (⑩今) 君藤家累世之甲第久保公者武門將種國家

梁棟也、其仁行也厚被万民、其威名也遠覆八荒、加之

射騎為業、文翰為志、好賢愛士、實濟世之偉材也、以

故聚樂相国深器重之、榮無大焉、蓋今茲天正又十八祀

庚寅春季、 殿下起承兵、討不庭逆臣、天下英雄風虎

雲龍一呼響應、公亦受命發京師向東夷、戰場不愧為諸

軍先鋒、豪出群夫、(⑩不)振都鄙之嘉声、万人無不瞻仰、

雖曰兒童走卒、亦能誦之識之、至哉、大哉、臨此時国

家胥謀、集郡内諸禪德一百員於廣濟精舍、開啓梵席、

限十日令看說大乘妙典者壹千部、右集殊勲、回向三世

十方賢聖、祝献(⑩壽)六十余州神祇、祈檀門貞固武運延長者

也、夫窃按法華經王者諸仏直道法門衆生得悟捷徑也、

是經之於余経也、以父論之一切衆生之大梵天也、以王

称之三十三天之帝釈尊也、度量其功德深高、滄海未為

滄海、須弥未為須弥、并以在下、然則仗茲(⑩伏)大善根力、

怨敵自然退散、功成名遂不日還本國者、在不疑之地、

祝々、於是、予老例疎慵弗獲陪于経筵、〔目裁〕伽陀壹

章以奉賀他時異日凱旋云、

緇徒聚百一禪房 誦誦経王妙理彰 試看那函大勲力

魔軍瞻落髻珠光

雪岑老衲津興

景渭

開筵醉月岸鳥紗 諸賢統得唐人宴

燕衆鶯梢簇似霞

讚公

千枝万朶景佳哉 高駕〔目遷〕遊不埃 初覺東風無弃物

桃李園中吟坐花

果公

開筵葭玉坐花來

桃紅李白□吹晴

蘭甫

此遊花下冠平生 携客開筵共品評 坐到深更不須睡

主客開筵共賞春

蔭涼

終夜坐來吟到晨 枝々紅白点無塵 于花于月自奇絶

此地開筵雅宴頻

文岳

主是高僧客野人 紫陽春勝洛陽春 同遊甚愧被花咲

杏桃爛熳弄春晴

芦庵

〔回風〕流不愧李長庚 斯処開筵心到清 醉月坐花賓与主

〔回〕  
有斯花斯会稀

士亥

設宴芳園忘是非 開筵桃李自芬菲 千金一刻莫輕擲

紅白競春佳景連

梅叔

夜來和月此開筵 花前設宴誇千古

客是僧中季謫□

千紅万紫動詩情 此地開筵吟味清 一夜坐花兼醉月

宴遊不覺到深更

李白桃紅景益長 開筵清話勝尋常 坐花吟詠宴遊會  
不覺今宵到曙光

笏公

吟步芳園桃杏辺 開筵此夜不須眠 賞心樂事坐花処  
倭国唐朝易地然

寛文十二年子十月十日

広濟寺守勇判

野田村 右同  
瑞雲山 法泉寺

開山月洲和尚、十一月四日示寂、年号不知、前住以  
来至現住永仁十一世、

大田村 右同

瑞雲山 法恩寺

④報

城三川内 開山月洲和尚

宝聚寺

開山桃隱和尚

右四ヶ寺、享保六丑十二月書出、

伊集院谷口村

広濟寺末

善福寺

37

薩州路泰定山広濟寺鐘銘、葦屋梟氏罄志于、吾山範金

作鐘、神河真幸明祐捨財補費、何其願輪不大乎、不言

号令四郊啓幽迪陽無象規矩一音為紀作綱、吾徒警悟札

楽翁張④垂億万「億万」歳、鎮定阜康、

寛正五甲申仲秋吉祥日

住山海樵叟銘焉

葦屋金屋大工

広濟寺七代住雪岑隱居故開基之由候得共、焼失之寺  
跡ニ而建立年月不知、

要用集しらへ

瑞雲山

善福寺

高式石

享保六丑十二月書出

開山玉圃 大永三癸未九月十八日示寂

前広濟当寺二世雪岑大和尚

慶長六辛丑五月十八日示寂

神之川  
江善山

広濟寺末  
神福寺

開山仰之和尚、三月二日示寂、年号不知、

前住以来至現住古岩六世

伊集院寺脇村  
横手山

廣濟寺末  
円福寺

伊集院長門守忠国夫婦墳墓之地、開基旦那年月不知、

享保六<sup>丑</sup>十二月書出

開山息山和尚、四月二日示寂<sup>年間由緒不詳</sup>

一嗣法於蒙山和尚、南仲和尚之法兄也云々、

無等忍公大禪定門<sup>伊集院氏忠國</sup>

十月十日忌日

一開基檀那  
月庭窓門大禪定尼<sup>室</sup>

正月八日忌日

右広濟創建南仲和尚親也、

福山之内

善福寺末  
慶林庵

円福寺御寄進状八通

一壺通

弘安元年九月十五日  
<sup>紀時繼判  
紀持時判</sup>

一壺通

正和三年三月十五日 沙弥判

一壺通

元徳二年五月十二日 藤原判

一壺通

建武二年十一月廿七日 助久判

一壺通

貞和二年卯月十日  
<sup>沙弥了導判  
虎熊丸判</sup>

一壺通

嘉吉元年<sup>辛酉</sup>十二月十三日大隅守熙久判

一壺通

永享六年十月廿九日 熙久判

一壺通

嘉吉二年四月廿八日  
<sup>道吉判  
けさ五郎丸</sup>

<sup>本城 大田村之内麓</sup>  
一 一字治ノ城 又唱鉄丸山

一 城廻り半里六町拾六間

一 御屋地<sup>十八間</sup>廿六間畦ニシテ壺反五畦拾八歩

▽<sup>伊城</sup>城内小名 △

一 大手口 一曲田城 一関城

一 阿多城 一町田口 一野首

一 護摩所 一中尾 一南之城

一 入佐城 一 榎木口 一 上原城

一 新地 一 松之尾城又神明堀共云、<sup>⑧城</sup>

一 弓場城 一 内城又釣瓶之城共云、此城、井戸有、<sup>⑨内</sup>

一 楠木城 一 平堀<sup>⑩城</sup> 一 彦城

一 伊作城 一 大保屋鋪<sup>⑪久</sup> 一 慶屋鋪

一 荒瀬平 一 搦手口

一 延元二年五代 貞久公大隅助<sup>⑫三</sup>□郎以下之逆徒為御誅伐、

伊集院御合戰之由、

一 曆応三年八月 貞久公当城被遊 御退治、其後伊集院

家数代御領之由、

一 宝徳二年庚午二月九代 忠国公当城御責落城、城主伊

集院大隅守熙久他邦へ出奔之由、

一 大永年中十四代 忠兼公御政道御氣儘ニ而國中動乱ニ

付、薩州出水之城主島津八郎左衛門尉実久野心を挟ミ

御国危、忠兼公より島津相模守忠良ニ守護職を被預、

大永六年丙戌十月伊集院南郷之城を忠良ニ賜り、城主

桑波田孫六忠良之旗下ニ属ス、

一 大永六年丙戌十月、忠兼公より忠良ニ伊集院を御賜候

由、

一 忠兼公当城江 御在城、大永六年丙戌十一月五日日置

之庄を忠良ニ賜り、同六日為謝礼忠良当城へ参向之由、

一 大永六年丙戌十一月十八日忠良之御子虎寿丸様 忠兼

公之御養子ニ被遊御成、鹿兒島へ御入御家督、奉称

又三郎貴久公候処、島津実久嫉之奉譏言、忠兼公大

永七年実久与共ニ伊集院之内日置之庄を御責落城、右

動乱ニ付、忠兼公之御養子 貴久公守護職を御捨、

田布施之様御退去之由、

一 大永七年丁亥五月実久妬ミ忠良当城を責候而、町田家

七代五郎清久之二男土佐守則久之四男町田中務少輔久

用ニ預之由、

一 忠兼公当城江御在城ニ而 貴久公守護職を御讓勝久公

与御改名、伊作へ御隠居、其時貴久公之御父 島津相

模守忠良公茂御法体、奉称 日新公之由、

一天文二年二月、伊集院南郷之城主桑波田孫六最前之約

を變シ 日新公を相叛候故、同年閏三月 日新公南郷

を御責落城、城主桑波田孫六滅亡、此時南郷を永吉与

御改之由、此桑波田孫六与申入者、忠久公初薩州御

下向之時分、伊集院四郎時清入道迎清伊集院郡司にて、  
迎清三男桑波田阿闍梨源知嫡子(⑩万)揚房寛弁 忠久公御

下向之節南郷之郡司ニ而、孫六者其子孫之由、 勝久

公之御家老桑波田讚岐守景光入道茂其子孫之由、

一同年八月 勝久公 日新公 御中御不和ニ御成、 勝

久公下瀉与御合戰謀計有之由 日新公被聞召、 貴久

公其夜より永吉へ御越城を守給ひ、 日新公田布施よ

り為援兵御越、寄手之敵數十人御生捕首を刎給ふ、夫

故伊集院之内日置之城主山田式部少輔者先非を悔、日

置庄を 日新公へ差上降参、然共伊作仏坂へ被召呼被

成誅戮之由、

一天文五年丙申三月 日新公御父子当城被遊御責之刻、

大田村小峰之尾ニ仮御陣を被居候、夜報恩寺之支荒瀬(⑩前)

平根木口より狐火之嘉瑞有之、右火ニ付被遊御責候得

ハ則落城ニ而、城主町田中務少輔久用被誅候由、夫よ

り 貴久公三州之守護職として当城御屋形江御父子共

被遊御座、其後天文十九年鹿兒島本御屋形へ 貴久公

被遊御移候由、

一天文五年十二月石谷伊賀守梅久 日新公江降参之由、

一天文六年丁酉伊集院之内福山大迫悉墨を捨、 日新公  
江降参之由、

一嚮是 忠国公伊集院御諏方被遊御勸請、 立久公御代

御諏方両頭掛田數六拾町被遊御究、 忠治公御諏訪御

造營之御書付写等も有之、然ハ 忠国公 忠治公ニも

当城へ為被遊御座与相見得申候、

一龍伯公 惟新公当城御屋形へ被遊 御座候而琉球相背

候砌、広濟寺七代之住持雪岑和尚を琉球へ陣僧ニ被遣、

中山王同道伊集院へ誘引、広濟寺末寺大田村報恩寺へ

御滞在有之、 龍伯公被遊 御対顔候由広濟寺由緒書

ニ相見得申候、其故報恩寺ハ皇居之地与于今申伝候、

一当所郷土中山源左衛門先祖佐々木家ニ而、佐々木三郎

盛綱藤戸之先陣、其恩賞ニ備州兒島を被下彼地江罷居、

其後日州櫛間ニ罷下居候処、 氏久公被召呼、薩摩国

日置郡伊集院之城大手口上之屋久所へ相勤候与系図ニ

相見得候へハ、 氏久公ニも当城へ為被遊御座与相見

得申候、

徳重村字古城  
一古城

右本城より北之方川越之嶮岨ニ而、妙円寺山ニ引続候

山ニ而御座候、

古城原

一古城原

右本城川越ニ右古城与相并、本城より戊亥ノ方高キ岡

ニ而御座候、

大田原

一陣之口

右天文五年丙申九月廿三日 日新公伊集院大和守大将

として伊十院へ御攻入、大田原之畷落去与有之、右古

城与申伝候、

竹之山村字助西

一長崎城

又助西ヶ城相唱申候、

右者肥後助西居城ニ而、天文五年丙申十一月廿八日土

橋勘解由左衛門長崎城ニ火を掛 日新公江降参、其外

伊集院村々領主悉致降参入 御手候処、当城主肥後助

西計不致降参、天文六年酉正月七日戦死之由、当城よ

り北之方小迫越ニ高キ砦之跡有之、右所ニ而戦死之由

助西塚与申候而于今自然右之古石相立、側ニ松式本有

之候、

福山村境

一谷口城

又梶之城相唱、

(其)

右者肥後周防居城之由候処、伊集院村々領主悉 日新  
公御手ニ入、天文六年丁酉正月右周防弟竹之山村領主

肥後助西戦死ニ而、同年周防事ハ谷口城を 日新公江

差上、鹿兒島之様退去之由、

上谷口村

一陣之園

(其)

右谷口城より申西之方式町計、迫川を隔高岡ニ陣取之

跡有之、谷口城向陣与申伝候、

内城

一内城 古城村ニアリ、

右者三代 久経公之御舍弟忠経之御子侍従房俊忠ニ古

城村を賜り、当城へ居住、其子弥五郎久兼号伊集院、

二三代之内ニ子孫繁栄、伊集院其外諸所押領之由、

猪鹿倉村横道之上

一陣之岡

右者麓本城より卯方八町程相隔、本城へ敵寄せ候時之

陣場与申伝候、

徳重村之内

一妙円寺之前

右者石谷之領主町田出羽守高久 久豊公 忠国公へ奉

仕、時ニ伊集院大隅守熙久嫉之 太守へ奉讒言、高久

伊集院本城へ被招呼、則熙久兵を妙円寺門前ニ伏置、

高久を待受合戦、高久力戦数回ニシテ終被致戦死、熙

久者高久之遺領石谷を被致押領候由、

麦生田村久保山

一平等寺

右者心永年中 久豊公伊集院為御退治滿家院川田より

伊集院麦生田村平等寺へ押寄、御對陣之場与申伝候、

大田村之内小峰  
一 小峰之尾

右者天文五年丙申三月七日 日新公御父子伊集院本城

御責之刻、右小峰之尾ニ御仮陣を被為取、夜中城之後

根木口迄狐火之嘉瑞有之、荒瀬平報恩寺之前より御忍

渡被遊御責候得ハ、則落城仕候由申伝候、

一 御剃髮石

右者雪窓院大門口より北之方四拾四五間之所道之側ニ

観音堂有之、右堂之後ニ石面平等之大石有之、天正十

五迄云々略す、

一 観音堂

右妙円寺支配ニ而同寺浮免地之内江建立有之候、天正

中 龍伯公御剃髮之場所ニ而 思召を以三十三体巡礼

観音御建立之由申伝、于今右地面を御剃髮観音屋敷与

申伝候、且御剃髮石右観音堂より西之方三四間之所へ

有之候、

竹之山村之内  
一 地之眼

右者薩隅日三州ニ一ヶ所ツ、地之眼有之、右薩州之地

之眼之由申伝候、

麓方之前通り  
一 犬之馬場

右者 御先祖様伊集院 御在城之時分犬追物之場所与

申伝候、

大追畠  
一 遠矢之場

三町五拾八間アリ

右者清藤村往還之側ニ杉壺本有之、右杉之本より 黄(家)

門様御意ニ而玉川伊予殿遠矢被射候処、夫より西之方

畠中一手之矢一所ニ相留り、其所江杉式本有之、其迄「辺敷」

を式本杉与相唱、遠矢被射候処ヲ一本杉と相唱申候、

尤東郷長左衛門重尚与申説も有之候、

一 諏訪大明神社

上宮  
御正体 匣有、不明之  
与伝束

御本地銅円形仏像差渡一尺八寸円形之内  
二体 文殊 各三寸八部  
下手 蓮花座有、左右花瓶有、

右円形之裏

応永十一年九月十三日さるのとし

きやうあんと書付有

銅円形差渡一尺  
六寸 普賢  
文殊 皆三寸三部

同差渡壺尺  
式寸 地蔵  
千手観音 長八寸四部

下宮

御正体匣有、不明之  
外二匣与伝来、

神鏡有、差渡七寸七部

御本地銅円形差渡一尺八寸  
仏像二体地蔵 長サ四寸  
千手観音

円形之裏

応永十一年九月十二日さるのとし

きやうあんと書付有

棟札

大檀那藤原家久朝臣云々、

寛永三年丙寅七月十八日

先地頭敷根中務少輔藤原立頼

当地頭三原左衛門尉藤原重饒

導師法印権大僧都饒也誌之

肥後喜右衛門平盛増

同 四元佐渡守藤原為利

同 宮原才兵衛藤原(重綱)  
(景継)

大宮司 中島秀左衛門純長

神主 小田原左近太夫秀澄

当座主 地蔵院頼伝

大田村之内宮川  
一神明宮社

右ノ棟札壹枚

右棟札之内ニ正応元年始而御勧請、寛正二年御遷宮、

大永四年御遷宮、当座主神照院迎盛代也、(定)差神王再興(善)

古垣新次郎殿忠秀、大願主宮原殿正実・猪股掃部助範

房与有之候、

下谷口村之内麓古諏方之原  
一古諏方大明神社

一棟札一枚

寛文五年乙巳十一月吉日

源光久朝臣云々、当地頭島津(久通)書頭、当嚙面高善隆

院・阿多平右衛門・松崎六左衛門

右伊集院長門守忠国当所石谷村より麓本城へ被罷帰候(移)

刻、石谷村江安置有之諏訪ヲ麓西之窪之上ニ御遷宮有

之、其後中島宮内少輔信州より諏方を奉守、御先祖

忠国公麓犬之馬場へ被遊御勧請候ニ付、長門守勧請候

当社を古諏方と号シ、其辺を古諏方之原と今ニ唱来申

候、

一那羅木大明神社

御本地板面観音画像

裏ニ明応六丁巳十二月十三日薩州於伊集院——筆

者下野住人事伝——

別当牧迫坊賢亮

下谷口村之内八久保  
一 小山権現社

立木像三体

右之内

一 稻迦奉造立長享二年戊申八月十五日  
藤原政統と稻迦伝之台ニ有之

上谷口村之内本坊  
一 稻荷大明神社

一 棟札之内

大檀那修理大夫藤原朝臣貴久公云々、天文廿二年丑

八月廿九日当地頭島津右衛門太夫孝久、

土橋村之内町田前苗  
一 福島大明神社

右者大覚寺御門跡大僧正義昭隱謀及露頭、日州福島へ

下り被隠居候処、普光院義教卿より就台命、忠国公

嘉吉元年三月十三日討手を被遣、義昭福島永徳寺ニ而

遂生害、福島大明神と被崇福島江一社御建立、鹿兒島

大興寺へ為被遊御建立由、其後 忠国公御二男河内守

久逸公日州福島へ被遊御移候刻、町田領主町田伊賀守

梅吉を被召附差越被居候内福島大明神を崇敬有之、帰

参之後町田村へ勸請有之候由、尤棟札之内へ御祭家説(附從)

別多利讚岐坊江も神供一膳可供也与有之候、且町田家

⑧怒より属米三斗、

一 棟札

大旦越藤原朝臣義久様云々、当地頭石谷助太郎殿藤原

久倍、

永祿七年甲子十二月六日

⑧認権少僧都頼貴誌之

竹山村之内瀬戸頭  
一 諏方大明神社

天文十四年乙巳七月廿四日権少僧都頼興与正体板面之

裏ニ書記アリ、

竹  
□山村之内板屋之前  
一 熊野三所権現社

一 棟札ニ

大檀那藤原朝臣勝久并当地頭平田信濃守宗温武運長

久云々、于時天文四年乙未菊月十九日与有之、

一 古額ニ 天正十二甲申二月彼岸日吉日権大僧都融原、

猪鹿倉村加治屋園  
一 薬師堂

右立像十六体ノ内一体ノ背ニ

信心檀那藤原季久

日光文明七年、——

薩州伊集院猪鹿倉、――

作者牛山――

右者日月之二菩薩伊集院又十郎季久文明七年右薬師堂

之内江安置有之、其節再興与書附相見得候、

恋之原村之内北之園

一稻荷大明神社

御本地板面三十一面文殊云々、  
右之裏ニ

大旦那藤原忠恒公云々、当村持主野村宮内少輔殿并

代官西田彦左衛門息災云々、慶長七年壬寅霜月二日

と有り、

一棟札

大旦那武久云々、「文字シレス」敬  
秀家白

文明九年丁酉霜月三日 大願主盛宥

入佐村之内五反田

一棟札

大旦那越源朝臣光久公、地頭島津甲斐守久武、大願主

貴島市左衛門、天和三年霜月①吉□祥日とアリ、

一鰐口ノ銘

文明十七年乙巳八月彼岸大願主四郎太郎敬白、薩州

「シレス」  
伊集院――長田之大鳥大明神――とアリ、

直木村之内立本  
一熊鷹大明神社

棟札

大檀那藤原貴久、地頭園田筑後守弟小楽倉安吉、

願主木下太郎兵衛殿南原老頭とアリ、「文字シレス」

棟札

大檀那光久公并綱久公、当地頭島津②久通書頭、寛文

五年巳二月彼岸とアリ、

直木村之内宮之原  
一聖大明神社

一棟札ニ檀那塚田云々名頭源右衛門尉「シレス」

永禄八乙丑十月十六日とアリ、

一源朝臣光久公并綱久公、当地頭島津③書頭、寛文

七未三月吉日とアリ、

直木村之内大村  
一鎮守社若宮大明神社一字

棟札ニ藤原朝臣貴兼并当地頭領主云々、大永六④沽洗

廿三日大宮司上原助五郎とアリ、一ツハ藤原朝臣忠

兼とアリ、

寛文八申三月当地頭島津⑤書頭久通と有之棟札アリ、

宮田村之内并手之上  
一青劍大明神社

一 鉾 一 劍 一 刀

右奉納有之、

一 棟札寛永二乙丑年 中納言家久公云々、

寺脇村之内大知  
一 楠牟礼大明神社

一 棟札ニ大檀那藤原忠兼、当地頭藤原久進、永正十六

年十二月九日、

一 慶長十九年 甲寅 卯月十一日 当檀那藤原国貞、地頭藤

連  
原常久云々トアリ、

野田村之内宮園門  
一 稲富大明神

御本地板面十一面觀音画像

右板裏ニ

大檀主藤原忠恒朝臣、施主飯牟礼權右衛門尉光秀云

々、慶長十一年 丙子 八月八日云々とアリ、

棟札ニ

大檀那藤原朝臣友吉同女、延徳<sup>(11)</sup>年 庚戌 三月十

五日、大願主友吉敬白と有之、

一 藤原朝臣忠恒 并同女、当地頭比志島紀伊守、大願主

飯牟礼權右衛門光秀・同比志島紀伊介光家、慶長五

丙子 八月朔日と有之、

一 刀 一 ツ 奉納アリ、

徳重村之内大内山  
一 山王社

明応五年 丙辰 二月棟札アリ、「シレス」

神之川村之内山下  
一 鎮守社

明応五年 辰二月大願主家次と棟札アリ、

下神殿村之内宮之前  
一 正八幡宮

棟札ニ

天和三年 亥二月廿八日地頭島津甲斐殿トアリ、

上神殿村之内堂之迫  
一 熊野六所権現

御本地板面ニ勝軍地藏画像

藤氏新納之久武公云々、絵師橘氏之児玉兵部左衛門

尉実直、永禄十二年 己巳 九月如意珠日云々とアリ、

上神殿村之内柳田  
一 諏訪上下大明神社

一 棟札ニ大檀那光親云々、大願主蒼氏太郎次郎、延徳

三年 辛亥 九月と有之、

上神殿村之内上之園  
一 山王社

御本地唐金円形座像

裏ニ天正十六子二月藤原氏女敬白とアリ、

山王廿一社之梵字、下ニ猿之絵アリ、

裏ニ

大檀那藤原朝臣貴久、天文八季<sup>(年)</sup>亥十二月朔日当地頭

比志島——、「シレス」

上神殿村之内天神平  
一飯綱大明神社 鏡ノ裏板ニ一三年戊申正月云々、  
信心施主藤原重秀願主トアリ、

板ニ神々書記シ裏ニ

大檀那菱刈伴右衛門尉藤原重広公、文祿五年丙申二

月彼岸筆者大宮司円田三河守藤原重経トアリ、

一短刀長九寸五部銘和州高市郡貞吉

但白木鞘入、鞘ニ奉寄進菱刈藤馬実詮ト有之、

一短刀長六寸五部銘吉光

白木さや入、さやニ奉寄進菱刈大炊隆色、粟田口

吉光と有之、

右者菱刈氏氏神ニテ上神殿江引直之由、

上神殿村之内瀧田  
一観音堂

木座像後ニ康正二丙子二月吉日願主祐順僧敬白トアリ、

リ、

一上神殿村御兵具方足輕藤崎清兵衛家江 (歳久)  
心岳公御牌御

厨子入テ安置、由緒不知、古ハ大馬場氏為名乗由也、

麦生田村之内辻  
一八幡社

右橋口氏遠祖ノ創建也、子孫橋口藤蔵伴兼純より厨子之内へ作書記スアリ、

棟札ニ、肝付氏族兼統代領高山橋口邑号橋口、其後

貴久公奉隨身伊集院麦生田村被移、賜宅地建立一字、

奉崇八幡宮為氏神祭之、其後 (家久、忠忠) 黄門公御世鹿兒島へ被

移云々、書記アリタレド今ナシトナリ、

有屋田村之内前畠  
一鎮守社

一棟札ニ大檀主有屋田加賀守久親云々、

天文十四年乙巳卯月十六日願主敬白トアリ、

一承応二年棟札光久朝臣并久平公トアリ、

一 中川村・福山村図書忠長入道詔益代文祿五年高麗御陣

依軍功七千石余御加増、其後下野久元代慶長十九年甲

寅六月晦日已来不相變持切ニ被仰付、山野共ニ支配也、

中川村ノ内藏下  
一春日大明神社

棟札

大檀那平之頰孫伊地知実住・藤原氏櫛山太郎殿并伊

地知新四郎殿云々并藤原厚繩云々、大工ナト名多ミ

ユ、于時永正五年一鐘拾伍日、大願主実住敬白、裏

ニ修造主源葩書記トアリ、

福山村之内奥門  
一山神社

一棟札伊集院谷口名甑田名門当地頭小倉左右左衛門尉  
云々、大工臼井四郎右衛門・同①肥後守、大願主小  
倉左右左衛門殿云々、天正十二マ年八月吉日敬白ト  
アリ、

福山村之内新山  
一小長崎大明神社

一棟札ニ享祿四年卯十一月吉日大願主海田小左衛門義  
典・梅木十郎右衛門、大工柏木丹波介善作禪師、小  
願主宮園六郎太郎云々、

一熊野權現社

一棟札ニ源家久朝臣、当地頭三原左衛門佐、寛永十二  
年二月吉日願主野村賢助貞綱とアリ、  
①重唐  
嶽村之内神之園  
一山神社

造立棟札大檀那有川新左衛門、寛永三年二月十二日  
とアリ、  
嶽村之内小山之下  
一熊野三所權現社

棟札ニ大檀那藤原之行久家門繁昌云々、大願主藤原  
氏太郎兵衛云々、小願主馬三郎・平右衛門、大工藤  
原清①久、時嘉吉元年辛酉歲霜月廿二日大願主謹誌、

右棟札ノ裏ニ意趣云々書記テ跡ニ

応永三十年①卯拾月初三日孫比丘了珍謹書

嶽村之内①前田  
一知賀尾六所權現社

一応永三十年卯九月廿日ノ棟札アリ、

一大檀那藤原朝臣貴久、当地頭右衛門太夫孝久、天文  
廿二年癸丑二月廿四日ト棟札アリ、

一額ノ裏ニ平山与三左衛門尉武紹・柏木源左衛門尉道  
重・同孫六道弘、永正十六年己卯二月廿一日大願主  
敬白、大宮口次郎左衛門尉・同八郎左衛門尉・木場  
次郎左衛門尉安重と有之、

一苗代川村

右往古市来養母村之内ニ而御座候処、慶長八年申木野  
下名村之内本壺屋と申所より朝鮮人被召移、苗代川被  
召建候節、伊集院之内江被召成候、

苗代川藤之尾  
一御飯屋

右延宝三乙卯年苗代川釜之原①平与申所江被召建、延宝八  
六月廿五日 光久公御下向之節当分 御飯屋有之、藤  
之尾江相直候様被仰出、同年八月より御取作事御取付  
有之候由、然処、宝永六年い十院麓 御飯屋之儀も苗

代川へ一所ニ御引移有之、跡御仮屋地江当分地頭仮屋有之候、

内田房境内  
一多賀大明神社

神鏡ニ天文十六年丁未閏七月虎福丸と彫付為有之由候へ共、当分文字シレス、

一棟札ニ大檀那藤原朝臣島津貴久、元龜元年庚午二月

内田房憲盛<sup>◎坊</sup>敬白

右棟札之裏ニ

薩州伊集院

御多賀大明神菊月神楽田

徳重名

一反 野そへ

大田名

一反 大渡里

以上二反

御寄進 貴久

永祿元年戊午二月吉日



神社調

薩摩国  
之部

三



(表紙)

市来 串木野 薩摩郡 百次 山田 隈之城
神社調 薩摩国之部 三

一 市来城ハ市来郡司十郎家房、是 忠久侯之時居城せしむ、其本ハ大藏姓、是日域の氏姓ニあらず、異国後漢の靈帝の子阿智王の後胤大藏政房宝龜年中薩州に下向して市来郡司となり□城に住する也、子孫代々相續して十郎家房嗣子無之、依て惟宗親王の流宗大納言知國之苗裔国分左衛門尉友久か二男友成を以て髡養子となし政治家を生ず、因て市来領地を附屬す、其子孫家号市来と称す、

亮洲隨筆

御戰場記

一 市来 ○市来氏代々居城、 貞久公御代御退治○寛正三年市来氏久家相背候故、十代之 太守立久公御責被成没落、同年龍雲寺御建立○天正八年島津実久之族守之候ニ付、閏六月 貴久公御大将ニ而即日平城御陥ニ而御陣營被遊候、本城堅固ニ難相守候、島津越前守・新納常陸介以下致退去、九月朔日於本城御勝吐氣被執行候、○伊集院氏「二字不知」以下之凶徒為御退治、曆四か年 貞久公平城江御発向候、

一 市来城 市来十郎郡司家房 忠久公御代令居城、其根元大藏氏より出る、我朝の姓に非ず、唐後漢靈帝の流阿智王の苗裔大藏政房と言る人、宝龜年間に薩州に下向して市来郡司と成、鍋ヶ城に居城すといえり、其子（兼伏力）嫌扶維房、其子三郎太夫宗房、其子十郎郡司家房世継の子なし、仍而惟宗親王之流宗大納言知國苗裔国分左衛門尉友成二男太郎政宗（家カ）を髡養子として市来を附屬す、市来二代太郎左衛門尉家法

号道澄弥陀山来迎寺、三代太郎左衛門尉時家法名道尊

代、守護道鑑市来へ出陣シ給ふ、道尊か城を責させ給

ひ市来降伏ス、四代太郎左衛門尉氏家法名観意隆家躰

鞠の名人也、禁中にて鞠の御会、將軍家御会御前ニ而

も氏家其例ニあり、五代筑前守忠家法名笑山、六代備

後守家親法名〔覆〕〔西原〕禪祖、七代四郎左衛門助家法名仁山

道義、八代筑前守久家法名黙翁禪詰万年山金鐘寺と云

々、此代又守護方 忠国公市来御退治有之御手ニ入、

九代美作守忠家法名禪輝善梁、是より末系凶ニ見得ず、

一族河原・川上・下・角・河俣・川崎・南・厚地・中

村・来迎寺・田口・植松・山野田、

一市来城 当城市来氏代々居城ニ而候、

貞久公御年七十一御代曆応三年八月被遊御退治候、市来筑

前守久家代ニ相背候故、十代之 太守立久公御責被成、

市来家没落仕候、左候而、同年龍雲寺被遊御建立候、

天文八年島津実久の族支之ニ付、閏六月十八日 貴久

公御大将ニ而〔郡〕平城を御陥候而御陣營被遊候、本城

堅固ニ相守於大日寺口・湯田口毎々合戦有之、敵味方

究竟の衆遂戦死候、城中の兵終ニハ勇氣撓力衰候而乞

和、島津越前守・新納常陸介以下致退去、九月朔日於

本城勝吐氣被執行候、

一平城

伊集院助三郎忠国以下之凶徒為御退治、曆応四年八月

十五日平城へ被発向候、

1 市来 寺地改

御目見地 真言大乘院末御免地高

一大日寺 三拾五石寺社方合力

一内山寺 右同御免地

一大明寺 大日寺末右同

一龍雲寺 曹洞福昌寺末御免地高

一宗乾寺 三拾七石寺社方檢者付

一梅岩寺 龍雲寺塔中

一湖音寺 右同末御免地

一西岩寺 右同

一金鐘寺 御目見地 能州総持寺末御免地

一永泉寺 高八石寺社方合力所

一興円寺

市来  
稻荷大明神 宗廟

右建立前々者御公義より為被成之由候、当修理之儀毎年市来野御牧為野崎稻荷へ上候、其勢を以近年令建立候、

一 右脇之宮として三島大明神・黒尾大明神・若宮天神・祇園御立候、当時社無之候ニ付、右之宝殿御戸之内ニ籠置申候、右由来八文字民部太夫御下向之時分御誓願として、大里村江六社、右稻荷合七社御建立為被成由申伝候、但社人塚田先祖負為下由候、

祭日

正月元日 二月三日 九月九日 十一月三日

祭米五斗二升五合

右之外節供々ハ小祭合十二節供為上由候、<sup>(マツ)</sup>堪落以後御公義より為祭用米壺石八斗ツ、為相付時節も御座候、

又其後ハ御公儀より高四石余為相付時も有之候、御支配以後ハ知行被召上、近年祭米右之分被下相調申候、勿論御名代毎年御上覽候、龍伯様御代ニ者度々御参詣被成候事其隠無御座候、

一 右社役屋敷三ヶ所竿御免

2 市来  
鐘銘

大日本国九州城市来院湯田村稻荷大明神鐘銘、、、応永三十三百丙午王春下体吉日、

大檀那沙弥禅祖願主宗家

前後文ナシ

于時永正拾一年甲戌十一月二日

信心大檀那三州守護藤原朝臣忠治

3

棟札

右意趣者護持信心大檀那藤原朝臣義久、、、天正拾年

八月吉日

当地頭比志島宮内少輔

当住持宝院頼真律師

当座主大明寺

右神社仏閣帳

日置郡市来郷

湯田村  
稻荷大明神 薩城より西ニ去事七里

祭神

瓊々杵尊

倉稻魂神

伊弉冉尊

同殿神狐二社

祭祀九月九日

祭米五斗二升五合御藏米

一 当社ハ比企判官能員之妹丹後局を 頼朝卿御寵愛おハ  
しまし、既ニ妊身成らせ給ふ、然るに 頼朝卿之御台  
所二位殿妬深く、八文字民部太輔に▽<sup>●</sup>給り△治承三年  
撰州住吉に至り給ふの時、御産氣に強くせまり石上に  
座して 忠久公御臨産し給ふ、折しも大雨降深夜前後  
を苦しむ、于時狐火明照して昼日の如く辺りを奉守護、  
是則住吉末社稻荷大明神之冥助也、故に 忠久公当国  
へ御入部之時神靈を請し下シ給ひ、祠を此所に創建し  
て、湯田村之内八町八反・大里村之内五反・伊作田村  
之内五反・隅州串良之内浮免一町被召付、大明寺を以  
別当職とし十二坊舎を被建、其後 義弘公 忠恒公朝  
鮮国ニ御渡海、白狐赤狐之三狐 義弘公ニ先達て御座

船に乗奉守護彼国に渡る、慶長三年十月朔日日出白狐  
出東門入敵軍中、両公大に得勝利、御帰朝之後当社之  
内に神狐を祭て相殿ニ座す、又曰、当社ハ神狐之依奇  
瑞丹後御局薩国へ御下向之時、此所ニ暫御滞居被為成  
候時御勧請共伝へたり、当地ニハ此外御局勧請之神社  
余多あり、又鹿兒島之稻荷ハ此宮之神靈を移給ふ共云  
り、其時駒犬一疋奉添、当社へハ阿犬を残置と云、此  
折神領茂悉く被召上、寺舎も大明寺一ヶ寺を被立置、  
其外ハ廢堪地と成と也、其後年中四度之祭米三石毎年  
御物より被相渡、九月九日ニハ鑄流馬之射礼を行と云  
へ共、大社・中社・小社之御取分有之、今ハ祭米五斗  
式升五合被相渡、九月九日之祭祀を令執行也、正月元  
日・十一月三日両度之御祭ハ撰州より御供ニ而罷下候  
家名之者共より御勧請以來于今相勤申也、二月三日ハ  
氏子出来を以祭之、撰州より御供之人数十三家、其内  
社役之者も于今令相統と也、右祭日之内正月元日有川  
家祭之、十一月三日所衆中山元佐平太祭之、此両家者  
御供之家統也、

一 丹後御局勧請之神社鶴岡八幡宮・御靈大明神・今熊權

4

現・宇都湯之稻荷・日吉山王・安楽権現・包宮大明神  
此七社者、丹後御局御下国、市来大里村鍋ヶ城江御在  
居、四方之風景鎌倉ニ似たる如ニとの依御思慮、建仁  
三年此所ニ件之七社を御創建、一々神領をも寄附せら  
れ御高敬異于他、雖然今社頭迎茂不全、祭祀茂如形と  
云々、此外ニも御尊崇余多有と云り、

右神社撰集

神社考  
一当社承元三年丹後御局勸請也、

一御霊大明神  
一今熊野権現  
一日吉山王

護主地主命

一安楽権現

一包宮大明神

大田命

一一之宮大明神

天狭務命  
地狭務命

一諏方大明神

上宮健御方命  
下宮事代主命

一諏方大明神

右同

一諏方大明神

右同

一諏方大明神

右同

一諏方大明神

右同

一巖島大明神

右同

一住吉大明神

底筒男 中筒男  
表筒男 神功皇后

一巖島大明神

右同

一霧島権現

瓊々杵尊

一諏方大明神

右同

一伊勢大神宮

右同

一葛城大明神

天御中主命

一妙見

天道根命

湯田村 市来郷神社仏閣

一稻荷大明神

大山祇女  
倉稲魂  
工祖神

外ニ

一山王

宦者殿

一若宮

仁徳天皇

一諏方大明神

上宮健御方命  
下宮事代主命

一天滿大自在天神

中將殿  
菅品孺子

一熊野三社権現

彦火々出見尊

一鶴岡八幡

玉依姫  
誉田天皇  
神功后宮

一長田權現

一天神

一森山天

一日吉山王

一小田峰權現

一若宮八幡

一春日大明神

一軍神摩利支天

一神明宮

一氏正權現

一權現

一蜂鷲大明神

一近尾權現

一伊勢大神宮

一鹿尾權現

一山之神

外二山之神七社略久、祭神右同、

一鳳凰山 遍照院

一宝篋山 真言宗

大日寺末  
内山寺

中將殿

大市姫命

木花開命

仁德天皇

武甕槌命 齋主命  
天兒屋根命

天津兒屋根命

武甕槌命

右同

高皇產靈尊

右同

右同

大玉命

一神護山 右同

一法城山 禪宗

一

一弥陀山

一補陀山

一寿福山

一白牛山

一万年山 禪宗

一青龍山

一勝目山

大日寺末  
大明寺

龍雲寺

宗乾寺

来迎寺

潮音寺

梅岩寺

西岩寺

金鐘寺

榮泉寺

興円寺

右元文二巳七月書出、

市来郷  
一鶴岡八幡宮 鎌倉鶴岡八幡宮

一御霊大明神

一今熊權現

一宇都湯稻荷大明神

一日吉山王

一安楽權現

一 包宮大明神

右七社ハ 丹後御局御下国之時、市来之内大里村鍋ヶ

城江建仁三亥年中御勸請、

右神社考

市来<sup>漆</sup> 市来

一 天満天神

一 鶴岡八幡宮

一 今熊權現

一 日吉山王

一 包宮大明神

一 諏方上下大明神

一 住吉大明神

一 山之神

一 山王社

一 諏方大明神

一 伊勢大神宮

一 葛城大明神

一 妙見

同所 一 熊野三所權現

同所 一 御霊大明神

同所 一 宇都湯之稻荷

同所 一 安楽權現

同所 一 之宮妙見

同所 一 諏方大明神

同所 一 霧島權現

同所 一 山之神

同所 一 若宮

同所 一 諏方大明神

一 植木大明神

一 諏方大明神

一 天神

同所 一 長田權現

同所 一 森山天神

伊作田 一 小田峰權現

同所 一 諏方大明神

長里村 一 春日大明神

同所 一 軍神摩利支天

同所 一 山之神

同所 一 蜂鷗大明神

一 山之神

同所 一 鹿尾六社權現

同所 一 山之神

同所 一 山野神

一 山之神

一 日吉山王

一 若宮八幡

一 諏方大明神

一 神明宮

養母 一 氏正權現

同所 一 權現

田代 一 近尾六社權現

萩之久保 一 伊勢大神

北山 一 山之神

同所 一 山之神

右神社考

稻荷大明神

神体五社稻荷老翁形

木像上古ハ三社ニ而候処、

高麗御帰陣之節五社ニ

御崇と申伝候、

座主 大明寺  
神主 有川數面

本地十一面觀音木像社殿ニ安置、

一 鎧卷領

但頼朝公初着之鎧と申伝奉納御座候処、天明七未十月

御用ニ付棟札相添差上、御納戸格護ニ相成候由ニ而、

当分ハ御兵具方立合之内より引替御奉納御座候、

一大般若経但上古より奉納物之由

一 祭米五斗式升五合

但年々被成下九月三日祭り御名代參

所郷士年寄・組頭より地頭代相勤候、

右 忠久公於撰州御誕生之節、依加護丹後局市来鍋ヶ

城ニ御在城之節御勸請、上代ハ神領有之、巷ヶ年ニ四

度祭り賑々敷有之候処、神領被召上候而より御代參祭

リハ前条之通、正月元日ハ社主、二月三日ハ湯田村百

姓中、十一月三日ハ御勸請下向之節御供仕候家筋と申

伝、市来郷士山元家より供物差上祭仕候、

右文化十一 戌十一月書出、

天狭霧命

地狭霧命

左越 一 巖島大明神

蒲牟田 一 巖島大明神

右 忠久公御下国之御祈願、建久七年辰二月御母堂丹

後御局御勸請、

右神社考

市来 一 之宮大明神

神体唐金形尊体

本地妙見菩薩

右丹後局御下向之節鎌倉之景を御移シ御勸請之社頭と

申伝候、神領祭米無御座候、大里村百姓氏子格護、

一 鶴ヶ岡八幡宮

右本地阿弥陀如来木像五体社内ニ安置有之候得共朽

損、神仏体相分不申候、

一 安楽権現社

本地垂跡相知不申、円像ニ形尊三体有之候得共神仏

市来郷 一 之宮大明神

祭神

之体不知、

神主 野崎多宮

一 日吉山王権現

神体木像一体

木像地藏四体 石地藏一体

一包之宮大明神

幣勧請ニ而本地垂跡不相知、

一 今熊野権現

石体三尊本地垂跡神仏体不知、

一 御霊大明神

石体八尊本地垂跡神仏体不知、

一 稻荷大明神

幣勧請ニ而本地垂跡不相知、生湯之稻荷与申伝候、

右七社丹後局御勧請之社頭与申伝、小社ニ而神領・祭

米無之、大里村百姓共向々ニ自分修甫ニ而格護仕候、

一 巖島大明神

一 右同

二 社共磯辺自然石体六尊本地垂跡神供体不相知、

一 長刀式振内一振波平安氏作  
一振波平行高作

但 壹社ニ壹振ツ、

右式社丹後局御下向之節、船中難風為御無難御着岸之

地江可被遊御勧請旨、安芸国巖島大明神へ御誓願ニ而、

大里村之内崎野浦江御着岸ニ而建立之社頭与申伝、長

刀一振ツ、奉納御座候処、天明年間就御用社司百姓よ

り由緒書付相添差上候処、古来より奉納之長刀御納戸

御格護ニ相成、為引替右之通奉納御座候、小社ニ而神

領・祭米無御座候、

右文化十一 戌十一月書出、

市来  
御惣坊

本地阿弥陀脇立伊勢 熊野

祭日

三月三日 五月五日 十月亥日

一 当知行三反堀町并畠少竿不入御免、右者前々知行過分

ニ為相付之由候得共、当分者右之高ニ而上十五日ハ仏

供二体、下十五日ハ壹体、朔日・十五日・廿八日、或

二季之彼岸ハ五体、如右市来五ヶ村より相調申候、由

来之儀者丹後之御局形代之由候、 忠久様御建立候由

申伝候、

越年祝物

一か、ミ餅九枚

一 小餅式十七

一 御酒瓶子一双

一か、ミ餅二枚・小餅九ツ・伽藍〔本ノマ、  
と〕

三月三日

一草餅九ツ

一同九ツ伽藍ニ上り申候、

五月五日

一 粽九把

一同式把伽藍ニ上り申候、

十月亥ノ日

一餅

一同伽藍ニ上り申候、

右知行ニ而如右相調申候、

一 大堂修理之事、近年ハ材木本木ハ公義より申受候、其

外入目等之事□以人勢相調申候、

一 光明寺三ヶ所

右者御惣坊花香寺由申伝候、其故于今竿不入御免地ニ

而御座候、

右神社仏閣帳

市来  
一 鳳凰山 遍照院 大乘院末  
大日寺

一 御惣坊仏供屋堀立御物方

右建立之儀御公義へ申上被成候処ニ材木用として立木

十二本被成下候、其代銀を本立ニして所々勢以修理申

候、

一 高三拾五石

右者高百七石ニ而候処、先年支配之時三ヶ一ニ罷成、

于今右相付申候、

一 寺地御免

右神社仏閣帳

市来  
当寺正安元年丹後局御建立、開山定僧法印、

一本尊大日如来 丹後局御安置 与申伝候、

一 高三拾九石壹升四勺壹才

内 三拾五石 寺領

四石壹升四勺壹才 阿弥陀仏供料

右阿弥陀領以前ハ御竿無之地方ニ而候処、先年

大御支配之節御竿右之通被仰候、

一 阿弥陀堂 当寺格護

右以前ハ御惣坊与唱候得共、先年被相改当时阿弥陀  
と申候、

一 忠久公御建立と申伝候、

一 丹後局御形代<sup>(4)</sup>ニ而、阿弥陀如来、脇立正観音・勢至

ニ而候、

一 阿弥陀江差上候品惣而女人手懸ケ不罷成候、

一 春日大明神 当寺格護

当寺前住高麗入御供相勤申候、其節御加增高百斛為

有之由申伝候、其後何様之訊ニ而候哉、当分ハ三拾

五石格護仕候、

一 豊後入之節も当寺先住御供仕候由、然共住持名前不

相知、

一 当寺前代火災有之、諸書物悉焼失仕候由、

右寛保二戌五月書出、

一 阿弥陀如来

座主

大日寺

仏供高四石壹升四勺壹才

但出米御免

右丹後局御守本尊御建立ニ而御惣坊と奉崇秘仏ニ而、  
仏供料現糶ニ而別当寺へ取調仕置別火所相調、市来  
百姓中より前後七日精進清浄身ニ而廻り合□加用夫  
相勤、別当寺より毎朝上十五日ハ糶壹升ツ、下十  
五日ハ五合ツ、相請取米ニ成シ、別火ニ而仏供相調  
差上、座主共ニ御下夕□御暇申上候、尤朔日・十  
五日・折目節旬日・二季彼岸ニ者門前より御仏供米  
増糶差出朝夕御仏供差上申候、上古より之仕来一日  
迎も緩怠無御座候、  
右文化十一戌十一月書出、

大日寺儀大乘院末寺ニ而候処、安養院門首被仰付候旨、  
文政九年戌正月安養院末寺被仰付候、

○享保十一午十一月十六日、高四石余市来大日寺へ阿弥  
陀仏供田為衆中高ニ相加候書付と寺社帳留目安アリ候  
事、

法城山

心岩派

龍雲寺

寛正三年壬午 立久公御創建、昔七堂伽藍也、

一開山心岩良信大寺氏也、木像画像位牌在、応永三年丙

午<sup>(子)</sup>日州於救仁郷誕生而出家、長祿三年己卯住越龍泉寺、

寛正二年辛巳自備州下向、八月廿五日福昌再興当入院、

同三年壬午 立久公於薩州市来院建精舎、山号法城寺

号龍雲、請心岩為開山、応仁二年戊子七月廿七日遷化、

一中興雲舟玄濟以島津為氏、木像位牌在、天文廿四年乙

卯十月廿一日遷化、雲舟ハ 貴久公參得師也、

一大檀那立久公画像尊牌在

永享四年壬子十一月五日御誕生、文明六年甲午四月朔

日寿四十三歳御逝去、号節山忠公、埋御骨於龍雲西北

隅、石塔存<sup>(窟)</sup>靈屈之中、

一貴久公仏殿御建立且御寄進状有之故御牌在之、

一茂山才公大姉御牌在、御石塔節山公御靈屋ニ同前在之、

御茶毘所別所在之、

一当寺十世抱岩龍孫者俗姓留<sup>〔川田歟〕</sup>駿河守弟也、室内別而安置

积迦・文殊・普賢、但厨子所入、殊彼三尊靈仏也、然

処寛文五年己三月十日御公義被召上、志和屋左京請取

有之、

一薩摩国伊集院寺脇名之内宣徳寺事ハ、妙谷寺・靈徳寺・

善勝寺以上三ヶ寺之為替地 貴久公雲舟和尚江御寄進

也、且寺領等も相応被召付置候処ニ先年被召上、于今

名寄帳御書物者有之、

以上元祿四年未十二月申出、

一高三拾七石

但寛正三壬午年 立久公御寄進、古代ハ下養母八町・

馬場之下七反・江口へ塩屋一間・堀切八反并湯原畠

地一町御寄附有之、下養母村百姓共不残正月三日乙

名祝并四月朔日御旦那忌ニ古代より御振舞被下来候

付、于今右之通仕来候、

一御靈屋一ツ

内節山玄忠大禪伯御石塔并御簾中茂山才公大姉御石

塔有リ、

右寛保二戊五月書出、

一大般若経六百卷

但朝鮮本 立久公御寄進

一十六羅漢之内壹幅

但日新公御寄進

一立久公御文書三通

一大中公右同式通(貴久)

一高三拾七石大中様御寄附高

右之外數十行略ス、

右寛延二巳六月書出、

「亮洲隨筆ニ、天文元年壬辰十二月廿一日曉龍雲寺回祿とあり」

茂山妙才大姉

文明十八丙午二月十七日御逝去、立久公御夫人、

梶原三郎太郎弘純女、

市来一門前寺領之事ハ御書物ニ見得申候、然処大閣毀破之時

分知行落寺家敗壞仕候処ニ 黄門様御代ニ知行高百石

御付被成候間、先師守鷹和尚代ニ古之大庫ノ跡地ニ草

家を取立被申候、其後知行三ヶ一ニ罷成候、

一高三拾七石

一寺地竿不入御免

一寺家建立ニ付訴訟申上候へハ、修理用として漸立木杉

楠松二拾三本、竹茅繩等被下候、其余者当住守寮門校

量、右家数建立仕候、

一仏殿茅葺礎五間四面

右 貴久公御代被成御建立候、然共敗壞仕候、御修

理有無之由披露申上候、於無 御修理者釈迦仏殿を客

殿ニ移可申由申上候得者可然与被仰候間、如其客殿へ

移申候、則仏殿ハ破却仕候、

一開山福昌寺中興心岩和尚、今心岩一派小本寺也、

一古者七堂大伽藍之古跡也、

右御先祖節山忠公大禪伯、御名乗 立久様御寺也、

一御印屋 豎四尺五寸横五尺五寸

一両石御立候 節山忠公大禪伯  
茂山才公大姉

一梁之文曰 東一番

上文略ス 開山第六世法孫嗣祖小比丘雲舟玄濟謹立

二番 西之梁文

右同天文廿三年甲寅三月三日檀越藤原貴久敬白

鐘銘

謹奉捨入日本島津庄日州北郷大同山西明禪寺常住

右志趣者為天長地久御願円満殊大士為道且惠有頓証仏果菩提

願主住持比丘祐突

次保祐本寺檀那知久心中所願皆令満足也、

肥州大工連応

応永廿三年丙申九月吉日

龍雲寺寄進狀

法城山龍雲寺門前并寺領等之堺之事、限東下藪之村、

限西鍋山之溝、限南牟田之首藤尾龜山之尾通惣陣之尾

之下之縁目通、限北黒岩堺之堀通、右門前之堺如斯、

寺領等之事者下藪八町・馬場之下七反・塩屋一ツ江口

へ在之、彼寺請心岩和尚開山守甚其法孫次第ニ連続為現

当令建立、上者停止万雜公事臨時課役等処也、於彼寺

領者迄後々未來不可有相違之儀者也、仍為後証寄進狀

如件、

寛正三年壬午十一月十九日

藤原立久御判

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一四一〇号文書ト同一文書ナルベシ)

薩摩国市来院法城山龍雲寺

一堀切八反并湯原島地一町為大岳(忠國)譽公居士奉寄進所也、

一来迎寺領三町、同山野島地為心花安公大姉奉寄進所也、  
(忠國幸・立久母)

一山林曠野方三里可為御理運、殊ニ楠木自二葉可被成格

護候、

右条々於後年違乱之輩者八幡大菩薩御照覽、不可為島

津子孫、仍所定如件、

文明癸巳八月十五日

立久御判

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一四八八号文書ト同一文書ナルベシ)

薩摩国市来法城山龍雲禪寺

一来迎寺三町并山野島地等之事、為心花安公大姉、立久

所御寄進也、依有時宜既中絶、然処為中興貴久奉返雲

舟和尚、以令寄附所也、

右於後年違乱之輩者八幡大菩薩御照覽、不可為島津子

孫者也、仍証狀如件、

天文十七年三月朔日

貴久御判

10

制札

(本文書ハ「旧記雜録前編」二二五七号文書ト同一文書ナルベシ)

本寺龍雲寺格護也、

伊集院宣徳寺御文書

薩摩国伊集院寺脇名之内宣徳寺内寺領五町之事、妙谷

寺・靈徳寺・善勝寺以下三ヶ寺〔上方〕為替地令寄附畢、并谷

口名之内田中之門壺町五反、付野田名浮免五段者为靈〔靈書〕

窓妙安菩薩所相加也、

右彼地三ヶ寺之事

雲舟和尚様へ所進置候、若後代於背此旨者、貴久不可

為子孫也、為後証之状如件、

天文廿年七月十日

貴久御判

(本文書ハ「旧記雜録前編」二二六五号文書ト同一文書ナルベシ)

右御文書伊集院宣徳寺へ雖有之廢塔之故、本寺龍

雲寺へ載之、

右神社仏閣帳

一 寺門前殺生人不通之事

一 所山之材木二葉迄寺家可為興行者也、余城構可用事、

一 寺修造時者地頭面々可致本走事〔一ニ奔走也〕

一 奴婢於出入者不可論之事

一 雖為江湖四ヶ所住侶之僧能々可撰之事

仍而為後証之留状如件、

文明三年七月廿一日

立久判

(本文書ハ「旧記雜録前編」二一四六号文書ト同一文書ナルベシ)

弥陀山

来迎寺

開基年月開山等不知、乍然申伝候者、丹後之局御下向

之節崎野之内石出与申所へ御着船、其時薩摩江無恙御

渡海候故、其所を薩摩渡瀬と御名付候、従夫初而御腰

掛被成候所を喜崎与申候、次当国江御初地入為御祝言

釜之蓋を御頂候所を釜蓋と申候、右釜蓋之由緒ニ而御

城を鍋之城と御名付、是又只今ニ鍋之城与申来候、左

候而、大里之景鎌倉ニ為相似由ニ而鎌倉七社を御建立

候、其後來迎・引撰・光明・遍照之四ヶ寺御建立、右

御文書左之通、

11 (本文書ハ八号文書ト同一文書ニツキ省略ス)

四ヶ寺共ニ本尊弥陀安置有之候、依夫于今里民是を四阿弥陀と奉申候□ニ而候、来迎寺本尊来迎阿弥陀中尊但坐像、長壹尺九寸五分、脇立観音・勢至但立像、長貳尺貳寸、作者定光ニ而御座候事、

一丹後局御石塔御立被成被召置候、尤御石塔へ御法名ハ見得不申候得共、前々より申伝候ハ三重之塔へ阿弥陀之切付有之候を御局御石塔と申来候、依夫来迎寺無住之節ハ名中より夫丸參候付、七月七日ニハ御塔掃除為仕候、只今所江髓ニ為存者御座候事、

一八文字民部太夫殿御石塔有之、是ニハ髓ニ法名笑山忻公上坐と見得来候、其外五輪之大石塔多々有之候得共、法名見得不申候故如何成人之御石塔共相知不申候、笑山忻公上座但十二月十八日御死去ニ而候得共年号相知不申候事、

一八文字殿御屋敷上之城、鍋之城より西ニ有之候事、一丹後局御建立中絶之後 忠国公之御簾中 立久公之御母堂心花開安大姉之御牌 立久公御立、高御寄附被遊候所又々中絶仕、 貴久公高御寄附被遊候御書物于今有之候得共又々中絶故、只今寺地計御免許ニ而御座候、

一開基之年月開山之儀不知候故、 貴久公御書物へ有之候、龍雲寺先師雲舟中興開山ニ仕立置候事、

右元禄四未十二月書出、

曹洞宗  
能州総持寺末  
峨山五哲之内  
大源派

万年山 金鐘寺

一高八石 一寺地御免

一古来之田畠三町七反并門屋敷六ヶ所・塩屋一間為相付由申伝候得共、今ニ者皆被召上御蔵入ニ罷成、今ニ右八石御付被召置候、

一右者

金鐘寺十二世明空和尚代ニ毀破ニ罷成候、其刻明空死去被申候故廢壞仕、其時道具等少々御座候得共取失申候而無御座候、

一 開山了空(堂)和尚

右神社仏閣帳

万年山

高八石

開山了堂真覺永祿三丁巳建立

右要用集しらへ

曹洞宗能州  
總持寺末寺峨山  
五哲之内大源派  
金鐘寺

開山了堂但御影高式尺作不知

右了堂ハ日本曹洞宗五派之惣領能州惣持寺大源和尚之(総)

法嗣、本貫和州生産、八幡之靈夢ニ依而当国下向、靈

夢云、西ニ行者金剛鐘鳴大世響、

一 永和三年丁巳当寺開關

金鐘寺者丹後之局建立之時ハ自宗寺ニ而候所ニ寺改之、

一 和州福岩寺開關但至徳元甲子年右了堂当寺開關後帰郷

之時也、

一 加賀瑞川寺但當時二代竹窓開山所、

右瑞川寺ニ而了堂遷化七月七日但年号ハ不知、

一 二代竹窓但越前生産

右当寺住職之後当所川上村之中牛之口ニ而遷化、廟所

彼所江有之、此間三拾年余諸門中より輪番相勤候、

一 三代大中但從是独住ニ罷成候、

一 十二代明室

右天正十五年丁亥四月六日関白下向有之、慶長七年壬

寅此間十五年余毀破并炎上仕永々廢壞無住、

一 十三代雲山再興但慶長七壬寅雪月四日

一 十四代禹門(愚)但寛永十九年(マ、マ)惣持寺輪番相勤候、

一 薩摩渡瀬旧跡

右者 忠久公当所崎野湊江御着岸目出度薩国江御渡海

ニ付、薩摩渡瀬と御名付被遊候、

一 姫旧跡薩摩渡瀬之向ニ有之、

右所江初而御腰掛為被遊石有之、同下ニ北条ヶ水有之、

依此由緒木崎与申伝候、

一 重信旧跡右所へ有之、

右之重信氏御伴之在所于今重信と申来候、

一 鍋ヶ城但御局御在城

一 島内有東方

右者鎌倉江之鳥之景御移被遊、弁才天之宮当辰巳有之、

一 御靈之宮今熊野之宮有西

右鎌倉之神社御移被遊御勸請有之、

一 一之宮妙現有南、日吉山王權現有東、

右鎌倉之移、

一 鶴ヶ岡八幡宮但一之鳥井主中傍ニ有之、只今ハ松三而候、二三之鳥井旧地ニ有之、

一 戸崎ニ觀音有未申、但鎌倉之景御移被遊候

一金鐘寺御寄附知行

川畑鍋田木場牛之口但金鐘寺壇入と申名所有之、

右三町七段御寄附

一 門前屋敷御寄附六ツ内書略ス、

一 塩屋壺間但寺之釜と申伝、薩摩渡瀬ニ有之、今ハ公領、

右之知行并門前地御寄付被遊置候所ニ天正年中毀破之

節被召上候、但御文書炎上之節焼却、只今ハ無提針地、

一 高八石但山鳥猪喰ニ而仏衆生之飯米乏

一金鐘寺山御寄附名所

北之ヶ平東之崎 大谷

唐人ヶ峰 八方ヶ辻

木屋ヶ字都 扇子山

暗谷

破石

阿女ヶ谷

池原北之崎

百田

苦木ヶ平

小屋田平

八幡山西崎

右山壺里半廻御寄附、只今迄格護仕候、

一 大門壺宇但伊集院雪窓院之只今之門也、

右者伊集院芳雪院地頭之時分当寺無役故移之、其外

寺物等彼之所へ有之由候、

一 末寺 松原庵但薩摩渡瀬ノ下ニ有之、敗寺地公領、

一 清円庵但湯田ニ有之、廢地公領、

一 宿露庵但串木野上別符ニ有之、廢寺公領、

一 鶴林庵但塔中有西、今ハ無之、

一 勲重院 右同有東、右同、

一 栄仙寺但大里村菩提所本之鶴林庵移之、寺地御免

一 勝目山興國寺但川上村ニ有之、寺地石地、

一 德陀山常樂寺但下飯ニ有之、寺地御免、

一 道典庵但塔中有東、

一 忠徳山定福寺川辺有之、二代法嗣学堂開山、

一 洞雲寺但越前大野郡ニ有之、

一 禪童寺但濃州岩手ニ有之、

一 医王寺但越前ニ有之、

右之四ヶ寺当寺末寺ニ候故、于今書翰往来有之、

一嘉祿三年丁亥十二月十二日丹後之御局郡山於厚地御逝

去、八十二、御廟所厚地ニ有之、

一嘉祿三年丁亥六月十八日 忠久様於鎌倉御卒去、四十

九、

以上都而元祿四年未雪月書出、

一大檀那金鐘寺殿桃源妙悟大姉

但御位牌有之、御当家元祖左衛門尉忠久公之御懷比

企判官能員之御妹丹後御局御建立、御菩提所御建立

年月不知、

一頼朝公御影御立被遊置候所ニ炎焼之時分焼却仕候而只

今ハ無之、依此由緒只今迄 頼朝公与御回向仕来候、

正治元年正月十三日 頼朝公薨御、

一忠久公建久七丙辰八月朔日年拾八才ニ而御当国江御初

地入、

一丹後之御局右同、

右同断元祿四未雪月書出ニ有之、

一鎌倉写之七社宮金鐘寺近所御建立

鶴岡八幡 大里之宗廟

御靈大明神

今熊野大明神

日吉山王二十一社 金鐘寺鎮守内

一宮大明神 八文字民部太夫建立宮

安樂權現

稻荷五社大明神 市来宗廟

御当家根本之氏神

外ニ

嚴島大明神

是ハ 忠久公御下国時御供之重信主建立宮

12 金鐘寺建立訴訟書

一市来金鐘寺事、丹後之御局御法号桃源妙悟大姉為御弔

御建立被成候事曆然也、為菩提御系(マ)有之候事、

一其節為御知行三町七段并畠有之、塩屋壺間・門前屋敷

余多御座候、雖然毀破以來高八石ニ罷成事、

一毀破之後修理不罷成付十ヶ年程荒野罷成候、其内丹後

之御局御位牌・校割等ハ金鐘寺末寺山之寺ニ被施置処  
ニ、金鐘寺末寺吉利之光恩寺住持雲山和尚寺之住持周  
善和尚と以相談、市来地頭吉利杵右衛門殿へ申入候得  
ハ、即 公義へ御申被成候造作相調申候、自夫年久儀  
ニ候得ハ偏及廢壞申候而今度御修理之儀奉頼候、以上、

亥九月六日

金鐘寺

市来  
地頭

謹奉再興客殿一字

南瞻部州大日本国鎮西路薩摩市来庄大里村万年山金鐘  
禪室者、大源禪仏の子了堂真覺禪師開闢之道場而、丹  
後之局桃源妙悟大姉為御位牌所忝七堂創建之、雖然年  
代深遠荒廢及毀破、於茲大檀越藤原家久公建立之、以  
則雲山籠從叟令当住矣、自夫以降六十余年受風雨難今  
既頓頹、當時某甲祖申叟就群李訴修甫焉也、然于処  
忝三州賢太守光久公以金諸抽丹惱再興客殿也、当住祖  
申代寛文二年壬寅正月十一日始鋤斧、同年卯月十一日  
修造功畢、謹奉安置大覺世尊本師釈迦牟尼如来開山  
像等三牌桃源妙悟大姉御位牌也、專祈大檀那光久公身

宮安泰寿山増延子葉繁茂、親春臣属如意豊達福海益深  
日々有吉慶喜善根弥因時々無災盜一少災所鎮随心背獲  
吉祥伏希、上棟之後柱碩堅固棟梁安寧弘大風隨落之難  
除霖雨疾壞陳矣、仏日坊輝檀宗繁昌、

寛文二年壬寅卯月十一日

大檀那薩隅日三國太守光久公

金鐘当住為説祖申叟

当家长

伊勢(貞昭)兵部少輔

島津(久通)図書頭

町田(久則)勘解由次官

島津(久頼)筑前頭

新納(久詮)右衛門

鎌田(正勝)藏人

島津(久茂)中書卿

鎌田(政有)源左衛門

御使

村尾

鎌田太郎右衛門

高崎宗右衛門

御物奉行

新納又左衛門

町田源左衛門

同座御使

書記員僧 文龍藏司

主取大工 織田治右衛門

新納縫殿介

為説祖申謹誌焉

市来治十郎

普請奉行

一系図一通

法元宇左衛門

先年融峰代改有之節、文所奉行肥後仁右衛門殿御見

黒葛原大覚左衛門

分ニ而公義江被召上候、

当地頭

平田

以上享保十二丁未十二月書出歟、

山奉行

五代三左衛門

三原九兵衛

当所嚶

吉川兵部左衛門

岩重庄右衛門

星原喜左衛門

普請奉行

久保田仲右衛門

神社仏閣惣大工

山崎佐左衛門

当寺鑑座

閻察

福昌現住

嶺室和尚

侍衣

京哲

開山了堂真覚和尚大禪師、俗生平氏、和州結崎之人也、元徳二年庚午三月十五日辰時誕生、貞和二年十七歳ニ而脱髮受具、左候而、応安六年十月廿一日入宋之志有之、撰津国難波浦より乗船被成海上ニ而逢難風、薩州串木野庄羽島浦江到着、則結草庵号宿露庵居事三年計、其庵跡今者百姓地ニ而候、御当家御元祖 忠久公御実母丹後局御逝去嘉禄三年丁亥十二月十二日、御法名桃源妙悟大姉、右御供之女房衆切髪比丘尼と成、市来院大里村創建一字精舎妙悟大姉牌を奉安置、因茲請了堂真覚禪師令為開山第一祖、自夫改尼寺作禪刹、山名万

年、寺号金鐘、永和三年丁巳四月十四日了堂、不知、

一 右御牌享保十二未年当寺十八世融峰代、御繼圖等一所

ニ肥後仁右衛門殿御使ニ而御取上ケ罷成候、是又何様之訳も不知、尤古代より有之候撞鐘之名等茂消除ニ罷成申候、

成申候、

一 古代者七堂伽藍ニ而候由、其節為知行三町七段并畠有之、塩屋志軒・門前屋敷余多有之、雖然毀破兩度以來

現高八石ニ罷成候、当寺十二代明室遷化之砌諸堂及破壊候故、本尊釈八金剛四菩薩等右弟子大碩と申僧豊後

□寺之様ニ被取除、古川より船ニ乗候由申伝候、右和尚遷化後出火、諸堂皆焼失、夫より天正十五年より慶

長七年迄荒野と成候節、御文書并校割等紛失仕候由、一十三代雲山依願殿堂地頭吉利李右衛門殿并 家久公御

代御建立、寛文二亥(ママ)四月十一日十六代尚祝代依願 光久公御再興之由、

一 寺領高八石

但万治御竿より以来目錄頂戴仕候、

一 寺地御免

一 山林古代より御免

東之境

北之ケ平 大谷 暗谷 唐人ケ嶺

八方ケ辻 破レ石 木屋ケ宇都

西之境

扇子山 阿女ケ谷 池之原

面田(百カ) 苦木ケ平 小屋田平

八幡山迄 右金鐘寺山林ニ而于今格護仕候、

一 能州総持寺五院より之状

14

其国市来院金鐘寺年来輪次断絶之儀申越処、以御分別茲般被成帰附旧門派江之儀誠以当代之明鏡、末世之龜

鑑、御嚴重之英威於官家無比類之条、於当山向後可奉仰檀越者也、将又金鐘寺住持職之事福昌寺へ申越候、仍而連印如件、

永禄癸亥 普藏院

三月七日 春播判

如意庵

文郁判

伝法庵

祖元判

洞川庵

宗⑧判

妙高庵

慶徐判

島津修理太夫殿

御奉行所

右ニ付此御方様より当時乱国之砌ニ而候付寺建立難成候、太平ニ罷成候節建立可仕旨御返札総持寺江有之由申伝候、

一当寺之儀他国江押出候而ハ為差立寺格ニ而、寛永十九壬午年十四世禹愚門代能州総持寺輪番相勤候、依之前代より住職替等も虎之間格式被仰付置候、

一古代号尼寺候由、依之当寺之内于今比丘尼迫と申所有之候、丹後之局御逝去之後右御供女中尼と成法名を号梅岩林公、桃源妙悟大姉御牌を奉安置候由人群ニ茂申伝候、

右寛保二戌五月書出シ、

金鐘開山了堂、諱真覺、俗姓平氏、和州結崎人也、元

徳二年庚午三月十五日生云々、永和三丁巳四月十四日

□歳五十住此寺、影不出山者八歳歟、而後移居於和州、

而尋覓靈地、于茲有峨々靈山、便就于此山中創建蘭若

山号宝陀寺名補巖、安置観音大士為本尊、故名補巖歟

云々、応永六年己卯七月初七日唱滅寿相七十歳、門徒

奉遺骸塔于瑞川西北隅、

竹窓相繼而住瑞川、応永三十年癸卯八月九日及寂示、

衆曰、金烏東出玉兔西移生也死也、前機現時書終抛筆

逝、瑞川西北隅師塔之傍塔之、

右行業記ノ内ヨリ写之、

長谷観音

右由来 御先祖市来之城を召乗給時、平之城者落本

城ニ為可召乗、大和国長谷観音・軍神摩利支天勧請

可被成御立願ニ而御立為被成由申伝候、左候而、知

行観音へ三町、軍神ニ二町為相付由候、毀破以後于

今漸畠少灯明として御免地ニ而有之候、

右座主 長谷寺

右神社仏閣帳

長谷寺

觀音灯明田として畠相付申候間此寺載候、

右由来者御先祖市来城を召乘、平城ハ落本城に為可被召乘、大和国長谷觀音・軍神摩利支天勸請可被成御立願為被成御立由申伝候、龍雲寺号を長谷寺と申候、

右神社仏閣帳

潮音寺

当寺昔者養徳庵と申候得共、鎌王と申奉る王位配所ニ付、当寺江数年御逗留被遊候時分、山号ハ補陀山、寺号潮音寺と御改被成候由昔人申伝候、年月不相知、

一本尊十一面觀音但座像、厨子之内ニ書付有之候、前永平龍雲現住抱岩叟誌之、爰（天カ）□天十五丁亥初夏十有之比、諸国發威光京勢走向軍兵百五拾万騎、誠ニ驚天動地、豈能支防人力有逆徒走矣、不敬仏堂不尊神社忽觀音菩薩之尊像打碎成微塵、潮音主盟智厚記室謂、予再興本尊以為幸聞哉、翼日令使薩之鹿兒島留滞洛陽一条居住

之大仏師大藏卿奉再興所眼前也与書付有之候事、

一開山龍雲先住雲舟

一中興龍雲先住抱岩

一古仏之文殊像一体・普賢像一体但両尊共ニ春日之御作之由、然尠才九月十一日ニ川野湘雪老（マヤ）公義より古仏御用之由ニ而御取被遊請取御座候、其後白銀三枚被下候、于今校割銀ニ而在之候事、

一福昌寺先師大川和尚御墓寺中ニ御座候、尤位牌も相立候事、

一昔ハ門前并知行二町二段相付候由申伝候得共、于今ハ無祿ニ而候事、

以上元禄四未十二月書出、

白牛山

西岩寺

西岩寺儀其古ハ白牛院と申候而天台宗ニ而、弁才天之座主ニ而御座候由ニ候得共、致中絶開基年月不知、勿論本白牛院与申候時分ハ御免地ニ而御座候由候得共、中絶時分何時代上地ニ罷成候哉、当分ハ御藏入ニ而御座候、中絶之後龍雲九世一岳再興被遊龍雲寺末寺罷成

候由ニ候、是又再興之年月不相知候、

一 串木野 串木野三郎忠通

一本尊勝軍地藏菩薩但木像坐像、長七寸、天文廿三年十

是忠久侯の時居城せしむ、其本は平姓頼娃郡司忠長か

一月吉日仏師日高二郎右衛門秀長作ニ而候事、

息成枝薩摩六郎忠真直イか三男也、二代太郎忠則、三代平

一開山龍雲九世一岳棟忍

次郎忠秀、四代平次郎、五代七郎忠秋、従是末系図ニ

右元禄四未十二月書出、

不見得候、  
亮洲隨筆

宗乾寺

開山龍雲十一世太春寺鷹(守也) 開基性梅宗乾居士(吉別忠澄)

名勝考  
日置郡串木野郷上名村

右ハ吉利治部殿先祖ニ而候、開基之年月不知候、

○冠嶽 日置・薩摩両郡に跨る東西中央の三峰ありて風

右元禄四未十二月書出、

折烏帽子に似たり、因て冠嶽といふ、

福寿山

梅岩寺

同郷下名村

開山龍雲九世一岳棟忍

照島 島平浦の海上に在り、海畔を去事一丁余、東西  
に長き事二丁計、横一丁余の小嶼なり、

開基梅岩林公大姉

串木野  
猪之日太大明神(田) 宗廟

右者丹後局為被召仕局之由候故、御局御逝去後為御菩

右奥州伊沢之郡より入枝名字之者為負下由申伝候、

提成比丘尼結庵、号福寿庵雖住之年月不相知、古ハ比

今ニ其子孫有之、

丘尼所ニ而候処ニ致中絶、龍雲先師一岳再興龍雲寺末

寺罷成候由候得共、再興之年月等不相知候、

右元禄四未十二月書出、

右神社仏閣帳

神社考

上名村  
猪日田大明神 薩城より西拾里

祭神二座石体

饒速日命

天香山命

祭米二斗 産子中出米

当社勸請年曆不詳

寛保二戊五月申出  
一奥州伊沢之郡より入枝名字之者为負下由申伝候、

申木野  
上名村之内御城内

一諏訪上下大明神

社司所衆中  
入枝藤右衛門

祭米三斗五升御物より御渡被下、

地頭有之節者御地頭方より壺斗七升五合相渡候、

右之外由緒書無御座候、

右寛保二戊五月書出、

一諏訪大明神

神主  
入枝采女

健御方命

事代主命

但上宮唐金壹体・木像壹体

下宮唐金壹体・木像壹体

右者秘物与申伝茂無御座候得共、従往古正体拜見不仕、  
此節初而拜見仕候処、但書之通古キ遺書等無御座候得  
共、申伝之書留持合罷居候段承届申候、

一祭米三斗五升御上より被仰付、地頭より壺斗七升五合  
被仰付来候、

右文化十一戊十二月書出、

神社仏閣帳

諏方大明神

御城

祭日七月廿八日

祭米三斗五升 従公義下ル

神社考  
一当社勸請年曆不詳

申木野郷  
下名島平

松尾大明神

祭神

大己貴命

本社勸請

大山咋命 市杵島姫命

諸神記

月読尊、此神ハ松尾勸請之以前より鎮座歟、

九月廿八日 正祭

祭料二斗 産子出米

右神社考

羽島崎大明神 薩城より西拾壹里

祭神二座

大己貴命

天治玉命

祭米壹斗七升 産子中出米

一当社勸請年曆不詳

串木野郷

末社

下名之内別府村  
一稻荷大明神

下名之内平松村  
一天満天神

上名向之原  
一妙見社

浜  
一伊勢大神宮

一惠比須

同所

一八房大明神  
下名之内野本村

一深田大明神  
町

一惠比須  
上名之内

一山之神  
上名之内

一山之神

龍  
一諏方大明神

龍  
一諏方大明神  
羽島

一天神

一甲大明神  
祭料五升産子

一諏方大明神

一諏方大明神  
右同壹斗五升産子

一松野尾大明神  
祭料壹斗三升産子

一能野権現

右神社考

芹ヶ野金山  
一山之神

右由緒不知、

右寛保二戌五月申出、

くしきの  
東嶽熊野権現

座主  
鎮国寺

15

奉造立東嶽三所大権現社頭一字、、、大檀主藤原光

久朝臣同久平、当地頭野村大学助源元綱、、、

寛永廿一年甲申四月二日

当座主法印盛心

奉行 児玉源太左衛門

同 上村才右衛門尉

大工 武元兵右衛門尉

同 前田弥五介

東嶽祭日 正月元日 九月十九日

中嶽熊野權現 今々無坊 興隆寺

奉造立中嶽三所權現社頭一字——、  
末同シ、

年間同斷故略之、

中嶽祭日 正月元日 九月十九日

西嶽熊野權現 今無坊 靈山寺

奉造立西嶽三所大權現社頭一字、、、大檀主藤原光  
久朝臣同久平、(綱久)地頭鎌田左京政喬、、、

慶安四年辛卯三月吉辰日

沙門全有敬白

右西嶽權現社久数年破損而無神社、今度(依)訴訟銀子一  
貫目檀越光久公御助成也、依之(金)今再造者也、

奉行

有馬源七左衛門

肝付新介

上村才衛門

西嶽祭日 正月元日 九月九日

右熊野權現者人皇第一神武天皇御宇ニ当山ニ下来給様  
ニ古キ文書ニ有之、当山者阿子丸仙人開発之由候、古  
キ文書ニ有之、建久五年造榮為有之由置文ニ見得候、  
当山建立者当初參人皇卅二代用明天皇御宇馬子宿祢親  
王御願所草創也、星霜年至文安六年八百五十余歳云々、  
此等之趣当山置文ニ有之、

右神社仏閣帳

くしきの冠嶽山 頂峰院 祈願所真言宗 鎮国寺

17 奉造立冠嶽山持仏堂一字、、、大檀主藤原朝臣光久同

久平、

慶安四辛卯八月吉日

当住持沙門全有敬白

当地頭鎌田左京亮政喬

一熊野三所権現

現神領高共有之候、

一高三拾九石九斗三升四合三勺七才

東嶽天神七代之初神国常立尊

西嶽同二代之神国狭槌尊

右神社仏閣帳

中嶽三代之神豊斟<sup>(淳)</sup>淳尊

右三所ニ鎮座 祭日

村上天皇天曆未年蒙

正月元日 三月三日 五月五日

勅天台宗於改真言宗と成也、

九月九日 同月十九日 同月廿九日  
十二月廿九日

冠嶽山 鎮国寺 頂峰院

三所権現

右之祭寺高四拾三石之内を以都而相調事御座候、

右者用明天皇勅願所と前代より之校割帳ニ書記有之候、

東嶽証誠殿阿弥陀如来

元者天台宗ニ而開山阿子丸親王と申候、十九代

御本地 西嶽上宮千手観音

相伝、其後天台宗を改真言宗ニ相成、京都法輪院権

中嶽中宮薬師如来

僧正宗寿勅住ニ而中興開山、夫より真言密院ニ而当

申木野 三所権現末社

住快超迄五拾七世罷成候、

一御経之塚

一寺高四拾三石八斗五升

但経を墨たる様之自然石有之候、縁起等無御座候、

右者慶長五年之知行目録ニ、鹿兒島御館内護摩所勤

一材木嶽

料として可被成下旨、御家老衆御連印之奥書有之候、

但古人之申伝に、往古右之嶽ニ而材木を取召置候処、

前代拾二ヶ寺長日寺之由候得共、近代之書付ニ者権

一夜之内ニ石と成り候由、材木を積重たる様之石有之候、

一大岩戸権現

彦山権現

開聞宮

霧島六社権現

但地より三丈余高キ所江凡四敷四間計之勸請、家ニ而も造立仕程之岩屋ニ而御座候、宮ハ小キ小倉ニ而候、

一虚空藏堂一字

但地より三丈余高キ所岩内ニ有之、梯子相掛岩穴之深サ七八間も有之候様ニ申伝候、

一不動尊 立像壹体

但高サ地より三丈余之岩穴江有之、岩穴奥之深サ五六間程、多人罷登事難成候、

一仙ノ岩 仙人石体

但絶頂岩之中江有水、是を覗之水与申伝候、

一児ケ宮 如遺輪觀音(意)

但児ケ石共相唱説も有之候得共、野中ニ大石有之、

18の1

18

是を児ケ石と申伝候、然処東嶽権現之棟札ニ児ケ宮と書載有之候故、是に相違ハ無御坐筈、場所之儀何れ之所相知不申、逢縁候人ハ目ニ掛杯と申伝

茂有之候故所中相糺申候処、爰元上名村之百姓行当候由申伝承候付相糺申候、成行別紙ニ書記差上申候、

右之外由緒不見得堂宮略之、  
右文化十一 戌十二月書出、

申木野頂峰院

御文書写

異国降伏御祈事者十月廿七日関東御教書今月廿日到来、(去)

案文如此、如状者、薩摩国一宮国分寺宗神社、殊可致精勤之由相触之、可令執(進)達卷数畢者、任被仰下(之)旨可被

致御祈禱忠候、仍執達如件、

正応五年十二月廿一日 「四代太守忠宗公」 左衛門尉御在判

冠嶽別当住僧御中

(本文書ハ「旧記雜録前編二」九六四号文書下同一文書ナルベシ)

18の2

奉免

薩摩郡串木野村内冠嶽両山神領田畠山野等事

右当所者熊野垂跡之砌、大権薩埵之栖為長日不退御祈

禱所之間、於件田畠山野等領家御方地利物以下者、任

先例、依仰所奉免如件、

永仁五年十月廿八日

又六御在判

〔忠宗公御舍弟伊作大隅守久長入道〕

沙弥道意右同

大江景遠右同

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二一〇一七号文書ト同一文書ナルベシ〕

18の3

冠嶽靈山寺別当代賢賀申、於社頭致狩獵乱入神領成煩

事、訴狀副(反)算如此、事实者甚無其謂、早任先度奉免状、

不可成違乱、次甲乙人等狼藉事、可加制止也、向後有

違非之輩者、可処罪科之状如件、

嘉元三年後十二月十五日

道義忠志御在判

中条平田内左衛門入道殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二一〇九九号文書ト同一文書ナルベシ〕

18の4

補任

薩摩郡内先達職事

右於彼職名〔太良〕行所冠嶽榮永也、早任先例、可令補任

状如件、

康安式年八月廿五日

〔五代太守貞久公御子 上総介師久御在判  
氏久公御舍兒〕

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二一〇八号文書ト同一文書ナルベシ〕

18の5

冠嶽権現

御宝殿修理事

右為凶徒退治立願如件、

貞治六年七月廿四日

〔六代太守〕

修理亮氏久御在判

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二一七八号文書ト同一文書ナルベシ〕

18の6

御札委細承候畢、抑去夏被入見参候之条悦存候、便宜

時者連々可申候、兼又承候奉加事進之候、巨細御使申

候間令省略候、恐々敬白、

九月廿四日

〔氏久公御法名〕  
沙弥玄久御在判

謹上冠嶽別当御坊御申

(本文書ハ「旧記雜録前編二一七九号文書ト同一文書ナルベシ」)

18の7

補任

薩摩国串木野村内冠嶽東谷西嶽別当職事

右到職者所宛行栄永也、早任先例、可令補任之状如件、

⑩ 伊久御在判

〔師久公御子上総介〕

(本文書ハ「旧記雜録前編二二五二号文書ト同一文書ナルベシ」)

18の8

奉加 冠嶽山社壇

馬一疋

右為彼御宝殿造営奉加如件、

至徳二年十月十一日

〔七代太守元久公  
初ノ御名〕

藤原孝久御在判

(本文書ハ「旧記雜録前編二二四三八号文書ト同一文書ナルベシ」)

18の9

敬白

奉寄進冠嶽山三所権現限永代薩摩郡内天辰谷参段事

右寄進志趣偏只為天長地久御願円満、且為家、且為

当代弓箭、且為子々孫々、或郷内安穩、或諸人快樂、

為取分息災延命、恒受安全、朝夕之祈祷憑故也、依

志趣若件、

⑩ 伊久御在判

〔丁亥朱ニテ  
天宛〕

二月九日

鳥津山城守藤原忠朝 在判

(本文書ハ「旧記雜録前編二二七六〇号文書ト同一文書ナルベシ」)

18の10

敬白

冠嶽山三所こんけん〔にわ〕うくわんの事

右こんとの世上目出度にて、弓箭のうんをひらき候て、

よせ田しほ入の本寄進の事、かへし申へく候、かさね

て一所寄進申へく候、せいゝの御きたうをいたされ

候へく候、仍くわん書如斯、

⑩ 伊久御在判

〔天宛〕

八月廿一日

鳥津山城守藤原忠朝 在判

(本文書ハ「旧記雜録前編二二七六四号文書ト同一文書ナルベシ」)

18の11

冠嶽権現御供田

薩摩国薩摩郡之内勝目迫壺町如本返付申候、

右件在所者早守先例可有領知如件、

応永十九年二月廿八日

〔忠相法名〕  
島津道世在判

〔本文書ハ「旧記雜録前編」二八七号文書ト同一文書ナルベシ〕

一御文章 壹卷

右至徳元年十二月 日榮永在判

一御坪付 壹卷

右正応元年十二月 日沙弥玄久御判

敬白 冠嶽権現

奉寄進

右文化十一戊十二月書出ニあり、其外前条写候年  
月日同数故洩之、

薩摩国伊集院大田之内一町、次栗毛馬一牽、

奉寄進所也、

串木野  
岩水山 良福寺

右意趣者敵悉退治為本覆立願如件、

実峰派之法孫月点永大和尚之開山所也、開基年月不

長祿三年八月六日

〔伊集院家六代家督〕  
伊集院熙久判

知、本寺中国之永福寺也、

一串木野領主島津中務殿時代、從（家久）公義良福寺御建立、

〔本文書ハ「旧記雜録前編」二一三七八号文書ト同一文書ナルベシ〕

大中様御牌御立被遊候而于今有来候、

右元祿十年丑閏二月書出、

右之通書写可差上旨被仰渡趣奉承知候、依之差上申

候、以上、

神社仏閣帳  
一岩水山 善提所曹洞  
良福寺

頂峰院

高壱石

未八月廿四日

亮昌判

右良福寺中務様御領之時御牌立候、

御唎衆中

申木野  
岩水山

曹洞宗本寺越後有之  
近代備中国道祖見村  
永祥寺末寺  
良福寺

開山月点永

在任勸請之訳不知 年間不知

高壺石

何年間御寄附等之訳不知

一 (貴久) 大中様御位牌 志尊

誰様御安置且年間不知

右寛保二戊五月書出、

19

一 串木野上名村之内上屋敷と申所江 大中様御石塔有之

候、此所江往古ハ岩水山来福寺と申寺有之、島津中務

大輔家久串木野領地之時、右 御石塔建立ニ而御位牌

も安置有之、其時良福寺と改号、寺高壺石被付置候段、

良福寺書付之内ニ相見得申候、当分之良福寺者末寺蓬

福寺と申寺有之地ニ而、廢壞後良福寺引移申たる由、

夫故上屋敷寺地跡田畠三段三畦ハ于今御免地ニ而良福

寺より作職仕来候、其上御石塔より拾八間計東ニ当り

岩間ニ清水有之、岩水山号と古跡ニ而、于今御光越之

節ハ御前水ニ相成候、其辺田地之字ニ鐘突田・寺之前

と申も有之候得者、良福寺寺跡無紛候、其時分ハ 大

中様御石塔も寺内と相見得候、今ニ至り良福寺より香

花差上掃除等仕候、以前より圀垣等も無之候処、御記

録奉行勤本田休兵衛先達而廻勤之節、不淨等持通場所

ニ而候得者、圀垣取建候様吟味之趣有之、地頭方より

所役江 圀垣取建候様被申渡、去西六月石圀垣仕調、当

分ニ而ハ籠抹之儀も無御座候、尤御石塔之場所者良福

寺より丑寅之方ニ相当り、道法六丁程有之候、良福寺

当分之地江引直候訳相糺候得共、何比より引移候儀書

留等見当り不申、何様之訳も不相知段、住持并所役よ

り承届申候、右様為隔場所ニ候得者、猶又時々氣を付、

何篇籠抹之儀共無之様、良福寺へ被仰渡度奉存候、

御石塔并御位牌籠絵図相添此段申上候、以上、

但御記録奉行廻勤之節、上古ハ蓬福寺と唱候処、家

久 大中様御牌建立之砌、良福寺と被相改候由申

伝候段、所役より書出候得共、伝誤ニ而御座候、

為御見合、良福寺古書付之内書抜并廻勤御記録奉

行へ所役より申出候留書写差上申候、

享和二年 廻勤寺社方取次

戌八月十三日

東郷次郎作

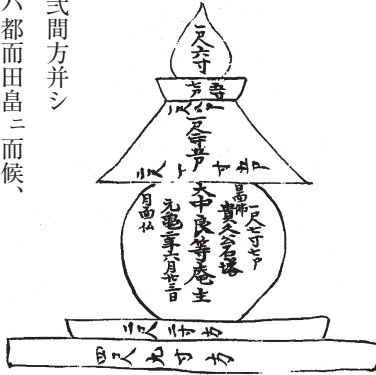
一大中良等庵主尊牌

御位牌台座迄惣箔磨

御位牌台座迄惣高サ壹尺八寸程

モツコウ御厨子惣高サ貳尺壹寸程

申木野  
御石塔西向キ



御石塔之地面式間方并シ

平地ニ而、境ハ都而田畠ニ而候、

作道通より御石塔迄十三間程入込候、

20の1

20

良福寺古書留

差出

一 串木野良福寺、古八岩水山来福寺と申候事、中務様

御持之時 大中様為御寺岩水山良福寺と寺号を御替被

成候事、御位牌于今御座候、

一 屋敷御支配地ニ而無御座候事、

一 禅宗

一 知行高壹石分

一 正福寺 但良福寺末寺 上名村

右于今御藏入地ニ而候事、

一 大同庵 但末寺

屋敷御支配地ニ而無御座候事、

一 栖風庵

屋敷御支配地ニ而無御座候事、

一 宿露庵 但末寺 下名村別府

右于今御藏入地ニ而候事、

一 雲庵 但末寺

右者御藏入地ニ而候事、

一松林庵 但末寺松林庵林鶴

一禪宗

一屋敷御支配地ニ而無御座候事、

一林泉庵 但末寺 浜

右御藏入地ニ而候事、

一妙智寺 但末寺妙智寺舜宅

一上川庵 但末寺 荒川村

右于今山ニ而御座候事、

一万藏寺 但末寺 羽島

右者御藏入地ニ而候事、

一法寿庵 但末寺 羽島

右者御藏入地ニ而候事、

一悟入寺 但末寺 羽島

右者御藏入地ニ而候事、

〔元禄四年未敷〕  
未八月十八日

御喫所

良福寺

差出

①之地  
下  
一本寺地御免地<sup>②</sup>册三間<sup>③</sup>ニ反三畦

良福寺

一寺地御免地<sup>④</sup>廿七間<sup>⑤</sup>卷反四畦廿步

蓬福寺

右致廢壞、只今良福寺ニ而御座候、

一寺地御免地貳反

一寺地御免地三反七畦拾步

一寺地卷反五畦

一山野名地

青峰庵

20の2

下名村之内深田  
一大山野開田地卷反余程

上名村之内馬籠  
一同 壹畦半程

一同 五畦程畠開

右者当寺之儀、中務殿当地御居住之時分 大中様御

牌御建立有之、定而其節御仏餉料為有之筈候得共、

佐土原へ御引越跡ハ分而御仏餉茂無之候故、御檀那

忌等茂無之候故、拙僧存立所役々江願出、諸障無之

場所田畠開調、往々檀那忌料ニ致度旨申出候処、右

場所何ぞ諸障無之故、自分物入を以開調、去々亥年

より毛上見掛を以少々ツ、為致取納候、尤去々亥年

新命

より檀那忌相初候、然共未御竿申請候間、序次第御  
竿御申請、交割帳ニ御載、永々次渡被成度存候、右

一良福寺当分之地面江引直候年鑑、且何様之訳ニ而引移

次第所役々ニも申出置候、尤寺役人委細被存候間、  
御談合之上宜様首尾可被下候、以上、

有之候儀、相知不申候、  
右良福寺江有之候書留写、

明和六年丑

心翁寺

四月廿三日

康天印

良福寺

21 岩水山

新命

但建立之由緒

地頭飯屋より巳之方

不相知

壱町拾五間

坪付

一貴久公御牌壹尊

田一間七合  
七十六間四畦九歩

一同公御廟所 右同所より卯之方  
四町八間

右者 大中様御仏餉料として所役々江申出、右地面

右者島津中務太輔家久公御居城之節御建立之由申伝

申受置候間、以後御竿申受御高相究候節ハ交割帳ニ

候、寺名上古ハ蓬福寺と唱候処、貴久公御牌御建

御載、永々次渡被成度存申候、尤寺役人委細之儀存

立之砌、寺号良福寺と為被相替由申伝候、旧記等無

之前ニ御座候、已上、

御坐候、

天明三年 卯

良福寺

一高壱石

十一月十一日

春耕印

右家久公御寄付之由、

良福寺

右御記録方江書出候留、

右之通書寫差上申候、以上、

享和二年戊

戌八月十六日

寺社方掛組頭

宮之原平八

右同郷十年寄

加藤孫七

寺社方御取次衆

東郷次郎作殿

〔別条△此印之處へ朱書〕

右御石塔御記録奉行本田休兵衛殿參詣有之、御石塔迄

二而ハ龜抹ニ有之候間噂被致候処、其後地頭所江井垣

相調候様被仰渡、地頭所より仰渡有之、享和元酉六月

石井垣所中より相調候事、

22

申木野 寺地改

御目見地

一頂峰院 真言大乘院末御免地

一良福寺 高三拾九石寺社方合力  
曹洞備中永祥寺末御免地  
高壺石寺社方合力

一松山寺 福昌寺末御免地

一妙智寺 良福寺末御免地

一悟入寺 右同末石地

23

薩摩郡百次

一 生松寺 真言大乘院末御免地  
高式石寺社方合力

一 善心寺 曹洞福昌寺末御免地  
高七斗寺社方合力

百次

宗廟

諏訪大明神

何年間建立共由緒等不知

祭米尅斗七升五合

右毎年七月廿六日祭ニ付 公義より被仰付候、

右寛保二戌五月書出、

一善峰庵 右同末

一正福寺

一 百次 上野城上野太郎忠宗、是 忠久候の時居城せし

む、其本は平姓薩摩太郎忠友か弟也、二代上野太郎忠

将、三代平三郎忠員、四代太郎良頼、五代四郎太郎良

国、六代孫四郎忠国、

亮洲隨筆

神社仏閣帳  
一 祭米壹斗七升五合

右毎年公義より被下候付祭相調也、

一 威徳山 円満院  
大乘院末  
生松寺

開山開基等不知

高式石九斗

寄付之訳不知

生松天神 一字

右当寺格護建立年間其外由緒不知

右寛保二戊五月書出、

神社仏閣帳  
一 高式石九斗

宝昌山  
福昌寺末  
善応寺

開山福昌十九世天海

何年間建立施主不知

高七斗 寄付之訳不知

一 寛庭芳宥大姉御牌  
(忠良等)

右御安置之訳不知

右寛保二戊五月書出、

神社仏閣帳  
一 長松山  
菩提所  
善応寺

高七斗

右寺享祿元年九月廿九日ニ御建立、前々知行六反御座候由候へとも、当分ハ高七斗相付候、

24 薩摩郡山田 寺地改

一 万福寺  
真言大乘院末御免地  
高式石寺社方合方所

一 東光寺  
曹洞福昌寺末御免地  
高式石寺社方合方

川内 山田郷

惣鎮守 薩摩郡  
久木原権現 薩城より北西之間去事拾一里

祭神 「朱書二面」  
神社仏閣帳

不詳 祭米壹斗七升五合 従公義出

九月廿九日 杜屋敷五せ 万福寺格護

祭料壹斗七升

一 当社勧請之年曆伝記不詳

社職  
野崎太兵衛

久木原権現  
別当  
万福寺

末社

一天乞大明神 一若宮大明神

一<sup>②</sup>神大明神 一山之口権現

一山之神

右神社考

右御物より被仰付候、  
右由緒等不知

薩摩郡山田  
一医王山  
福昌寺末  
東光寺

志繩大明神

三代実録曰、貞観二年三月<sup>②</sup>廿二日、從五位下志奈

毛神亦授從五位上卜薩摩ノ部ニ有リ、志奈毛志繩訓

近シ、此社ヲ云歟、

右式行御安置之詔不知

右都而寛保二戊五月書出、

薩摩郡山田  
東嶺山  
陽春院  
大乘院末  
万福寺

高式石八斗

御寄付之詔不知

神社仏閣帳  
一高式石五斗  
一寺地竿御免

神社仏閣帳  
一高式石八斗  
一寺地竿御免

隈之城  
諏方両大明神 宗廟  
祭日七月廿八日  
祭米五斗式升五合從御蔵出ル、

右神神元不知

右神社仏閣帳

神社考

一 当社勧請年曆不詳

一 祭料五斗式升五合 毎年御物より、

薩城より戌亥ニ去拾二里

寛保二戌五月申出同断、



神社調

薩摩国  
之部

四



(表紙)

神社調 薩摩国之部 四	隈之城 高江 平佐 佐志 黒木 樋脇 入来 萬牟田 大村 中郷 東郷 鶴田 宮之城
----------------	---

隈之城

諏方両大明神

祭日七月廿八日

祭米五斗式升五合

從御物藏出ル

右神根元不知

右神社仏閣帳

神社考

一 当社勸請年曆不詳

一 祭料五斗式升五合 毎年御物より

宗廟

薩城より戌亥ニ去拾弍里

寛保二戌五月申出同断、

薩摩郡 隈之城

宮里村

志那尾神 志奈毛トモ

薩城ヨリ戌亥ニ去事  
十二里

祭神

熊野

一 三代実録、薩摩国貞観二年三月廿日庚午、從五位下志奈毛神亦授從五位上、

但三代実録ニハ志奈毛神ト有所ニテハ志那尾大明神

ト云リ、文字唱等雖異実録ニ被記候ハ從古来此神

ヲ以正トス、

祭祀二月三日

右神社撰集

神社考

一 勸請年曆不詳

隈之城末社

一 諏方大明神 一八房

一 矢奉射大明神

一 八幡宮

一 山之神

一 新宮八幡

一 松の尾大明神

一 開聞社

一 森大明神

一 惠美須

一 權現

一 霧島權現

一 諏方大明神

一 若宮八幡

一 山王

一 春日大明神

一 權現

一 權現

右神社考

神社仏閣帳  
一 右寺之根元不知

「本ま、」  
巢山山 龍寿院

高八石

金剛院脇寺  
来国寺

右寺従前之士役被仕候ニ付、所之衆中并ニ軍役高被下置候、根源之儀不知也、

右神社仏閣帳

神感山

菩提所禪家  
市来龍雲寺末  
大源寺

高五石

右寺根源不知

右神社仏閣帳

観現山

平嶺石寺 ヘレイホキ  
大乘院末  
金剛院

開山羅上人 (日脱カ)

年間不知

中興開山快玄 年間不知  
神社仏閣帳同断

高三拾壹石 上代より付置、

一文亀二年 戌灌頂執行有之候書付有之、

一古銀百五拾目 先師施入ニ而次来候、

一錢五貫文 右同断、

右寛保二戌五月書出、

一 建立年間不知  
一大檀那 日新公御牌

右本来日州飢肥御領之時、上原志摩守地頭ニ而彼地

へ移居、其節永源寺相立別号永源寺殿、天正十三乙

酉七月十三日也、然処又伊東領成、斯時当寺前住明

岩和尚、生国肥後之人也、雖為永源寺住持居住難勤

之故、包御牌自背負、当寺隆岳和尚法縁之故頼被參候、隆岳則以件事聞 義久公、閣下御感不微、則可

奉安置之旨任貴命奉崇と云々、

一高五石 日新公へ 義久公より天正十三年乙酉七月十

三日御寄附、

右寛保二戊五月申出、

隈之城  
白波山 向田一編派  
称名寺

寺地竿入

宗久公之 御牌所

右者宗久公之御牌所御灰塚之松于今御座候、前者知行六町為相付由候、当分者堂地迄茂竿入ニ罷成、高式石七斗余御藏入納方本手村御藏ニ相納候、御本尊阿弥陀金仏 宗久之御形代之由候得共、先年京衆下候砌盜取為申由候、其後新納住持本尊為被召立之由候、先年遊行上人廻国被成候時分、堂修理從 御公義被遊候、称名寺平佐持ニ罷成候ニ付、新納住持如加世田被罷移候、其時分什物不依何色被持越、于今一ツも書物等無御座候、 宗久公之御落馬被遊候所ニ地藏堂御建立候、近

年其堂破壊仕、称名寺ニ御移、阿弥陀堂ニ御座候、如右申伝候、

右神社仏閣帳

隈之城  
川内山 福寿院 相州藤沢市 清浄光寺末  
「託何共」 称名寺

曆応三庚辰年遊行七世廿日上人開基ニ而候、元和三甲午八月廿日示寂、

開山僧阿弥陀仏文和四乙未八月廿八日遷化

建立年間不知

一長庵久阿弥陀仏

貞久公御嫡男  
宗久公

曆応三年庚辰正月廿四日御落馬之由也、

師久公宗久公次弟  
一定山道貞大禪定門

永和二年三月廿一日御逝去、

右 御牌誰様御安置之訳不知

一高三石

右 宗久公 師久公御仏餉料として永代持留ニ 綱

貴公より御寄附之旨、元禄三年午十二月廿七日被仰

出、未六月二日知行目録拝受仕候、

一銀八拾六匁

右 綱貴公御寄附、

一 祠堂銀五百四拾八匁

右者称名寺本尊地御仮屋地ニ被仰付、本寺地ニ茶園櫻

子有之、所務を以 宗久公 師久公御仏餉御茶湯差上

来候処、返寺地新次ニ被仰付候故、別而不勝手ニ有之、

其節段々御訴訟申上候得ハ、一ケ年ニ真米式石ツ、

十ケ年米式拾石被仰付候、右之内式石ハ現米ニ而申受、

残り九ケ年分米拾八石一度ニ申受売払、右五百四拾八

匁之銀所役所へ預置、年々利銀住持方へ受取、本銀ハ

右之通、貞享四年、当寺十四世一郭祠堂銀ニ相定置申

候、  
一 太夫判官宗久公御廟所

一 右同御灰塚松

右式行本寺地向田御仮屋地辺ニ御座候、

一 師久公御廟所不相知、

一 当寺御家五代道鑑様之御子 宗久公之御菩提寺ニ而、

上古ハ寺領六町為有之由申伝候、

一 宗久公御形代之地藏菩薩御落馬之所ニ建立有之候得共、

堂廢壞ニ而称名寺御位牌所ニ今以奉安置候、

一 宗久公向田町はつれよなごせと申所之辺ニ而被遊御落  
馬候由、

一 向田町頭田地之内ニ御行器すへ候跡と申伝候所于今御

座候、

右寛保二戌五月書出、

一 法昌山福寿院称名寺

一 本尊阿弥陀立像長卷尺八寸  
湛慶之作と申伝候、

一 境内 豎廿三間横廿四間 寺地御免地

外ニ足地畠七反式畦八歩御免地

右足地之儀者貞享三丙寅年元寺地御用地ニ相成、当

寺地向田日暮之城涯へ被召直候故、元寺地之畦反寺

内之外ニ畠地ニ而被召付候、

右元禄十五年四月書出、

一 銀四百拾壹匁六分六厘

但宗久公 師久公御牌前へ御灯明用、

向田町人江預置申候、

称名寺

享保十八丑二月廿一日

覚眼印

要用集しらへ  
師久公御石塔 重豪公思召ヲ以御再興被仰付、文化十  
一甲戌十月御成就、

隈之城

称名寺

一仁王之銘 享保五庚子八月如意日

当寺十七世現住祖田記之、

奉造立

向田町

郭善兵衛

御位牌三基左之通、

一久阿弥陀仏

一定山道貞大禪定門師久尊儀

一得祥玄瑞明一房

御石塔者向田町之脇御飯屋之側ニ在之、

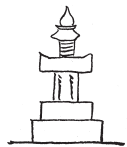
曆応三稔

帰寂 久阿弥陀仏

正月二十四日



定山道貞大禪定門



右之二基御相中ニ籠相之上屋あり、鹿兒島本立寺之  
振合なり、

天保五年午四月十一日久仰入来温泉より行て拜之写  
し置、

一 隈之城

龍寿院

大乘院末

巢山寺

大源寺末

正福寺

金剛院末

来福寺

一 右元文二巳七月申出、

2

隈之城

御目見地  
一金剛院 真言大乘院末御免地高  
三拾壹石寺社方合力

一来国寺 右同末御免地

一来福寺 金剛寺末御免地

一大源寺 曹洞市来龍雲寺末高  
五石御免地寺社方合力

一正福寺 大源寺末石地

御目見地  
一称名寺  
時衆藤沢山末御免地高三石  
寺社方檢者付并合力

名勝考  
薩摩郡隈之城郷東手村

日暮里あり、

一 高江宮里紀太夫正信、是 忠久侯の時知行せしむ、其  
本は紀姓光孝帝の流、石清水俗別当正四位下兼信五世  
の孫信経の二男正信、初て宮里の郷を領す、

亮洲随筆

○ 梶前あり  
薩摩郡高江郷久見崎村

3

高江 寺地改

- 松嶺寺 真言大乘院末御免地
- 高壘石寺社方合力
- 曹洞福昌寺末御免地
- 高壘石合力
- 長崎寺 御船手支配竜雲寺
- 久見崎
- 江音寺 末寺寺地

惣鎮守 薩摩郡高江郷  
諏方大明神 薩城より西ニ去事拾三里

祭神二座

本社ニ同

七月廿八日祭

祭料壹斗七升五合 御物より年々被下候、

一 当社勸請之年曆不詳

梅北数馬

末社

- 上高江 一志那尾三社大明神 長崎
- 麓 一宝満立 城内
- 一熊野三所権現 一地主権現
- 一山之神 広瀨
- 寄田村 一水神 同所
- 一天神 一山之神 同所
- 一若宮八幡宮 久見崎
- 同所 一諏訪大明神 御船手内
- 一柳大明神 一船玉大明神
- 一稻荷大明神 一光神
- 右神社考

一志那尾大明神

祭所中より出来を以相調来候、

右寛保二戊五月申出、

右神社仏閣帳

峰山 実相院

開山盛嶽

祈願所

松嶺寺

諏方大明神

宗廟

祭日七月廿八日

祭米壹斗七升五合

右者祭米として 公義より被下候而相調申候、由来

之儀座主無御座候間、為存者無御座候、

建立年間不知

高壺石

熊野三社権現

愛宕堂

右式行当寺格護

右寛保二戊五月申出、

弥陀山

禪宗

長崎寺

高壺石

高江

弥陀山

菩提所

長崎寺

屋敷御免

開山鑑嶺珠大和尚年間不知

高壺石

嶺山

真言宗

松嶺寺

高壺石

但田寺家無之

阿弥陀堂

屋敷御支配地ニ而ハ無之候、

右式行当寺格護

右者由来不相知候、右寺諏方大明神掃除仕候者格護仕

右寛保二戊五月書出、

候而罷居候、

高江

一 惣鎮守諏方大明神

神体鏡

一 鎮守權現

神体鏡

一 志那尾大明神

神体木像

一 熊野三所權現

神体木像

一 宝満山王

神体幣

右五社高江村

一 諏方大明神

神体鏡

一 柳串大明神

神体柳串

一 秋葉權現

神体石像

右三社久見崎村

一 □ 自在天神

神体木像

一 □ 之神

神体石像

右二社寄田村

□ 三ヶ寺

松山寺

長崎寺

右寺社方御修甫所

江音寺

右所修甫

右文化十一 戌十二月書出、

一 薩摩郡薩摩太郎忠友此人居城ハ、平佐の内敷、是 忠久公の時居城せ

しむ也、其本は平姓頼娃郡司三郎忠長か息男六郎忠真

か子也、薩摩の郡本地頭太郎忠友と号す、建久八年内

裏大番の御触にも此人なり、

亮洲随筆

平佐

高八千式百拾式石余

狩夫六拾式人

御居城記

一 碓山城ハ 太守貞久公暫被成御座候歟、其後 師久公

御子孫城地也、

○ 曆応二年、右城江（雖カ）凶徒難寄来新田八幡山より妙有之、

終ニ凶徒等打負引退候由、

○ 文和四年凶徒寄来、一日一夜御合戦、 師久公三ヶ所

被負御手候、

4

天正十五年四月廿八日、平佐城 太閤様より御責被成候、其節之地頭桂神祇殿籠城、寄手之大将小出大隅守

殿御舍弟、<sup>⑨ナシ</sup>〔脇〕大将役九鬼八郎殿を我等祖父原田帶刀

弓を以右之八郎殿を射申候折節、太閤御方江相図之具

聞得申候故、其より則双方和談御座候、其砌大隅守殿

家老佐々木鞍助殿・佐々<sup>⑨ナシ</sup>〔木〕志賀丞殿を以帶刀被召寄、

大隅守殿於御前承候者、八郎殿<sup>⑨承</sup>仕候者ハ何番目之矢ニ

而候哉<sup>⑨九</sup>与被仰候付、八番目之矢ニ而御座候由為申上由

候、其日矢<sup>⑨九</sup>筋射出申候而、九人射臥申候矢之内八番

目ニ而候故、右之返答申上刻御暇仕候由承置候、任御

尋書付如斯御座候、此段日帳書留置為申儀ニ御座候、

以上、

丑<sup>⑨九月廿六日</sup>〔五月廿三日〕

原田市兵衛

隈之城

御暖衆中

〔本文書ハ一田記雜録後編二二二八九号文書トホボ同文ナルベシ〕

祭日九月十九日

〔勸請年曆不詳〕

右由来不知

靈八幡

座主屋布高一斗八升余 但御支配地

祝子屋布高四石余

供田高五石

祭米壹石七斗余

祭日八月晦日

右神者北郷一雲<sup>⑨時久</sup>嫡子次郎相久死去以後、一雲庄内へ

被指置候、其後北郷加賀慶長廿年六月平佐へ被崇候、

森荒神

祭日霜月廿八日

祭米貳斗

右神由来不知

諏方大明神

祭米壹斗五升

祭日七月廿三日

右由来不知

平佐  
天神

平佐

稻荷大明神

宗廟

〔真ハ朱書ナリ〕  
薩城ヨリ西ニ去十二里

座主屋布高九斗余 但御支配地

祝子屋布高六斗余 但御支配地

供田高五石壹斗余 〔神領高五石領主寄附〕

座主屋布高四斗余 但御支配地

祭米壹斗五升

祭日九月廿五日

右神由来不知

矢房大明神

祭日霜月十五日

祭米五升

右神根元不知

歳之宮大明神

祭日霜月初丑日

祭米壹斗

右由来不知

権現

祭日九月廿九日

祭米壹斗五升

右神根元不知

白波大明神

祭日

祭米壹斗五升

右神根元不知

久木原大明神

祭日霜月廿七日

祭米壹斗五升

右由来不知

諏方大明神

祭日七月廿八日

祭米壹斗五升

右根元不知

権現

祭日霜月廿七日

祭米壹斗

右根元不知

山王

祭日霜月廿七日

祭米五升

右根元不知

以上神社仏閣帳

兼喜大明神

祭神北郷常陸介相久靈、神領高五石領主寄附、勸請

年曆伝記日州至之城正一位兼喜大明神之社記詳也、

右神社考

薩摩郡平佐郷

平佐  
白羽大明神 薩城ヨリ西ニ去コト十二里

祭神

火雷神

一三代実録、薩摩国貞観二年三月廿日庚午、從五位下白

羽火雷神、

一神代卷一書曰、所謂八雷者在首曰大雷ウケノカミ在胸曰火雷ホノカミ云々、

一祭祀十一月三日

一祭米一斗

領主北郷家調進

祠官  
野崎大膳

右神社撰集

勸請年曆不詳

神社考

平佐

一諏方大明神

一大満天神(天)

一八房大明神

一小長崎権現

一諏方大明神

一湯沢津権現

一妙見

一霧島権現

一諏方大明神

一赤目大明神

一天満天神

一諏方大明神

一鍋倉大明神

一諏方大明神

一山之神

一荒神

一惠美須

一年之宮

一鎮守

一久木原大明神

一山王

一諏方大明神

一上村権現

一山王

一山王

一荒神

一生神大明神

一天満天神

一下原大明神

一天満天神

右神社考

宗廟  
一稻荷大明神

倉稻魂命・大山祇女・土祖神・田中社・四大神勸請

之由申伝候、

一兼喜大権現

北郷次郎相久有故崇若宮八幡、元和年間勸請、

一森荒神

土祖神・澳津彦命・澳津姫命、三神勸請之由申伝候、

一諏方大明神

健南方命勸請之由申伝候、

一天満天神

菅丞相中将殿・吉祥女勸請之由、

一白羽大明神

白羽火雷命勸請之由申伝候、

一梁月寺 菩提所 慶長年間開基

一平等寺 祈願所 右同断

一青蓮寺

元和年間開基、本号称名院<sup>二</sup>而候处、遊行三拾七世

廻国之節青蓮寺と寺号被相改、相州藤沢山清浄光明

寺直末寺与罷成候、

一梅真寺

万治年間開基 梁月寺末

右之通御座候、以上、

文政五

平佐役人

午三月

内藤仲左衛門

平佐

長照山

菩提所起宗派  
梁月寺

高四拾五石余

右者北郷加賀慶長元年八月自庄内移、以後北郷（時久）一雲入

道法名為月庭梁新庵主菩提建立也、開山香山和尚、都

之城龍峰寺末寺也、

梁月寺塔頭

月桂院

知行十五石御支配地也、

右神社仏閣帳

都之城龍峰寺末  
梁月寺

開山龍峰寺六世香山梵桂、寺地三反三セ式拾式步御免

地、

高四拾五石壹斗九合領主寄附、

右寛保二戊五月申出、

右八北郷加賀守三久慶長元年丙申八月從庄内移、已後建立也、

平佐  
愛徳山 祈願所三宝院派  
平等寺 和合院

青蓮院協寺  
宝樹院

高三拾式石

屋敷高五斗御支配地

屋敷高壹石余 御支配地也、

右神社仏閣帳

右者北郷加賀慶長元年八月從庄内移、以後為祈願所建立也、開山者庄内高城小山寺清覚和尚、于今十四代也、

藤沢山末  
青蓮寺

右平等寺延宝三年卯八月炎上有之云々、

開山覚阿弥代草創常宿共

右神社仏閣帳

一境内横三十間青蓮寺圍敷山二而候、

大乘院末

平等寺

内除地横廿五間年貢高拾三石六斗壹合之内寺地二而候、

一年貢高拾三石六斗壹合寺領

開山磐海

右元禄十五午四月申出、

高三拾壹石九斗領主寄附、寺地式反八畦拾式步御免地、

寺家元文辰十月焼失、其後造立、

平佐  
一稻荷大明神 格護  
平等寺

右寛保二戊五月申出、

高五石壹斗五升五合

平佐

池涼山

時宗  
青蓮寺

右寛保二戊五月書出、

屋敷高壹斗三升但御支配地

知行拾三石余

稻荷大明神

尊体無御座候、但正体鏡

青蓮寺脇寺  
宝樹院

倉稻魂命 大山祇女 土祖神 田中社 四大神

屋敷高五斗

右五社勸請之由申伝候、

右神社仏閣帳

一従古来平佐江安置有之候、然処北郷加賀守三久文祿四年乙未八月庄内より平佐へ罷移候、以後宮造相改宗廟

一開基年曆青蓮寺同断

と崇敬勸請之由、年月等不知、

一大担越同人

一社地境内立十間横四間社南向平地、

一本尊阿弥陀木像高サ壹尺六寸惠心之作

一高五石 祭米として領主より寄附、

一年貢高四斗三升八合

一長刀 一振 新身

右元祿十五年四月申出、

享保三戌年北郷宗次郎久慶寄進、

平佐

右文化十一 戌十二月書出、

宝巖寺

屋敷高壹斗五升但御支配地

白羽大明神 尊体有之候、

知行十石

白羽火雷神

右寺由来不知

勸請年間不知

久木山

龍興寺

一社地境内立拾壹間横拾五間社西向

屋敷高式斗式升余 御支配地

一祭米壹斗 領主寄付

知行三石

右文化十一 戌十二月書出、

右由来不知

普賢院

屋敷高八斗七升 御支配地

右由来不知

右神社仏閣帳

平佐領分種脇中村戸田  
観音

右渋谷家崇敬之本尊ニ而候由、寛保三年  
御参詣有之候、  
於(宗信母)嘉久様

右文化十一 戌十二月申出、

祭神

倉稻魂命

十一月十日正祭

祭料三斗五升

祭料九升 号花飯

一当社勧請之年曆不詳

社職  
鮫島助之進

右神社考

平佐 寺地改

平等寺

真言大乘院末御免地  
高三拾壹石寺社方合力

宝嚴寺

平等院末領主高之内

青蓮寺

時宗藤沢山末右同

梁月寺

曹洞都城竜峰寺末御免地  
高四拾五石寺社方合力

梅真寺

梁月寺末領主高之内

神社仏閣帳

飯富大明神

宗廟

祭日霜月十日

但衆力之祭也、

右神由来不知、所中無寺、

文化十一 戌十二月申出、  
一 祭米三斗五升

御代官所ヨリ手形を以申受候、

(伊佐方)  
薩摩郡山崎郷

飯富大明神

薩城より西北ニ去事拾里

一 寺地改

養安寺曹洞宮之城大円寺末

宮之城大円寺末  
養安寺

御免地

無高

寺社方合力

山崎 末社

一 稻荷大明神

一 愛宕

一 天満天神

一 惠美須

一 飯富大明神

一 天子大明神

一 紫尾権現

一 諏方大明神

一 紫尾大明神

一 若宮八幡

一 山之神

一 山之神

一 山之神

一 諏方大明神

一 紫尾権現

一 山之神

一 現王大明神

一 天満天神

一 山之神

一 山之神

一 山之神

一 山之神

一 現王大明神

一 井元之口

一 山之神

一 山之神

一 山之神

一 飯富大明神

一 諏方大明神

祭神 御食津神

一 諏方大明神

一 若宮

一 稻留大明神

一 山之神

祭神

一 石神大明神

一 雅産靈命

一 鎮守

一 稲飯命

一 飯留

一 祝霧島

一 山之神

右神社考

文政十亥年再撰方江書出之内

山崎城 地頭飯屋より子之方四町四拾九間程

右古城上古ハ大前氏支配城と云々、天正十五年殿下

西征、五月十八日泰平寺を発して平佐城ニ入り、又

川内川を溯て当城に入り、地頭野村良綱殿下留事三

日、此時左衛門督歳久主宮之城に在り、病と称して

来謁せず、京軍潜ニ諏方の原に至り宮之城を窺ふ、

歳久主兵士覺て追ふ、牛尾渡りニ至り二人を殺して

遣候、既にして歳久主人をして導とし、九尾の嶮岨

を越て鶴田に至る云々、

地頭系図

是ヨリ上世并

年間不知

野村美作守利綱

野村美作守良綱

一当社勸請之年曆不詳

祠官

丸目伊予

一分地外城伊佐郡祁答院内佐志、是宮之城より分地也、  
只今は島津伊賀領知之、

一妙見社

一諏方大明神

一秋良大明神

一霧島宮

一水天

一鎮守

一北山明神

一霧島宮

一山王

一霧島宮

佐志

高三千四百四拾五石余

右神社考

狩夫百五拾三人

佐志

松尾山

淨菩提院

大乘院末

興全寺

寺地改  
興全寺

真言大乘院末御免地  
高壺石寺社方合力

開山越前坊琳春と申伝候、  
高壺石九斗八升四合

伊佐郡佐志郷

領主より寄付

阿字賀大明神

薩城より北ニ去事拾壹里

寺屋敷壺反六畦

祭神不詳

但万治二年亥五月御支配之節為勅願所之由依申訳

二月二日

御免地ニ被仰付、御支配所より目録相渡り居候、

一祭料六斗 領主

米三石

領主より為祈禱料年々相渡り候、

一当寺者頼朝公之御代御建立ニ申伝候、永仁五年伏見院

御代勅願之由共申伝候、

一心岳(歳久)良空大禪伯御牌

右所中より奉安置候、

一祠堂錢拾貳貫文余

右先師代被付置候、

右天保十三寅十一月書出、

阿字賀大明神

座神三体

但木像、本地弥陀・薬師・観音と申伝候、

祭米六斗ツ、年々領主より相渡候、

右文化十一 戌十二月書出、

黒木

高六百四拾七石余

狩夫五拾壺人

黒木  
市之大王 宗廟

祭日十一月八日

右社家屋敷御支配地也、

右神社仏閣帳

大王権現 薩城より西北ニ去九里半

祭神不詳

十一月八日祭

一祭料貳斗 領主

一当社勸請年間由緒等不詳、寛文二年寅炎上、同三卯年

島津豊前(久保)久武建立、

祠官  
元山右近

末社

一諏方両大明神 一天神宮

祭料四斗領主 祭料壹斗領主

小社之内  
一五郎王 一妙見

右同  
一矢房 同壹升

祭米壹升 一天心

一若宮八幡 一山王

神領高六石領主 祭米壹升

右神社考

大王権現 神体木像

本地弥陀 薬師 観音

当社寛文二年壬寅十月十五日宝殿・舞殿共焼失二而、

其後次郎三郎久武代造営云々、

文化十一年戌十二月書出、

黒木  
福聚山

福昌寺末  
不借院

右者桜島玉東庵廃寺二付、黒木江建立仕度旨、元禄

十一年寅十二月願御免、左候而、不借院と宝永七年

寅九月依願改号御免有之、

一寺領高拾五石 領主寄附

一開山福昌寺卅九世愚海

右寛保二戊五月書出、

黒木 寺地改

円明院 真言宗大乘院末御免地高無之寺社方合力

永源寺 曹洞福昌寺末切明地高拾五石寺社方合力

名勝考  
伊佐郡黒木郷南方村

○長江瀧 源黒木嶽より出て大村郷中津川を経佐志村に  
注く、高サ廿壹間三尺余、横幅八間許、

樋脇 寺地改

瑠璃光寺 真言一乘院末御免地  
高三石寺社方合力

栄原寺 瑠璃光寺末石地

玉淵寺 曹洞福昌寺末御免地  
高三石寺社方合力

随泉寺 右同末石地

玄豊寺 川辺宝福寺末御免地

天福寺 平佐梁月寺末石地

清敷

延宝九年酉四月廿二日、樋脇と改らせる、

樋脇  
明宝山

福昌寺末  
玉淵寺

高三石

一花心琴月大庵主 御牌

右玉淵寺清敷代ニ者慈光寺と唱申候、其節諸衆中より菩提所ニ尊牌無之候得者拝申儀難成候付、慈光寺より福昌寺江相付申出、福昌三十世(マ)天室(マ)より御老中迄申出奉安置候由、

一樋脇之儀前方ハ清敷と申候而浦之名を為府、然処ニ万治年間入来院殿依願、清敷之内浦之名添田村を分而入来院家之私領と成し号入来、此故衆中者移塔之原村而為府、此時菩提所慈光寺茂同前移塔之原村、其後入来ニ慈光寺と申寺再興被成候付、寛文三年福昌三十一世嶺室勸請為開山、明宝山玉淵寺と改名被仰付候、

臥龍山 金藏院(密)

一乘院末  
瑠璃光寺

高三石

建立開基施主不知

開山快珍律師と申伝候、

右快珍ハ肥後之国高瀬談議所真俗院江一往住職ニ而、其後当国へ下向、寛正・応仁之比ニ而も候哉開基被成候半、分明ニハ不相知、然共文明六年甲午南呂一日遷化と相見得申候、往昔涉谷家大身之節者瑠璃光寺も大地ニ而、檀林所灌頂改(マ)ニ而御座候由申伝候、一当寺茂万治年間添田村入来院家之私領と成候節、塔之原村ニ引移有之候、

樋脇  
惣鎮守  
一之宮大明神 木像陽神陰神二体

右者清敷代ニハ大宮大明神惣鎮守之処、万治年間添田村私領と成候時分、右一之宮ハ本塔之原村一名之雖為鎮守、樋脇一郷之惣鎮守と成候、

一祭米五斗式升五合 毎年從御物被成下候、  
一高壺石三斗

右清敷代大宮大明神惣鎮守之時より不相替被召付置候、

以上都而寛保二戊五月書出、

薩摩郡樋脇郷

一之宮大明神 薩城より北ニ去事拾里

祭神

大物主神 初大宮大明神と称、

二月二日 祭

十一月二日

神領高壺石三斗

祭料五斗二升五合

一当社勧請之年曆不詳

溝口新太夫

右神社考

樋脇末社

一天子大明神

一諏方大明神

一天神

一山之神

一大明神

一山之神

一熊野三所大権現

一天子

一弁才天

一若宮大明神

一鎮守宮

一山之神

一諏方大明神

一巖島大明神

一鎮守

一鎮守

一山之神

一山之神

一字賀神

一山之神

一山之神

一山之神

一鎮守

右神社考

一弁才天

一山之神

一小弓大明神

一山之神

一天神宮

一鎮守

一鎮守

一鎮守

一諏方大明神

一権現

一九玉大明神

一鎮守

一鎮守

一山之神

一天道神

一人来院ハ入来又五郎頼宗、是 忠久侯の時領主也、先

祖不詳、上古入来氏寄附水田於新田宮、其記、長和二年十二月廿一日入来院本主藤原朝臣頼存施入とあり、

頼宗は其苗裔也、 島津三代久経侯の時寛元年中、平

洪谷平次公重、弘安四年辛巳異国兵船筑前津襲来る、此時出陣し挑み戦、公重并弟三都而四人戦死すと矣、

亮洲隨筆

入来

高五千五百八拾六石余

狩夫式百四拾六人

入来 寺地改

松林寺

真言一乘院末御免地  
高拾九石寺社方合力

延命院

松林寺末石地

定永寺

臨濟志布志大慈寺末石地

昌了軒

浄土不断光院末石地

寿昌寺

曹洞福昌寺末御免地  
高七拾石寺社方合力

慈光寺 右同末石地

道昌寺 妙谷寺末石地

固心院 寿昌寺末石地

入来  
副田村之内小園領主飯屋より子之方ニ当り六町  
重来明神

社未之方ニ向左右後山、

祭神入来院又六重時靈

一神鏡式面

内壺面差渡壺尺壺寸

中神体座像鑄出高サ三寸

右裏書

元和七年辛酉九月廿三日

奉造立日吉大明神

御神体大願主平氏女、右意趣者信心檀那御息災延命  
御子孫繁昌吉祥如意故也、

座主快栄

金細工

東郷南衛門尉重親

仏師

田口五郎左衛門尉親昌

代官

田中市左衛門尉家良

壹面差渡八寸ニ神体

座像鑄出高サ五寸

一 祭米四升

一 高五石五斗三升三合三勺四才

右領主より寄付

一 善神王左右石祠木像冠裝束

11 宗原(源) 宣旨

靈社 薩州入来院村

今宜授

重来明神号

右依

今上皇帝 聖勅 神宣

御表之神 璽如件、

承応四年二月吉曜日

神部壹岐宿祢判

神祇道管領長上卜部朝臣判(兼起)

12

誰承(維)承応四年歲次乙未二月廿九日、吉日良辰乎揶定天、

高天原仁神留坐須皇親神漏岐神漏美乃命乎以天、掛毛

畏 薩州入来院村靈社乃広前仁、恐美恐美毛申佐久、

夫当社波武勇不尋常奇瑞乃靈驗有仁依天、爰仁入来院

石見守平重頼篤凝精誠志恭久抽信心天、神道管領長卜

部朝臣兼起仁告天神号乎重来明神授介奉留、夫吾神道

波天兒屋根尊乃相承宗源神道乎執行之稱辞竟奉留、此

杖(愁)乎平介久安介久聞食天弥重頼寿命長遠武運長久子孫

繁昌乃冥助乎加給比天常盤堅盤一夜乃守日乃護幸賜陪

止申須、辞別仁申佐久、今度宗源宣旨乎納奉利欲喜賜

覽、然上波愛愍納受乎垂給天無咎無崇護賜陪止、恐美

恐美毛申須、

寛文十二年壬子四月廿三日

当座主

快運

右者入来院家拾五代又六重時事、慶長五年子春より在

伏見仕居候処、同年秋上方相乱、九月十五日関ヶ原御

合戦之節 義弘公御供仕罷立候処、御一戦相破れ御合

戦及御難儀、重時事残兵三拾人余召列余多之敵陣打破

申候処、家来共追々戦死仕、家来入来院彦右衛門・東郷清太・村尾善兵衛・大迫弥四郎・前田三郎次郎・中間弥四郎六人ニ相成候ニ付、右之者共召列帰国ニ差向候処、同廿三日於途中敵ニ出合主従七人戦死仕、其後奇瑞之儀御座候付、伯耆守重高代靈を日吉神社と崇め、湯之尾之内荒瀬と申所江宮建立仕、其後入来私領被返下候節、元和七年辛酉九月廿三日当分之地江遷座仕候、左様候而承応四年石見守重頼代久広上京之節、神号之儀を吉田殿へ申入候処、重来神社と相授、右鎮札并重来神社之額翌年之春到来仕、久広入来江被差越、同四月十三日吉日を以二夜一日祭事執行有之、鎮札等奉納有之候、

## 棟札写

曾祖父又六重時者当家正統十五世之主也、慶長五年庚子九月廿三日於美濃国関ヶ原遂戦死畢、有其靈示現妙之事、因茲祖父伯耆前司重国相攸於入来院副田村建立（新）親社崇置其靈、称雅号於日吉、然而卜毛神祇管領之神号未慊吾心、是歲承応第四即明曆元年也乙未春二月鹿兒島諏

訪神主正六位宇宿若狭守久広有奉（光久）太守公之命赴京師之使宜、憑久広請神号於神道管領之長上脱之卜部朝臣兼起、許諸号重来明神作為鎮札以賜焉、且復請依卜部朝臣兼（起）從写其額兼（起）從亦諸書之、以重来神社件神器久広受之帶之来格而附与吾、於茲撰吉日良辰所以寄進也、仰冀神威与山高当家根与水長、子孫繁茂武運長久（垂）無窮寄進志在于此而已矣、

明曆元年乙未二月吉日

入来院石見守重頼敬白

## 額裏書

当社明神者洪谷氏之正嫡第十五世之後孫也、慶長庚子九月亥日埋体於濃州之戰場、拳名於本朝之勇士也、于茲嗣子重国雖崇其靈而建新社、未神社之官号我將不快心、幸諷訪神主宇宿氏正六位久広有故蒙命而赴于京之次請神号於神官之長兼起、許諡重来明神、以使兼（起）從書之額也、久広即命工諸版札以備神明之宝前、仰冀威光齊与天明子孫同与地久也、

明曆乙未二月吉日

入来院石見守重頼敬白

15

棟札

東郷内膳平重増  
寺尾内匠平重長

明神重来者旧号入来院又六重時当家十五代之領君也、  
慶長庚子年蒙君命使太府而將歸時於濃州関ヶ原為国捨  
命也、、  
、  
、  
略ス、

享保二十乙卯二月廿四日

現寿昌田良叟

謹誌

入来  
浦之名村之内小中野領主飯屋より辰巳之方ニ当り拾壹丁  
一若宮明神

社戌之方ニ向惣廻山

神体木像式体

内壺体高サ式尺五寸

壺体立像高サ式尺

一祭米三斗八升 領主より寄附

一善神王 石社

16

奉再興若宮大明神御社檀一字

右志趣者天清地泰風而知時五穀豐饒郡内平均、專祈  
大檀越平朝臣重嗣息男千代五郎丸武運長久、子孫繁  
昌、息災延命之故也、夫以大明神者当家累代祖父也、  
泰為令守護吾家後胤飯現明神当山垂跡給、依星霜久  
宝殿破壊、抽丹誠奉新造社檀者也、怨敵退他方慶集  
家門至祝云々、  
弘治三年丁巳大呂五日

東郷美作守平朝臣

重前

山口筑前守平朝臣

重秋

祝是枝讀守藤原実光・同名助九郎源貞秋

入来  
右者入来院三代平次公重代、蒙古之賊船筑前国江襲来  
候節、公重弟平四郎有重事、兄之軍代として弟平五郎  
致重・四郎太郎重尚以下召列罷立、弘安四年己六月廿  
九日於筑前国博多海上兄弟三人共戰死仕候、依之有重  
靈を若宮と崇申候由、最初矢壺手射放申候而、初矢落  
候場所江寺建立いたし菩提を弔候得、乙矢落候場所江

社建立致し影像安置仕候得と申置、遂ニ戦死仕候故、任遺言初矢之所江者慈光寺則建立仕り、乙矢之地江当社建立為仕之由申伝候、

右神社考

写其額、兼從<sup>(起)</sup>又諾書之、以重来神社件神器久広受帶之、来格而附与乎重国<sup>(于九)</sup>、於茲乎撰吉日良辰所以鎮座也、

<sup>社職</sup>溝口孫太夫

日吉 入来郷

重来神社

薩摩郡入来郷

祭神

大宮大明神

入来院又六郎重時靈

祭神

九月廿四日 祭

大物主命

神領高四石五斗

十一月三日

抑当社ハ入来院石見守平重頼之曾祖父又六郎重時之靈

五月九日

祭

を崇、重時ハ当家之正統拾五世の孫也、慶長庚子九月

神領高壹石三斗

廿三日於美濃国関ヶ原遂戦死畢、有其靈示現奇妙の事、

祭料五斗二升五合

因茲重頼祖父伯耆前司重国相攸於入来院副田村建立新

一当社勸請之年曆不詳

社崇置其靈、称雖号於日吉、然而非神祇管領之神号未

<sup>社職</sup>是枝源太夫

嫌重国心、承応第四<sup>(即明暦元年也)</sup>乙未之春二月、鹿兒島諏方

右神社考

神主正六位宇宿若狭守藤原久広有奉

<sup>(光久)</sup>太守命趣京師之

便宜、憑久広請神号於神道管領長上下部朝臣兼起、許

入来 末社

諾号重来明神作為鎮札以賜焉、且復請依卜部朝臣兼起

一鷹子権現

一妙見社

- 一 子馬大明神
- 一 今熊權現
- 一 重來大明神
- 一 赤城大明神
- 一 広瀬大明神
- 一 鎮守
- 一 知高八社
- 一 山之神
- 一 近岡八社
- 一 祝霧島
- 一 知高八社
- 一 山之神
- 一 鷹巢大明神
- 一 知高八社
- 一 山之神
- 一 比叡山王
- 一 鎮守
- 一 早馬森
- 一 山之神
- 一 山之神
- 一 弁才天
- 一 山之神
- 一 山之神
- 一 山王二拾一社
- 一 諏方大明神
- 一 熊野權現
- 一 愛宕
- 一 蛭見大明神
- 一 天満天神
- 一 鍛冶山權現
- 一 天神
- 一 諏方大明神
- 一 逆子明神
- 一 大梵天王

- 一 山王
- 一 諏方大明神
- 一 大将軍
- 一 諏方大明神
- 一 稲荷大明神
- 一 黒尾大明神
- 右神社考

入来  
 万寿山  
 関山派  
 定永寺

高拾二石七斗 寺地籠從石州相付  
 右之寺前名者西福寺、開山者鎌倉円光寺(意)仏光国師を勸請也、開基者石門和尚即国師之弟子也、応永八年辛巳十一月朔日逝去也、入来院十六代扇皇定永大禪定門、  
〔以下紙一枚切レ候半与見得候卜有之〕

〔前キル、歟卜有之〕

高拾五石 寺地籠從石州相付

右者寺地前二禪寺之由候、入来院十五代加賀守奥方寺之時ハ英淳庵と申候、左候而、入来院領分替之時者平田太郎左衛門為菩提所天心寺と申候、其後伯州領分罷(入来院重高)成候時、御懷蓮昌様御寺ニ罷成候、然処ニ彼御寺前ニ相立候故、伯州奥方寛永十年十月逝去、号然芳昌了大

姉為寺造立、同十四年丁丑八月不断光院前往純誓上人  
開基也、

右神社仏閣帳

法智山

高七石 寺地籠 從石州相付

曹洞宗心岩派  
英忠寺

右前者宗英寺、開山天左和尚也、入来院代々先祖之寺  
也、(入来院重豐寺)節心英忠大姉位牌安置候而英忠寺と改名、

右神社仏閣帳

然芳山

高六拾石 從石州相付

浄土宗  
昌了寺

右勸請開山者神子和尚、開基者通峰和尚也、自古有之  
寺ニ而候、渋谷先祖入来院へ初地入より菩提所ニ而候  
事、

右神社仏閣帳

一開山純誓性不知、生国肥前、(姓)

一寺<sup>(マ)</sup>立寛永十二乙亥十月、同十九壬午八月十四日遷化、

龍遊山

福昌寺末  
壽昌寺

開山者肥前国臨濟宗万寿寺開山神子和尚也、宝治年  
中渋谷一族五郎禪師定心重直薩摩下向之節、神子和  
尚請于入来院而建立於壽昌寺以為開山、昔日者万寿  
寺末寺ニ而候得共中古及廢壞、然処入来院先祖又六  
重時慶長年中ニ建立、福昌寺先師勸請天海而為中興  
開山、

一高七拾石八斗式升六合四勺内式拾八石三斗三升四勺且那方へ未ノ年より借入ニ而候、  
又六重時寄付、

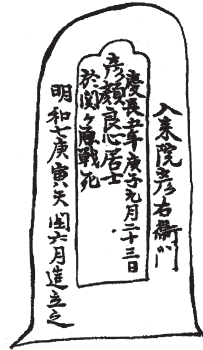
右寛保二戌五月書出、

大通山

曹洞宗心岩派  
蓮昌寺

高三拾五石 寺地込從石州相付  
開山妙谷寺先師聖院和尚也、前伯州懷蓮昌様御牌被  
立置候、即 竜伯様御嫡女也、今ニ伯州位牌(入来院重高)も立、  
右神社仏閣帳

久仰入来温泉として差越候節、諸所巡見の折寿昌寺に行て写ス、



右自然石ナリ、

梅玉明心大姉

右年号月日ナシ、

浄円妙清大姉

寛永、甲申八月十八日

右梅玉ハ寺内高見ニあり、

浄円ハ門外にあり、是には当領主定経より石灯炉まで

も追献ありて尊敬の方ニ見ゆ、

一性光院殿覚岩了心大居士

寛政十二庚申三月十五日

右墓側石灯炉あり、  
前面

市田壬生源義宣建

性光院殿吾姻家也、寛政十二年三月十五日以病卒於国都、春秋十七歳、越廿二日葬於入来寿昌寺先塋、義宣以姻家之故至入来管葬事、謹建石灯台二座於墓側以表追慕之意云、  
源義宣識

入来之内大通山蓮昌寺久仰巡見して左之通写し置、

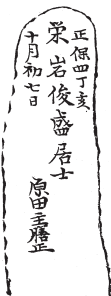
大円月鑑庵主

正保四年丁亥八月十八日

右五輪の石塔にて少し高ミにあり、

虚窓俊室大姉

延宝四年九月十四日



正保四丁亥 一翁清心居 十月初七日

藤田番右衛門 (秀盛)

正保四丁亥  
一庵道帰居士  
十月初七日

河崎佐左衛門  
(助魁)

松山宗賢居士

川添左兵衛  
(重次)

此一ツ文字シレス  
然共時代ナト同様ニ  
見ユ

右五ツ平地の印塔(卯カ)にあり、

入来  
金地山

坊津一乘院末  
松林寺

高拾四石三升六合四勺六才

領主寄附 内七石  升四合三勺八才

且那方へ未ノ年より借入ニ而候、

諏訪社格護

祭米高五石領主より寄付

右寛保二戊五月書出、

大宮大明神 社南向平地

正体木像廿壹体冠装束

勸請年月等不知

一祭米八斗 領主より年々相渡

一善神王両体 木像冠装束

右之小倉御座候、

一祁答院郡司又太郎大前姓道秀は則 忠久侯の時令居城也、其本大前姓より出、上古より祁答院郡司職を勤む、先祖康治之頃時吉大前氏道助か所領祁答院の内中津川名讓渡すと云旧記ある也、

祁答院吉岡三郎重真(マ)は則 島津三代久経侯の時宝治年中從鎌倉薩州に下向して、祁答院郡司職を勤む、其本ハ平姓桓武帝九代の後胤秩父の冠者武綱か末子小机六郎基家、三代洪谷庄司重国ノ孫子東郷早川太郎重実(実重カ)次弟也、重真(マ)より二代重尚、三代則至十三代河内守良重、島津薩摩守実久之聳と為也、永禄九年良重は為妻女被殺矣、祁答院家及断絶也、一族庶流ハ久富木・大村・山崎・蘭牟田に在也、

亮洲随筆

蘭牟田

高千八百六拾石余

狩夫四拾六人

伊佐郡 蘭牟田郷

牟田  
日吉山王 薩城より西北之間ニ去事八里

祭神

江州日吉ニ同

正月朔日 祭 八月朔日 祭 十一月初申 祭

一 神領高拾三石六斗式升 領主

一 当社勸請之年曆不詳

祠官

押領司多宮

右神社考

蘭牟田郷

諏方大明神

祭神前ニ同

七月廿八日祭

神領高拾二石壹斗七升 領主

一 当社勸請之年曆不詳

社職

税所甚太夫

末社

一 白髭大明神 一 新諏方大明神

一 羽黒権現 一 鹿島大明神

一 今宮大明神 一 荒神

一 天満天神 一 稻荷大明神

一 愛宕 一 諏方大明神

一 霧島権現 一 早馬権現

一 天満天神

右神社考

17

蘭牟田 寺地改

普賢院 真言大乘院未御免地

花山寺 高拾石寺社方合力

大翁寺 曹洞宗福昌寺未御免地

竹林山 右同末

蘭牟田 大乘院末 普賢院

開山大乘院先師俊盛

永祿九年丙寅三月十一日遷化

開基施主樺山家九代安芸守善久入道玄佐

一 永祿四年辛酉十一月十六日善久居城隅州長浜堅ヒ利之城ニ右寺建立ニ而候、但蘭牟田へハ慶長年中ニ引移シ為申之由候、年間も然々ハ不相知候、

一 摩利支天木像長三寸立像弘法大師作之由申伝候、

一 愛宕 画像長貳尺四寸立像筆者不知、

一 飯綱 画像長貳尺貳寸白狐迄ニ筆者不知、

右三尊樺山先祖已來信仰被申、就中安芸守玄佐・同

子息兵部(忠助)太夫紹劍行兵術、依信心於所々戰場奇特為

有之靈仏之由申伝候、

一 寺地御免地

右元祿四未十二月書出、

蘭牟田  
弓木山

福昌寺末  
花巖寺

開山福昌寺十六世喜冠龍慶、俗姓樺山家七代安芸守

長久三男、天正元年癸酉八月十四日、無疾詠月則座

遷化、

一 開基樺山家十代(九)為助太郎忠副被遊 貴久公御開基、

向之島之内赤原三町五反被召付、弘治三年六月八日

造立、始之寺号十慶庵、後ニ忠副御道号花巖寺と改

名候、樺山家より貳町相付、合而寺領五町五反為有之由ニ候、蘭牟田へハ慶長年中ニ引移為申之由、年間然とハ不相知、

一 施主助太郎忠副道号花巖弓木上座 貴久公蒲生馬立

ニ御出陣之御供ニ而軍功無比類、于時弘治三年丁巳

四月十五日菱刈左馬權頭之剛陣ニ責入、數ヶ所之深

手を負、居城長浜ニ帰り、同廿八日ニ卒去ニ而御座

候、 貴久公蒲生より右卒去之段被聞召付、其日脇

元より被召御小船長浜ニ 御入、其夜之煙りを被遊

御覽、為忠副赤原(尾脫カ)を被召付候段家譜ニ見得候、

一 寺地御免地

右元祿四未十二月書出、

蘭牟田  
明道山

福昌寺末  
大翁寺

開山福昌寺十八世代賢守仲俗姓中俣氏、喜冠禪師之

嗣法ニ而候、天正十二年甲申二月十五日、於福昌寺

大衆を仏殿ニ集、涅槃之行事終り候而宝之間ニ安座

遷化、

一 開基施主樺山十一代兵部大輔忠助入道紹劍道号大翁

忠宏庵主、慶長十四己酉五月十三日卒去、

一当社勸請之年曆不詳

祠官

松永沓岐

一開基忠副・忠助之母儀ハ 貴久公(之)一服一姓之御姉ニ  
而道号通善周慶大姉、天正十八年雪月十六日卒去ニ  
付、忠助為慈母右寺建立候而、始之寺号慈母之御道

末社

号通善寺と申候、後ニ忠助菩提寺として忠助之御道

一諏方大明神

一妙見

号大翁寺と改名候、

一弓折大明神

一箭房大明神

一舎兄忠副戰死之後、忠助家督被申於所々被抽軍忠、

右神社考

從是 中納言(家久、忠恒)様出水表御通道之砌大翁寺へ被遊御入、

一大居神

宗廟

忠助位牌ニ御焼香御座候而難有仕合ニ候、

祭日 正月八日 九月三日

祈願所

吉祥寺

一摩尼山

高三石

寺地御免

因分正興寺末  
菩提所五山派

大心寺

大居神大明神 薩城より北ニ去事拾里半

一雲長山

高六石

寺地御竿不入

祭神内宮三体

右神社仏閣帳

天照皇太神 手力雄命  
万幡豊秋津姫

正月八日

祭

大村

寺地改

九月三日

吉祥寺

真言大乘院末御免地  
高三石寺社方合力

一祭料三斗五升

18

大応寺 臨濟国分正興寺末御免地  
高六石寺社方合力  
 龍盛寺 曹洞蒲生永興寺末石地

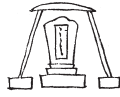
大村下手村の内 石塔あり、久仰入来へ湯治とし  
 て差越し、諸所巡見の折是を見て写し置、

良重寺殿樹蔭鉄公大禪定門

永祿九丙寅稔正月十五日逝

夫大禪定者往昔祁答院領主渋谷河内守平良重也、可惜  
 歴多星霜而塔石闕損矣、是故合当所之諸士並下手村・  
 上手村之助力、命石工而今新彫刻石塔一基以模自古破  
 塔矣、伏冀所中無難無災、無魔無障、時疾退散、五穀  
 豊饒所也、

維時享保十六辛亥天孟夏吉辰



高サ五尺位  
 笠石広畳半帖位  
 石柱石上屋ナリ

右石塔の左脇に多宝塔形の石塔式ツあり、

宗忠  
 妙幸  
 此二銘ナリ

又同シ右脇ニ常之坊主ノ墓形ニテニツあり、  
 良重、、、鶴三珍大和尚  
 中興重巖継大和尚

薩摩郡 中郷

諏方大明神 薩城より戌亥方ニ去事拾三里

祭神前ニ同

九月廿八日 祭

祭料壹斗七升五合

一当社勧請之年曆不詳

社職  
 坂元新左衛門

末社

熊野権現 神体木像三体

右神社考

諏方大明神 宗廟

祭日七月廿一日<sup>(八)</sup>

神体木像四体

祭米壹斗七升五合

右神社仏閣帳

松平山<sup>(林)</sup> 成就院

大乘院末  
宅満寺

勸請開山ニ而由緒不知

高壺石 寺地御免

大平山

菩提所  
伊集院広濟寺末  
安国寺

開山叟淨妙<sup>年間不知</sup>  
八月十七日示寂

寛保二<sup>戊</sup>五月書出左之通、  
曆応二年<sup>己卯</sup>創建

一足利尊氏祈願ニ而日本國中一國一ヶ寺建立之内薩州之

一ヶ寺也、

尊氏牌  
一等持院殿贈一品左相府仁山大居士

延文三年<sup>戊戌</sup>四月晦日薨

一高壺石

20

御<sup>口</sup>様  
一梅巖笑公庵主

一如庵妙幼大姉

元文八<sup>(マ)</sup>己亥正月十三日

右碑二基仏餉料無之、

神社仏閣帳  
一寺地竿御免 同  
一高壺石

享保六年<sup>(マ)</sup>己十二月書出  
一開創以來至現住独安十五世

中郷 寺地改

宅満寺 真言大乘院末御免地  
寺社方合力

安国寺 臨濟広濟寺末御免地  
高壺石寺社方合力

一東郷ハ在国司小太郎道氏斧淵と号す、 忠久侯の時居  
城せしむ也、其本ハ大前氏より出る、大前は橘諸完公<sup>(兄)</sup>  
の苗裔といふ、

洪谷太郎実重は島津三代 久経侯の時、宝治年中薩州  
ニ下向して東郷を領知す、<sup>(二代脱力)</sup>早川権守頼重、三代若狭守

重親、此時在国司斧淵氏不入手裡、重親化正体泉下より報恨深誓を成して廿五歳、葦毛の馬に乗り入定の土穴に懸入る也、其後親大明神と崇む、存生の日妻女懐妊あり、入定後五十日を過て平産す、男子也、是を庶子之棟梁に可立諸臣下議定せり、成長元服して下津留太郎次郎重持と号す、焉東郷十三代大和守重綱法号蜂月、永祿の比佐多家より東郷家に陥し入ると矣、下津留没落の後、島津圖書忠長為家臣、

亮洲随筆

名勝考  
薩摩郡東郷斧淵村

ツカサノ  
司野あり

同村

イナヒノ  
櫛野 今市比野村と云て榎脇郷に隸けり、

島津大膳私領

川内東郷  
諏方大明神

宗廟

祭日七月廿八日

「祭米志斗五升  
当社勸請年曆不詳」

座主 宗仁房

「斧淵村」  
神主 田中次郎左衛門  
「薩城ヨリ戌多ニ去  
拾二里」

新田八幡宮 自古勸請

祭日十月十五日

奉造立八幡宮社一字、、、大檀主藤原朝臣久憲公并女、

大施主息、、、承応二年癸巳九月吉日筆者盛良、

能野権現

彈正大弼久慶代勸請

祭日十一月十日

愛宕

彈正大弼久慶代勸請

祭日六月廿四日

新諏方大明神

彈正大弼久慶代勸請

祭日七月廿七日

松尾権現

祭日十一月一日

奉造立松尾権現宝殿一字、、、大檀那藤原朝臣久慶公  
并女、大施主息災、、、慶安二年己丑卯月吉日、大工

湯田甚左衛門、

一熊野權現

一伊勢天照太神宮

北野天神

一五社大明神

一松尾權現

祭日十一月六日

一熊野權現

一祇園權現

奉造立天滿天神宮一字、大檀主藤原朝臣久慶公并

一八幡宮

一霧島六所權現

女、大施主息災、正保四丁亥九月十六日、

一諏方大明神

一諏方大明神

紫尾權現

一紫尾三所權現

一諏方大明神

祭日十一月廿一日

一栗山大明神

一無刀山王

奉造立紫尾權現一字、趣書同前、承応三年甲午九月吉

一八幡宮

一鷹大明神

日 大膳亮久憲代再興、

一天神宮

一現王

祇園權現

一軍神

一幾田村宮

祭日六月十五日

一紫尾三所權現

一山之神

奉造立祇園權現宝殿一字、意趣書同前、承応三年甲午

一現王社

一若宮

十月吉日 大膳亮久憲代再興、

一荒人大明神

一天神

右神社仏閣帳

一戎宮

一現王

東郷 末社

一山之神二社

一山之神

一紫尾權現

一己房大明神

一現王

一八幡宮

一親大明神

一山之神五社

一妙見

一新諏方大明神

右神社考

一久玉大明神

一久玉大明神

祈願所

吉祥寺

高五拾石但鳥津大膳(久憲)私領より相付、

寺地御支配之地也、

右由来鳥津(常久)下総日置私領之時祈願所安養院、其後大

村へ召移、礼橋寺と申寺有之を祈願所ニ相定吉祥寺

と申候、其より川内東郷江召移、杉之山と申所へ寺

相立吉祥寺と申候、

寺地御支配也、  
諏方坊

高拾三石但鳥津大膳私領より相付、

右由来大村仁興寺と申寺へ罷居候、東郷へ召移諏方座

主ニ罷成、御諏方宮近所へ罷居候、

真言宗  
山本寺

高拾六石但鳥津大膳より相付、

右由来前ハ諏方坊と申候へ共、鳥津彈正東郷私領之時

分、大村山本寺より召移、則山本寺と申候、

明寺  
真言宗  
神光院

知行拾六石但鳥津大膳より相付、

寺地御支配之地也、

葉師院

吉祥寺隱居

高三石付觀音高拾三石

但鳥津大膳より相付、

寺地御支配也、

真言宗  
五社坊

高拾六石鳥津大膳より相付、

寺地御支配之地也、

真言宗  
熊野寺

高五拾石但鳥津大膳より相付、

寺地御支配之地也、

右由来熊野権現鳥津彈正奉勸請為座主召立候、

森蔵山  
時樂宗  
西前寺

寺地御支配之地、

阿弥陀江寄進高拾式石八斗

開山僧阿弥ヨリ当住但阿弥迄十五代

21

奉再興阿弥陀如来仏殿一字、、、薩摩州東郷有一字之  
精舎号西前寺者也、所令修造、、、大檀越藤原朝臣鳥  
津圖書頭忠長所生愛子等御息災、、、別而阿多右衛門

尉忠利・稻留掃部助長元・土持清右衛門尉昌綱・和泉

一年貢地高四斛五斗式升八合壹勺式才

勝左衛門尉保重息災、、、、爰当坊主僧阿弥陀仏、、、、

右元禄十五年午四月西前寺南山申出、

慶長四己亥曆如洗上旬二日、<sup>(姑)</sup>

大工 山下李右衛門

陽光山 重元寺 天沢寺

小工 上野李左衛門

右神社仏閣帳

来迎山 光明院 西前寺

延文六年辛丑三月大檀越渋谷薩摩守重信<sup>東郷領主</sup>、開山

右此寺之由来者渋谷家建立山号陽光山寺号重元寺、其以後島津<sup>(忠長)</sup>紹益領知之時号曇秀寺、下野守久元祚答院宮之城依領知、此寺臨濟宗罷成廿有余年本号重元寺、其後彈正大弼久慶丁領知之時、慈父為常久天沢芳春庵主令修造再興、因慈号天沢寺山号者前陽光山也、当住存利、宗派曹洞派也、<sup>(慈父)</sup>

僧阿万元和尚草創、開山以来当住迄十七世、

高五拾石

一本尊阿弥陀 安阿弥作証文有 立像

島津大膳相付也、

一脇土観音 勢至 右同作 立像

右神社仏閣帳

一境内除地 竖十八間横十六間

臨濟宗 山之坊

一境内田 竖十三間横十間

一同畠 竖十間横九間

高式石

一同同 竖十六間横八間

開山一岳

一同同 竖八間横六間

右神社仏閣帳

右四行斛地、

川内東郷之内  
〔南瀬カ〕  
村

妙円寺末  
藏六院

右開山者妙円廿二世奪叟全株大和尚、  
寺地御免地、

右元禄十丑閏二月書出、

東郷  
摩尼山 円寿院

大乘院末  
吉祥寺

陽光山

市来龍雲寺末  
天沢寺

不二山

福昌寺末  
香積寺

来迎山

天沢寺末  
龍虎寺

右元文二巳七月書出、

陽光山

龍雲寺末  
天沢寺

開基古代洪谷家建立号陽光山重元寺、寛永年間島津彈  
正大彌久慶領地之時、慈父為常久天沢芳春庵主令修造

再興、因茲号陽光山天沢寺、開山前永平一岳洞忍大和  
尚(貴久)而御座候、二世日高春重大中良等庵主御牌奉安置

候訳不知、

一(歲久)心岳良空大禪伯

寛永年間彈正久慶安置也、

一高五石

但延宝年間外城ニ罷成候節、御支配被仰付置候、島津

左衛門一所領之内者高五拾石ニ而御座候、

右寛保二戌五月書出、

摩尼山 円寿院

大乘院末  
吉祥寺

右島津下総殿大村私領之節祈願所吉祥寺、東郷領地

之節大村より寺号被引移、其節之中興開山快譽、

一高六石

但延宝年間外城ニ罷成候節、御支配被仰付置候、一所

領之内者高五拾石ニ而候、

東郷  
惣社  
諏方大明神

座主  
吉祥寺

祭米壹斗五升御物より被相渡候、

右明徳年間洪谷家再興之棟札有之、往古之建立不相知、

右寛保二戌五月書出、

吉祥寺

真言大乘院末御免地  
高六石寺社方合力

西前寺

時樂藤沢山末御免地

天沢寺

曹洞市来龍雲寺末  
御免地高五石寺社方合力

龍虎寺

天沢寺末石地

香積寺

福昌寺末御免地

東郷

神社仏閣調帳抜書

一 地頭仮屋

島津図書頭忠長入道紹益長男河内守忠倍舍弟下総守久

元領地之由候処、其後慶長十九より式拾有余年外城ニ

罷成、寛永十三年島津弾正大弼大村私領東郷江御繰替、

東郷拾ヶ村・日置・真幸、東郷之内山田村者町田出羽(忠尚)

守領主、

一 明暦丙申久慶(捐力)損館之後壹万石之内三千石上地ニ罷成、

二 渡・白男川山崎支配ニ成、山田村御養子久憲公私領

相加、東郷八ヶ村ヲ領ス、

一 久憲狂乱候哉、歳久公之御家被相逃、前太守三位中将

光久公御舍弟三郎右衛門尉忠朝公所相統、忠朝公長男

左衛門尉久光(竹)後号丹波下、右代御繰上ニ相成、延宝八年申

外城罷成り、夫より右仮屋地辰之方道法り九町五拾三

間、後延享年号当分之仮屋地ニ成ル、

一 鶴岡城斧淵村之内麓 廻り三拾五町拾五間程

一本丸 高三拾間程廻り百六拾式間程

右天正年間忠長入道紹益并息男河内守・下野守領地

之時居住、当分畠地三反程、四方山、地頭仮屋元よ

り卯之方六町程、

一 国見ヶ城

但遠看ヶ尾とも相唱候、

一 勝軍地藏 木仏馬乘

右島津大膳久憲御寄進、

一 二ノ丸

一 南ノ城

一 山崎城

一 高城

一 川原城

右小城四ヶ所惣廻り之内ニ有リ、

一 白岩口

大手口

一 石坂口

搦手口

一 山居口

一 池田口

一家吉口

一 谷之口

右城口六ヶ所城惣廻り之内ニ有リ、

一新城 地頭飯屋より子ノ方拾九町三拾五間程

右者天正十五丁亥年、島津図書頭忠長紹益一所隅州

依御練替東郷御安堵、長男河内守忠倍繼箕裘之処、

於東郷城内与<sup>本ノマコ</sup>狷館舍弟下野守久元有合相統、右三代

之内城内本丸并右新城原江構居宅、斧淵村・<sup>マコ</sup>海村・

宍野村・鳥丸村・藤川村・南瀬村・山田村、当分山

崎之内二渡村・白男川村・泊野村、石村領ス、

一原之城 一古城

右三ヶ所、東郷斧淵村之内鶴岡城惣廻り外ニ有リ、

一宗廟諏方大明神

本願主祐行朝臣

大檀那渋谷熊王丸沙弥重仏

渋谷左馬之助重光

大工掃部之助久枝

右明德三年壬申七月廿五日建立、

陽光山在古重元寺今号  
一 天沢寺

市来竜雲寺末菩提所

右寺渋谷家建立、山号陽光山寺号重元寺、其以後島津

紹益御領地之時号曇秀寺、下野守久元祇答院宮之城脚

領地、此寺林<sup>臨</sup>濟宗罷成廿有余年、本之号重元寺、其後

彈正大弼久慶丁領知之時、慈父為常久天沢芳春庵主令

修造再興、因茲号天沢寺、山号者前陽光山也、

一開山一岳洞忍和尚

一寺高五石 一仏餉料錢八拾貫文

一仏餉米貳拾八石

一寺地九反八畦程御免地

一<sup>貴久</sup>大中公 <sup>歳久</sup>心岳公御位牌

一心岳公御石塔

右三行所中より安置、

天沢寺末  
一龍虎寺

一開基年号不相知

一開山風山宗董和尚

摩尼山延寿院  
一吉祥寺

祈願所

右者島津下<sup>常久</sup>総守日置私領之時祈願所安養院、其後大村

江召移、龍福寺与申寺御座候付、祈願所ニ定メ吉祥

寺、夫より東郷江召移当分析願所也、

一本尊不動明王 立像

一 高六石 一 仏餉料米五石

一 開山開基年号等不相知  
来迎山古ノ山号森蔵山と云、  
一 西前寺 時宗

右延文六年三月創建、大檀那渋谷山城古平重信、  
延文二年巳 九月九日

一 開山僧阿万元和尚

一 寺高三石 一 仏餉料錢百四拾貫文

一 仏餉米壹石五斗

一 阿弥陀如来再興棟札ニ大檀越藤原朝臣島津凶書頭忠

長息災云々、阿多右衛門尉忠利・稲留掃部助長元・

土持清左衛門尉昌綱・和泉勝左衛門尉保重云々、慶

長四己亥曆姑洗上旬二日、大工山下左衛門尉・小

工上野全左衛門尉、

不二山  
一 香積寺

右者開基往古藤川村江有之候、香積寺破壊之地ニ而其

寺号寛文六年四月十六日京順和高建立、福昌寺廿七

代奪叟和尚ヲ開山請シ、当分南瀬村江建、

一 高式拾石根占丹波殿寄附、

一 仏餉料錢式百拾四貫文

小路  
一 阿弥陀

木像、後ニ大檀那渋谷氏平重治建立、嘉吉元年酉歳、  
同所  
一 新諏方大明神 正体鎌

右鹿兒島福ヶ追諏方を勸請之由、  
谷之口  
一 久玉瀧崎両大明神 金仏二体 鏡壹面

右永祿年間東郷家式拾式代重綱再興、

中余淵  
一 五社大明神 正体鏡

右五社大明神ハ渋谷家兄弟五人当国御下向之時崇給、

第一伊勢大神宮東郷殿、第二八幡大菩薩祇答院殿、第

三春日大明神鶴田殿、第四加茂大明神入来院殿、第五

建比大明神高城殿与奉崇、延宝七(ママ)未 九月十六日棟札

有リ、

同野  
一 権現 正体金仏数体

元禄十二卯三月、宝永元年甲申八月造立棟札有リ、  
(松カ)

音権現と有、

同所  
一 祇園

右宝永元申八月地頭島津新八殿代造立棟札有リ、

南瀬尾末  
一 霧島山六所大権現・紫尾三所大権現 正体木仏

右寛永十八年辛巳九月当願主源氏久慶朝臣息災云々棟

札有り、

山田村  
一諏方大明神 正体木像

右東郷氏重治建立、

天文十九年庚戌七月大工迫田肥前守と有り、又元禄

七戌年二月再興、

同所  
一権現

右大檀那平氏鎌寿丸、天正十三甲酉十一月十四日原田

宗泉入道(紀カ)記氏良貞建、

山田村井手門  
一観音 正体木像

往古正平庵之寺跡之由、

天文廿四年卯十月建立ニ而候哉、元禄十二己卯林鐘十

八日棟札有り、

一開山石塔正平、開基妙岳徳和尚禪師、

同所  
一山田殿 石塔式ツ有り、

右由緒不相知、七月八日村中より施餓鬼有り、

一紫尾三所権現 木像

右木像裏ニ東方薬師如来勧進結縁自岳、文明庚子菊月

廿三日、

左西方之重寿仏勧進御門自岳、文明庚子菊月廿三日、

正面観世音菩薩仰了祖誉此間不知瀧門僧、文明庚子菊月  
日ミヘス勧請沙門自岳、

六野  
一軍神 正体石像

一永正元年、廿有九日、大旦那不詳、棟札有り、

一大檀那平重綱当村催促人長山七郎  
願主山口名主八郎兵衛永禄四年辛酉十一月

朔日再興、大工藤原武雉、大宮司伊右衛門、

一(紀カ)元禄十六年午九月再興棟札有り、

六野  
一現王 正体木像

一大檀那平朝臣重治、天文十七戊申十一月七日建立之

棟札有り、

同所  
一元文三年十一月廿日氏子中再興棟札有り、

一一生田森 正体木像

同所  
一大檀那平重尚、永禄十一戊辰十一月吉日再興、

一阿弥陀 正体木像

同所  
右往古大松院寺跡段々石塔有り、

氏野々  
一薬師 正体木像

木像裏ニ薩州東郷別府藤川村大檀那平氏重猶等、

薬師如来藤川庵之本尊、願主契道敬白、于時文明十四

年壬寅仲秋彼岸、

同所  
一矢房大明神 正体鏡

鰐口銘表薩州山門院一宮天神御宝前、正長二年十月

日願主宗心敬白、

同所寺川内  
同ウラ藤川宇津野氏神御前、永享八年正月吉日願主、

一正観音 正体木像

木像裏ニ于時永正十五年十一月八日大願主道鑑妙清

敬白、

同所鹿袋  
一地蔵 木仏

文明十一年己亥九月十三日

婦源心叟信公庵主位牌有り、

北野  
一天神 正体木像小厨子入

古神鏡数十有り、

当分木像ハ大工司清右衛門当七十三一二之比、京都北野

より東郷司野郷土木原氏守下安置之由、

一正保四年丁亥九月十六日再興棟札有り、延宝己未十二

月再興、

田海戸川内  
一薬師 正体木仏

同所的場  
一天正十一癸未八月彼岸再興棟札有り、

一阿弥陀 正体木仏

同所  
慶安五年壬辰二月造営、寛保三癸亥二月再興棟札有り、  
一無刀山王 正体鏡三面

元和二年十一月九日造立棟札無刀天子と有り、元禄九

丙子九月七日再興棟札無塔宮と有り、

一八幡 正体木像

同村  
一承応元年壬辰年再興、大檀マツ藤氏朝臣久憲棟札有り、

一紫尾権現 正体木像

慶長九年三月再興、大檀越藤氏朝臣忠長建立、山下空

右衛門云々、

同村  
一親大明神 正体木像

右者渋谷若狭守重親九月廿三日斧淵村之内淵脇山へ入

定、崇親大明神、毎年七月廿三日於西前寺施餓鬼有り、

永禄十二己五月十日棟札ニ平重綱、大工園田越中守と

有り、

名勝誌抜書  
○諏訪大明神 斧淵村に鎮座、地頭仮屋同村にをさるこ

と寅方式拾町余、祭神二座前に同し祭七月廿八日、勸請年月

詳かならず、初め領主早川次郎重親重親は渋谷族次郎実重五代の孫宿願

にて本邑の惣鎮守となし、今ニ到りて郷中崇敬す、

社司田中某、(別當)座主を吉祥寺といふ、

○摩尼山延寿院吉祥寺 同村にあり、地頭飯屋の卯辰方拾三町、真言宗大乘院の末にして開山快普法印慶安二年日遷、本尊不動明王立像、初め天台宗の寺なりしに、文禄中火災にかゝり廃壊せしを、元和中快誉再建して真言宗とすといひ伝ふ、

○陽光山天沢寺 同村にあり、地頭飯屋の戌亥方凡六町、曹洞宗日置郡市来龍雲寺の末にして開山一岳等忍和尚龍雲寺、本尊地藏菩薩座像、初め領主洪谷若狭守重元菩提の為に建立し、山を陽光、寺を重元と号し位牌を建、其後天正十五年島津図書忠長入道紹益東郷を領するに及び曇秀寺と改め、先考の牌を安す、忠長の男下野久元の世にあたりて寺号を故に復し重元寺と改め、臨濟宗の寺となす、又寛永十三年島津弾正久慶東郷の領主となりて先考常久の菩提寺となし、天沢芳春庵主の牌を安置し、正保中天沢寺と改め、一岳和尚をもて勸請開山とし龍雲寺の末となし、日高春重和尚をして中興二代の住職とす、元禄七年甲戌の春丙丁童子の為に記録を失ひ来由委しからすといへり、庭前に虎の尾と

いふ白桜あり、

○司野 同村にあり、地頭飯屋より卯方凡壹里許り、伊佐郡山崎通路の往還なり、能因法師歌枕に薩摩国の名所とす、今ハ原野田畠となりて邑人司野原とよへり、人家もあり、東南に入来・樋脇の山々冠獄等を遙に見、景色広々松風涼陰、旅人もこの所に休すらへり、前に千台の川流れて後ニ笠山野といふ牧あり、西は経塚といへる松林の岡あり、むかしひじりの経石を納めし所といひ伝ふ、つかさ野の詠歌いまた所見なし、按するに東郷ハ往古在国司某といひし人の世々領地にて、司野西方式拾町許りもあらん、在国司居住の古城址今にあり、近衛院の御宇康治の比、祁答院郡司大前道助在国司と称するにや、其子孫師道・道秀などあり、建久八年十二月鎌倉の御教書に、在国司内裏大番来春参勤すへきのよ、し見えしはこ、に居住せし在国司道胤なり、鎌倉のそのむかし国々の司みやこより下向して、あるは三年、あるは五年を限り任充てのほりけるとなり、司野の名は国司の下向せし時、ゆへありて名つけそめしにやありけん、いまた其権興を考へず、

天満大自在天神 藤川村に鎮座、地頭飯屋を距ること子方凡弍里拾弍町余、祭神一座祭八月廿五日、勸請年月詳かな

らす、北野の天神と伝へたり、故に此辺を北野といふといへり、華表の右に梅樹あり、多くの歳月を経しや、枝葉繁茂しつゝに其根株朽て数樹に分れり、花は薄紅にして年ごとに実を結び、おほくみものといへとも梅子を生せず、また枝を採ること神の嫌ひ給ふよしをいひ伝ふ、梅樹の古木をもて神廟の久しきことを知られたり、今の南瀬村香積寺はいにしへハ藤川村にありて当社の〔座主〕寺なりしといへり、

不二山香積寺 南瀬村にあり、地頭飯屋の辰方凡壺里

式拾四町余、曹洞宗福昌寺の末にして開山奪叟全珠和

尚福昌寺廿七世住持、本尊地藏菩薩座像、初め藤川村にありて廢

に及しを、寛文六年丙午四月十五日普峰京順和尚元禄八年乙亥五月十八日遷化、今の地に再建し、山を不二山と号し、全珠和尚

△をもて開山となし、自から二世の住持となり、衾寝

八郎右衛門平清雄を開基の施主とす、

来迎山光明院西前寺 田海村に有り、地頭飯屋より申

方凡六町許り、時衆宗藤沢山清浄光寺の末にして開山

万元上人、本尊阿弥陀如来立像安阿弥作、脇立勢至、觀音同作、延文六年辛

丑三月東郷領主渋谷薩摩守平重信開基すといへり、

23

一鶴田は渋谷大谷四郎重茂ハ則吉岡三郎重真ハヤシ之次弟也、宝治年中兄弟五人下向して重茂鶴田城を守る、二代重行、三代頼重、四代重成、此時島津判官伊久鶴田城を囲む、及難儀為救島津陸奥守元久侯右陣大合戦也、亮洲隨筆

鶴田

諏方上下大明神

宗廟

奉造立諏方上下大明神宝殿一字、大檀主藤原家久朝臣

、、、

元和五己未菊月吉日

当座主 千手院

当地頭 鎌田加賀守政貞

祭日七月廿八日

祭米壹斗七升五合 従公義出也、

右神根元不知

右神社仏閣帳

鶴田  
紫尾三所権現

24

奉造立紫尾三所権現宝殿一字、、、大檀主藤原家久、

慶長十四己酉十一月吉日

導師

権大僧都快誉認之

当地頭

島津図書頭忠長

当座主

権大僧都盛雄

造榮奉行鹿兒島衆

常円坊清堅

右同

猿渡嘉左衛門辰信

大工

白井七右衛門常益

鍛冶

谷口掃部助重正

熊野権現 在社内厨子式尺方也、

祭日九月廿九日

宝物

一刀一ツ 式尺八寸但銘有末行

一劍式ツ 長式尺

一磬一丁

一大般若經 一部但唐本

外二琴式丁、先年從

(家久忠信)  
黃門様被召上于今無之候、

本書在座主

25 一紫尾権現社頭及破壊候、然者為再興祇答院中可被致勸

進候、其村之從肝煎前諸百姓江申付可馳走仕之通可被

仰渡候、仍証文如件、

慶長十一年

榊山権左衛門

南呂朔日

久高判

図書入道

紹益判

紫尾山

座主坊參

右神社仏閣帳

神社考

諏方大明神 薩城より北去ル拾三里

一祭料壹斗七升五合

一応永三十三年丙子七月勸請

鶴田  
宗廟諏方大明神

正体木像

御額二掛 文字 諏訪上宮  
諏訪下宮

右 日新公御寄進之由申伝候、

祭米壹斗七升五合

右 毎年御物より相渡候、

同  
紫尾山三所権現

别当

祁答院

神体鏡

一末行之刀 一腰

一宝劍 二振

右 式行何方寄進共不知

古紫尾大明神

正体木像

神主

種子田三太夫

内山城左衛門

丸山喜左衛門

深水普仙坊

延宝三年 卯九月吉祥日

右之通再興棟札御座候、

右古紫尾大明神柏原村之内種子村江安置、古紫尾権現  
共申伝候、

紫尾山権現上宮・中宮・下宮三所之内、下宮之宮ニ而

候由、神主等右棟札之通罷居為申由候得共、何比より

退去仕候 茂不相知、右神主種子田三太夫子孫于今宮之

城松尾大明神社人種子田舍人と申者有之、右子孫之由

申伝候、

鶴田  
大願寺薬師堂 一字但木仏

右柏原村之内ニ有之候、大願寺者往古尊氏將軍義満

公之台聽而建立之由、柏原村地頭渋谷家滅亡之刻破

壞仕、于今本尊薬師堂迄有之候、

鶴田  
紫尾山 祁答院 南泉院末  
神興寺

右人皇二十七代繼体天皇御宇、空覚上人開基之寺ニ

而候処、中古及破壊候を正徳年中 総州様御再興被

仰付、山号等往古之通ニ而寺領高式拾八石余被召付

置候、

以上都而文化十一戊十二月書出、

神社仏閣帳

伍幣山

伍明院

祈願所

神崎寺

高三石式斗八升九合六勺  
寺根元不知

長松山

菩提所  
竹林寺

高壺石壺升余

寺根元不知

藥師堂

茅葺  
丸柱

七間四面六尺椽

右者去年大風ニ破壊仕、于今三敷式間之かり殿(マ)中

より調達上置候、勿論右之堂ころひなから有之、

一額 医王宝殿と有之

右藥師出所ハ上方ふけいと申所より樋渡名字之人も

り下為申由候、左候而、大願寺にふけい庵と名付、

礫葺之堂を立雖有之候天火出来焼亡、其後茅葺ニ罷

成、其堂地相替本寺之寺内ニ直候、前々之棟札ハ先

年火事ニ焼捨申候之由候、其後建立之棟札ハ此節差

上候、

右神社仏閣帳

寺地改

神崎寺 真言一乘院末御免地  
高四石寺柱方合力  
御目見地  
祇答院 天台南泉院末御免地  
高式拾石余

竹林寺 臨濟大慈寺末御免地  
高壺石余寺柱方合力

伊佐郡鶴田郷

柏原村  
古紫尾三社権現 薩城ヨリ北ニ  
去コト十三里

祭神

熊野権現ニ同

一三代実録、薩摩国貞観十年三月八日壬寅、正六位上紫

美神従五位下、

一当社ハ古来初テ此所ニ勸請シテ後紫尾山へ奉崇故ニ古

紫尾権現ト称ス、

祠官  
岩崎肥前

右神社撰集

神社考右同

稻荷大明神

相殿

出見 (妙力)

一 祭料

一 当社渋谷氏吉岡三郎重直薩州祁答院柏原院依御朱印

宝治二年下向、両社勧請と云々、

右神社考

末社

稲荷妙見

古紫尾権現

山王神社

稲留大明神

野母家大明神

諏方大明神

諏方大明神

山之神

右神社考

地理志

鶴田之部

天正十五年五月、秀吉<sup>④</sup>山崎郷江御着ニ付、本道を除九

尾と云所の難所を尋御通候時、祁答院之士卒已鉄砲を

射掛奉る、然共無事故鶴田村江御宿ニ而候故、此所ニ

而 御両殿様御対顔被遊、歳久主ハ依病気家臣本田掃

部助を以被窺安否、左候而<sup>▽</sup>④翌朝<sup>△</sup>発駕、神子村通行

と云、

宮之城 寺地改

清浄院 真言一乘院末御免地  
高四拾五石寺社方合力

多宝寺 清浄院末石地

薬師院 右同末

曇秀寺 曹洞福昌寺末御免地  
高四拾五石寺社方合力

光叟寺 曇秀寺末石地

無量寺 右同末石地

大円寺 右同領主免地

昌英寺 右同末

宗功寺 臨濟京都妙心寺末無高

揚宣寺 吉田津友寺末右同

大道寺 京都妙心寺末

宮之城

高卷万五千五百七拾六石余

狩夫四百七人

宮之城

松尾大明神

宗廟

祭日十一月十五日

圖書忠長為守本尊慶長三年十一月八日京都より守下  
愛宕大権現

高拾石

座主

多宝寺

祭日四月廿四日

薩州川内千台郡東郷松尾城新勸請愛宕堂造立事

夫奉勸請旨趣信心施主島津藤原朝臣忠長建生辛卯、、、

女施主藤原甲寅、、、

慶長三年戊戌十一月八日

座主権大僧都頼栄

造立奉行藤原忠利

右同 藤原昌繩

右同 藤原長元

大工 山下左右衛門

小工 山下久作

若宮四所八幡

社内籠物

一太刀二腰

一鏡十二面

一 刀二腰柄

一 銀幣

一 幡十二流

一 鍔四領

一 鍔壹本

一 朱唐笠壹本

一 華鬘十二

一 王面六ツ

一 獅子面壹ツ

一 幕四頭

祭日廿一度

一年中ニ六度辛卯祭

一 閏之年閏祭壹度有

一 惣合祭米六石七斗六升九合五勺

右前々ハ高相付候へとも今ニ者石を以相調候、

右者為洪谷家氏神関東鶴岡より和銅元年癸巳四月勸

請候、

雲葉宮

八幡末社

祭日 二月二日 十一月二日

右者八幡御祭ニ相籠

八幡由来

一 若宮四所八幡宮本地普賢文殊  
地藏龍樹

右当社関東鶴岡より為洪谷氏神勸請候、其下文ニ曰、

八幡二郎吉家癸巳年四月和銅元年彼国に後藤兵衛直清

并職司守下シ候、左候而、一番ニハ求名と申在所ニ御

留り依在、彼所之内ニ名を幡居田と申門御座候、是ハ

八幡之幡之字ヲかた取如此候、其後湯田へ新田致出来、

九月廿五日辛卯日ニ御遷宮ニ而于今例年九月廿五日御

祭礼候、自爾以来一年ニ廿九度之御祭申来候、当代ニ

至迄不懈相勤候、御祭廿九度之入目之日記別ニ有之、

凡八幡御下着和銅より以来九百年余ニ罷成候、委敷書

物等毀破勘落之時分相良弋庵太官司ニ而候時所持ニ而

被相逃、于今当社ニ無之、雖然御下文卷ツ職司手前ニ

有之、大略如右記也、

右神社仏閣帳  
宮之城  
物鎮守松尾大明神屋地村  
薩城より子丑ニ去拾壹里

祭神二座大山呪神  
宗像神

神社考

右者勸請年曆不詳、当領二代目凶書忠長慶長年間東郷

より宮之城江領地相替引移候、以後家臣稲留掃部長元

此社を勸請と申伝候得共、往古より脇地江有之候共申

伝候、

宮之城  
諏訪上下大明神 屋地村

祭神二座健御名方神  
事代主神

右者虎居村古之立と申所江安置有之、宝治二年渋谷家

関東より下向有之、(元)那答院之領主ニ而候渋谷家代屋地

村之内為被還と申伝候、天和二年社頭より火起棟札等

焼失仕、其後凶書忠長領分ニ罷成、三代目之下野久元

造立仕候、

宮之城  
若宮八幡宮  
湯田村  
座主  
清淨院

祭神四座

玉依姫 心神天皇

神功皇后 武内宿祢

正祭九月廿五日

一太刀二腰  
□神太夫と申伝候  
来国光と銘あり

右二腰ハ寿永元年関東鶴岡より八幡御下向之節御持

下之由申伝候、

一御太刀二腰

内一腰式尺六寸四部、備前兼光銘あり、但縁頭赤かね、

柄糸小倉、打裏鮫、鍔皮錫覆輪あり、切羽四枚赤か

ね、鉦鉄、目貫赤かね、扇子白木鞘、

右惟新様高麗御陣之砌御寄進之由申伝候、

一腰青江と申伝候、長式尺、

右島津左衛門歳久様肥前入之節御寄進之由申伝候、指

裏二天正九年辛巳五月十六日寄進島津左衛門督藤原歳

久朝臣と有之、

一御鎧四領

内一領 惟新様朝鮮御陣之刻御寄進之由申伝候、

一領 忠恒様御寄進之由、

一領 歳久様御寄進之由、

一領 庄内入之砌北郷(忠能)長千代丸様御寄進之由、

一鎌鍬壺本 太刀打鉄ひる巻有之、

右者 惟新様御寄進之由申伝候、

一銀幣壺流

右歳久様奥方御寄進、天正八年庚辰菊月廿五日と有

之、

一怒猊壺頭

右 義久公御寄進、文明十一己亥施主□と有之、

一歌仙三拾六枚

内壺枚裏二天正九年辛巳五月十六日奉寄進島津左衛門

督藤原歳久朝臣と有之候、

一太刀一腰 未行と申伝候施主不知

右都而文化十一 戌十二月書出、

神社考

一当社ハ寿永年間鶴ヶ岡八幡宮ヲ勧請、

宮之城

末社

一諏方大明神

一天神

一祇園

一彦權現

一稻荷大明神

一藪佐大明神

一米留大明神

一白山權現

一山王權現

一諏方大明神

一諏方大明神

一有馬權現

一山神

一稻摘大明神

一米摘大明神

一天神

一立神大明神

一鬼丸大明神

一霧島權現

一鶴丸大明神

一 上宮權現 一 鬼丸王大明神

一 諏方大明神 一 天守

一 山之神 一 鎮守

一 諏方大明神 一 山之神

一 箭武佐大明神

右神社考

宮之城 善提所  
陽広山 曇秀寺

奉懸華鯨一口薩州路東郷大珍山重元寺

応永卅五年臘月廿四日

願主 永金敬白

一 高四拾五斛

右者福昌寺末山三枝派、則三枝開山之地也、開基 日

新様三男左兵衛佐尚久法名号一枝曇秀居士、永祿五年

壬戌三月一日三拾二歳逝去也、就為一郡之本寺、寺地

八公儀御支配也、

右神社仏閣帳

大徳山 山派 宗功寺

高七拾六石并寺地

右京都妙心寺末、開基尚久嫡子凶書忠長入道紹益法名  
既成宗功庵主、慶長十五年庚戌十一月九日遊去也、(マヤ) 天文  
二十年辛亥七月十七日出生也、

右神社仏閣帳

宮之城 祈願所一乘院門下  
金与山 自性院 真蓮寺

高四拾五斛

脇坊

宮司坊

高三石

松下坊

高五石

右神社仏閣帳

潜龍山 足室派 揚宣寺

高五拾三石五斗并寺地

右福昌寺末山、開基右馬頭忠將女子凶書入道忠長妻法

名揚窓妙宣大姉、

寛永四年丁卯二月八日七拾四才逝去也、

右神社仏閣帳

宮之城  
少林山

大道寺

31

謹鑄華鯨一口為大道寺殿鉄心宗峴大居士資助冥福、

正保元年甲申八月時正日

功德主

島津中務少輔久茂

千代鶴

万袈裟

高七拾五斛并寺地

右者妙心寺末山、開基下野守久元法名号鉄心宗峴大居士、寛永廿年癸未六月十六日逝去也、正保元年甲申建立也、

右神社仏閣帳

青龍山

三枝派

大円寺

高五拾五斛并寺地

右曇秀寺末山、開基凶書入道忠長嫡子河内守忠倍法名覚翁大円居士、慶長十四年己酉五月十八日三十二才逝去也、

右神社仏閣帳

大龍山

三枝派

昌英寺

高拾五石并寺地

右者曇秀寺末山、開基凶書入道忠長女子中務少輔豊久妻法名号松岩昌英大姉、慶長十四年己酉三月二日三拾八歳逝去也、

右神社仏閣帳

愛宕座主

多宝寺

高拾石但愛宕二付

右一乘院門下

葉師院

高拾斛

右同断

神護院

高三石

右同断

右神社仏閣帳

一水引国分惟宗姓国分左馬助友久、是 忠久侯の時居城  
せしむ也、其本は惟宗姓大納言五代新田宮執印左馬頭  
康友の二男、其子孫于今相続す、

亮洲隨筆

名勝考  
高城郡水引郷新田村

鏡野 水引郷の中にて新田宮より西之方四十丁、小倉  
と云所にあり、

水引 寺地改

御目見地  
泰平寺 真言大乘院末御免地  
右同 高廿壹石寺社方合力  
観樹院 右同末御免地高廿壹石  
合力所  
国分寺 右同末寺社方合力所

若宮寺 右同末

神護寺 右同

照常寺 右同

五大院 右同

学頭坊 右同

財力坊 右同

権宮司坊 右同

経官坊 右同

止宮司坊 右同

玉泉坊 右同

御政所坊 右同

檢校坊 右同

和光坊 右同

下宮司坊 右同

園林坊 右同

九品寺 右同

浄鏡寺 浄土不断光院末御免地

臨江寺 臨濟広濟寺末御免地

惣持院 臨濟大慈寺末御免地

鷲岳寺

高城郡高城信興寺末御免地高式石合力所

御領国御陵由来

一日本紀曰、天津彦々火瓊々杵尊崩因葬筑紫日向ノ可愛之山陵可愛此云埃、

可愛陵

薩摩国高城郡水引郷神龜山新田宮社頭之戌亥方相隔可愛ト申所アリ、爰ニ葬ト申伝フ新田宮ハ瓊々杵尊之神靈ヲ崇シ所ト云、其後人皇四十五代聖武帝神龜二年乙丑建、是ハ八幡三所ヲ新田宮エ為被崇入時年号ト申伝候、新田宮社山之中ニ中陵・端ノ陵・川合ノ陵ト云アリ、瓊々杵尊・天忍德耳尊・栲幡千千姬命之陵トモ云、上古ノ事跡相分リニ申候、可愛陵ヲ額娃開山ト云ト有之、額娃ハ彦火々出見・豊玉姫之垂跡也、

一日本書紀、瓊々杵尊天照太神之御孫、地神三代之皇王也、瓊々杵尊離天磐座、且排分天八雲、稜威之道別々々而天降於日向襲之高千穗峰、又到於吾田長屋筥狭之碓矣、襲ハ今ノ隅州曾於郡也、吾田ハ今ノ薩摩国阿多郡阿田也、筥狭ノ崎ハ加世田ノ崎ニテ今ノ野間ノ御崎ト申伝、皇孫就而留住、吾田津姫ヲ娶テ、吾田津姫ハ又吾田鹿津、彦火出見尊ヲ生給フ、以竹刀截兒臍、其所棄竹刀終ニ竹林トナル、倭名抄薩摩国阿田郡又關駝此所ニ有鷹屋郷、神代所謂竹屋ト云、其後薩摩国往古ハ加世田ノ小松原マテハ阿多郡ト申シ伝フ、 高城ニ都シ給フト云、都ノ所ハ不相知、紫尾山又上宮岳、又宮之城ハ天子皇都付シ名号也ト申、紫尾ハ

紫微ニテ帝座ヲ申候、恭徐福紫キノ緒ヲ落スト云説不審シト申伝エ候、

一 大隅国肝属郡内之浦郷北方村高屋神社 内之浦ハ上古内ノ裏ト書、天王内裏之建タル遺跡ト申候

高屋陵

瓊々杵尊御子地神四代彦火々出見尊奉崇高屋宮ト云、社頭ヨリ凡二里又曰三里山上ニ高屋陵アリ、国見権現ト云、其所ニ葬ト申伝、

一日本紀曰、彦火々出見尊崩、葬日向高屋山上陵、人皇十二代景行天皇十二年高屋神社建給ト云、

一日本紀曰、景行天皇十二年十一月到日向国起行宮以居之、謂高屋宮、高屋山上陵アリ、以是故ニ行宮モ高屋ト云カ、 議討熊襲、国有厚鹿文・连鹿文者兩人渠師也、十三年悉平熊襲国、因以居於高屋宮已ニ六年也ト云、同二十五年秋八月熊襲亦反之、冬十一月遣日本武尊景行帝第二子小碓尊ト申此命也十六歳解髮作童女姿、熊襲魁師石鹿文川上梟師抽咽中劍刺給フト云、熊ハ熊磨、襲ハ曾於郡也ト云フ、

一古事記曰、日子穗手見尊者、坐高千穗宮伍伯捌拾歳、御陵即在其高千穗之西高千穗之事諸説多シ、日向諸県郡高城、同郡都城ソノ遺跡歟、 鹿兒島神社又作鹿島大隅国桑原郡正宮也、彦火々出見尊都

シ給フト申伝、豊前州宇佐宮伝記之中ニ麿島神社神武天皇建給フ有之トナリ、上古ハ高千穂宮ト云シトナリ、四方ニ門ノ立タル石跡アルト申也、桑原郡国分正宮ハ霧島ノ裾ニシテ霧島ハ曾於郡ノ中也、曾於郡ト国分境如犬牙入マジハリシ所ナリ、其後人皇二十代欽明帝五年鹿兒島神社工八幡宮ヲ奉崇入申候、

一 大隅国肝属郡始良郷上名村鵜戸権現

吾平陵

一 日本紀曰、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊崩於西州之宮、因葬日向吾平山上陵、

地神五代葺不合尊為奉崇ト云、葺不合尊ハ彦火々出見尊ノ御子ナリ、此所ニ

石窟アリ、洞ノ内ニ奉葬ト云、是ヲ吾平陵ト称スト始良

始羅皆、洞ノ口東ニ向窟広サ百二十坪、中央ニ有社壇、

社壇ノ下井戸ノ如ク深サ幾尋ト云コト不知穴アリト云、

此窟即不合尊之陵也ト申伝、又日州那珂郡ニ鵜戸権現

ト云アリ、此所ニモ窟有リ、忌部正通曰、葺不合尊産

屋旧跡也ト云、

一 薩摩国大隅国、本日向国也、人皇四十三代元明帝和銅五年日向分大隅出下有之、

右者御領国中之内諸所へ山陵有之場所并来由等相札可

申出置旨承知仕候、御領内ニ而帝王之御陵と申伝候者

前条之三ヶ所ニ而国史と符合仕候、廟陵記に可愛・高

屋・吾平、何れ茂無陵戸と記申候、陵戸ハ天子之御陵

ニ者四時之祭祀・掃除等を相勤候民戸を被付置事ニ而

候、扱右三ヶ所を国史ニ者何れ茂在日向国と被記置候

得共、是者薩摩・大隅之両国を未夕日向国より不割置

已前之由を被記、既ニ薩摩・大隅之両国を被分候後者

日向国中ニ而者無御座候、是又薩摩・大隅之儀者遠国

辺鄙ニ而、四時之祭祀等も届兼申候故、山城国葛野郡

田邑陵と南原ニ而可愛陵・高屋陵・吾平陵与三陵を御

立、四時之祭祀を被行候儀延喜式ニ被載、是を神代三

陵と唱、其方至一町余と見得申候、且又御領内三陵之

側ニ別ニ被崇神靈候神社御建立有之、新田八幡・高屋

大明神・鵜戸権現など、奉称事候処、後々者右御陵ニ

付而之御神とも不奉存、或者其神社之所ニ神体を奉葬

歟と心得違申者も有之、歎敷次第奉存候旨相見得申候、

右之外御領内ニ御陵と申伝候所前文之通御座候へ共、

慥成儀未承得不申候、此段御用ニ付書付差上申候、以

上、

文化十一 戊 六月廿八日

福ヶ迫諏方神主

井上左膳

寺社御奉行所

水引  
新田八幡

可愛陵 小板葺竪四尺横五尺

陵宮 竪四尺横五尺五寸 軒口七尺  
五寸七尺三寸

34 奉造立新田八幡大菩薩宝殿一字、、、大檀主藤原少将

忠恒朝臣・前太守義久并大願主侍從義弘息災、、、

慶長七壬寅菊月廿八日

当奉行 島津凶書守忠長

樺山権左衛門久高

鎌田出雲守政近

比志島紀伊守国貞  
義弘役人

伊勢平左衛門尉

伊地知筑後入道

巢山寺頼玄  
作事奉行

川上久右衛門尉

本田新助

白浜次郎左衛門

隈城当地頭

相良新右衛門尉

百次当地頭

新納新八郎

山田当地頭

伊勢兵部少輔

入来院清敷当地頭

平田太郎左衛門

執印吉左衛門尉

權執印堯慶

座主宗仁

千儀

大檢校

遷宮勸之 法印権大僧都盛秀

35

水引

薩州高城郡千台神龜山新田八幡奉再造大檀那三州太守

大隅守家久、隔年不豫憂愁尚矣、雖禱爾上下神祇未有

其驗故、使梓匠再修造焉不日成之、其疾病亦日々有得

其減驗、身躬堅固而保龜齡鶴算之寿、且復薩州光久并

虎寿鳳毛亦得文武之永年而身心堅固、、、

寛永十七丁丑八月吉日

中納言家久敬白

地頭 伊東二右衛門

〔祐昌〕

八幡宮御宝物

一 御太刀一腰 鳩丸 無銘

一 御太刀一腰 御戸丸長光

右者從禁中御寄進之由申伝候、

一 中脇指 助宗、鞘梨子地わらひ手也、金かなかひ、

一 御太刀

右之箱書付

奉寄進新田八幡宮御宝前島津兵庫頭入道義弘朝臣沙弥

惟新 御判

慶長七年 壬寅 二月六日

大工 上井渡右衛門兼次  
鍛冶 天辰隱岐助種(成)

一目貫有 但つかまきもよき

一 太刀袋からにしき 但もよきさかり有

慶長六年 辛丑

関備後守

八月廿四日

盛光判

三宮司坊但兩番下宮司坊

参

一 連歌千句

一 短冊壹枚

右者元和七年九月十七日

中納言(家久忠恒)様御寄進

一金灯炉壹ツ

右者慶長八年十一月 惟新様御寄進

一 御鏡壹面 但奩金覆輪有

右者国府 御前様御寄進

一 銀幣

右者 惟新様御寄進

一 歌人三十六

右者 中納言様御寄進 但御自筆

一 戸帳 但黄段

右同

右之御太刀渡日記

新田宮御寄進御太刀金具物数之事

一金物十七処 但金計

此内二重せつはは、き有

一 きつくふのあり 但おひとり文くち

祭日 廿八度 日割略ス

一高八百六十七石

内百五拾石者

百十八石壹斗五升五合

右者執印休左衛門格護

百九石四斗壹升壹合

五拾八石壹斗九升七合

廿六石壹斗九升六合

廿六石壹斗九升貳合

四拾六石五斗五升八合

廿壹石九斗七合

拾七石壹斗壹升七合

拾貳石六斗六升五合

拾壹石九斗八升壹合

拾壹石貳斗九升六合

拾壹石貳斗九升六合

拾壹石貳斗九升六合

拾壹石貳斗九升六合

拾壹石貳斗九升六合

御修理方

御供田

惣官執印久左衛門

惣校枝權執印

殿上職大檢校

殿上職千儀

座主坊觀樹院

學頭坊連台院

右同 經官坊円満院

御前 檢校坊福寿院

正宮司坊宝寿院

下宮司坊宝藏院

財力坊理趣院

御政所坊返明院

円林坊善寿院

玉泉坊蓮光院

拾壹石貳斗九升六合

七石八斗七升三合

貳石七斗三升八合

三石四斗貳升三合

百八拾六石八斗壹升五合

薩州一宮新田八幡崇廟之事

地神御代

一天照太神

二正哉吾勝々速日天忍穗耳尊

天照太神御為御子即還於天

三天津彦々火瓊々杵尊八幡新田宮正哉太子母

姫高皇產靈尊之女也、初天津於日向襲之高千穗峰矣、(卷) 幡千々

治天下卅一万八千五百三十二年筑紫日向可陵興伝申

事山号神龜山、

新田宮座主坊中

座主

觀樹院

一

右先座主ハ一条殿御家より被罷下、代々御神事被相勤

候処ニ、寛永廿年九品寺入組ニ付 扨、真言清僧ニ被

仰付、今兩代被相勤候、前ハ妻帯ニ而候、

一 蓮台院 祈願所 学頭坊

右者六十六部廻国法納之寺ニ而候、且上十五日之主座

ニ而候、

一 円満院 祈願所 経官坊

右者下十五日主座ニ而候、

一 福寿院 御前 檢校坊

一 宝寿院 正宮司坊

一 宝蔵院 下宮司坊

一 理趣院 財力坊

一 返明院 御政所坊

一 善寿院 円林坊

一 蓮光院 玉泉坊

一 福昌院 和光坊

一 医王院 権宮司坊

一 五代院 神宮司

右者出家無之、円林坊より格護五大尊御立被成候処

ニ而候、

一 九品寺 惣菩提所

右者出家無之、太平寺より格護、

一 総持庵 權執印 禪宗 菩提所

一 森尾道場 執印久左衛門 時宗 菩提所

一 拾郎太夫殿 京泊舟津島 宗廟

祭日霜月十日

右者舟神之由ニ而從前々 殿様御上洛ニ者日和御神

乘上申候、新田末社之故祭ニ者社人罷下相勤申候、

右神社仏閣帳

八幡新田宮祭神

天照皇太神

天津彦火瓊々杵尊

天忍穗耳尊

八幡新田宮者地神第三天尊瓊々杵尊也、最初降来之時

到給筑紫日向高千穂神触之峰、而此所構城壁雖蝶雄蝶力起給

高城千台宮之処也、此尊降来之時、天神賜八咫鏡而祝

曰、汝見此鏡即視吾可与同床共殿為曆鏡云云、此御宝

鏡之八文字与此尊之母命栲幡千千姫也、幡字因母鏡与

幡其儀一也、

今小倉ト申所工鏡野有リ、大野原中ニ二反計リ丸叢有、丸ノ内四氣共草青々タリ、昔八咫鏡ヲ暫留置給シ故跡ト申伝也、里人放野火而歳之農業ヲ吉凶占卜ナリ、

八幡御尊号此御宮相始日本第一御宮城之地也、瓊々杵尊領五部神及八十万神而治天下後葬筑紫日向可愛山也、

昔筑紫日向一國今薩摩者和銅元年立ト御縁起有、和銅五壬子日向分ケ大隅出ト年代記ニ有リ、

御陵山有現

昔此辺都テ可愛ト為申由、追々御新田相開ケ新田村トモ為申由、深秘曰、当所中ノ御陵ニ文化三年之頃松木相倒根先堀除之節御石塔ニ堀当、土中余程広ク被遊御構哉ニ相見得候、恐至極奉存則本ノ通奉納祓清仕候、端御陵モ土中大響有、

抑此処者為体四神相応靈龜以象其山神龜山是ナリ押給異國四海蛮夷降伏也、万乘君子御尊敬処道俗貴賤孰不蒙此徳哉、

御神判有  
一 序宣一冊

諸郡色々本郡役等事

式拾二ヶ所院郡ヨリ御祭用途事

一 綸旨一通序宣被成下事

一 八幡宮印

文字御印判今ニ有、神前御奉公之其家々被任職分之

時公文所ニテ執行貫職補任書調、正月十一日卯ノ刻

執印職・權執印・座主兼政所・殿上檢校其外四人銘

々書判仕、御印判補任紙頂戴仕来候、但銅印、

一 薩摩倉印

文字御印判昔有、式拾二ヶ所郡院ヨリ諸祭用途物相

納之節証文ニ御印判戴候由、前代 禁裏御直支配之

時御渡為有之由、今此印無御座候、

一 承安三年、正殿以下門廊等不慮之外炎上ニテ御座候、

当分之二条目ニ御正殿為有之由、御輿下リハ此御時

ヨリ無之、夏越会・放生会・大会今ニ不怠有来候、

一 山頂可奉造否事經 奉聞賜宣旨願奉捧申文畢、

一 綸旨一通 御造管之事、八月三日

一 綸旨一通 神玉面相損修復之事、十二月十四日

一 府宣一通 神王面修覆并宣祓之事、十月廿

一 御奉送一通 御幣御膝突御馬壹疋鎌倉殿、建曆三年十一月十五日

一 御拝進 御劍一腰・御馬一疋・御征矢一腰・御弓一張鎌倉殿、建曆三年十二月廿五日

一 関東御教書 蒙古降伏御祈禱事、建治元年九月十四日

一 関東御教書 御造營等之事、弘安四年二月日

一 院宣一通 被下国衙料所内檢任事、弘安二年五月十日

一 院宣一通 御造營料所三ヶ所之事、正応二年十一月三日

一 関東御教書一通

御劍一腰・御馬一疋為異国降伏御祈被獻一ノ宮畢、正応六年五月廿日

一 関東御進宮之事一通

御劍一腰・御征矢一腰うすへ尾・御弓一張長藤正応六年五月十一日

右之類古文書等数通格護仕居候、

為異国降伏御祈被寄附所三郡御祈之節、神風荒吹賊船

悉令破損、一時凶徒沈海底也ト弘安六八月日文書ニ相

見得申候、

一 御先祖様被遊御下国候而ヨリ当所御直支配ニ而御座候、

当分之新田宮宝殿・拝殿・舞殿・鐘楼・廻廊・諸末社・

仁王門・鳥井ニ至迄 義久公 義弘公 忠恒公朝鮮御

渡海首尾克御帰陣御願成就御誓願ニ付被遊御再興候、

其前太閤秀吉公御動座之節ハ、社人・社僧惣而御神殿

奉守護山中ニ楯籠罷在候処、秀吉公ニ茂大切成御宮之

由被聞召、宮内之儀者放火狼藉等禁制被申付候、

一 神領高八百六拾七石三斗壹升式合五勺

但神領百姓屋敷日高給地五屋敷、手嫌・死穢等不相

障并食忌迄も往古ヨリ被相定置候、

右御当家様御寄附、

御陵三ヶ所

年中御神事每宝殿より御供饗膳、正祭神前ニ而神楽、

社頭左脇

若宮四所宮神体

彦火々出見尊

豊玉姫

鷓鴣草不合尊(音脱力)

玉依姫

社頭右脇

武内神社神体

忍信命

当八幡新田宮ハ押給異国 武内宮茂依為被押三漢

縁後此地江勸請与 申伝候、

右宝殿同前、御供饗膳神楽同断、

瓊々杵尊供奉諸神

二十四社

高良神

中王神

早風神

東善神王

西善神王

九楼神

主公神

右諸末社勸請棚ヨリ御供饗膳、正祭ニハ其神前ニ而

神楽、

右文化十二亥四月書出、

但伝云、正宗拵鳩之彫物目貫目釘迄、

一同 長光銘有一腰 御戸丸

一小サ刀 助宗 一腰

右三腰 禁中より御寄進

一香台 一ツ

右陸奥守忠国公御寄進

一太刀 行吉 一腰 拵金赤銅

右惟新公御寄進

一制札 一枚

右太閤当国江下向之節被立置候、

一刀 無銘青江 一腰

裏差かりくひ有

右光久公御寄進

一刀 備前国友成 一腰  
長式尺六寸六部

右青江 齊宣公御用ニ相成、文化五年辰七月廿三日

右御刀友成を以御引替、但御添書有之、

一刀 谷山安行 一腰  
御拵有

一脇差 肥後守法城寺 一腰  
御拵有小刀有

右二腰 綱貴公御寄進

水引

新田宮宝物

一太刀 無銘一腰 鳩丸

一 刀 肥後守橋吉次 一腰 白木さや

一金幣 一流

一 刀 御寄進狀一通 一腰

一指杉十万本 御願狀一通

右 四行 吉貴公御寄進

一 御刀八幡 比国治国造 一腰

右 繼豊公御寄進

一金灯炉 一ツ

右 惟新公御寄進

右之外輕キ品々略之、

右文化十二亥 四月書出、

寛保二戌 五月書出、

一 大太刀 一腰

右 天草高力左近大夫寄進、

一 御刀 一腰 備前国友成  
長式尺三寸六部

右文化五年辰七月廿三日從 齊宣公御引替被遊御奉

納之書付有之、

文政三辰二月 御差料

一 御刀 一腰 無銘、文字  
長式尺壹寸九部

右同  
一 御脇差 薩州住藤原正房  
長壹尺貳寸四部

右 水引八幡新田宮 江從 齊興公被遊御寄進候付、御

側役有川勇馬より添書有之、

水引郷  
龜山之半腹ニ在

八幡新田宮

祭神

天照太神

瓊々杵尊

栲幡千千姫

神代卷曰、久之天津彦々火瓊々杵尊崩、因葬築紫日向

可愛之山陵、

当社西北之山腰ニ可愛ノ陵在、是則皇孫ノ御尊体ヲ

為奉葬所也、

本薩隅トモニ日向国也、瓊々杵尊最初降臨ノ時、猿田

彦ノ教ニ任セ日向国襲高千穂峰ニ至リ給、雖然此地膺

完胸副国故、自頓丘覺国行去薩摩国阿多ノ長屋笠扶ノ

御崎ニ到、大山祇神ノ女子木花開耶姫ヲ娶、児火酢芹

命、次彦火々出見尊ヲ生、此所無戸ノ旧跡也、初阿多郡加世  
田郷今川川辺郡也、則此神ヲ崇テ

竹屋大明神ト号、  
今鷹屋ニ作 其後ハ今之水引郷ニ都シ給歟、所謂千

台高城ナト云ルハ此所帝城ヲ定、千<sup>(マ)</sup>台高原ニ千木  
高知テ美津ノ御舎ニ座テ天国ヲ治万世不窮ニ可平安ト  
也、

一当社ハ昔皇家之尊敬特ニ勝テ、毎歳六月名越ノ祭ハ遠  
ク勅使ヲ差遣シ<sup>(遣)</sup><sup>(神力)</sup>慮ヲ恭敬シ万民ヲ役シテ祭祀ヲ<sup>(瞻)</sup>膽逸  
セラレシ也、

### 五所別宮之内

#### 薩摩国新田宮

勸請年記不詳、初雖降日向国不宮神宮、依之薩摩国  
龜山ニ鎮云々、

今茲ニ応神天皇及武内宿祢ヲ会祭、是則日本文武之大  
祖、又武内臣も其功莫大ナルヲ以神祠ヲ設て是を崇、  
其例余社ニ茂多シ、欽明天皇五年大隅国鹿兒島神社へ  
八流之幡ヲ降シ応神帝ヲ祭正八幡トス、故ニ八幡ノ号  
アルカ、又八幡ヲハ皇孫日向へ降臨ノ時、天照太神手  
持宝鏡<sup>(八咫金)</sup><sup>(鏡也)</sup>祝曰、吾見視此鏡当猶視吾可与同床共殿  
以為齋鏡<sup>(也是ヲ以)</sup>」八咫ノ字ト母之栲幡千々姫之幡ト  
ヲ取テ八幡ト尊号シ奉トモ云、新田宮と称スルコト古  
来ヨリノ尊号ナルヘシ、

神社調

薩摩国  
之部

五



(表紙)

神社調 薩摩国之部 五	高尾野 阿久根 野田 水引 高城郡 高城
-------------------	----------------------------------

高城郡水引郷  
龜山

八幡新田宮

薩城より西ニ去事  
十三里

祭神

天照皇大神

伊弉諾尊御子也、

瓊々杵尊

天照太神ノ御孫也、

栲幡千千姫

天皇產靈尊御女也、

神代卷曰、天照大神之子正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊、

娶高皇產靈尊之女栲幡千千姫、生天津彦々火瓊々杵尊、

故皇祖高皇產靈尊特鐘憐愛以崇養焉、遂欲立皇孫天津

鍾(鐘)

彦々火瓊々杵尊以為葦原中国之主云々、天照皇大神

ハ女帝故、皇統日繼ノ御子ヲワシマサス、故ニ弟素戔

鳴尊都ニテ大市姫ヲ娶、生セ給ヘル御子ヲ養給ヒテ、

皇統ヲ継セ玉フヲ天忍穗耳尊ト申奉ル、皇祖高皇產靈

尊ハ別天神ト奉称、氣化御人体ノ御神ニテ天照大神ノ

摂政ノ任ナリ、女ヲ栲幡千千姫<sup>ト申</sup>奉、此女ヲ天忍穗

耳尊ヘ会マイラセ瓊々杵尊ヲ生マス、此御子聰明<sup>智</sup>

ニシテ三種固有ノ聖徳備リ玉フ故、皇天二祖ノ叡慮ヲ

以御孫瓊々杵尊ヲ立テ御讓位ナラシメ葦原中国ノ主ト

シ給ントノ勅命也、此時天照大神ハ畿内大和国高市

郡ニ都シ給イ、今ノ四国・中国・九州ハスベテ大己貴

命ノクダキ伏セテ、出雲国五十田狭小河<sup>江</sup>ハ御在城ヲワ

シマス故、勅使トシテ経津主神・武甕槌神ヲ出雲国ヘ

遣サレテ、大己貴命ヘ勅命スラク、皇孫瓊々杵尊ヲ天

降葦原中国ノ主トシ給ハントヲボス、汝サリマツラン

ヤ否、大己貴命謹テ事故ナク国々ヲ献シサセ給フ、兩

将皇居ヘカヘリ、登テ大己貴命ノ状ヲ具ニ奏シ奉リ給

イケレハ、御感ヲワシマシテ、瓊々杵尊ヘ八坂瓊曲玉

及咫鏡・草薙劍三種宝物及五部神等百寮々ヲ配侍ラシ

メテ、高皇産靈尊以真状追衾覆於皇孫瓊々杵尊、離天磐座排分天八重雲以奉降之、其御ヨリヲイ稜威イツシク大伴速遠祖天忍日命、師来目部速祖天穗津大来目、背負天磐鞞臂著稜威高鞞、手捉天梶弓・天羽々矢及副持八目鳴鏑、▽又帶頭槌劍△而立天孫之前遊行降、日向襲之高千穗二上峰天降給フ、其地石高沼ヲ、ケレハ、都建ヘキ地ノリ無故ニ、暫クモ行宮ヲ建給フ、夫ヨリ遊行テ薩摩国加世田野間ノ御崎ニ至リマス、加世田ノ宮原元阿田郡也、其国有一人、事勝国勝長狹ト云、是則吾田ノ領主也、皇孫問曰、此地ニ都建ヘキ所アリヤ、対曰、爰有国トモカクモ叡慮ニ任セ奉ルベシ、皇孫ヨツテ留リ住ミマシテ行宮ヲ建而後チ高城ヘ都建、謂所千台ト号スル事、千ノ台ヲ杵築ノ儀、高城トハ高キ城ヲ構ヘテ千木高ク上テ天下ヲ治メ、御即位ノ大礼ヲ行ヒ、天津罪・国津罪ヲアケテ律令格式ノ根本トナシ、中臣ノ道ヲ立テ、天兒屋根ノ命中臣・卜部・藤原等ノ初祖春日大明神也製作シ給ヒ、奏聞ヲヘ臣下万民ヘ示聞セ、万機ノ政事・祭政一理ニ述知食給フコト共也、

久之天津彦々火瓊々杵尊崩、因葬筑紫日向可愛之山陵、

茲ニ薩摩国高城郡水引郷八幡新田宮ハ皇孫瓊々杵尊ノ帝都也、龜山西北ノ山腰ニ可愛陵有、今五代村ノ内也、新田之社頭ヨリ相隔ルコト一里計、是則皇孫ノ御尊体ヲ葬シ所也、此一山ヲ陵山ト号ル靈山也、又神龜山社頭ノ山内ニ中陵有、其次ニ端陵在、是皆同陵ノ御靈也、凡往古ニハ天子ノ陵所々ニ設置、何レヲ正ト不知ヨウニ御靈ヲ崇、御尊骸ヲ葬所モ深ク奉隱事、実ニ故有ノ御事ナリ、又此山ヲ龜山ト称スルコト、神龜山ヨリ五代ノ陵山迄一山ノ号也、神龜山ヲ龜ノ頭トシ陵山ヲ龜ノ尾トス、古来ヨリノ祝号也、又当社ニ応神天皇以下武内宿称等ヲ祭五所ノ别宮トス、五所八幡ノ内也、天皇ハ中興ノ聖主、日本文武之太祖、四所宮ハ住吉三神ニ神功皇后ヲ会祭ル、武内ノ臣モ又功業渙大ナルヲ以神祠ヲ設テ是ヲ祭ル、故ニ此時ヨリ八幡ノ号アルカ、新田宮ト称スルハ古来ノ宮号ナルヘシ、諸神記曰、新田宮ハ雖日向国降不営神宮、薩摩国龜山鎮座ト云々、此説ハ瓊々杵尊ノ降八幡ハ、欽明天皇ノ五年ニ八流ノ幡ヲ降玉フヨリ正八幡ノ号アリ、是ヲ垂跡ノ最初トス、又当社ハ皇家ノ御尊敬最異于他、昔ハ毎歲六月名越ノ大祭ニハ遠ク

勅使ヲ發遣シ、神慮ヲ恭敬シ万民ヲ役シテ祭礼ヲ執  
行シ給フトナリ、

末社

四所宮

武田社

廿四社

荒神社

高良社

中王社

早風社

兩善神王社

可愛陵社

中之陵社

端之陵社

久留社

宿神社

大己貴社

彼岸社

弥勒堂

種子津阿弥陀堂

昆沙門堂

仁王堂

明王堂

右本社・末社等、檢者付修甫所、

一神領二百五拾石三斗一升二合五勺

一寺社家給地六百十七石

右神社撰集

合高八百六拾七石三斗一升二合五勺

右寛保二戌五月書出、

妻帯三ヶ所  
社人四拾四ヶ所  
別当  
觀樹院

要用集しらへ

八幡新田宮執印職  
執印吉左衛門

右大宮司職・神主職・執印職被仰付候節者達 貴聞、  
於虎之間寺社奉行より申渡之、

1  
就 八幡新田宮御建立ニ御造営中相詰候、為後代之ニ  
書付畢、

慶長七年四月三日

鹿兒島住人

柳緑花紅 藤崎善介 (花押)

藤崎善助公綱入道有我、或号竹翁、慶長十五年或十六年入  
文之門、受業励学仁為御右筆、同十九年敷根中書立頼  
駿府・江戸へ御使者被仰付候節、公綱副使ニ而被遣候  
由、寛永十八年彈正殿宅ニ於て御文書調之節、藤崎六  
郎左衛門と云御右筆あり、公綱子乎、

八幡新田宮三社

在高城郡水引郷  
龜山

新田宮

所祭 天照太神 瓊々杵尊 栲幡千千姬命

八幡宮

所祭三所 一書曰、同宮崎、宮崎者所祭神功皇后、

応神天皇・武内也、然当社者末社有武内社、則仲

哀天皇、或玉依姬乎、

末社

武内社 住吉社

当宮者瓊々杵尊、而後代八幡太神ヲ崇入レ、一致ニ新

田八幡ト奉申、

一神代卷云、天津彦火瓊々杵尊崩、因葬筑紫日向可愛之

山陵、

龜山西北面ノ山腰ニ有陵、是曰可愛陵、神代遺跡也、

上古薩隅統曰日向国、後割日向置薩隅、

一書曰、薩摩国新田宮人皇四十五代聖武天皇神龜二年

建、是ハ八幡三所ヲ新田宮工崇  
メ入レラレタル時ノ年号歟、

上代自禁裡御寄進之神代五部神猿田彦命等之面于今存

焉、

此処号千台、疑是千々姬命在座台之意也、今日川内、

五所別宮之事

第一筑前国大分宮 神龜三年ニ建、

第二肥前国千栗宮 孝謙天皇天平宝字二年ニ建、

第三肥後国藤崎宮 朱雀院承平年中ニ草創、

第四薩摩国新田宮 神龜二年ニ建、

第五大隅国正八幡宮 欽明天皇五年ニ顯座、

神祇拾遺曰、件五座在外国不便參詣也、仍後柏原院大

永年中奉移山城国小山庄、西海ノ辺ニ八幡宮多ク勸請

シ玉フハ、異賊降伏ノ為ナリト宮崎八幡宮ノ社記ニ有

ト云ヘリ、

新田宮祀場七里方ニ掛ルニヨリ、咎人・欠落者搦捕事

難成故、承応四年二月神祇官領卜部兼起ニ御問アリ、

兼起答其状云、薩州新田八幡宮之祀場七里方之由也、

川向隈之城茂於氏子者祀場掛義尤也、非氏子者可無其

法、水引・中郷・高城三ヶ所、於氏子可為同事、且又

於致搦者武門之職法也、不獲止而用之、神者以清淨為

元、以正道為專、偏不廢社例則以代官神職、可清淨者

也、

本朝年代記ニ、新田宮建薩州同箱崎トアリ、

一俗ニ高江ノ内宮里ト云所ニ八幡御鎮座アリシヲ、後ニ

新田宮ニ奉移ト云コトアリ、社家ニ宮里ノ郡司ト云伝

茂アリ、以是見時ハ本瓊々杵尊ノ新田宮ニ八幡宮ヲ奉

崇入、一致ニ八幡新田宮ト奉申コトノ証也、

一当社累世ノ神職權執印ハ紀氏也、石清水勸請以後、以

紀御豊始テ八幡ノ神職ト定メ玉ヒテヨリ、国々ノ八幡

ノ大社大方紀氏也、尤八幡ノ善法寺紀氏也、

一新田宮延喜式神名帳ニ不載式外ノ神也、神祇拾遺ニ見

エタリ、

右都而異本神社考

八幡新田宮權執印座主一社

謹言上

抑地神第一之伊勢天照皇大神宮者、奉為新田八幡者祖

父御神日本鎮守申習波世登、當宮皇孫尊守給波奴加多目仁、

伊勢狹長田五十鈴川上ニ猿田彦太神顯彰向、第二代天

忍穗耳尊者又當宮御親父雖有降來聽而天上返終、第三

代瓊々杵尊ハ天照大神与忍穗耳尊ニ祖鐘愛シテ、(鍾) 豊葦

原中国主定給江波、從天上直ニ下給ヒ天与利以來、天正

甲戌迄一億五十一万四千七百十五年治世、卅一万八千

五百四十二年可愛陵葬斂阿利、從其以來天正甲戌迄一

百四十七万六千六十七年也、第四代火々出見尊新田第

二御子、治世不見給波、第五代葦不合尊當宮御孫、治

世八十三万六千四十二年南礼波、日本鎮守ハ新田八幡

異余社在所南礼波、余社例証一向不用在所也、中略ス、

一昔者雖為勅所當國守護御下知候処於、近比澁谷・東郷

地頭職不成本意存候処仁、如前代御屋形様御知行一社

満足申候上仁、庚午之春長寿院・河田殿以兩使何事茂

如前代被仰下候、守其旨於年始御礼・歳暮之卷数無懈

怠、年中勤行・講説・神樂勤仕申候、執印方宣義坊企

謀訴、輕神慮候、彼兩人非忠人、一社非不忠、高聞無

使者不開申愚意、以御分別達貴意者可開申喜悦之眉於

是、

是、

天正式年甲戌十一月十七日權執印 良慶 宗盛言上

水引

新田宮金灯炉之銘

於新田宮

奉寄進島津兵庫入道惟新

慶長八年癸卯十一月吉日

於新田宮奉寄進

慶長九年甲辰七月吉日

島津(忠長)函書入道紹益

右之表対神前ニ相掛ル、

同所鰐口之銘

嘉曆四年巳五月八日

兩願主 宮脇善二  
宰府藤九郎正信

一宝殿横五間入四間也、

一舞殿三間三尺方也、

右天保五年午四月十日入来湯治先より久仰行て(新納)拜し写し置、

水引

内裏大番之事被仰下旨

可令參勤人

川辺平二郎

別府五郎

鹿兒島郡司

⑩願

□娃平太

伊作平四郎

薩摩太郎

⑩知

□覽郡司

益山太郎

高城郡司

在国司

牟木太郎

江田四郎

莫祢郡司

山門郡司

給黎郡司

指宿五郎

南郷万楊房

小野太郎

市来郡司

滿家郡司

宮里八郎

萩崎三郎

伊集院郡司

和泉小太郎

右各守注文之旨、明春三月中令參上、令見知役所給也、

且於鎌倉殿仰旨如此、早可被存其旨之状如件、

建久八年十二月廿四日

左衛門尉 在判

薩摩国地頭御家人御中

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一七五号文書ト同一文書ナルベシ)

4 警固役事、自六月至七月被勤仕候、仍執達如件、

永仁二七月卅日

「忠宗公」  
忠宗 (花押)

新田宮執印殿

(本文書ハ「旧記雜録前編二」九九二号文書ト同一文書ナルベシ)

5 警固番役事、今年春分、以代<sup>⑩被</sup>官役勤仕候、仍執達如件、

永仁三四月十六日

忠宗

(花押)

新田宮執印殿

(本文書ハ「旧記雜録前編」二九九八号文書ト同一文書ナルベシ)

8 薩摩国凶徒退治事、去三月三日御教書如此、急速致用

意、相催<sup>⑩族</sup>一催、可被発向状、依仰執達如件、

曆応三年五月十五日

沙弥<sup>(貞久)</sup> (花押)

新田宮権執印殿

(本文書ハ「旧記雜録前編」二〇八三号文書ト同一文書ナルベシ)

6 肝付八郎兼重以下凶徒誅伐事、随守護催促、可抽軍忠之状如件、

建武三年三月廿八日

「將軍尊氏」

(花押)

新田宮執印又三郎殿

(本文書ハ「旧記雜録前編」二一八〇号文書ト同一文書ナルベシ)

9 大隅・薩摩両国凶徒退治事、去月廿一日重被仰付之間、

急速南方所発向也、早一族相共可被致忠節之状如件、

觀応二年十月二日

左馬助<sup>(尾張義冬)</sup> (花押)

新田宮権執印殿

(本文書ハ「旧記雜録前編」二二三七八号文書ト同一文書ナルベシ)

7 肝付八郎兼重与党凶徒等为誅伐、御発向大隅之間、為

抽軍忠、薩摩国一宮新田宮執印又三郎友雄令馳參候、

以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年四月廿八日

惟宗友雄

「貞久公」  
承了 (花押)

進上御奉行所

(本文書ハ「旧記雜録前編」二一八四号文書ト同一文書ナルベシ)

10 將軍家御台所御領日向国穆佐院島津庄事、畠山修理亮<sup>(直興)</sup>

伊東八郎已下直冬与同凶徒等、搆城郭濫妨之間、可令

对治之由、所被仰一色少輔太郎入道也、可致合力之件<sup>(⑩状)</sup>

如件、

觀応三年六月五日

「義詮將軍」 (花押)

新田宮執印殿

(本文書ハ「旧記雜録前編」二二四二九号文書ト同一文書ナルベシ)

11 於薩摩国致忠節之由、島津判官所注申也、尤以神妙、

弥可抽戰功之状如件、

文和二年三月十日

(足利義詮  
花押)

新田宮執印左衛門太夫殿  
(友進)

(本文書ハ「旧記雜録前編」二二四七四号文書ト同一文書ナルベシ)

12

薩摩国凶徒誅伐事、相「不明下有」高津判官師久、可被致忠節候、  
子細可令註進也、仍執達如件、  
(其)

文和二年四月廿六日

(右)左京權太夫(花押)  
(色直氏)

新田宮執印左衛門太夫殿

(本文書ハ「旧記雜録前編」二二四七七号文書ト同一文書ナルベシ)

13

一色殿并大友刑部(氏時)大輔攻入肥後国、被始合戰畢、仍為  
合力、所打立也、来十五日以前、可被馳寄和泉城・  
(同山門院問)

(月六日院問)、依執達如件、

文和四年三月三日

左衛門尉  
(少)

氏久公御舍兒  
師久公御判 (花押)

執印左衛門太夫殿

(本文書ハ「旧記雜録前編」二二五七八号文書ト同一文書ナルベシ)

14 契約

右雖以伝(女説)承子細候、不信用之儀候間、則申候畢、  
就其以契状如此承候之条、悦入候、向後も何様も聞得(義)

候とも可申候、又其方にも風聞之説候はん時者、則承

候て可令落居候、若此条偽申候ハ、当社新田八幡宮

并天満自在天神御罰お可罷蒙候、仍契状如件、

貞治七年二月三日

氏久(花押)

執印左衛門太夫入道殿

(本文書ハ「旧記雜録前編」二一八六号文書ト同一文書ナルベシ)

15

此塚合戰事、今時分大綱候之間憑存候、御同心候ハ、  
日来可為本望候、尚々憑存候、委細御返事可承候、恐  
々謹言、

六月十七日

謹言(上)

執印殿

(本文書ハ「旧記雜録前編」二二五八六号・「同前編」二一七四号文書ト同一文書ナルベシ)

修理亮氏久(花押)

16

誠新春之吉賀、珍重幸甚々、不可有尽期候、抑其方越  
年可申存候処、月迫及候余取乱候て無其儀候、聽而く  
參詣可申、御殿之ひさしの事、きふ給へく候得共、入  
候ハ、取来共ふせさせを、板敷いかほと可入付候哉、  
重而ひさし木符可給候、又一束一本預候、祝着候、是  
より茶碗をち二ちやわんミたし候、恐々謹言、

正月五日

忠国（花押）

権執印御返事

（本文書ハ「旧記雜録附録二」六〇三号文書ト同一文書ナルベシ）

17

右意趣者、於身上一世之間通忍名災難、殊島津少將藤  
原忠恒朝臣為国家泰平、武運長久、息災延命、子孫繁  
榮、諸願成就、太刀一振吉奉寄進之者也、仍願文如件、

島津兵庫入道

慶長六年八月廿四日

惟新（花押）

新田八幡宮社司

（本文書ハ「旧記雜録後編三」一五四五号文書ト同一文書ナルベシ）

18

昨日者此方迄預御尋候之処ニ、殊外致酒醉①沈、即不遂參

会候之事、不及是非候、委候旨為可申述如此候、恐々  
謹言、

正月十二日

家久（花押）

執印河内守殿

御宿陣①所

（本文書ハ「旧記雜録附録二」四〇二号文書ト同一文書ナルベシ）

19

改年之御慶重々目出申納候、仍川幡新左衛門殿事者、  
連々嗜被申方にて候間、知行四百石之目錄を今月末ニ  
可被下之由、旧冬堅固ニ被仰付候条、先々為御内証用  
書札候、在所之儀者罷居られ処へ乍召置たるへく候、  
名之儀者五大村を望次第可被遣候旨候、恐々謹言、

樺山権左衛門

正月元日

久高判

執印丹波守殿  
「不明」

（本文書ハ「旧記雜録附録二」一三七号文書ト同一文書ナルベシ）

20

新田宮

杉苗 十万本

右依宿願奉寄進之状如件、

宝永三丙戌

四月八日

少将吉貴 (花押)

21

献上

新田宮

御太刀

一腰阿波守  
康綱

右於江府西之丸御安産、依宿願成就奉寄進者也、仍  
(状脱力)  
如件、

宝永四丁亥

七月廿六日

少将吉貴 (花押)

22

「水引観樹院蔵」

右大将家政所下

右兵衛尉惟宗忠久

可早為大隅・薩摩両国家人奉行致沙汰条々事

可催促内裏大番事、  
(令)

右催彼国御家人等、可令勤仕矣、  
(勤)

建久八年十二月三日

令大藏丞藤原(頼平)在御判

别当前(天江広元)因幡守中原朝臣在御判

散位藤原朝臣

祭主清原  
知家事中原

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一七四号文書ノ抄ナルベシ)

要用集しらへ

神龜山

大乘院末  
観樹院

高四拾六石

23

「水引観樹院蔵」

去六月廿二日、薩摩国南方御敵并洪谷人々押寄碓山城、  
及散々合戦、御敵既取破城壁垣立攻入之時、自 八幡  
新田宮御山、鎗音二三度響入于寄手凶徒中、其時神慮  
令然哉、御方軍勢乘勝致合戦之間、彼凶徒等討負引退  
畢、神明貴仰而猶可奉仰者哉、仍為御不審、注進言上  
如件、

曆応二年八月十五日

左衛門尉久景  
(酒匂)

進上御奉行所

(本文書ハ「旧記雜録前編二」二〇五八号文書ト同一文書ナルベシ)

24 「水引九品寺縁板之由、松板ニテ釘跡并フシモアリ」

禁制

宮内

兵船軍勢、乱妨狼藉放火堅令停止候、此旨相背輩可加  
成敗者也、

卯月廿七日

九鬼大隅守 (花押)

脇坂中務少輔 (花押)

加藤左馬助 (花押)

小西日向守 (花押)

(本文書ハ「旧記雜録後編」二二八六号文書ト同一文書ナルベシ)

高城郡 水引郷

五代村 山王 薩城より西ニ去事拾三里

祭神前ニ同

十一月初申祭

一祭料壹斗七升五合

一当社ハ天文拾五年丙午十一月勸請、

神職 寺田平右衛門

一天満宮 一権現

一若宮八幡宮 一小手洗社

一大將軍 一権現

一射勝大明神 一諏方大明神

一池神社 一天神宮

一山之神 一霧島社

一若宮 一蛭児

一伊勢 一権現

一祇園社 一蛭児

一射勝大明神 一権現

一年之神 一矢房

一諏方大明神 一軍神

一山之神

右神社考

宗廟山王社 角面

右者往古水引山之内つる坊と申人京都より守下シ勸請

之由申伝候、

右文化十一戌十一月書出、

末社

天満宮 国分寺 在高城郡水引

宣旨・院宣数通在国分家詳矣、

祭祀毎月五六度或五節供之祭祀、薩州七ヶ外城ヨリ祭

供ヲ献ス、院宣并鎌倉之御教書ヲ以也、専勅命ヲ以天

下太平ノ御祈禱被修ト見エタリ、何年ヨリ断絶有ル哉、

日本記曰、元正天皇養老五年、依勅命立諸国国分寺、

千台国分寺、古記云、当社寺者是養老年中建立、聖朝

御願云々、天満宮勸請時代相違、天神者人皇六十一代

崇天満大自在天神也、養老年中人皇四十四代也、可考、

領家御使伊与法橋御房上洛之時京進畢、  
〔元亨元十日〕

25

薩摩国 天満宮国分寺所司神官等謹解申進申文、請殊

早被経御 奏聞、且先例〔且任力〕○興行御徳政法、被造替〔且任力〕当宮

并国分寺堂塔等、弥耀神威、奉祈天長地久御願子細状、

〔本文書ハ旧記雜録前編二二二八号文書ノ抄ナルベシ〕

右都而異本神社考

天満宮 木像

興楽寺

別当

国分寺

右人皇六十二代村上天皇御宇〔和〕永三亥御建立、日本

三天神太宰府安楽寺・京都北野豊楽寺・薩州興楽寺

ト文書ニ見得候、往古ハ神領段々有之候由、当分高

九石御座候、

右文化十一 戊十一月書出、

26

大小路村之内国分  
一 天満宮

右建曆年間ヨリ田村石見守勤来申候、

五代村之内上村  
一 大将軍社

大宮司  
植村源左衛門

右天文八年五月三日正祝子田村助六勸請仕候、

施主

長田源左衛門

右同

九郎左衛門

右同

松五郎

右同

三郎兵衛

大宮司

拾郎兵衛

五代村  
一 霧島

右天正年間正祝田村彦左衛門勸請仕候、

施主

八右衛門

右同

藤三

大小路之内風口  
一熊野權現社

右同

新左衛門

大宮司

森安兵衛

右慶長九年權祝子日高善左衛門勸請仕候、

施主

同姓伝介

一不詳也

五代村之内

一高月權現社

大宮司

曾木甚右衛門

右慶長十二年正祝子田村彦左衛門勸請仕候、

施主

長田伊与介

右同

久長民部左衛門

右同

同名帯刀介

右同

丹生河勝兵衛

右同

深川次郎左衛門

施主大小路町

町中

大小路町  
一祇園社

木像

大小路町之儀ハ往古より新田宮連名町と申候而、每

年六月廿八日、十五歳より内之童共為御鏡スマシト

参詣仕相勤申候故、祇園社御祭相勤申候節祓清仕候、

尤右之訳を以以来より私先祖代々相勤来申候、

五代村之内

一軍神社

大宮司

権右衛門

右神元龜年間權祝子日高善右衛門勸請仕候、

右同  
一若宮八幡

施主

治右衛門

右同

清左衛門

大宮司

万兵衛

右天文年間正祝子田村彦左衛門勸請仕候、

施主

右同

半右衛門

右同

市左衛門

右同

吉右衛門

大宮司

源左衛門

右同河底村

一射勝大明神

右天正年間正祝子島元左近勸請仕候、

施主

洪谷左兵衛

右同

山崎源助

右同

同吉左衛門

右同

同孫左衛門

右同

太郎

右同

三郎

右同

九左衛門

右同

千右衛門

大宮司

源左衛門

右同右同

一塩人大明神

右天正年間正祝子島元左近勸請仕候、

施主  
洪谷左兵衛

右同  
山崎源助

右同  
同姓平左衛門

右同  
同姓孫左衛門

右同  
太郎

右同  
三郎

右同  
九左衛門

右同  
千左衛門

別当  
若宮寺

草道村  
一若宮八幡

同  
右天文年間權祝子日高内記祭来申候、

一射勝大明神

庄助

右寛永四年正祝子田村彦左衛門祭来候、

施主

湯田内記

右同  
平左衛門

右同  
八兵衛

右同  
重右衛門

大宮司  
賀右衛門

平島  
一諏方上下両社

右寛文八年正祝子田村彦左衛門祭来申候、

施主

葉師子六左衛門

右同  
寺田良右衛門

右同  
酒匂堅助

右同  
浜田千兵衛

右同  
十島主計

右同  
大野七郎右衛門

右同  
平右衛門

右同  
九郎右衛門

右同  
休左衛門

大宮司  
賀右衛門

平島  
一池之神社

右寛永六年正祝子田村彦左衛門勸請仕候、

施主

十島賀右衛門

右同  
同主水祐

右同  
同助五郎

右同  
同善右衛門

右同  
弥六左衛門

別当  
神護寺

網津村之内  
一小盤大明神

右寛文七年正祝子田村石見守神事勤来申候、

大宮司

六右衛門

施主  
染川孝左衛門

右同  
湯田筑右衛門

右同  
清左衛門

右同  
長左衛門

右同  
孫左衛門

右同  
伊左衛門

右同  
六左衛門

大宮司  
新右衛門

同所  
一山之神

右慶長八年十一月正祝子田村助七勸請仕候、

施主

中村孫八郎

右同  
藤井拾郎左衛門

右同  
浜田源左衛門

右同  
九郎右衛門

右同  
六右衛門

同所浜田村  
一山之神

大宮司  
源太

右慶長七年十一月正祝子田村彦左衛門勸請仕候、

施主

勘右衛門

右同  
長右衛門

右同  
兵右衛門

五代村之内小倉  
一八尾大明神

大宮司  
周右衛門

右正祝子田村彦左衛門古来より祭来申候、

施主

江川宰相并女

右同  
柏木太郎左衛門

右同  
春坂勝介

右同  
得兵衛

右同  
左左衛門

右同  
仲左衛門

右同  
勝右衛門

右同  
平兵衛

右同  
次郎右衛門

船間島  
一十郎太夫社

右神事之節、我々共三家并内侍兩人罷下り、古来よ

り勤来候、

京泊津口  
一船頭社

右同断祭来申候、

右神社祭方我々先祖代々勤来申候、且又其郷氏子共霜

月之砌、氏祭等当時迄無退転祭方相勤来申候間、是等

之趣を以御申上奉頼候、以上、

新田宮正祝子

延享四卯四月廿七日

田村岩右衛門

水引  
医王山

正智院

祈願所真言宗  
泰平寺

高廿壹石八斗

門前地蔵

27

薩摩国泰平寺塔婆事

院宣如此、為六十六基之随一、(㊦定于) (㊦可)〔寄〕料所造立、可被存

其旨之状如件、

曆応一年十月十四日

(足利直義)  
左兵衛督判

泰平寺長老

(本文書ハ「旧記雜録前編」二二〇二〇号文書ト同一文書ナルベシ)

28

奉安置薩摩国泰平寺塔婆

仏舍利二粒 一粒東寺

右於六十六州之寺社、建一国一基之塔婆、忝任申請、

既為勅願、仍奉請東寺仏舍利、各奉納之、伏冀皇祚悠

久、衆心悦怡、仏法紹隆、利益平等、安置之儀旨趣如

件、

曆応二年八月十八日

(㊦督)  
左兵衛朝臣直義判

(本文書ハ「旧記雜録後編」二二〇五九号文書ト同一文書ナルベシ)

写在御記録  
一書物壹卷

但立久公御判有、

29

義久公御印有

当国寺社領事、以御下知令勘落候、雖然先年御動座之

(㊦被居)刻 御陣候条、不混自余、寺領別紙(㊦被居)事如先々被仰付

候、被全寺納、可被抽懇折之由候、恐惶謹言、

天正廿

町田出羽守

九月三日

久倍判

泰平寺

(本文書ハ「旧記雜録後編」二九五八号文書ト同一文書ナルベシ)

30

泰平寺領目錄

一田方六町八段八狭三步

一分米六拾八石八斗壹升

一畠方壹町五段

一大豆七石五斗



久印文義久

⑩山  
一大畑壺町五反式狹

大豆三石四升

都合田畠山畑九町九段三步

両口合七拾九石三斗五升

天正廿年九月三日

町田出羽守

久倍判

(本文書ハ「旧記雜録後編」二九五九号文書ト同一文書ナルベシ)

31

大小路村之内、<sup>⑩合</sup>今佰五石、

如先規不混于他、令寄附之訖、

慶長五

島津兵庫入道

十二月八日

惟新御判

泰平寺

(本文書ハ「旧記雜録後編」三二一四一七号文書ト同一文書ナルベシ)

一薬師

泰平寺中ニ有、

32

薩州高城郡泰平寺薬師堂一字、、、右奉修興趣者、、、

大檀那修理亮藤原朝臣立久、

(本文書ハ「旧記雜録後編」二四三三号文書ト同一文書ナルベシ)

⑩文  
天正元年丙戌五月十二日

藤原氏給黎忠俊

住持沙門文鏡

(本文書ハ「旧記雜録前編」二一四四〇号文書ト同一文書ナルベシ)

33

古推鐘銘

薩摩国高城之郡千台医王山泰平寺薬師如来御宝前推鐘

于時永禄六曆癸亥二月八日

当住持

大檀那

正智院宥鏝

水引地頭ノ

平朝臣重綱

奉行

原信乘

大願主

平重陳

勸進妙門

藤原政盛

作者

野崎大膳亮

勸進妙門

藤原兼定

作者

高野山長乘

藤原信統

同信直

一二王堂

右藥師并二王者、仁皇四拾三代(元)天明皇帝御宇和銅元

年ニ建立之由申伝候、

右神社仏閣帳

右從(綱久)泰清院様屏風壹双差上、為代銀被下候、

一禁中様御文書 一通

但文永年間之由相見得候、

一公家様方御文書 一通

一將軍家御教書 三通

但一通ハ仏舍利ニ相添文書、

一立久様御判之勸進帳 一通

一義久様御判之奉加帳 一通

一惟新様御状 一通

一義久様御代御状 一通

但寺領目錄、

一家久様御書 一通

一家久様御代寺領目錄 一通

一義虎様御判之奉加帳 一通

右寛保二戌五月書出、

水引

靈光山

菩提所曹洞宗  
鷲岳寺

高式石

右神社仏閣帳

藥師 木像

右元明天皇一刀三礼之作と申伝候、和銅年間勅造之

寺ニ而候由、

右文化十一年戌十一月書出、

水引

一医王山

泰平寺

大乘院末

正智院

元明天皇勅願所

真言中興開山宥海法印

永祿年間与相見得候、

但前代者天台宗、又者真言律宗之由申伝候、

高式拾壹石八斗

一四ツ宝銀式拾枚

右從 光久公藥師為仏餉料御寄附、

一四ツ宝銀式貫七百目

靈光山

高城信興寺末  
鷲岳寺

高式石 寄附之訊不知

開山鑑嶺和尚

但惟新様御帰依僧ニ而、帖佐惣禪寺より 御意ニ而

被差越候由、

右寛保二戌五月書出、

一 国分寺格諸天満宮社頭、天曆帝依勅応和年中御建立、  
右要用集しらへ

白雲山 竹林院 惠念寺

明徳元年三月大檀越執印久馬

明徳ノ比執印系図ニ久馬不見得由、

開山宣阿弥

本尊阿弥陀作不知

一 境内除地

但 豎廿四間 横八間 寺地御免

豎十四間 横九間 墓地

一 阿弥陀堂地 豎式間 横式間

右元禄十五年四月書出、

水引  
護国山

威徳院

大乘院末  
国分寺

高九石壺斗

天満宮

国分寺格護

社領高無之、祭寺役ニ相勤候、

右寛保二戌五月書出、

威徳院

(護脱之)  
国山

真言宗  
国分寺

高九石壺斗

右神社仏閣帳

神社仏閣帳

成徳院 照常寺

真言宗  
佐目野寺 (山)

(感) 高式石壺斗八升九合

高城郡  
水引  
法器山

不斷光院末  
浄鏡寺

一 開山不詳、養老元年丁巳創建、  
一 聖武帝勅願所、日本国中一ヶ寺之内ニ而候、

開山運誉上人、姓氏本田、生国肥前高木人、寺起立

慶長二丁酉二月、寛永三丙寅年正月十五日遷化、八十有餘、

天徳山 伊集院広濟寺末  
臨江寺

開山玉田 (琢) 七月十日示寂年間不知

開創檀那光輝都仁庵主

(マ) 寛応二年癸巳九月八日

開創年間不知

前住以来至現住葛山 十四世

右享保六丑十二月書出、

34

高城郡高城郷麓村

○屋形ヶ原 大小路口に近し、

同郷麦之浦村

○一条社 伝云、昔時新田宮へ奉幣の勅使一条殿大

臣此所にて病死あり、其靈神なり、

右名勝考

高城郡 高城 寺地改

浄岳寺 (興) 真言大乘院末御免地  
高老石寺社方合力

宮司坊 右同末御免地

信興寺 曹洞帖佐総禪寺末御免地  
高五石寺社方合力

英岳寺 信興寺末

慈眼寺 右同末

永源寺 右同

意足寺 右同

量寿寺 (院) 右同御蔵入地

川内 高城  
妙見大菩薩

宗廟

亮洲随筆

祭日九月廿九日

一高城郡司伴姓武光太郎、是 忠久侯之時高城郡司職を勉むなり、其本伴姓天智帝・大友の皇子之苗裔也、建久八年内裏大番御廻文ニ高城郡司と有、武光也、涉谷落合六郎重貞は東郷早川太郎実重か六番目之弟也、宝治年中下向して高城本地頭と成、五代下総権守重雄まで系に見る、

祭米五斗式升五合從公義出ル、

社屋敷五畦

右神社仏閣帳

妙見神社 薩城より西拾三里拾五丁

勸請年曆不詳

右神社考

高城郡高城郷  
高城三社権現

祭神

七月十日祭

一高三石 高城六右衛門家より寄附、

内壺石五斗 祭料

壺石五斗 寺料

一当社ハ渋谷家城主之時慶長年中、渋谷備前守父子三人  
を崇祭、三社権現と称す、

右神社考

高城郡 高城郷

末社

一若宮権現

一天満天神

一諏方大明神

一西谷彦山権現

一惠美須

一春日大明神

一白髮大明神

一山之神

一蔵王権現

一北山山王

一諏方大明神

一山王

一金峰山蔵王権現

一妙見宮

一八房

一伊勢大明神

右神社考

高城郡

一駒之宮

一祇園宮

一伊勢大神宮

一中山権現

一児美権現

一鎮守権現

一山之神

一山之神

一条妙見

一龍宮

一頭大明神

一熊野王子

一諏方大明神

一早馬大明神

一湯屋権現

一拾五社

高城  
麓村惣廟 地頭飯屋ヨリ未ノ方五丁程  
一妙見宮 正体鏡

右上代惣社ニ而、祭田八町相付居候由、天正年中兵

乱之節焼失、其後再興之年間不知、

麓村 地頭飯屋ヨリ丑寅ノ方四丁程  
一諏方大明神 正体鏡

右永正十四年七月造立、高城之城主渋谷家勸請之由、

麓村 右同申ノ方三町十五間程  
一高城三社権現 正体鏡

右高城之城主渋谷家高城備前守死去之後、慶長三<sup>十一</sup>九

年之比、父子三人を三社権現与崇候由、且高城六右

衛門殿寄附高三石有之内、老石五斗八社付、老石五

斗菩提所信興寺江被付置候由、

麓村 右同申ノ方三丁式拾間程  
一駒之宮 正体木像

右上代高城之城主渋谷家高城備前守息ニ而候处、落

馬ニ而死去ニ付、駒之宮与崇為申由、年間不知、

麓村 右同巳ノ方七丁程  
一祇園天王宮 正体石

右承応三年午十月所中より勸請

一伊勢神社 正体石 右同未ノ方七丁程  
麓村西谷 右同戌ノ方六丁程

一彦山権現 正体石  
麓村 右同亥ノ方八丁程

一中山権現 正体石

高城郡高城

城上村 右同亥ノ方十二丁程  
一春日大明神 正体石

右四社勸請年代不知

右同 右同子ノ方一丁程  
一兎美権現 正体石

右霧島勸請之由、年間不知、寛文六年午二月再興有

之、

右同 右同 一里十三丁程  
一山之神 正体石

右同上小川 右同亥ノ方一里廿丁程  
一藏王権現 正体石

右御社勸請之年代不知

麦之浦村 右同西ノ方半里程  
一諏方大明神

右勸請所中より之由、年代不知、明曆二年申四月再

興有之、

右同村 右同戌ノ方一里半十丁程  
一一条妙現宮

右一条院勸請之由、年代不知、寛文十八年巳三月再

興有之、

麦之浦三藏 右同中西ノ方十四丁程  
一藏王権現 正体石

右勸請年代不知

湯田村 右同戌ノ方二里程  
一天神社 正体鏡

右貞和三年亥十一月左衛門尉重躬勸請、前代祭田式

町六反相付居候由、天正年中兵乱之節被召上候由、  
同所 右同亥方二里五丁程  
一諏方大明神 正体石

右勸請年代不知  
同所 右同亥方二里半程  
一湯屋権現 正体石

貞享二年丑二月勸請  
西方村 右同亥方二里半十丁程  
一十五社 正体石

勸請年代不知  
同所 右同亥方三里程  
一早馬大明神 正体石

右都而文化十一 戌十一月書出、

渋谷山 信興寺末 慈足寺

開基年代不知、上代高城城主渋谷家之時造立之由、  
信興寺退転之節同前退転之由、依之信興寺二世鑑嶺

勸請中興也、  
福寿山 信興寺末 慈眼寺

開基年代不知、上代信興寺五世朴詠淳勸請開山也、  
信興寺末 量寿院  
西方山

開基寛文 丑九月、檀方中依願造立、信興三世騰雲(應)

勸請開山也、  
大乗院末 宮司坊  
天満山

開基年代不知、元禄之比全秀と申僧再興ニ而中興開  
山也、  
群玉山 西来院 禪宗帖佐惣禪寺末 信興寺

高五石 惟新様御寄附之由、年間不知、

一(貴久)大中良等庵主  
一(義弘)松齡自貞庵主

一信興寺之儀、先年退転以後 惟新様へ此表御拝領被遊

候節、帖佐惣禪寺住持鑑嶺和尚事 惟新様御帰依僧ニ  
而被仰付候ハ、信興寺事古跡ニ而候間、再興可仕旨  
御意ニ而鑑嶺ニ罷移候、其節より 大中様・松齡様御

牌御立被遊、高拾六石御寄附ニ而、 惟新様ニ茂一両  
度御光儀被遊候由申伝候、然処其後漸々知行高被相減、

当時高五石御座候、其上前々より御免之寺地有之候処、  
明暦三年之比御竿入ニ而高五石五斗余御蔵入ニ罷成候

ニ付、其以後段々御訴申上候得共、相達不申候由申伝

候、

一 当寺 惟新様御意を以惣禪寺鑑嶺被罷移候、再興之年

月不相知、尤信興寺開基年月・施主之名委不相知、昔

日高城之城主洪谷家之時節者七堂伽藍之地ニ而、衆僧

茂拾四五人程も為罷居由候、開山ハ玄室玖和尚、福昌

寺天祐和尚之法嗣ニ而、代々六世蘭室和尚住山之時、

高城・出水迄天領ニ相成、信興寺も其節退転仕、其後

鑑嶺罷移、福昌寺五代心岩信大和尚を以致勸請、鑑嶺

元珠大和尚ハ二代ニ而候、

右寛保二戌五月書出、

群玉山

菩提所石屋派  
信興寺

高五石

寺地御免

右神社仏閣帳

一 信興寺天正年中兵乱之節退転、其後 惟新公御帰依僧

帖佐総禪寺鑑嶺へ以御意再興有之、上代高城之城主洪

谷家之節者、寺領八丁有之候由、

川内 高城  
桃華山

多楽院

大乘院末  
真言宗  
浄興寺

高壺石 御物より被召付置候、

当寺者建立開基年月不知、開山ハ尊慶上人、上代ハ大

伽藍ニ而寺領八町余為有之由、

右寛保二戌五月書出、

桃花山 多楽院

三宝院派  
浄興寺

高壺石壺升

寺地竿御免

右神社仏閣帳

一 浄興寺開山尊慶上 [ ] 年中開基、上代寺 [ ]

[ ] 候処、天正年中兵乱之節 [ ] 其後小庵相成候由、

一 莫祢城ハ莫祢兵衛尉平姓成友、是鳥津四代忠宗侯之時

令居城也、 忠久侯時何某不知、建久御下文ニ茂莫祢

院郡司と在て字なハ不記、成友は其本桓武帝七世駿河

守貞道、第八世神崎太郎成兼、寛元四年十二月四日鎌

倉殿より莫祢院を給て下向す、此子孫十世得系図たり、  
此庶流遠矢次郎太郎成兼入道(長)也武功有て、尊氏將軍  
の御教書を給ふ、

亮洲隨筆

神社考  
一 祭神 額娃開聞社ニ同し

一 祭米 三斗五升

一 勸請年曆 不詳

一 薩城より西ニ去二拾里

莫祢アケネ郷波留村

名勝考

大島  
金毘羅社

母子島 今大島ニ作る、波留村を距る事一里、周廻

又一里、

錦浜 波留村の左方ニあり、

光瀬ヒカリ 錦浜の前に在り、海中の岩礁なり、

阿久根山下村

開聞正一位

宗廟

正体木像 并脇立八体木像

祭日 二月三日 十一月三日

祭米 三斗五升

前代ハ知行壺町五段為相付と申伝候、当分ハ兩度之祭  
米三斗五升被下候而相調申候、

右神社仏閣帳

阿久根 末社

一 諏方大明神

一 天満自在天神

一 伊勢太神宮

一 戸柱大明神

同島  
祭米 壺斗三升ツ、年々御物より被相渡候、

山王社

右先年より大島之内へ石を建置、山王と崇有之候処、

天明七未五月 重豪公より造立之儀被仰出、本山王

之地より外之場所へ社殿御造営有之、本山王へハ神

垣御造営有之候、但祭米等者不被下候、

右二社寛保二戌五月并文化十一年戌十一月書出、

一八幡宮  
一天滿天神

一伊勢太神宮  
一諏方大明神

一若宮八幡宮  
一霧島六社權現

一八幡宮  
一春日大明神

一天神宮  
一中津宮大明神

一高津五大明神  
一妙見

一八龍宮  
一稻牟礼大明神

一八ノ王  
一岩船大明神

一山之神  
一切目王子五社大明神

一御靈大明神  
一稻荷大明神

一池之宮大明神  
一天滿自在天神

一稻荷大明神

右神社考

阿久根  
瑞香山

菩提所  
蓮花寺

開山高標和尚、但開基応永五年戊寅、

高壺石

寺地御免

宝物

一大般若經 一部

一磬 一口并

一鈴 一ツ

一鉞 一双

一鞞 一ツ

一丁板 一張

御文書

35 薩州阿久根院蓮花寺之事、号開山南溪和尚并檀那開山

(島津)藤原国久、於子々孫々此寺他門之妨候者、以此状可有

其沙汰候、仍為後日如件、

文明二年庚寅十月九日 藤原国久判

蓮花寺監寺法盛侍者

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一四六四号文書卜同一文書ナルベシ)

36 (本文書八四九号文書卜同文ニツキ省略ス)

37 此方為湯治罷越候、御留主之事候間、不能面拝候、今

一七日茂望候へ共、此方種々申合候間、ふと可罷歸候、

今度罷(通)入御見事候、日比之本意此事候、随而為折(通)真読之大般若読度候、百卷可得御意候、五百之内申請度候、其余者彼方此方ニ誂候、可有御察候(願)、配慎

(本文書ハ「旧記雜錄附録二」九号・同附録二二二四三号文書ト同一文書ナルベシ)

進上  
侍者(禪師)  
藤原国久判

改年之御吉賀千喜万幸、不可有際限候、珍重々幸甚々、抑年明候ハ、最前之御祝言可申上候処ニ、此境ニ依逗留候無其分候、如何様近日可罷越候間、以面上心事可申承候、次之時者可預御披露候、恐惶謹言、

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一三五九号・同附録二」六〇五号文書ト同一文書ナルベシ)

南溪和尚御足下  
十一月廿四日  
忠国御判

今春之御吉賀可有際限候、抑其方ニ御越之後可申通候(不)、海陸(共)ニ依不輒候、無音之至慮外ニ候、仍此境ニ未逗留仕候、定被聞召及候哉、延草寺其ニ御渡(慶)ニ、三郎太郎ニしかるへき様と御催促候ハ、可目出ニて候、恐々謹言、

(本文書ハ「旧記雜錄附録二」六〇六号文書ト同一文書ナルベシ)

二月三日  
陸奥守忠国御判  
南溪和尚侍者之御中

当年之御祝言千秋万歳、不可有際限候、抑年明候者早々可申入候之処ニ、于今延引候、路次迷取明候ハ、最前參御祝詞可申入候、恐惶謹言、

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一三六二号・同附録二」六〇八号文書ト同一文書ナルベシ)

正月十二日  
侍者(禪師)  
忠国御判

之事ハ(口上)ニ而可認候、恐々謹言、  
五月四日  
南溪和尚  
忠国御判

蓮花寺置文

恐以謹狀申上畢矣、抑吾宗之源者、太宗国之径山禪寺無準和尚之嫡子無學祖元禪師也、大徹大悟之後在禪定中、嘗見神人峨冠偉服手執圭、告曰、願和尚降我國、如是者數矣、然每神人到、先一金龍來入袖中、亦有群鴿子、或青白之者上膝上、如此依有此、二子因緣渡于日本來終入于鎌倉、一時有人語曰、当境有明神曰、八幡大菩薩、威靈甚新、師已棲斯界、盍詣祠燒香一遭、因此至八幡宮、視殿梁上有數箇木鴿子、門之對者曰、此神之使鳥耳、故偶焉、即知、定中峨冠此神也、此故円覚寺創造、命元（祖脱力）為開山第一祖、諡仏光常照國師、其嫡子陰陽五山之上海禪寺規庵祖円禪師也、其嫡子蒙山和尚也、其嫡子伊集院広濟寺開山南仲和尚是也、其弟子南溪崇薫和尚也、然当家御先祖桂林居士（島津國久）幼稚御時有子細南溪和尚為御弟子、号崇津坊御喝食、広濟寺小師坊者河野辺延慶寺得翁禪師、今極楽寺之開山是也、崇津御坊年來十二三之頃、御屋形忠国様被聞召及、於鹿

児島有元服之後藤原国久尊公也、以茲当家御繁榮、自国久様到于当御代五代也、然松夫（島津用久）様出水莊御知行之後、国久依為御師匠、以豊饒山永泉寺被進、南溪和尚辭広濟寺、來而居住于永泉寺年尚矣、然暨暮齡希隱居之所、蓮花寺事者本感応寺一派也、有子細闕所成無主也、日向矣、其時感応寺住持無門和尚也、是故欲隱居所被進、南溪和尚居住六年、終八十一之四月廿八日逝去、辭世頌曰、画堂露命八十一年、欲知的旨伝在不伝、書了拋筆示寂、到于今為当寺開山第一祖、到于拙僧五代也、英檀亦五代也、從南溪以來海田庵為末寺、持來凡四十年、到于慈真首座從当寺之塔中多宝院懸持海田庵、使沙弥留守、其沙弥依有出家方外、其時之地頭松崎丹波守称其咎奪取海田庵、而楞嚴寺之僧被付就藏司道号臣則、天文七年戊戌正月廿日逝去、位牌亦尚庵中興巨則就公書也、其証跡如此、自其鉄藏主、其後降藏主三代也、今度不凶棄此庵而出奔他所、而成闕所者有日、以茲拙僧一日昔由緒一闕所、即是鳥銚花也、（銚力）以茲松下長門守方依為私領所望于再于三、雖拒辭、長門守亦日安慶菩提而賜事無其藏次第也、昔由緒殊闕所、日彼日

此被付于拙僧、然所楞嚴寺門中十ヶ年余企徒党、或握  
噴拳、或对劍於道路过、拙僧踏殺之巧、或蓮花寺乱入  
而押取可持之儀歷然也、其外上之御寺打破、而他宗借  
宿稽留事日尚、是則為道理乎、又為紕謬乎、如是則拙  
僧亦粉骨分髓不可有棄此庵、沙門者慈悲為室柔和為衣、  
避四業守五戒者專一也、武家亦文以兼武、武以兼文、  
文武兩備、禪宗亦道以修德、德以修道、々德俱全矣、  
嗚呼拙僧無道無德、而有何所依乎、雖然忝頂戴關東之  
副將軍時氏御判、鎌倉十刹之首賜禪興寺帖、如形換袈  
縷色、住于蓮花寺者二十有八年、齡亦耳順欠二、非老  
衰又非若輩、争構虚語吐妄(ハ)乎、拙僧一門徒雖多不借  
一人人口舌唯一ヶ心上耳、各蒙慈愍、次之時被達上聞者  
本望也、心事雖夥万端難尽筆墨、恐惶不宣、

一

昌岳庵

知行壹石

寺地御免

右者昌岳庵今御藏入ニ罷成候、出水之太守陽久公蓮花  
(鳥津義虎)  
寺隱居所ニ御定為被成由候、弘治三年十二月吉日与御

座候、陽久公御判之御書物于今御座候、  
右神社仏閣帳

阿久根  
瑞香山

伊集院広濟寺末  
蓮華寺

出水前太守国久建立之古道場也、

寺地御免

一本尊聖觀音座像

脇立兩尊高壹尺八寸  
定朝作之由

一開山高標

阿久根殿二岡

応永五年五月十日示寂

但高標・南溪兩住之間、百年余住持不知、  
(寅)

一中興開山南溪文明四年  
四月廿八日遷化

右広濟寺開山南仲弟子也、

国久様幼稚之御時有子細南溪為弟子、御喝食之時有広

濟寺出家ス、名於号宗津坊、年来テ十二三之御時鹿兒

島御屋形 太守忠国様被為聞召、於鹿兒島ニ元服有之、

後藤原国久也、出水庄御家督之後、南溪依為御師匠在

御進而、雖辞来不止蓮花寺住居畢、依是号開山第一祖、

右由来書付在之也、

一蓮花寺殿（爲津國久）桂林国久大居士

明応七年 戊午 七月廿九日卒去

忠国様御舍弟用久様之御子也、

右者奈毘所御石塔有之、尤出水薩州之七代御石塔有

之候、

一寺領 大石田六町有之候、応仁元年 丁亥 十二月八日正

繁御記之書付有之候、先年毀破之時分より無縁地ニ罷

成候、

43 建仁寺住持職事、任先例、可被執務之状如件、

元龜三年九月五日

宗宝西堂

（足利義昭）  
權大納言判

44 筑前国聖福寺住持職事、任先例、可被執務之状如件、

永祿七年四月二日

宗宝西堂

（足利義輝）  
左中将判

（本文書ハ「旧記雜録後編」二二九〇号文書ト同一文書ナルベシ）

45 薩摩国大願寺住持職事、任先例、可被執務之状如件、

永祿二年四月廿三日

宗宝首座

（本文書ハ「旧記雜録後編」二一三三号文書ト同一文書ナルベシ）

46 薩摩国大願寺住持職之事、任先例、可被執務之旨、被

仰下之状如件、

十月廿六日

渋谷又次郎良重判

宗宝首座

（本文書ハ「旧記雜録後編」二一三三号文書ト同一文書ナルベシ）

47 日向州大慈寺住持職事、任先例、可被執務之状如件、

寛永六年二月七日

季雲西堂

中納言家久判

（本文書ハ「旧記雜録後編」二〇八号文書ト同一文書ナルベシ）

48 広濟寺住持職事、任先例、可被執務之状如件、

寛文十二年十一月廿八日

少将光久判

守陽西堂

以上元祿十丑二月書出、

天文十辛丑七月廿二日卒去

六代大通(鳥津義虎)広公大禪定門

天正十三乙酉七月廿五日卒去

享保六丑十二月書出、  
一当山四世仁室和尚、永祿六癸亥四月十八日示寂、勅

由緒書之内

賜仏智法照慈勝禪師号、(補)倫旨緹襲藏于寺、

一 国久公文書式通

(鳥津義虎)一 陽久公文書一通

一当山六世耕雲和尚

一 忠国公右同四通

一 崇朝右同一通

右就出世、永祿七四月二日左中将公帖、且又建仁寺住

一 左大弁之輪(補)旨沓通

一 公文拾沓通

持職權大納言公帖有焉、

一 洪谷又次郎良重之文一通

一前住以来至現住雲洲十七世伝記不分明故略焉、

一 東通之印判文沓通

初代松夫存公大禪定門

一 隱居昌岳庵仁室之印形書物沓通

応永廿五戊戌誕生、長祿三己卯卒去、

一 建仁寺方丈江義村御札状沓通

二代桂林国久大居士

一 洪谷次郎左衛門入状沓通

明応七年戊午七月廿九日卒去

一 羽久太様人々御中へ嘉行心印判之状沓通

三代天倫賢公大禪定門

一 国久公御牌沓本

天文五丙申三月四日卒去

右文化三歟寅七月と相記有之帳留之内拔書置候也、

四代隆岳興公大禪定門

大永五年乙酉十月九日卒去

瑞香山

臨濟宗五山派  
伊集院広濟寺末寺  
蓮花寺

五代昌岳源久大禪定門

高式石式斗七升八勺四才

開山高標 応永五年草創

一中興開山南溪 將軍義輝公之公帖を賜、以来 將軍家之公文を賜來り候処致中絶、其以後準佳例、御当家之公文を賜而住職相勤候、

右要用しらへ

蓮華寺末

昌岳庵

本尊毘沙門立像高八寸定朝之作之由、

協立兩尊

弘治三年十二月開基

開山勅仏智慈勝禪師

〔義虎親父歟〕

一昌岳源久大居士久意初実久

〔二とも〕

天文十辛丑七月廿二日卒去、

右御建立之寺也、尤奈毘所有之候、当分寺地御藏入ニ罷成候、

爰蓮華前往勅仏智慈禪師仁室和尚寺外被求隱之居所、

而以有亡父昌岳居士深志、就予懇望之条、彼居号昌岳

庵、万歳々々、多幸々々、

于時弘治三年十二月吉日

〔島津義虎〕  
薩摩守藤原陽久判

昌岳庵主

玉床下

右元禄拾丑二月書出、

〔本文書ハ「旧記雜録後編二」九六号文書ト同一文書ナルベシ〕

慈眼山 寺地御免地

出水龍光寺末

大同寺

開山南谷芳龍光寺四代目

開基年月不知 〔天文二癸巳二月九日遷化〕

一大同寺殿本源妙派大姉建立

出水三代成久之御前

〔十六日共一〕

天文六年丁酉八月十三日卒去

右者檀那茶毘所石塔于今有之、永正十年癸巳十月吉日四代目忠興御印形目錄有之、右本源御居城者阿久根之城主として居住被成候由申伝候、

薩摩国阿久根之院

52

一五段

本源仏餉田

くろげた

薩摩國阿久根之内水田

堀町

寄進田

いなりの前

(本文書ハ「旧記雜録前編」二一九二五号文書ト同一文書ナルベシ)

右此坪付ハ本源御自分之新田と申伝来也、

式反

屋敷

堀町

堀町

くる主

うしろむた

はねた

51

一七町五段

永正十七年六月四日

大同寺

忠興印

瀉

薩摩國阿久根之内水田

坪付

堀町

屋敷

壱段

堀町

屋敷

堀町

堀町

堀町

長田

せら田作

窪下

くす田

きのぶれ

くるす

はねた

くる主

うしろむた

いなりの前

(本文書ハ「旧記雜録前編」二一八四四号文書ト同一文書ナルベシ)

永正十年十月吉日

忠興印

以上三町卅

一貳段

久留主

一貳反

堀町

堀町

堀町

堀町

堀町

堀町

堀町

堀町

堀町

堀町

堀町

堀町

水田坪付

一壹町三段

栗林門

一六町卅

折尾門

一九段

長田

一貳段

久留主

一壹段

施餓鬼田

一三段

前田

一壹反

ばくちてん

上野その門

一貳反

垣内

一貳反

原ノ前

堀町

堀町

堀町

堀町

堀町

堀町

堀町

堀町

堀町

堀町

堀町

堀町

堀町

壹町五段 川成

くす田

壹段 川成

松元

畠地之分

右元禄拾丑二月書出、

慈眼山

大同寺

(マ、マ、マ) 永正五年乙酉建立之由、

一 知行三段

右目錄計格護仕居申候、外ニ忠興公より知行目錄過分

ニ候得共、先年御用付御座江差上為申由、何比之事共

不知、

一 宝銀九百目

一 白銀拾枚

右銀子当寺校割之龍之繪・秋月筆趙丹和尚之繪像大同

寺什物ニ而候処ニ、先年公義江御用ニ付差上候処、其

代錢として右之通被成下、当分寺校割銀ニ罷成居申候、

右寛保二戊五月書出、

宝寿山

大同寺末  
宝蓮寺

開山中庵玄(天文二年丙子三月十六日遷化)

開基年月施主不知

中興明円察和尚

寛文十一辛亥八月十一日遷化

寺地御免

右元禄十丑二月申出、

宝寿山

極楽院

時樂宗  
藤沢末寺  
阿弥陀寺

開山裏阿弥「裏ハ不詳」

寺地御免地

哀阿弥陀仏

忌日不知

開基年月施主不知

寛正元年戊辰十二月廿五日遷化〔阿久根播磨守良忠歿〕

一 前太守播州正室中公居士

文明十九年丁未九月五日卒去

右位牌有之候得共由緒不知

一 阿弥陀寺と申者、昔川内高城湯田村ニ御座候時分ハ称

林寺と申、其後莫根ニ阿弥陀寺を建立シ、阿弥陀之阿

之字を以阿久根与名付為申由候、其時分為寺領田七町

五段為有之由申伝候、其内炎焼など為有之由ニ而于今

覺書無之、其上毀破以後より無縁地ニ罷成候、

右元禄十丑二月書出、

元禄十五年午四月書出、

一境内竖卅八間  
横三十間

御免地

時宗

阿弥陀寺

右神社仏閣帳

高峰山 文殊院

出水幸善寺末  
般若寺

開山頼真

高壺石

右寛保二戌五月書出、

神社仏閣帳

一高壺石

一寺地御免

右前代八寺号平田庵、(殿也)楞藤寺之末寺ニ而御座候、

高峰山 文殊院

大乘院末  
祈願所

般若寺

阿弥陀如来金仏立像高壹尺  
五寸

脇立二尊金仏立像高壹尺

右三尊共善光寺阿弥陀同作之由申伝候、

弘法大師木像座像高壹尺  
四寸

右坊津一乘院之大師同作、弘法大師作之由申伝候、

開山頼真

開基年月施主不知

右元禄十丑二月書出、

妙高山

野田感応寺末  
楞嚴寺

本尊釈迦座像高壹尺七寸

本尊阿弥陀座像高壹尺七寸

但定朝作之由、

開山果山

応安四年日不知

開基不知

一施主阿久根殿覺也入道

石塔有之年号不知

一前代寺領三町五反有之候由、

一寺地御免地

右元禄十五二月書出、

中城山

開山日照嚴

(実)

野田感応寺末  
大藏庵

応永元甲 戊正月廿四日遷化

開基年月施主不知

本尊如意輪觀音座像

高廿壹尺貳寸 脇立四天王

定朝作之由、

寺地御免

右元禄十五二月申出、

峰前山

本尊地藏座像高壹尺

野田感応寺末  
長壽寺

定朝作之由、

開山雪溪康

弘安三年丁巳十一月七日遷化  
(造)

「開基年月施主不知」  
中興怡叟悦和尚

万治三年庚子八月四日遷化

寺地御免地

右元禄十五二月書出、

松向山

本尊阿弥陀立像高貳尺

帖佐願成寺末  
西安寺

春日之作ノ由申伝候、

開山德蓮社運誉上人

元和八年壬戌正月十五日加治木本誓寺ニ而示寂、

開基年月不知

一天神名号

壹幅

近衛様御筆

一寺地御免地

右西安寺先年者禪寺海田庵と申候、其後中絶仕候故、

慶長年中ニ浄土宗ニ罷成候、其比 惟新様より一向宗

御禁止ニ付、浄土寺建立可仕旨、帖佐願成寺運誉上人

へ被仰付候条、施主柏木安芸と申檀方へ運誉相談候而

建立仕、夫より西安寺と申候、別ニ由緒無御座候、

右元禄十五二月書出、

阿久根中諸寺家寺地御免狀之写

各寺地之儀、兩度御檢地之刻、竿被許置候之處ニ、御藏入糺明衆寺地を茂日記ニ被書入候哉、就其御侘之由候、兩度之御檢地ニ免許之上者、別儀有間敷候条、永々可有領知候、若又相違之子細於有之者、可及其沙汰候、仍如件、

慶長十三年

二月三日

比志島紀伊守

國貞判

(島津忠長)  
凶書入道

紹益判

阿久根寺家中

(本文書ハ、「旧記雜録後編四」四二五号文書ト同一文書ナルベシ)

先年阿久根寺家中御竿打被成候刻、御侘被申上候ニ付、御墨付ニ預候、今度各寺中江竿入可有之由被仰付候間、彼長壽寺爰許へ被罷越候、様子具承候条、野村才右衛門殿を以御老中へ申上候、然処ニ先年之如御墨付、此度之竿之儀、可有御赦免之由被仰出候、此等之通拙者前より各中へ可申渡之儀、野村才右衛門殿ニ而被仰聞

候間如此、猶重而可申承候、恐惶謹言、

十二月二日

阿久根地頭  
渋谷周防介

重將判

平田民部左衛門尉殿

河上伊与守殿

まいる人々御中

尚以此度御老中之御時之被申上候へ共、先年之御時

ニ相替儀無之候間、我等前より可申達之由被仰付候

条、如斯候、尤半松前より同前ニ可被申越之趣ニ、

當時氣相無然々体候間、不及是非候、一段御竿打、

寒中と申、御辛勞無申計候、以上、

(本文書ハ、「旧記雜録後編四」四二六号文書ト同一文書ナルベシ)

右者阿久根中九家寺寺地先年より御免許被遊候由、

御老中并地頭御狀写如此ニ御座候、以上、

元禄十丑

二月十三日

蓮花寺

文殊院

大田寺

楞嚴寺

阿久根

御暖衆中

長寿寺

大藏庵

阿弥陀寺

西安寺

野田  
熊野権現 宗廟 野田

大宮司屋敷 御支配御免地

祭日九月九日

座主 山田(内)

右神社仏閣帳

阿久根 寺地改善

文殊院 真言出水幸量寺末御免地  
高卷石寺社方合力所

蓮花寺 臨濟広濟寺末御免地  
高式石寺社方合力

阿弥陀寺 時衆藤沢山末御免地  
無高合力所

大同寺 曹洞出水龍光寺末御免地

永福寺 臨濟野田感応寺末御免地

楞嚴寺 右同

長寿寺 右同

大藏庵 右同

西安寺 帖佐願成寺末御免地

神社考

一熊野三社権現 藤城より戊亥去貳拾貳里

祭料三斗五升御物ヨリ年々相渡、

勸請年月不詳

別本

一本地弥陀 薬師 観音

一薬師堂一字 山内寺格護

右本堂 忠久公為御祈願御建立、天正年中迄ハ八間四

面之堂ニ而結構有之、一山之講堂ニ而候処、漸々及衰

微零落仕、其形計相残候、

一 一宮大明神 山内寺格護

祭米無之、近辺之者共打入を以、十一月朔日輕キ祭

仕候、山内寺より祭執行仕候社人無之、窪之半左衛

門と申百姓、代々香花備申候、

一霧島

山内寺格護

一天長地久、殊ニ者信心大檀那藤原義虎為御武運長久

右社江山門院為作神、寛永十六年己卯本願主庄屋小島

弓箭冥加、天正八庚辰年奉造立と棟札有之候、所中

内膳造立為仕由、尤神領無之、  
往古

より造立仕候哉、願主者不相知候得共、当地頭藤原

一箱崎八幡宮

山内寺別当職

忠義・当代官藤原家宣と有之候、神領無之、先年ハ

神領七反

屋敷壹ヶ所為有之由候得共、当分御藏地ニ罷成候、

右 忠久公御寄進御文書于今有之候得共地面者無之、

野田  
一伊勢大神宮

山内寺格護

当分山社之体ニ而御座候、  
高尾野之内

山内寺別当

祭米等無之、大宮司屋敷一ヶ所御免地ニ而、当分ハ

一稻荷大明神

山内寺別当

木上孫右衛門と申者支配仕候、

神領五石

右大神宮上代為飛來給由申伝候、山内寺住持隆秀法

右慶長十九年伊勢兵部少輔貞昌・三諸右衛門尉重種・

印、享祿四辛卯歳為国家安全新造立仕候、其後慶長

比紀伊守国貞・町少兵衛尉久孝知行目録当寺へ于今格

十六歳大願主種田八郎左衛門尉重定為 忠恒公御子

護仕置候、往古ハ野田之内ニ而候処、高尾野と申外城

孫繁昌・御武運長久・御領豊饒再興仕候由、棟札相

慶長年来被召立、当分者高尾野ニ而候、何比退転候哉、

見得申候、

只今ハ格護ニ而無御座候、

一小松宮大明神

山内寺格護

右寛保二戊五月書出、

宮守木場万兵衛仕候、社人無之、

出水之内瀬崎牧神

往古

右小松宮何比造立ニ而候哉由緒等不知、上代ハ所領八

一白山権現

山内寺別当職

町并大宮司屋敷為被召付置由候得共、天領之時分為被

神領高三石壹斗

召放由候、

右先年野田之内瀬崎野為御牧守神、建久年中御勧請之

由候、右社領者慶長十年三月 惟新様御印形有之、伊勢平左衛門・本田六右衛門御目録当寺へ頂戴仕、于今有之候得共、何様之訊ニ而退転仕候哉、当分地面者無御座候、万治年間出水支配罷成、当時出水之内ニ而候、只今ハ山内寺格護ニ而無御座候、

一瀬崎野御牧依為天馬、先年山内寺へ御牧御祈禱被仰付、每歳正月十一日瀬崎之きんきの池へ罷登大般若転読有之、香火を以野火付始候、其節者御牧凡及一千疋為申之由、左候而、取駒山内寺内ニ引越御祈禱有之、野崎之駒老年尅疋ツ、御寄進有之由、其後三年目尅疋ツ、御寄進有之候得共、当分ハ出水之成願寺より御祈禱仕、三年目之御寄進馬成願寺へ有之由、由緒帳ニ見得申候、何比如何成訊ニ而成願寺より御祈禱執行仕事罷成候哉、其訊不知候、

右寛保二戊五月書、

野田  
御当家御高祖  
一若宮大明神

祭米無之

右神休者 御元祖忠久公御当国江御入部之節、木牟礼

屋地村之内  
山内寺格護

城被遊御座、其後野田下名村之内江久々御在城被遊候付、右御屋形之跡 忠久公御尊形御安置、若宮大明神

与奉称、神休者御束帯ニ而被遊御座候、以前より山内

寺格護ニ而、二月朔日・六月十八日・十一月十五日輕

キ御祭仕、山内寺より御祭執行仕候、右社地迎御屋形

旧跡故屋地村与唱申候由、古記ニ見得候、神領退転仕

候哉無之候、只今ハ近辺百姓備香火候、以前者御物よ

り御修甫為被仰付ニ而も候哉、大願主藤原光久公与有

之寛永十三年御再興之棟札于今有之候、其後零落ニ而

山内寺格護之事故、御元祖之旧跡ニ而候処、修甫之手

伝も無之罷成、山内寺先々住秀雄代造替之心願有之、

所中申談鹿相之宮殿・本社・拜殿再興仕候、

右寛保二戊五月山内寺より申出、

野田  
下名村之内  
若宮大明神

右者 御元祖忠久公初而御下向之節、御在城被遊候御

屋形之旧跡へ尊像鎮座、若宮大明神奉崇、冠装束ニ而

被遊御安置候、且座主西前寺と申、御宮之脇ニ有之、

天正年来迄者右寺地髓ニ為有之由、然共当分御藏入地

ニ罷出西前門と申候、尤水之手江西之御門・笠掛ケ馬場・御植木園与申所、于今無紛相唱申候、

一若宮大明神

右社以前ニハ寺社方合力銀修甫所ニ候処、神像之儀

御元祖様を御勸請有之、社頭廻等相損候付、文政八年

酉右社造立、御神像御彫刻被為在、以来寺社方檢者付

修甫所ニ被仰付候、

神社考

野田下名村

若宮大明神

祭神忠久公

祭料無之

当社ハ御元祖忠久公御入国、山門院野田江暫被為居

候御屋形之跡江尊像ヲ祭崇、若宮大明神と奉称候云々、

野田  
一若宮大明神

山内寺格護

社人木上孫右衛門

神領高五石并屋敷壹ケ所

光久公より為御誓願御寄進為被遊由候、野田衆中吉満

善助社之香花并掃除相勤候迄ニ而社人ニ而も無之候処、何様之由緒を以支配仕候哉、右神領・屋敷共吉満善助

今以支配仕居候、

一寛永十三年丙子光久公御再興為被遊由、棟札相見得申

候、

右寛保二戌五月山内寺より申出、

野田御城取添之城 上名村ノ内

一若宮大明神一字

野田衆中

社司吉満善助

右者島津常陸守殿と申候人、野田地頭職被為勤候、然

処ニ常陸守殿大将ニ而天草之内長島を被為切取、于今

御領国ニ而候、然ハ常陸守殿儀兵道之依為達者、死去

之後荒人神と被為成候故、野田御城取添之新城江大天

狗与被崇候処ニ、弥被為荒万民迷惑仕候付、其節之山

内寺住持豪契若宮大明神と勸請被成候、以後静ニ有之

別而利生現重ニ御座候、光久様御幼年之時分初而江

戸へ被遊御參勤被遊(マ、マ) 砌、右若宮現重之由被聞召

上、為御誓願御宮近辺之田畑五斛并大官司屋敷御寄進

之御願状壹通、御使新納大藏殿(久道)ニ而御座候、島津彈正殿・島津下野殿(久元)より茂御願文御差上被成候、左候而、

追付御快然候、然共御步行難御成由候而、重而之御誓願御宮御再興可被遊候付御願文被遊御下候、為御使喜

入五郎兵衛殿ニ而候、就夫無程被遊御満足候ニ付、知行高之儀者御竿入不申、御見分を以為被召付置由、于

今其通ニ而候、宮造之儀早速被仰付相済申候、御失墜

目錄于今有之候、左候而、遷宮之節ハ野田山内寺差合

有之ニ付、出水成願寺并權座主阿久根文殊院山田民部(有卷)

少輔殿御下知を以差越被成、遷宮相済申候而右御願文

両通并島津彈正殿・島津下野殿・新納大藏殿御願文三

通、合而五通御座候処ニ、成願寺より被仰候者、御立

願成就申候間御願文やすめ可被成由候而、則神前ニ而

古棟札迄御焼捨被成候、右御知行之所務を以、毎年七

月八日ニ御祭事相調、尤御宮修甫等相調来候、

右寛保二戊五月所役々より申出候、

一霧島大権現

一比山大明神

一祇園社

一稻荷大明神

一八房大明神

一若宮大明神

一小松宮大明神

一伽藍社

右神社考

一妙見社

一香之社

一箱崎八幡

一天滿天神

一山之神

一若宮

一一ノ宮大明神

臨濟宗五山派京都  
東福寺末寺  
門首

### 鎮国山

開山千光国師、建久年中忠久公御下国之節、本田左

衛門尉忠親御先(マコ)ニ罷下り為御菩提所創建、其後忠宗

公 貞久公到御代被遊御再建候、

一左衛門尉草創之時本州不二之為法窟、因茲山鎮国寺号

感応、

一忠久公・忠時公・久経公・忠宗公・貞久公御石塔有之

候、

一天照太神宮

野田郷 末社

一八房大明神

一 右五代之御石塔瀟石ニ而被遊御座候処、享和三亥五月

上葺御堂御出来、其外廻石垣調方被仰付候、

一 得仏大禪定門 (忠久)

嘉禄三丁亥 六月十八日

一 道仏大禪定門 (忠時)

文永九壬申 四月十日

一 道忍大禪定門 (久経)

弘安七甲申 四月二十一日

一 道義大禪定門 (忠宗)

正中二乙丑 十一月十一日

一 道鑑大禪定門 (貞久)

貞治二癸卯 七月三日

右文化十酉十月 重豪公思召ヲ以御位牌殿御造次 御

五代様御牌御安置被仰出御成就有之、翌戌十月廿八日

右之通御安置、

一 忠宗公 貞久公

右御牌被成御座候処、右之通被相改御安置有之候、

右要用集しらへ

鎮国山

一 尊氏將軍御牌有之、

一 得仏 道仏 道忍 道義 道鑑

右五代之御石塔有之、

一 道義・道鑑之御牌有之、

宝物

一 御舍利

一 東福寺開山聖(円爾)一國師御影

一 同弟子円鑑和尚御影

一 同弟子感応寺開山御影

一 磬壹ツ 但高壹尺 広壹尺式寸五分

一 鏡鉢壹双

一 青色香炉壹ツ

右感応寺之事 忠久様御下向之時分、本田貞親島津

殿為御寺被立置候、其時分迄ハ禪宗依無之住持不定

候、其以後曆応二年忠宗御上洛被成、(貞久方) 尊氏將軍江

有御目見得、島津殿御氏寺御尋被成候時、感応寺と

御申候、京都東福寺ニ御申、東福寺二代目之住持円

鑑和尚弟子雲山和尚御下向被成開山相定候、開山頌

京東福寺門徒大宋  
經山無準派  
感応寺

作將軍ニ御上被成候、

休將名字問禪徒 利養紛華与道疎 只憶祖庭秋已晚

山家村裏送居諸

將軍より上使御下向被成御返歌

さそなけに都の遠き山の端は<sup>(C)</sup>

くもらぬ月のひとりすむらん

一当寺高式斛

寺内脇寺

一光明院

隣竹庵

金井軒

道交軒

山家村

不二軒

領春齋

右神社仏閣帳

宝寿山

感応寺末  
極楽寺

極楽寺住持職事有御経、<sup>(⑩住)</sup>被致天長地久之御祈祷執務

候者恐悦候、恐々謹言、

正月十一日

<sup>(貞久)</sup>道鑑御判

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一六八二号文書ト同一文書ナルベシ)

右之御文書當時山内寺ニ有之、

一極楽寺開山感応寺十一世得翁和尚、後昌岳御懷寺ニ成、<sup>(鳥津入愈)</sup>

常陸殿父子石塔于今有之、古者知行六町、前屋敷十ヶ

所相付候、于今御藏入ニ罷成候、

右神社仏閣帳

鎮国山

京都惠日山東福寺直末  
薩州出水郡山門院野田郷  
感応寺

抑当寺者 御元祖忠久公初而当国江御入部之刻、為

御菩提所最初之靈場、建久年中本田石見守親経<sup>(⑩)</sup>

蒙 太守忠久公之敕命、被于当寺草創△本州不二之為法

窟、因茲鎮国山感応寺ト云者也、

一開山千光国師

一安貞二年戊子六月十八日為 忠久公御骨堂寺内江光明

院御建立并御石塔御崇立、

一同年八月十八日光明院へ水田三町御寄進状、下野守忠

義御判、

一元亨三癸亥如月吉日河内守忠宗公御再興云々、

58

一 同四甲子二月金井軒草創、本田石見守開基、  
〔京都惠日山東福寺二世円鑑禪師弟子〕  
 一 開山雲山大和尚、諱曰祖興、住山廿二年、從元亨三癸亥年、到康永三甲午年  
 伝曰、雲山興大和尚者山城国平安城東惠日山東福禪寺也  
 開基曩祖円爾大和尚聖一國師之的孫、円鑑禪師蒙山大和尚之弟也云々、肥前高城寺ヨリ入寺、  
 一 從元亨三年〔初力〕、河内守忠宗公、上総守貞久公御両主於  
 当寺御再興、則表洛東惠日山東福禪寺之境地而七堂伽藍御造創、剩十境迄被移興〔隆之〕、寺領有御寄附、尊崇不  
 淺昌盛美々之地云々、  
 一 康永三甲申九月廿日雲山大和尚齡七十一入定、有辞世、  
 偈曰、帰元一曲 説似虚空 泥牛吼月 木馬嘶風

一 真如寺住持職事、任先例、可被執務之状如件、

貞治三年五月十五日 源朝臣義滿判〔詮力〕

祖通西堂

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」一四四号文書下同「文書ナルベシ」

一 貞治五年八月廿七日十刹御教書壹通同御判、

59 一 祈禱申於当寺、殊可被抽懇祈之状如件、

応安五年九月四日 太政大臣義滿判

感応寺長老

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」二二八号文書下同「文書ナルベシ」

60 一 右於当寺、軍勢并甲乙人等不可致濫妨狼藉、若有違犯之輩者、可処罪科之状如件、

応安五年九月四日 同御判

感応寺長老

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」二二九号文書下同「文書ナルベシ」

一 応安六年三月寺中造創本会軒・隣竹庵・道交軒、

61 一 相模州東勝寺住持職事、早任先例、可令執務給之由被

仰下所也、仍而執達如件、

康暦二年三月朔日 細川武藏守頼之判

祖問西堂

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」四〇七号文書下同「文書ナルベシ」

一〇〇(至)德四丁卯年閏五月四日 氏久公行年六十歲御逝去、  
御祭文

62 維至德四年歲次丁卯閏五月四日、修理亮藤原氏久公前

奧州太守齡岳久公大禪定門示于寂寢室、越於初四日、  
薩州鎮国山感応寺住持法末比丘祖問、謹具香花蘋蘩之

奠昭告祭于尊靈之前曰、伏惟久公大禪定門、万民父母

一家所倚 看予如子 旁被指示 吁嗟二豎俄至 四蛇

走避 於戲日月有蝕 人豈無死 而不亡者聖賢而已

童堅一炉 雀舌一益(器) 無訝定疎 清鑑微志 伏惟尚亨

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」八八〇号文書ト同一文書ナルベシ)

63 一長楽寺住持職事、任先例、可被執務之状如件、

応永九年六月十八日 大相国源義満判

祖杲西堂

67 一下桑原田并落水寄進状一通

嘉吉二年八月十三日 伊作左京大夫

久清判

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」六八五号文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二二八六号文書ト同一文書ナルベシ)

64 一東勝寺住持職事、任先例、可被執務之状如件、

応永十二年七月朔日 左大臣源義量判

通音西堂

68 一薩摩州山門院多田之内水田三段(江)金龍院(津)奉寄進所也、仍

而状如件、

文明二年二月十五日 薩摩守国久判

(島津)

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一四五九号文書ト同一文書ナルベシ)

69 (本文書ハ八〇の14号文書ト同文ニツキ省略ス)

一伝曰、俗姓者鳥津大隅守藤原朝臣忠長主之長子ニ而、

肥州八代庄妙見大菩薩江忠長主無男子悲、一七日夫妻

通夜被設、文明二年庚寅八月十六日午刻誕生、懐胎前

ニ妙見薩埵顯出、一株松龜を以忠長ニあたふと夢見懐

胎ありとかや、仍而童名龜松丸と⑤云十一歳より出家後

ニ至諱号從龜西堂といへり、詳ニ行常記⑤録ニ見へたり、

70 薩摩国感応寺住持職事、任先例、可令執務給之由、所

被仰下也、仍而執達如件、

明応五年十月廿九日 細川右京太夫政元判

從龜首座

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一七五三号文書ト同一文書ナルベシ)

71 一相州鎌倉建長寺住持職事、任先例、可被執務之状如件、

永正十六年五月十五日 源朝臣義植種判

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一九〇五号文書ト同一文書ナルベシ)

從龜首座

72 一普門寺住持職事、任先例、可被執務之状如件、

享祿三年十月十七日 左大臣義時晴判

從益西堂

(本文書ハ「旧記雜録前編二」二二七〇号文書ト同一文書ナルベシ)

73 一建長寺住持職事、任先例、可被執務之状如件、

天文五年八月十二日 左大臣義時晴判

尚珊西堂

(本文書ハ「旧記雜録前編二」二二八四号文書ト同一文書ナルベシ)

一伝曰、俗姓者鳥津薩摩守国久主之五男、出家幼名為心、

後改從薰、始者道号南堂和尚云、改号南華和尚、山門

院莫祢郷峰前山長寿寺より入院、

74 (本文書ハ八〇の15号文書ト同文ニツキ省略ス)

75 一普門寺住持職事、任先例、可被執務之狀如件、

天文十三年五月七日

左大臣源義勝(晴)判

從薰西堂

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二四七「号文書ト同」文書ナルベシ)

76 一真如寺住持職之事、任先例、可被執務之狀如件、

天文十六年七月晦日

左大臣源義時(晴)判

收隆西堂

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二五四「号文書ト同」文書ナルベシ)

77 「永祿八年茂林和尚楞嚴寺(江隠居トアリ)一楞嚴寺住持為龍節被越海、因珍簡令披閱、惟悅不淺者

也、殊鎧壹領鎖威并甲鍬形同毛収納、珍重雖為不腆之

方物、表微礼蘇木式千斤進呈之、一覽多幸万緒忻慶不

備、

(「永祿」末年ナラン)  
林鐘二十日

琉球国中山王印也

島津陽久公(義虎)

回章

(本文書ハ「旧記雜錄附録」二二五三「号文書ト同」文書ナルベシ)

78 就文船之儀、松下安芸入道奉尊書、蓋楞嚴寺於使節被

令成渡海候、因攸賜之珍簡詳遂拝閱候、如尊意此方亦

雖無疎信之到候、依海路遠隔無音罷過候、彼文船之儀

者從往古至鹿兒府之主へ者、御即位代々文船無渡海之

儀候、自然応時於有要用之儀者渡船之儀有之候、其謂

未成分別候哉、從上古依隣国相去、通音之儀于今無相

違、遠近之廻船連続候、近年不意日本賊徒之兵船往来、

無隙閉塞海上候之間、海路不穩之由風聞候、然者当邦

封内遠近之島、彼大小之津泊、日夜無油断晨夕致警固、

然間難及自邦之格護(◎)、呪於他国之礼儀、今時分難成候

所存之儘不応尊命、聊以無疎意之儀候、殊主三司官楮

国公五十束拝受、不知所謝候、為表非礼、匱綿參拾把

進呈候、此留多幸万緒期後音之時候、恐惶謹言、

林鐘二十日

三司官

市来因幡守殿

阿久根播磨守殿

猿渡伯耆守殿

竹田越中守殿

古垣山城守殿

右者琉球国江為御使茂林和尚渡海有之候、楞嚴寺と書

中ニ有之候者、其節当寺より楞嚴寺江致隱居居候節之

儀ニ而候、

〔本文書ハ「旧記雜錄附録」二二五四号文書卜同〕文書ナルベシ

79 一野田感応寺之重物繪賛二軸 (家久・忠恒) 黄門様被成 御覽候、先

之寺江被返進候間、何方江も不參候様ニ可有格護之由、

住持江可被仰渡候、為其一書①如斯候、恐々謹言、

八月十一日

川上左近少監(將)

久国判

喜入撰津守

忠政判

下野守

久元判

蒲地備中入道殿

御宿所

〔本文書ハ「旧記雜錄附録」二二三八号文書卜同〕文書ナルベシ

以上都而寛保二戊五月書出、

鎮国山 京東福寺直末  
感応寺

当寺薩摩最初之禪林、本願大檀那忠久公草創之地也、

再興大檀那(貞久)道鑑公、徳治二年より建武年中迄ニ七堂造

ニ御再興也、

開山雲山 康永三九月廿日歳(七)十一ニテ入定也、

一仏殿本尊千手觀音像座像高二尺八寸

協立四天王四体立像高二尺七寸

中尊協立共ニ木像、作者定朝、

一金龍院殿前奥州太守大岳(忠恒)大居士

右感応寺十二塔頭之内金龍院事 大岳公御建立被遊

候由、御牌彼の寺江安置候得共、只今ハ廢壞ニ而客

殿江被成御座候、

右元禄四未十二月書出、

但外之ヶ条ハ元禄三年書出と同案故略、

80 元禄三年午十月五日

御文書并公文等写

野田感応寺

御石塔之銘

〔忠久〕得仏大禪定門嘉祿三丁亥六月十八日於鎌倉御逝去御年四十九

〔忠時〕道仏大禪定門文永九年壬申四月十日御年七十一御逝去

〔久経〕道忍大禪定門弘安七甲申閏四月廿一日御逝去御年六十四

〔忠宗〕道義大禪定門正中二乙丑十一月十二日御逝去御年七十五

〔貞久〕道鑑大禪定門貞治二癸卯七月十三日御逝去御年九十五

右御五代之御石塔御安置被遊候、

御牌之銘

道義大禪定門 神儀

道鑑大禪定門 神儀

右御両殿様 御牌仏殿江御安置、

道義大禪定門 神儀

感心寺殿道鑑大禪定門 神儀

右御両殿様御牌客殿江御安置、

等持院殿贈大相国一品仁山義公大居士 台臺

右尊氏公御牌客殿江安置、

〔延久三〕文戊戌四月廿九日五十四薨御

金龍院殿前奥州太守大岳誉公大居士 神儀

右御牌感心寺十二塔頭之内金龍院へ御安置被遊候、

只今右塔頭廃壞仕候故、感心寺客殿へ被遊御座候、

鎮国山感心禪寺廼本州最初法窟也、曆応第二之年本州刺史藤原朝臣島津公之京謁見 大将軍尊氏殿下、殿下

喜色余問公曰、公之国今有福林之可興礼楽者否、答曰

言、有也、蓋遊寮之魚不大也、故殿宇随地而少矣、豈

其予劔問乎、殿下便下使价問本寺来田并主盟家風、主

盟 雲山和尚不説其攸来由事、唯賦一偈、答劔問、其

偈云、

休将名字問禪徒 利養紛華与道疎 只憶祖庭秋已晚

山家村裏送居諸

殿下展書感歎相甚、輒聯三十一字詠歌答焉、其歌云、

さそなけに都のとをき山のはに

くもらぬ月のひとりすむらむ

繇焉終登本寺、加初地之列刹焉、諒太守豪華和尚之德

刀也、○一朱書入当主席徹堂禪師求予斯記、忽奔筆云、歳七

十一入定、南大門拜首、辞世

康永三年九月廿日

帰元一回 説侶虚空 泥牛吼月 木馬嘶風

〔本文書ハ、「旧記雜録前編二」二〇七三号文書トホボ同文ナルベシ〕

右者感応開山雲山和尚御影之讚也、

感応寺常住文書注文

一 置文被出事建武三年丙子九月廿七日也、祖興在判

一 通開山置文 檀那島津道鑑封裏云々、

一 祈願所御教書被出事建武二年丙子卯月一日尊氏御判有リ

一 通祈願所 本朝大將軍尊氏御判云々、

一 諸山御教書被出事曆応二年己卯十二月十七日

一 通諸山御教書 同御代

一 通仏殿上棟儀式 本願主本田靜觀草創云々、  
(貞觀)

一 通同上棟之時合力住文 同前

一 通島津道義御書札 自鎌倉到來云々、

一 通河辺郡内両名御寄進 道鑑御判云々、

一 通將軍家卷数請取状 奉行飯尾殿

一 通新開田数目録 道鑑封裏云々 山野東西<sup>④</sup> 乾梅

一 通糊串頭無両所塘田奇進状 道鑑御判

一 二通造営用木之状 折紙 道鑑御判

一 一通造営之時人夫状 折紙 道鑑御判

一 一通三町寄進状 一紙 道鑑御判

一 一通開山塔置文 開山御判

一 一通開山塔所領坪付 開山御判

一 一通開山塔田地之状 同御判

一 通多田内園田之状 附書札二通

一 通文書之數 開山之御判

一 通文書之數 開山自筆自判

▽  
④ 一通 檢断之状 伊久上総介法名久哲御判

一 通檢断之状 本田兼阿之判  
(久兼)

一 通糊串頭無之状 本田靜觀判

④ 一通 河辺当所問寺領事、或札惣抄并久世御判  
(元久)

一 通奥州玄仲之書札

一 通兼阿之避状

一 通道鑑之書札

一 通栗林之寄進状 本田兼阿判形

一 通島津新納殿御寄進状 附書札

④ 一通 本田興磯寄進状 井杭田

一 通本田之御家祖円状 山之口

一 通本田次郎左衛門殿書札

五通総州状一ツ 折紙 別府之内小松田一反

一 通本田之通禪之状 針原田地

一 通鶴田之通秀 薦土山之状

④ 一通 千束野状 島津之久世之状

一通折紙 河辺之所務之状

④(一) 四通別府畠中園之状 附書札

一通寺家文書注文 大円御判 上桑原田八家泰判形 山

門郡司森町八家雄判形

下桑原田并落水江木田等八道惠判形

右御文書者嘉吉年中之回禄ニ焼失仕、于今右目錄者  
相殘御座候、

感心禪寺本尊莊嚴勸進帳

夫感心寺者薩摩最初禪(林取)⑤(巻)、円通解脱妙境、千手開

千眼、一国仰一尊可惜白衣端嚴威光、翻身丹霞向上炉

鞆、是以像殿聖教悉灰燼、雲水僧侶盍嗟嘆、於此幹縁

比丘(マ) 海底算沙水中探月、若值大施主為談老婆禪、

右宓以西海九州隅開山祖懸永明百卷宗鏡東都万里外鎮

国峰立常樂四德法門、因甚未運到、此時必有中興復旧

觀、石心鉄腸宜切齒、露宿風喰嫌憚勞謂之報師恩名之

修冥福尽十方界、便檀越粒々三斤麻、十二時中閑工夫

滴々一莖草、你乃掃塵求仏、彼既抛瓦引金、只向有錢

定得無価宝四天王勳力九社神點頭、謹疏、

嘉吉式年壬戌七月日

馬一疋 持久御判

馬一疋 照久御判

馬一疋 犬安丸

右者仏殿本尊千手觀音莊嚴勸進帳、正于今有焉、

80の4

感心禪寺大般若勸進帳

▽⑥嘉吉二壬戌年七月日△  
(鳥津義虎)

藤原陽久御判

太刀一腰 久清判

太刀一腰 次郎丸

太刀一振 常陸介忠兼判

太刀一腰 刑部太輔久完判

太刀一腰 新介久武判

太刀一振 入来院源左衛門重通判

太刀一腰 山本能登守貞綱判

二十疋 伊佐右近久晴

十疋

沙弥元左

右者感応寺大般若修覆勧進帳、于今有焉、此外諸士  
余力之人数繁多也、

80の5

天辰周防入道浄慶為菩提依望申、山門院西方之内水田  
松本三段<sup>付畠地</sup>之事、限永々令任付所也、仍所定如件、  
文明十年十月十五日

島津薩摩入道国久御判

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一五三三号文書ト同一文書ナルベシ)

80の6

薩摩州山門院西方西牟田之内佐事田一段三百五十地、  
感応寺<sup>寄</sup>奉宰進候、此田ハ我等永代之本領ニ而候、他之  
不可有妨候、仍為後日之状如件、

応仁二年 戊子十一月十五日

沙汰仁道仙判

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一四四四号文書ト同一文書ナルベシ)

薩摩国山門院多田之内八町作水田壹段代四百地、依有  
志感応寺于金井軒令寄進所実也、為後日証文如件、

坪久田嘉紹判

文明二年 庚寅 仲春時正

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一四五八号文書ト同一文書ナルベシ)

先年田与池相博之事無子細、雖然寺家寸土依為大切、  
以衆評返地御寺申上者、田地当毛之上、如旧令知行者  
也、仍為後証之状如斯、

〔感応八世住太叔尚祐〕  
前建長太叔判

文安元年 甲子 六月十一日

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一二九七号文書ト同一文書ナルベシ)

80の9

感応寺  
田帳之日記

一 脇下 三段

屋敷一所 藻水吹切ニ通而寺山有、同寺嶼

一 山口一町七段 屋敷一所

一 餅飯町九段 屋敷一所

一 塘田三町 蓮池六段田共ニ同処八段

一 土瀬戸八段 同処一段

一保鳴起迫六段

一西茂田六段四策

一芦刈五段 同処桜谷一段

一城下町四段二策 同処堀町

右神山之界ノ法木之下者寺領、同処野畠有、

一新弥堂后二段三策

一柿野九段此内否一段

屋敷一所

一薦土山三段処々有、

一河原田六段 同処上桑原一町作四段否六段 同処二保

但一段此内作一策否四策 同処二段田

一山之口一段 同処堀町

一森町六段 落水五段

此内作二段否三段

一榎田六段二策

一庄塘九段 同処下塘

四ヶ所否保田、此内一所八金井之分也、

一下桑原田 二段

光明院之分

一九段一枕田三段否

隣竹庵之分

一小山田三段三策牛縛

三段尾多田三段 橋口二段今欠タリ

金井軒之分

一松下三段 静慶之寄進

一灯油屋敷付田二段 屋敷今欠タリ

▽  
〔感〕寺塔頭共△

已上二十町二段

此内本寺之田ノ否町一段有

本寺屋敷之分

已上一石四斗四升蒔

此内二斗自作

光明院之分

已上一石三斗五升

隣竹之分

已上一石五斗八升

金井軒之分

野田静慶寄進二斗蒔

80の11

野島一斗五升蒔本来有、

聖薰判

文明十五年癸卯小春吉日

〔是ハ感応寺十世徹堂聖薰〕

右外以前之田地帳今一冊雖有焉、料紙及廢壞所々  
文字分明ニ無之故、不書載之候也、

撰津国善住寺住持職、<sup>⑩</sup>任先例、可執務之状如件、

応永廿二年十月四日

義持將軍御判

尚祐首座

〔感応寺八世住太叔尚祐ト申候〕

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」九三七号文書ト同一文書ナルベシ〕

真如寺住持職事、早任先例、可令執務給之由、所被仰  
下也、仍執達如件、

畠山左衛門督持国入道徳本判

正長二年五月十五日

尚祐西堂前同

80の12

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」一〇九二号文書ト同一文書ナルベシ〕

南禅寺住持職事、任先例、可令執務給之由、所被仰下  
也、仍執達如件、

文安五年七月晦日

太叔和尚前同

右京大夫判

〔細川右京大夫勝元也〕

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」一三二八号文書ト同一文書ナルベシ〕

80の13

納

大叔和尚御入寺御奉加錢之事

合佰貫文者

右所納之状如件、

修造納所

中漸判

却來  
都寺

梵舜判

文安五年八月四日

都聞

中竺判  
却来  
首座梵者判

西堂聖慶判

侍衣禪師

(本文書ハ「旧記雜録前編二」二二二九号文書ト同一文書ナルベシ)

明応七年十二月十四日宣旨

徹堂和尚

宜持賜仏宗大弥禪師

藏人左少弁藤原判  
(ママ)

「右ハ感応寺十世徹堂と申候」

薩摩国感応寺住持職事、任先例、可被執務之状如件、

島津実久判

天文九年十一月拾六日

從薰首座

「是ハ感応十五世南華從薰と申候」

(本文書ハ「旧記雜録前編二」二二二九号文書ト同一文書ナルベシ)

80の16

禅興寺住持職事、任先例、可被執達之状如件、

(足利晴氏)  
左兵衛督判

天文廿一年六月八日

秀繁西堂

「感応寺十八世茂林秀繁と申候」

(本文書ハ「旧記雜録前編二」二六六九号文書ト同一文書ナルベシ)

80の17

手形

木佐貫野原六番

一松杓本

長五尋壹尺 本之口六尺廻

大廻頭廿番

一松杓本

長六尋 本之口七尺廻

同所卅二番

一同杓本

長六尋貳尺 本之口六尺廻

合松三本

右者出水野田村之内長谷山へ有之風折木、感応寺修理

ニ入由被申候付被給候間、手形於無相違者可被引渡や

うニ可被仰付者也、

寛永二年卯月十二日

(国隆)  
比志島宮内少輔判

(島津久元)  
下野守

(久高)  
樺山美濃守殿

〔本文書ハ「旧記雜録後編四」一八七四号文書ト同一文書ナルベシ〕

開山国師四百年之遠諱却後五年己未之歲正当也、就于本寺經營大当会、依竿人至于諸末寺兼而吉報焉、為末派之徒衆準先規香資貢獻、且迫其期必遂出頭可被助一会之化儀者也、尤及支派略冀輒論余靈自本庵可為伝達、不宣、

乙卯閏四月十七日

侍衣

靈覺印

維那

一即印

都寺

祖英印

參暇西堂

宗寔印

同西堂

大珠印

薩州野田

感応寺

納 香資之事

合白銀參枚者

右為 開山国師四百年諱之香資攸請取如件、

延宝五年丁巳三月廿八日

81

〔感応寺文書〕

〔州共〕

薩摩国山門院西方之内筒田五丁并薩郡之内天辰別分之

事、〔而〕給分宛行所也、無相違可有知行状如件、

〔向〕

応永十七年十二月十一日

〔鳥津〕

久世判

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」一八〇七号文書ト同一文書ナルベシ〕

役者 宗寔判

同 惠忠判

同 光唐判

薩州

感応寺

〔朱印〕  
東福寺

右感応寺御文書并公文等写一冊令記録、為御一覽差上

申候、以上、

野田感応寺

午十月五日

南堂

寺社

御奉行所

82 (本文書ハ八〇の8号文書ト同文ニツキ省略ス)

仍状如件、

弘治三年丁巳二月九日

83 (本文書ハ八〇の6号文書ト同文ニツキ省略ス)

見高城良真判

前住円覚光璞判

84 (本文書ハ八〇の7号文書ト同文ニツキ省略ス)

感応寺

南堂西堂

85 (本文書ハ八〇の5号文書ト同文ニツキ省略ス)

88 [同]

嵯峨慶寿院領并河内国觀心寺領等□□和尚御管領安堵

事伺申候、可有申沙汰之由被仰出候、恐々敬白、

四月十六日

中正(花押)

86 [同]

[光明院買地状 聖薫]

依為有歿後之用段、光明院之中一斗五升地、四貫文

買取候事実也、以後於テ彼在処、不可有違乱候、四壁

之竹木等買取内也、

于時延徳四年子壬彼岸吉日

89 [同]

徹堂判

周仲西堂

(本文書ハ「旧記雜録前編」二一七〇九号文書ト同「文書ナルヘシ」)

[同]

当住以前日②可被

御書上候由云々、

87 [同]

任先年一龍和尚拳達之旨、令登庸洛陽普門寺位者也、

三月十七日

中正(花押)

〔鮫〕  
尾殿

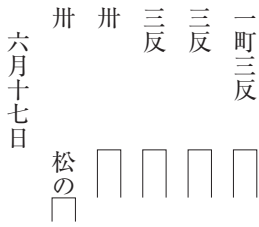
90 〔同〕

薩陽南華藏局、從予負笈者一歲半、朝經暮史、孜孜不倦、一日俄告錦旋、不堪默止、贈之以詩二曰、  
万里西行天一涯 多惜惜別立昏鴉 思皆在秋風後 公  
獨胡為先洛花

寿印頓頌

91 〔同〕

坪付



六月十七日  
▽  
感(花押)  
△

92 (本文書八八〇の9号文書ト同文ニツキ省略ス)

93 (本文書八七七号文書ト同文ニツキ省略ス)

94 〔同〕

知行名寄

一 浮免  
 与中田九七畝町十一之内  
 下田三畝 粃式表  
 岡島六七廿分之内(歩)  
 下々島壹畝廿七先大豆壹斗  
 つほね一七十分畝町十四之内  
 下之田拾者 粃三升五合  
 合田島五畝七先  
 佐藤 孫左衛門  
 彦次郎  
 〔左立〕  
 〔九反〕  
 仲左衛門

粃大ツ二俵一斗三升五合

高ニして七斗九升五合六勺五才

右知行内場(入有)之足地之内として令支配者也、

元和五年

樺山美濃守印

三月拾三日

感応寺

〔朱ニ面〕

右紙數六枚ハ現之文書一卷也、

弘化三年午夏、於寺社奉行内々写置也、此紙數六枚ハ、是ヨリ頭江拾五

通目、感応寺文書薩摩<sup>〔州共〕</sup>国<sup>下</sup>有之候迄ニ相当リ候事

或書

一 感応寺開基不詳、後將軍尊氏ヨリ歌ヲ雲山和<sup>〔尚脱之〕</sup>に賜ハる、

さそなけに都の遠き山のはに

曇らん月の独り栖むらめ

薩州出水郡山門院野田郷

鎮国山感応寺世代

当寺者島津氏御元祖忠久公受封於薩隅日三州、建久年中始下国、家臣本田左衛門督貞親預下薩州山門院創当寺、称鎮国山感応寺、

一 開山千光国師

一 再興開山雲山

自千光至雲山之交四五世不分明、

自元亨三<sup>癸</sup>亥年至康永三甲<sup>マ</sup>申住山二十年、康安三甲<sup>永</sup>

申九月二十日寂、

一 二世田翁 諱祖珪

自康永三甲<sup>元</sup>申至康安三<sup>辛</sup>辛住山十八年、貞治二<sup>癸</sup>癸卯

二月廿五寂、

一 三世大円 諱相通

自康安元<sup>辛</sup>辛丑至永和元<sup>乙</sup>乙卯住山十五年、永徳三<sup>癸</sup>癸亥

九月七日寂、九十一才、

一 四世答叟 祖同

自永和元<sup>乙</sup>乙卯至応永四<sup>丁</sup>丁丑住山三十二年、<sup>〔ママ〕</sup>応永十三

丙戌八月廿九日寂、六十九才、

一 五世天窓 祖果<sup>〔泉〕</sup>

自応永四<sup>丁</sup>丁丑至同十三<sup>戌</sup>戌住山十年、<sup>〔西二〕</sup>応永十二<sup>乙</sup>乙酉二

月建立永林寺・永福寺等二ヶ寺、<sup>〔戌九〕</sup>応永廿五<sup>戌</sup>戌九月

廿四日寂、八十五才、

一 六世徹宗 通音

自応永十三<sup>丙</sup>丙戌至同十七<sup>庚</sup>庚寅住山五年、永享元<sup>己</sup>己酉

十月三日寂、

一 七世無際 明照

自応永十七<sup>庚</sup>庚寅至同廿一<sup>甲</sup>甲午住山五年、永享八<sup>丙</sup>丙辰

四月三日寂、

一 八世太叔 尚祐

自応永廿一<sup>甲</sup>甲午至宝徳二<sup>庚</sup>庚午住山三十七年、

一 九世無文 慶章

自宝徳二庚午至寛正六乙酉住山十六年、同十二月十七日寂、五十八才、

自天文十七戊申至同廿辛亥住山四年、一十八世茂林 秀繁

一十世徹堂 聖薫

自天文廿辛亥至永禄八乙丑住山十五年、

自寛正六乙酉至明応八己未住山三十五年、

一十九世天恕 秀竺

一十一世得翁 宗叔

自永禄八乙丑至慶長八癸卯住山三十九年、

自延徳二庚戌至明応元壬子住山三年、

一廿三世三叔 尚乘

一十二世用堂 從龜

自慶長八癸卯至寛永十三丙子住山三十四年、正保三

自明応元壬子至大永八戊子住山三十七年、天文廿癸

丙子十二月四日寂、九十三才、

亥四月 寂、六十四才、

一廿一世心巖 尚安

一十三世州岳 從益

三叔弟子、自寛永十三丙子至延宝元癸丑住山三十八

自大永八戊子至享禄四辛卯住山四年、

年、

一十四世樹蔭 尚珊

一廿二世九岳 尚舜

自享禄四辛卯至天文九庚子住山十年、

心巖弟子、自延宝元癸丑至貞享三丙寅住山十四年、

一十五世南華 從薫

元禄十六癸未十一月廿七日寂、六十四才、

自天文九庚子至同十五丙午住山七年、

一廿三世友道 尚益

一十六世興叔 収隆

九岳弟子、自貞享三寅至元禄七甲戌住山九年、広濟

自天文十五丙午至同十七戊申住山三年、永禄三庚申

寺末脇元円通寺江隠居、

七月二寂、

一廿四世物外 崇亭

一十七世龍雲 聖薫

蒲生宝寿院より入院、

自元禄八<sup>(乙)</sup>亥至宝永三丙戌住山十六年、同年四月十三日寂、六十八才、

一 廿五世黙翁 尚伝

阿久根楞嚴寺より宝永六己丑入院、正徳四甲午十一

月右之楞嚴寺へ隠居、

一 廿六世愚山 永諄

山川正龍寺より正徳四甲午入院、享保十乙巳末寺極

樂寺江隠居、同十六辛亥三月廿五日寂、六十三才、

一 廿七世恢峰 永廓

泊海印寺より享保十乙巳入院、阿久根蓮花寺兼帯被

仰付候、享保十五庚戌十二月二日寂、四十二才、

一 廿八世直応 慈侃

享保十六辛亥二月五日阿久根折口永福寺より入院、

阿久根蓮花寺当代迄兼任被仰付置候、

一 忠久公御入国之時、此寺を御祈願所ニ被成、世々住職  
龜山之免状ヲ以僧官昇進有之候、

一 寛文五己巳年神徳院より山内寺ヲ末寺与書出候ニ付、山

内寺由緒古跡之訳段々申出達 貴聞候処、神徳院末寺

与者難申儀候条、御領内ニ而神徳院ハ日州一寺、山内

寺者薩州一寺ニ被仰付、兩寺別立候様有之度旨上野明

王院へ被仰聞、兩執当覚王院・仏順院<sup>(◎頂)</sup>江相達候処、弥

思召之通兩國之一寺ニ可被成御究旨明王院より申遣、

元禄四未年兩國天台宗之一寺ニ被仰付候、

一 野田若宮御神像并社頭御造立ニ付、山内寺を別当寺ニ

被仰付候旨、文政八酉八月被仰渡置候、

右要用集しらへ

一 御元祖忠久公御祈願所として御再興、所領八町・脇坊

十二ヶ寺・門前十二ヶ所被宛行、御祈願無怠慢之処、

天正年来寺院回祿なり、

龜翁山 西性院

高式石

開山性空上人 康保年中創建

天台宗江州比叡山延暦寺  
〔探題正覚院末トモアリ〕  
止観院末寺穴大派薩州  
天台宗一寺門首  
山内寺

野田  
龜翁山

右上古者西光寺与申候、

天台宗  
山内寺

高式石

右依為一所之祈願所寺家四對之境立、(島津守) 応永十三年得(久) 公御書物于今有之、題目瀬崎為御祈念於笠山大般若御座候、就中絶先師豪契法印從蒲生被召移、豪契代迄ハ於山内寺御祈念御座候、

寄進状

薩摩国山門院之内井貝居田七段、新御堂(⑩) 苔崎八幡所奉

寄進也、仍状如件、

応永廿五年十一月廿八日

(花押)

沙弥得仏御判

(本文書ハ「旧記雜錄前編二九七三号文書下同」文書ナルベシ)

任此状、可領掌之状如件、

島津判官入道沙弥得仏御判 (花押)

讓与

薩州山門院山内寺社院主職田嶋等之事

四至

東限馬場大道

南限新御堂堀

西限田(⑩) 大道 北限陣之内堀東(⑩) 殿城(⑩) 宛也、

右件寺社田嶋者、自先祖師匠祐範重代相伝之所領也、然者子息最珍坊依為器量之仁、限永代讓与畢、到子々孫々迄、無相違可知行也、仍為後日状如件、

応永十三年丙戌六月廿八日

(本文書ハ「旧記雜錄前編二七四六号文書下同」文書ナルベシ)

山内寺脇坊

一吉祥坊 一実相坊

一乘円坊 一觀喜坊

一坂上坊 一常万坊

右六代前代より山内寺脇寺之故、先師被申上、当時御免地、

右神社仏閣帳

右苔崎八幡(⑩) 八幡ハ感応寺末寺野田極楽寺之鎮守ニ而候、文書之正真ハ只今山内寺へ御座候、

右寛保二戌五月感応寺より申出、

野田  
龜翁山 西勝院  
天台宗比叡山  
延暦寺末寺  
山内寺

寺高式石

右寛永十三年知行目録有之、御寄付等之訳不知、

御切米七石

右者先住豪憲野田下名村之内自分ニ新田相開、高

五拾六石余出来仕、其節寺江被召付御訴訟申上候

存念之処致病死、秀雄代享保九辰年御訴申上候処、

永々現米七石ツ、被成下候旨被仰付置候、

一村上天皇御宇性空上人開基年月不知、其後建久年中

忠久公御当国江御初入部之節山内寺へ御着在而御再興、

中興開山豪秀法印、

一当寺事、忠久公初而当国江御入部、最初為御祈願所

御再興、脇坊十二坊・門前十二ヶ所・寺領八町被宛行、

于今寺領之御文書相残有之、其後御代々御崇敬之由ニ

而(忠將)道仏公より四至之所領被宛行御文書相残有之候、

其後 貞久公猶以御崇敬為被遊由ニ而、今以御文書相

残有之候、当寺之儀者九州天台宗之法談所ニ而、往古

別而繁榮之地ニ而、院家僧正住持之節も為有之由候、

寛文中前迄ハ比叡山執行探題正覚院住持信海法印・

存海法印兩代従山門兼帶罷成、兩世之位牌并所持之書

籍等于今有之候、右通繁榮之地ニ而候処、出水表及棄

破寺院零落仕無住罷成候、此時伝来之宝物・文書等紛

失之由、古記伝来仕候、然処豪契法印与申僧肥後国阿

蘇山之衆徒ニ而候処、御当家江依忠功当国江入来、然

ニ山内寺事御当家御祈願所之最初ニ而、御由緒無余儀

雖為旧跡右通寺院零落ニ付、龍伯公 惟新公御信仰

之上意を以豪契法印中興開山被仰付、所領百石御寄付

被遊豪契被任大僧都、寺院再興被仰付旨古記相見得候、

右寺領百石之儀者豪契俗姓清田氏を被取立候由ニ而、

清田右京与申者之知行罷(成当方)分其通ニ而有之候、八町

之所領・四至之所領・脇坊六ヶ寺・門前十二ヶ所、慶

長年中被召付候寺高百石共悉転任、只今八寺高式石・

脇坊六ヶ寺相残有之候、門前地十二ヶ所者都而御蔵地

ニ罷成候、何比共不相知候脇坊地屋敷名寄目録頂戴仕、

于今格護仕置候内ニも当分衆中屋敷ニ而有之候、茂御座

候得共、何様之訳共不知、

一 最初者亀翁山山門院西光寺と唱候処、其後最初院と相

改、又々文字を西性院と相改、又々西勝院と相改為申

由御座候、只今者亀翁山西勝院山内寺ニ而候、何比相

改候哉不相知、

右寛保二戌五月書出、

一 俊寛僧都墓所

但此地今ハ御蔵入ニ罷成候、

右申伝ハ喜界島江三流人之内兩人ハ赦免忝人相残、然

ニ有王と申若党下向ニ而致供奉上京之砌、船中より病

氣差発当所荒崎津江着船、山内寺を頼入寺候処山内寺

ニ而卒去、則院内江葬候由ニ而、広式畦余之壇築墓所

有之候、俊寛宝物等為有之由候得共、天正年中一乱之

回祿焼失之由、古記相見得申候、

右寛保二戌五月書出、

亀翁山 山内寺

但上古ハ最初院

一 開山性空上人

開基年月不知、播州(原之)書写山寛弘四年三月十三日入(十日九)

寂、

一 阿闍梨嚴海

一 権少僧都隆慶

一 中興豪秀

右御元祖 忠久公初而御当国江御入部之砌、御祈願

最初御再興被遊、脇坊拾式軒・門前拾式ヶ所・所領

八町被宛行、別而御崇敬為有之由、寿永之比より山

内寺住職、建曆三五月三日遷化、

一 祐伝

嘉禄三年遷化

一 祐存

弘安十一年三月十日遷化

一 祐範

応永十四六月廿日遷化

一 最珍坊法橋

一 心海

応永之末住年月不知

文安三年の比

一存海

右二世ハ比叡山学頭執行探題正覚院住職山内寺兼任、

此時ハ九州天台宗一宗之法談所ニ而致繁栄候由、

一豪淳

永禄十二年六月(朔九)日遷化

一隆存

天正十六年八月六日遷化

一尖存

元和五年四月十七日遷化

一豪契

肥後国阿蘇山集慶寺住持ニ而候処、御当家江依忠功

御国江入来、然処山内寺儀雖為御祈願最初之旧跡寺

院零落ニ付、龍伯様 惟新様思召ヲ以、慶長六年

山内寺中興被命附所領百石、其外神社領ニ宛行、大

僧都迄被任、寛永十四年四月十四日遷化、

一豪意

承応二年八月五日遷化

一宥尊

元禄九年十月廿五日遷化

一豪憲

元禄七年四月三日遷化

一秀雄

生国下野国日光山ニ而候処、南泉院へ罷下役僧相

勤居候処、正徳四年午八月十八日住職、享保十四西

正月十五日遷化、

一旭威

右旭威南泉院寺中観樹院ニ而候処、享保十四年西五

月三日兼任、元文四未十二月廿日高原神徳院へ移転、

一智門

元文四未十二月廿日山内寺住職ニ而、南泉院寺中実

相院兼任被仰付候、

右之外山内寺八代程之石塔有之候得共、往古之石塔故

文字不分明ニ付相記不申候、且山内寺儀段々及廢壞、

其上火災等有之、寺家焼失いたし記録等無之、相知候

分右之通御座候、以上、

元文五申閏七月

神社調

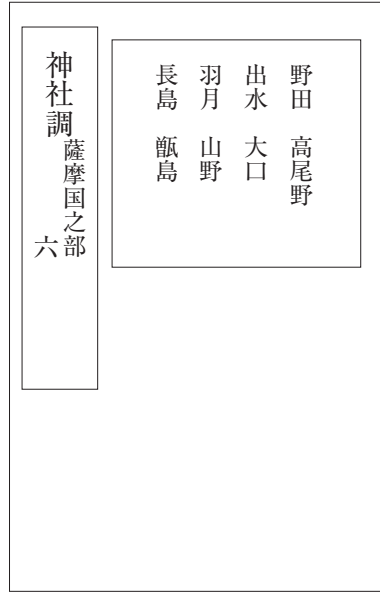
薩摩国  
之部

六



1

(表紙)



野田 寺地改  
御目見地 天台京都比叡山末寺御免地  
 山内寺 高式石御切米七石寺社方合力  
 極楽寺 感応寺末御免地  
 永林寺 右同末御免地  
御目見地  
 感応寺 臨済京都東福寺末御免地  
高式石統米拾式石合力

一分地外城出水郡山門院内高尾野、是野田より分地也、

2

稻荷大明神中古野田に在り、今高尾野内と成ル、紫尾権現客殿之棟札に、慶長十八年十一月上旬当地頭仁礼左近将監源景頼と有之、

高尾野 寺地改  
 福性院 真言善善寺末御免地  
高卷石寺社方合力  
 洞亀寺 曹洞宗竜光寺末御免地  
高拾式石寺社方合力  
 東全寺 洞亀寺末御免地  
 竜性院 右同末

出水郡高尾野郷

紫尾権現 薩城ヨリ西ニ去コト 廿三里  
朱書人  
 祭神 神社仏閣帳  
祭日九月廿八日

熊野権現ニ同祭米三斗五升従公義被下候、

朱書人 神体木像  
 当社ハ古来湯屋権現ト称シケルヲ紫尾ニ建替セシ故、  
⑧尾  
 紫屋権現ト号スル由、社記ニ見得タリ、湯屋権現ハ大己貴命ヲ勧請スルコト最モ本義ナレト、通例熊野三所ヲ湯屋権現ト崇メシモ在、此神熊野タルコト分明也、  
 神階集ニ、貞観八年辛巳薩摩国紫尾神従五位下、  
四月七日脱カ

祇答院上宮権現ヲ紫尾ノ最初トス、

高尾野末社

古紫尾権現・紫尾権現合テ三社也、

一 諏方上下大明神

一 住吉大明神

祭祀九月廿九日

一 正八幡宮

一 稲荷大明神

一 祭米三斗五升御蔵米

一 居間大明神

一 八王

外三斗五升氏子中出米

一 三部郎天神

一 横峰鎮守山之神

一 紫尾トハ、昔唐人狩衣ノヒモヲ残シ置、其色紫故名

一 羽山権現

一 山之神

付テ紫尾と云由、甚異説ナリ、

一 山之神

一 水天

祠官  
白川出雲

一 唐笠木井手ノ神

一 浜ノ天神

又出水之内上知識村之内ニ紫尾権現有、祭日十一月

一 張原鎮守

一 山王権現

八日、神供一膳と記ス、後勸請ノ神社と見得タリ、

一 尾籠鎮守

一 水天

最モ由緒不詳、

一 水天

一 榎木鎮守

右神社撰集

一 井上鎮守

一 伊勢

社屋敷五畦前々より被下置候、

一 井手ノ神

一 若宮大明神

右文化十一 戌十一月書出、

一 早馬権現

一 伊久田森

一 永池井手ノ神

一 霧島権現

神社考  
一 当社勸請年曆不詳

一 伊久田森

一 愛宕権現

右外撰集同意故略ス、

一 鎮守山之神

一 大窪王鎮守

一 矢房森

一 井手ノ神

一 山之神

一 木ノ法

一住吉森 一山河鎮守

一井手ノ神 一山之神

一山之神 一山之神

一山之神 一山之神

一蛭児 一井手ノ神

一山之神 一山之神

一山之神 一山之神

一山之神 一山之神

右神社考

高尾野 紫尾山 宮司寺 祈願所 福性院

高壺石六斗寺地御支配地

右者久々破壊仕候処ニ、寛永十五年所中勤を以再興仕、

出水之成就寺より順正と申出家現住ニ而御座候、

右神社仏閣帳

一貞享年間比、中興開山快慶建立之由書留有之、且前代ハ紫尾権現神前勤も為致由候得共、当時無住之御より社人祭方相勤、今以其通也、

一前代ハ大乘院末ニ而候得共、幸善寺御建立之節より幸

善寺末ニ被仰付候、

一高壺石六斗

高尾野 齡瑞山 道提所 洞亀寺

高壺石六斗

但寺地御支配地御竿御免

一福昌寺開山石屋四世在天和尚之法孫龍光寺二世洞亀

寺開山東月和尚

右神社仏閣帳

高尾野 齡瑞山 出水龍光寺末 洞亀寺

開山龍光寺二世東月上珊(承)

文明十一年己亥洞亀寺開闢、即東月在任職、同六月

十一日示寂、然者洞亀寺ハ東月落命之(地)也、

但東月之由緒龍光寺之所ニ委出故に爰に洩す、

一当寺三世中興龍光五世大朝宗大和尚、永祿六年癸亥正

月八日丁酉日申刻示寂、

一洞亀寺殿重久天輪才賢大禪伯(倫)

(高津成久)

出水薩州三代也、天文五年丙申三月四日死去、灰塚并〔義虎美マ〕

石塔洞龜寺内ニ于今有之、〔高津成久マ〕

一洞龜寺事昔日從重久才賢高七町寄附之由、毀破之節、

京衆青木紀伊守殿右高差上、三十石被付置候処、又到

御当家、慶長十三年二月右高三十石被召上、五石九斗

七升被召付候、然処先年依御法三ヶ二被召上候節、壹

石六斗之高被召成候、雖然如先例法規不怠相勤申候、

右元禄四未十二月書出、

寛保二戊五月書出、

一高拾貳石壹斗貳合八才

一錢五拾貫百八拾貳文

但先師并松方より施入、

高尾野

洞龜寺末

東全寺

開山洞龜六代雪伝瑞春

元和元乙卯十二月廿六日示寂

一施主雪庭隆安庵

但仁礼左近入道秋扇也、寛永元年正月廿六日卒、

右同

如意庵

開山洞龜五世仲庵宗玄

天正五丁丑四月遷化也、

一如意庵殿実宗妙真大姉

才賢之御妹也、年月不知、

龍光寺末

龍昌院

開山洞龜四世布禊破

廿二日示寂、年月不知、

一龍昌院殿香山龍昌大姉

才賢之伯母也、忌日年月不知、

右同

西德寺

開山洞龜六世白外宗異

天正七年癸未七月八日示寂

一西德寺殿天輪〔倫〕才賢大禪伯

勸請之由申伝候、

右同

永忠庵

開山洞龜八世日山盛晋

八日示寂、年月不知、

永忠庵廢壊地ニ而本尊等も無之、

以上都而元禄四未十二月書出、

或書  
一出水郡中古作和泉、今為出水

出水郡出水郷鯖淵村 名勝考

○箭筈嶽 上鯖淵村ニ属す、

同郷莊村

○水成川ミナリガハ 高尾野川・野田川の末にて、西の方瀬崎野

に對して勝地なり、

同郷西目村霧野村

○霧野

○山門ヤマド 出水郡を山門院ヤマドといふ、

○薩摩迫門サツマセト 今黒戸と云て出水と長島との交ひの海門

也、海潮南北に流れて其長サ二里余、其濶サ五町余、

南に大洋を受けて潮汐の漲り来る時ハ大河洪水の流に

似たり、故にその満濶を候ふて通船す、長島ニ渡る

の門を黒戸といふ、

同郷脇本村

○搗之浦港ツキノウラ 即脇本の津也、港中の小嶼を寺島といふ、

○山門村 出水郷内にて今野田郷になる、

同郷武本村

一薩州山門院郡司職平姓秀忠ハ、是島津元祖忠久侯初入

部之時令居城、其本桓武帝之流平姓千葉介常時四代之

後胤常胤弟胤光一流出羽守種方、肥前国神崎庄本領主、

其子權別当平次郎太夫種国初て薩州山門院郡司職を受

く、其子權別当国秀、其子太郎秀忠、此時參謁関東右

大将加元服、御烏帽子・御太刀拝領之、而称山門太郎

秀忠、男子二人女子五を生す、

一和泉郡司職伴姓兼保、是忠久侯初入部之時令居城、其

本肝付石兵衛祐兼貞之末子兵衛尉行俊か一流和泉元祖

小太夫兼保也、建久八年内裏大番廻文ニ和泉小太夫と

ハ此人也、其後島津四代忠宗侯ニ男衛門兵衛忠氏相統

古和泉家亡跡、其後薩州用久相統す也、

亮洲隨筆

御居城記

一木牟礼城者 御元祖忠久公以来五代貞久公迄御居城ニ

而、御家最初之地也、

○上宮嶽 午ノ方ハ伊佐郡山崎、卯の方ハ同郡宮之城ニ属す、薩藩高山の一なり、

或書

一黒の津 出水郡此地上古薩戸迫門と唱ふ、今ハ此辺黒之津と云、和泉西目村と長島脇崎村之間ニ渡海一里也、万葉集長田王歌に

隼人のさつまの迫門<sup>セト</sup>を雲井なす

遠くも我れはけふミつるかも

大納言某歌

ハヤひとのせとの岩ほも鮎走る

よしの、川になをしかすけり

一薩州和泉郡志考、忠久侯入国已前百姓肝付氏之一族領也、家号和泉と唱ふ、忠久侯山門院居城之時、内領主平姓秀忠也、建武・暦応之比は太守四世忠宗侯の二男忠氏領知す、和泉と号す、応永年中島津播摩<sup>磨</sup>守守久領之、文明之比は薩摩守用久代々領知す、右人衆長島まで致支配、伝に云、長島一節天草越前守押領す、此時島津常陸守攻取之為領主、然処有故て於野田極楽寺誅

常陸守也、文禄元年島津又太郎忠辰朝鮮征行不宜氣儘故、將軍家ヨリ和泉・高城二郡被没収、慶長三年帰陣之後、義弘・忠恒父子軍功依之如本返賜二郡、従和泉及長島地頭職賜本田六右衛門親正、慶長十二年の後、樺山権左衛門久高地頭及長島、寛永の初ヨリ和泉・長島地頭山田民部少輔有栄入道昌巖也、

出水

箱崎八幡大菩薩

出水

宗廟

祭日九月廿四日 同廿五日 十一月十五日

祭米五斗式升五合従公義下

右祭前ニ者流鑄馬有之、祭度々日数御座候得共、当

分如此ニ候、

屋敷壹ヶ所 正座主

同 壹ヶ所 伝太夫

同 壹ヶ所 大宮司

同 壹ヶ所 笛代

同 壹ヶ所 正祝子

同 壹ヶ所 伝介

右神社屋敷御免

右神社仏閣帳

出水郷

箱崎八幡宮 薩城より西ニ去事ニ拾四里

祭神

本社<sup>(筑)</sup>筑前国博多郡箱崎之郷

誉田天皇

九月五日

同廿五日迄正祭

一 祭料五斗二升五合

一 伝称す、当社ハ忠久公御下向之時、博多之海上ニ而難

風有、御誓願之旨ニより薩州山門院へ御勸請、神領余

多御寄附、其後出水之内名護浦江御遷座、雖然神事之

便り悪敷故、今和泉へ御安置、鎬流馬之射儀を行、于

時不例の事有、今の宮内ニ遷座、累年祭礼無退転令緩<sup>(施力)</sup>

行畢、

社司

黒木安房

右神社考

異本神社考  
加紫久利并箱崎八幡・諏方大明神出水之三社と申伝候、

出水上知識村

箱崎八幡宮 薩城より西ニ去事廿四里

午ノ方向、仮屋元ヨリ申方十八丁三十八間

祭神三座

神功皇后

応神天皇 誉田天皇トモ

武内臣

本社ハ筑前国那珂郡箱崎神社、此社者誉田帝之祠也、

地近博多、諸社一覽、

人皇六十代醍醐天皇延喜廿一年六月廿一日依託宣建宮

柱於箱崎松原、書新羅降伏之旨而置御庄ノ下、立石柱

祈神誓不朽、古老云、昔此松原埋戒定惠三字之箱故号

云箱崎、栽松<sup>(マ)</sup>其処為標、至今猶在焉、

縁起曰、昔白幡四流・赤幡四流降下、於其処栽松為標、

故有八幡号云々、

祭祀九月廿四日より廿五日、兩日共ニ地頭代參詣、廿

五日ニ社参有之、是ヲ号御名代、

〔九月〕

一 正月廿五日浜殿下祭有、

一 祭米五斗二升五合御藏米

遺書

出水郡宗廟箱崎八幡宮ハ、本社筑前国博多郡箱崎郷ニ本社譽田之帝之祠也、地近博多、是須眼異国之意也、

昔箱崎へ有白幡四流・赤幡四流自空降下、此地ニ建社崇大神、故ニ号八幡矣、当社東脇埋感定惠<sup>(戒)</sup>之三字之箱

裁松其所以為標、末社平位殿椋位殿住吉現玉也、

一 当社へ御勸請ハ、忠久公為三州之太守出於東関浮西海

之日、於博多海上有迷風簸船之愁、諸国之商船悉帆破楫摧不知其所之時、公自被念八幡宮懇祈鄭重也、故

其感応不虛唯官舟無恙着岸御当国、因此御願御勸請為令護封疆安置于此地矣、

一 右之趣ニ而、忠久公依御宿願、出水郡山門院野田之内新御堂江右社頭被遊御造立、御神領等被召付、放生

会之砌ハ三騎之鎗流馬御座候、其後出水之内名護浦江御勸請ニ而、御神領八町相付、鎗流馬等不相替候処ニ、

名護浦之儀ハ磯辺故、大潮之時鎗流馬難成故同断今和泉へ御社被召直、如旧規御神事御座候処、御池ニ鎗流

馬掛入怪我依有之、当宮内ニ御宮被召直、有来候御神

領又ハ御祭等如前御座候処、<sup>(鳥津)</sup>忠辰御代ニ殿領ニ罷成候

時分、右神領被召上候、雖然<sup>(高)</sup>麗御陣之節、被遊御立願勝利を得、出水郡為御加増御給、早速神領三十石被

召付、御神事之鎗流馬等前代ニ不相替候、然処ニ寺社之高被召上候砌、右神領不相残被召上、于今御物より

無断絶御神事御座候事、  
一 野田新<sup>(御堂力)</sup> 当出水名護浦今和泉へ箱崎八幡宮社之跡、于

今小社御座候事、<sup>鳥津播磨守</sup>久寄進状有之、  
但本書ハ野田山内寺へ于今有之候、

右神社撰集

一 神領四拾壹石壹斗式升壹合

右慶長年中迄者被召付置候、年々拾式度ツ、祭有之、其上九月廿五日ニ三騎之鎗流馬等も有之候得共、右神

領被召上、只今者五斗式升五合ニ而祭有之候云々、  
一 八幡宮前代より出水・野田・高尾野・長島・阿久根宗

廟と申伝候、  
別当寺 成願寺

屋主 愛染院

右異本神社考

社司 黒木大膳

3

奉造立箱崎八幡宮宝殿一字云々、

右檀那島津薩摩守藤原陽久(義虎)為息災延命云々、

永祿五年壬戌九月十五日

当奉行 猿渡伯耆守

藤原信知

市来民部大輔

惟宗家諸

竹田越中守

中原良純

当地頭 田野出雲守

藤原祐之

狩野縫殿助藤原永吉

扉之画師

木屋奉行

築瀬右衛門大輔

境宗直

4

奉造立箱崎八幡宮宝殿庫藏一字、、、、

大檀那薩摩守藤原陽久為息災延命云々、

永祿六年癸亥九月廿日

当奉行 猿渡伯耆守

藤原信知

市来民部大輔

惟宗家諸

竹田越中守

中原良純

当地頭 原田紀伊助

藤原経一

木屋奉行

市来美作守

大藏家弘

遠矢下総守

平賢通

一大檀那島津薩摩守国久名前之棟札有之候得共、相損文

字不知、

5 奉上葺修理、箱崎八幡宮宝殿一字、、、

大檀那藤原家久為御武運長久云々、

慶長十七年壬子九月吉日

伴久兼

加志久利大明神

高六拾斛

6 大檀那藤原朝臣光久公并(綱久)久平御息災延命云々、

正保元年甲申四月吉祥日

屋敷一ヶ所

正座主

当地頭

山田民部

同 一ヶ所

大官司

源有榮

同 一ヶ所

正祝子

同 一ヶ所

炊司

同 一ヶ所

御贄狩之行司  
金丸次兵衛

7 奉修補箱崎八幡宮御殿云々、大檀那源朝臣光久公并綱

久公為御息災延命云々、

寛文九年己酉季秋吉日

同 三ヶ所

檢校三人

同 一ヶ所

みさき  
内侍

同 一ヶ所

祝子

同 一ヶ所

鍛冶  
龍雲右衛門

町田勘解由

藤原忠代

右社屋敷御免地

一当社ハ薩摩宗廟之由申伝候、

右神社仏閣帳

8

奉修補箱崎八幡宮社中云々、大檀那藤原朝臣綱貴公并(吉貴)忠竹公為御息災延命云々、

貞享五年辰三月二日

加志久利大明神

薩城より西江去事  
二拾五里社西向

当地頭

肝付主殿

延喜式神祇賦

出水郡一座小 加志久利神社

本社 応神天皇  
神功皇后

第一御殿 天照太神

第二同 姫明神 三女神

第三同 住吉三神

二月三日 八月朔日 十一月三日祭

一 神領高二拾石

一 加志久利とハ、昔彼山を加世久利山と云、世と志と音通す、故今加紫久利を神号とす、

一 勸請年曆不詳

一 当社ハ往古小社ニ而候処、寛永元年明神之神体を蛇三

重奉卷死候、時之地頭樺山久壽美濃守奇意をなし、祠官黒

木氏成願寺使僧西之坊宗印を以薩摩ニ奉告、家久公ハ

其比田布施江御懇ニ而御咽氣御煩之処、此事を被聞召

上御祈願之旨有之則御平愈、明ル寛永二年御造営有之、

奉行吉利忠張下総・樺山采女勤之、

一 当分之宮作享保六年吉貴公御再興、同七年正月遷宮有

之候事、

右神社考

下鯖淵村之内平松  
加紫久利大明神

社未申之方ニ向、仮屋元より子之方壹里拾式丁三拾

間

一 当社并箱崎八幡・諏方大明神を当所三社と申伝候、

右異本神社考

又曰

本社二神 応神天皇  
神功皇后 住吉大明神

日輪太神宮 姫神 天照太神也、

脇小神三神 三女神也、

遺書

一 出水郡大宮加志久利大明神と申ハ筑紫小戸ノ櫛原ニ潮

路ヨリ化生シ給て、住吉明神とあらわれ給し由申伝候、

然るを日本最初三十三ヶ国ニ定り、一國ニ大社一社宛

御立之由候、後ニ六十六ヶ国ニ相分、其刻薩摩之為大

社出水肥後境加志久利山へ奉崇、則彼山之名を片取、

加志久利大明神と奉申之由申伝候、最第一之御殿ハ日

神大神宮、第二御殿ハ姫明神と奉申候、則宇佐明神田

霧姫命也、第三底筒男・中筒男・表筒男也、第四神功

皇后、此三社を二之御殿一社ニ奉崇之由申伝候、然処ニ古来彼山ニ野火入候而本社・末社・本地迄悉焼失いたし、縁起等其砌り捨り申之由候、漸御神体并本地之由、毘沙門天一体木仏御残り被成候事、

一高麗御加増とて出水郡御給之刻、高三拾石被召付候、左候而 惟新様御初地入之刻ハ加志久利并箱崎八幡宮へ御参詣被遊候、前代より之大宮司ハ池上次郎左衛門と申人ニ而候得共、大宮司之儀候条然々成者をと被仰出候而、帖佐衆野村兵部・正祝子真幸衆黒木伝太夫・座主帖佐山田正田院快誉、此衆御意ニ而被召移候事、(家久、忠世)一中納言様吉田殿へ御尋之時分、加志久利大明神ハ薩摩之宗廟一之大社ニ而御座候由御咄有之、就其一入御崇敬被遊、御神領小知行之故高三拾石被召付、都合六拾石于今相付候事、一元和年中寺社之知行被召上候時分も、加志久利ハ一国之宗廟之由ニ而、本領六拾石其儘ニ而被召置候、右之高を以年中ニ拾式度之御祭礼、堅固相調申候事、右之条々從古来申伝候也、

加志久利大明神

寛文十二年

正座主

八月十二日

権座主

正祝子

大宮司

黒木左近

一三代実録、薩摩国貞観二年三月廿日庚午、賀志久利神從五位下亦授從五位上、

一三代実録・類聚国史、貞観八年四月七日、正五位下加志久利神正五位上とあり、

9 覚

出水加志久利大明神者何れ之神を崇候哉、可申出由承知仕、左ニ申上候、

一延喜式神名帳一座(座ト)被相記候所祭之神者

本社二神心神天皇 底筒男神 神功皇后 住吉大明神 中筒男神 表筒男神

日輪太神宮 姫神 脇小社 三神 姫明神

但右神社大小二社勸請御座候、

一加志久利大明神ト申候ハ昔彼山之名ヲ加世久利ト申候付、直ニ山之名ヲ神社之号ト仕、世ト志ト五音相通ニ唱来申候由承伝候、

右之本地ハ何仏ニ而有之候哉、此儀何仏共不承伝旨難申上候、

右之通任御尋書付如斯御座候、

寅五月廿一日

本田甚次

御記録所

右神社撰集

11 奉造宮加紫久利大明神御殿一字、、、

寛永二年乙丑九月廿六日

家久公御代也

樺山 島津美濃守久高

樺山 島津采女正久貞

吉利 島津下総守忠張

作事奉行

阿多 島津加賀守忠榮

橋元助右衛門尉<sup>(寫)</sup>眞

伊尻和泉守祐永

河野伊与介通榮

導師 成願寺住法印快盛

10 写 寺社奉行へ

右新納市正殿寄進

一太刀 一腰 波平

右二行 吉貴公御寄進

一同 一腰 上村阿波守藤原康綱撰州於大坂作之、

一太刀 一腰 奥和泉守忠重作

右出水加志久利大明神を薩州之宗廟と唱来候得共、向

後ハ薩州之惣社と唱候様被仰出候、

右可申渡候、

正月

(種子島久基)  
彈正

12 奉再興宝殿、、、

正保三丙戌七月廿三日光久公并<sup>(綱久)</sup>久平公、、、

当地頭

再興奉行

山田民部少輔源有榮  
八重尾休兵衛藤原重良

(本文書ハ一旧記雜録追録三二一一二五号文書トホボ同文ナルベシ)

地頭代

山田主計助源有貞

遷宮導師成願寺現住

大阿闍梨法印快寿

13 奉修甫御殿、寛文六丙午三月廿八日光久公并綱貴

公、

当地頭

山田民部藤原有盛

再興奉行鹿兒島衆

今井与三左衛門

外名前略ス

14 奉修甫、貞享三丙寅八月十九日光久公并綱貴公

、

当地頭

肝付主殿伴久兼

地頭代

本田次郎右衛門藤原親苞

相良与左衛門平長種

外名前略ス

出水武元村之内籠、杉  
諏方上下大明神

午方向、仮屋元より子方四丁五十間

神体鏡

木体二ツ右社へ鎮座

右神社へ山門院諏方大明神武元村之内市之注連と申所

江勸請ニ而候得共、御城内へ御宮建立、如旧規神領八

丁被召付両頭御居り、義虎代ニハ直參も為有之由、右

市之注連ニ跡宮大諏方と申于今御座候、

一于今社屋敷五畦并神領畠壹反七畦拾貳步被召付置、御

祈祷并掃除等相勤候、

一祭七月廿八日

一往昔者杉田・松ヶ迫・小門田・舞田抔与申字之田并武

元之内門拾貳為相付之由申伝、大祭為有之由候得共被

召上候付、当分七月廿一日注連卸、廿七日・廿八日迄

社人相揃祭相勤候、

15 奉造立諏訪上宮宝殿一字、大檀那国久為御息災延

命云々、

文正三年八月廿八日

16

奉造立諏訪下宮宝殿一字、、、

応仁二年二月廿八日

<sup>出水</sup>  
老神六所権現  
竹本村

祭日正月四日 十一月四日

屋敷壹ヶ所 御支配御免地

右者昔宮田家之先祖為崇由候、

17

奉再興薩摩国出水庄諏訪上下大明神宝殿一字、、、大

檀那藤原朝臣家久公為御息災延命、、、

元和七辛酉 七月廿八日

天神  
祭日二月廿五日 八月廿五日  
小松

榊山美濃守

藤原久高

鞍懸之明神但木像

妙見但石像

山王但木像

大諏方

祭日七月廿七日

屋敷壹ヶ所 御支配御免

大田村

一大檀那藤原朝臣義虎息災延命之棟札有之候得共相損、

年号月日等不相見得候、

一 鰐口之銘

愿奉掛志岐深江村十五社大明神鰐口、于今明応三年甲

寅六月吉日大脇安徳敬白、

一 当社并加紫久利・箱崎八幡宮ハ出水三社と申伝候、

右異本神社考

諏方  
祭日七月廿七日

屋敷壹ヶ所 御支配御免

大井手之宮水天

祭日十一月廿九日

寺社方帳留目安

享保九年閏四月十一日、高百石加紫久利江為社領御

寄附、幸善寺江之書付、

屋敷壹ヶ所 御支配御免

伊勢

祭日霜月廿一日

屋敷但大宮司 御支配御免

若宮大明神・八幡大菩薩

大宮司屋敷 御支配御免

祭日七月八日

右者島津常陸父子崇申候、

18

奉新再興若宮殿、、当大檀那主藤原光久朝臣、

寛永十三年

大願主山田民部少輔

丙子八月大吉日

源有榮朝臣

右神社仏閣帳

出水郷 末社

一天神

一諏方大明神

一乙諏方大明神

一祇園宮

一高千穂大明神

一降野八幡宮

一甲天満天神宮

一正八幡宮

一天神宮

一春日大明神

一老神大明神

一山王

一諏方大明神

一白山権現

一拾五社大明神

一龍王宮

一浜之八幡宮

一天満天神宮

一諏方大明神

一伏草宮

一矢筈権現

一伊勢太神宮

一諏方大明神

右神社考

一紫尾権現

一大諏方大明神

一彦三所権現

一稻荷大明神

一諏方大明神

一弁才天

一伊勢太神宮

一老神天神宮

一伊勢太神宮

一伊勢太神宮

一拾五社大明神

一森宮

一熊野権現

一水天

一宮崎大明神

一霧島六社大権現

一天満宮

出水知敷村之内  
名護浦(識)  
八幡宮 但午之方向

神体木像

後ニ天文八年己亥十一月十日作者知敷安昆

棟札

大檀那薩摩守藤原朝臣陽久(鳥津義虎)

奉行 市来民部太夫惟宗家諸

猿渡伯耆守藤原信允

竹田越中守中原良純

地頭 田野出雲守藤原祐之

右八幡宮由緒之儀 忠久公三州為太守初而御下向之砌、

筑前博多於海上御難風之時節、筑前箱崎八幡宮ニ御祈

願被遊、野田新御堂江御勸請、其後出水御手ニ付、御

宮名護浦江被召置候処ニ、三騎之鎗流馬大潮之砌かけ

入怪我依有之、出水六月田村今和泉江御宮被召直、其

跡宮之由于今申伝候云々、

天明六年

出水郷士年寄

午八月廿四日

野村市郎右衛門

大諏訪大明神 市之住連

卯方向、仮屋元より戌方拾九丁三拾間

神体鏡

右神社山門院木牟礼諏方大明神 忠久公御勸請、神領

八丁被召付、両頭被召居神事も有之候得共、夫より市

之住連と申所江被召直、本社ニ御取持不相替神領被召

付、両頭被召居神事有来候処、右諏方御城内へ被召直

候而、大諏方江者、五月五日・七月廿七日神事被仰付

候処御米被召上、前々度之住連と申字屋敷之内より式

反五哇于今被召付置輕キ祭有之候、右社地へ被召直候

年月日不知、

右文化十一 戌十二月書出、

天満大自在天神 山崎

午方向、仮屋元より丑寅方四丁四間

神体鏡

大願主藤原祐桑(乘)

天正十八年戊子八月吉日

出水  
住吉

一 神体鏡

一 天神繪像一幅

狩野雖盡入道永吉筆、大願主田野伊予守藤原祐桑<sup>⑤</sup>

〔ま、〕  
天正十六年戊子八月吉日

一 木体壺ツ天神社ニ有

一 加藍石体式ツ<sup>(マ)</sup>

但 天神・住吉両御宮之間ニ有、

一 祭八月廿五日

一 社屋敷五畦 于今被召付置候、

21

奉再興<sup>天神</sup>住吉両社拜殿一字、、、大檀那<sup>(島津義虎)</sup>藤原朝臣薩摩守義俊<sup>(利)</sup>、

永祿九年丙寅八月彼岸日

一 勸請之年号月日不相知

一 右之外由來書申伝等不相知

22

山崎天神社江相付候三拾六歌仙裏銘之字

此三拾六歌仙三拾五枚者

去ル酉年中ニ被遊候、御年六拾九歳之時也、

高辻大納言殿菅原氏豊長卿之染筆也、

今壹枚者

六拾歳之御時染筆也、

河野大納言殿正二位実藤卿之御染筆也、<sup>(阿)</sup>

薩州出水郡於麓山崎天神宮奉寄進者也、

于時元祿七甲戌年二月吉日

撰州大坂公務住成就之所也、

願主 伊集院主水藤原久明

敬白

右文化十一戊十二月書出、

出水

天満大自在天神

小松

申之方向、仮屋元より巳之方八丁五拾八間

神鏡壺

慶長十三年十一月吉日、願主鬼塚伊豆助藤原宗次

と銘有、

木体壹

文龜二年八月彼岸と銘有、

一 右天神之宮脇ニ、妙見之石并山之神右同所ニ有之候、

一 社屋敷壹ヶ所

一 往昔ハ神領八町相付候由、

奉造立南無天満天神宮宝殿一字、、、、

大檀那藤原家久為御息災延命也、当地頭藤原久高(禰山)

慶長十六年 辛 亥 仲夏吉祥日

右之外由來書等不知

一 右文化十一 戌十二月書出、

春日大明神

雉子峰

卯之方向、飯屋元より戌方拾四丁四拾四間

神体九

内鏡壹 石体壹 木像七

地藏仏木壹本

右社内安置、

一 勸請之年月不知

一 当社者出水五社之内ニ而、前々より別而御崇敬之由申

伝候、

一 右文化十一 戌十二月書出、

出水

稻荷大明神

中大野

卯之方向、飯屋元より酉之方式拾四丁三拾四間

神体鏡

木体二

祭日十一月廿八日

一 当所五社ニ而前代ハ御崇敬之由、慶長十七年之高帳ニ

も神領拾石と相見得申候、

一 肥後加藤主計頭清正勢出水沖へ船余多乘來、蕨島迄燒

払候時分、夜中ニ箭筈嶽より洗切磯辺迄幾万共不相知

火相見得、夫故加藤勢為引退由、稻荷大明神之御方便

と只今迄申伝候、雖然右神領被召上、御祭米 茂不被下、

当分祭所中より相調申候、

一 義虎代ニ者毎々參詣有之候由、其由緒を以于今五社ニ

御取持ニ而候、勸請之年号月日不知、

右文化十一 戌十二月書出、

山之神

栗毛野

午之方向、仮屋元より午未之方壹里貳拾壹丁四拾貳

間

一 神体石五ツ

一 末社之由ニ而小社三所ニ有之、

一 祭日十一月二日

一 右山之神出水宗廟と申伝候、

一 義虎代ニハ栗毛野村ニ仮屋被建置候而、毎年參詣有之

候由、

米津天満宮

米之津

辰之方向、仮屋元より亥子之方壹里十八丁三拾七間

神体鏡

木像二体

内 一体筑前太宰府飛梅枝を以御出来候尊像之由、

右天満宮御建立者 重豪公御參勤之節、天明七 未 九月

四日出水御仮屋御發駕、米之津御茶屋へ被遊御入候、

前夜俄ニ風雨光物など有之、翌朝御門前石階之上ニ天

満宮之神鏡一面有之候を見出、右御茶屋ニ而差上候処、

直ニ御取揚ニ相成、夫より屋地御見分ニ而、翌申年御

普請有之、同九年 酉 六月九日遷宮有之候、

一 御切米三石ツ、年々被成下候、

社司  
伊東大膳

一 右同貳石ツ、右同斷

社家  
西郷源五郎

右兩人近辺江被召移、居宅御普請被成下候而相勤居

候、

右文化十一 戌十二月書出、

24

奉造立山之神社一宇、薩摩国和泉庄栗毛野村之内云々、

(天正九年辛卯十一月廿五日)

大願主檜前大学助国広

一 右大学先祖従上方守り下り奉崇候由申伝候、

一 御文書御記録ニ茂被召載置候由及承候、

右文化十一 戌十二月書出、

愛宕

座主  
千手院

申之方向、仮屋元より寅之方式拾貳丁五拾五間

木仏三体

太郎坊 勝軍地蔵 弁才天

祭日六月廿四日

25  
鱈口之銘

奉施入杉村

一 当山之儀義虎別而崇敬ニ而、義虎為寄進狩野頼益字ニ  
近衛様御自筆歌仙三拾六枚、天正五年丁丑六月廿四日

御寄進之由、尤 近衛様御銘書、天正四年七月一日臨

池末流親王と御判形迄も有之、

此鱈口有子細紛失、年久敷而求之、  
大願主地頭  
本田六右衛門尉藤原正親

一 義虎崇敬ハ無隱申伝候、堂ハ御城元より向鬼門御立被

成、結構ニ而為有之由、其後出水下城之刻致廢壞、右

之歌仙も千手院格護仕置候、然処無程火事差起、御堂

悉焼失いたし候得共、山田昌巖地頭之時分、所衆力を

以再興有之、歌仙之儀者千手院所江有之候而相揃、于

今千手院へ覚悟仕候由、

右文化十一 戌十二月書出、

26  
奉再寄進薩州和泉庄杉村薬師如来御宝前  
慶長七年壬寅首夏吉日 敬白  
当寺之住  
権大僧都頼莚

薬師

杉

午之方向、仮屋元より亥子之方五丁拾壹間

一 右薬師如来ハ從古秘仏也と相伝、昔年大磯虎御前依二  
世宿願、帖佐米山薬師・法華嶽之薬師・出水杉本寺薬

師三ヶ所同前建立云々、其後御堂為香花拝授開基杉本寺、雖然不知其何年何月、是又申伝御座候、

一開山安明法印年月等不知

一右葉師于今杉本寺俗題覚悟ニ而候、

右文化十一 戌十二月書出、

27

直末寺証文写

存江被仰付、安養院宥江二代目之積ニ而住職被仰付、其涯安養院兼帶ニ而幸善寺江致入院候云々、

薩州出水郡加紫久利宮別当幸善寺惣持院加紫久利山

右幸善寺年久無住ニ而諸寺及退転由、国主意願建立之

寄附於録金本寺、末マツ当院先住僧正快存依国主 吉貴公

命為中興開山被置、当院之法流所以受国主之命被願為

当院末寺、依永加当院末寺者也、

一莊嚴院兼帶之事

大覺寺殿御氣色候、

仍執達如件、

智積院僧正

享保六年丑十一月日

知興

薩州幸善寺御房

一高式百五拾八石五斗八升六合七勺壹分  
内六拾石 加志久利社神領  
右要用集しらへ

加志久利山 惣持院

享保六年丑 吉貴公大乘院末寺隅州栗野之廢寺幸善

寺を被引移御再興ニ而、加志久利社別当寺ニ御究、

京都智積院快存僧正を為中興、鹿兒島安養院宥江敝を

二代之積りニ而住職被仰付、智積院直参ニ而門首ニ

被仰付候、

真言宗京都  
智積院末寺  
門首

幸善寺

加紫久利山 惣持院

享保六年辛丑七月御再興、中興開山智積院前僧正快

京都智積院直末  
真言宗門首

幸善寺

直末寺証文写

一加紫久利社御再興ニ而、当寺事別当寺被遊御取立、京都智積院末寺門首法流地ニ被仰付、其上嵯峨大学寺御院家莊嚴院兼帶迄結構被仰付候処、末寺一ヶ寺も無之

28

一米津天満宮

別當寺

幸善寺

右米津天満宮御造立ニ付、別當職兼帯被仰付候、此旨

被申渡候様寺社奉行へ可申渡候、

天明八年申八月

(島津久那和泉)

月并之法席差支候分ヲ以、大乘院末寺出水成願寺・同  
阿久根文殊院・同長島常念寺・同高尾野福性院・成願  
寺末寺出水<sup>(御)</sup>成川寺・同金藏院六ヶ寺、享保十三申正  
月幸善寺末寺成御免被仰付候、

一 当寺六世之住大円代、寛延三年午十二月廿二日暁出火  
ニ付、諸帳面等都而及焼失候、

幸善寺世代

一 高貳百石

一 中興開山快存僧正

内百石 繼豊公御寄附

拾七石壹斗六升余

右快存僧正事京智積院江住職之内、享保六年丑十月  
中興開山迄ニ被仰付候、左候而、於京都致隠居、同

右中興快存寄附

九年辰八月遷化、

三拾石九斗三升余

一 二代宥敞

右二代宥敞寄附

享保六丑年十月安養院より入院、同十九寅正月遷化、

式拾四石壹斗五升余

一 三代太音

右三代太音寄附

享保十九寅二月海藏院より入院、元文四未八月江戸

式拾壹石壹斗六升余

於護摩所詰遷化、

右四代覚盈寄附

一 四代覚盈

元文四未十月安養院より入院、

一米津天満宮

一 五代政宥

一 六代大円

右米津天満宮御造立ニ付、別當職兼帯被仰付候、此旨

一 七代隆秀

一 八代政敞

被申渡候様寺社奉行へ可申渡候、

一 九代快巖

一 十一代覚長

出水

29

東光寺

右勅願所之由候御文書有之、京(みやこ)之時分致破壞、今二寺作無之候、古跡無其紛候、前々寺地山野二而候、

今度者仏事之儀馳走令祝着候、就其当寺准家来上者、以上洛次勅願所之事、可執奏之状如件、

八月十日

御判

東光寺上人

30

今度之仏事之儀、馳走尤喜悅候、則義虎江具申候、仍当寺向後准家来之条、相応不可有疎意候也、状如件、

八月十三日

御判

東光寺上人

近衛殿御夫婦御石塔有之、

天正四年十一月十日

(近衛權家) 惠雲院殿准三空大閣

法名

(覺) 岳天大円大禪定門

天正四年十一月十日

高源院殿從三位

法名  
芳巖妙譽大禪定尼

右神社仏閣帳

出水

無量寿院

真言宗

成願寺

本尊阿弥陀 行基菩薩作之由候、

高式拾六石

右久敷古跡之由申伝候、京儀之時分致破壞文書等無之、然処二惟新様以御意快譽へ大隅之内帖佐山田高寺住

持職被仰付、罷移寺家等建立仕、中興開山所之祈願所無其紛候、其砌知行八拾石、其後三ヶ二被召上、当寺如此候、脇坊八ヶ所今二御藏入二罷成候、

右神社仏閣帳

宝池山 無量寿院

出水幸善寺末

成願寺

開基年月不知

本尊阿弥陀座像長ヶ三尺  
行基作

高式拾六石

同五石八斗七升余

寺内仕明方二而、元禄四年未三月御支配御目錄被

下置候、

ノ三拾壹石八斗七升三合九勺六分

一薩州家義虎代祈願所多宝寺ニ而候、又加紫久利大明神・

箱崎八幡両社座主号成願寺、寺高八町并坊中八ヶ寺有

之候、然処文禄年間京前逆乱以後寺塔悉及破壊、其後

高麗御帰陣之節、為御褒美出水四ヶ所御拜領、惟新

様家久忠愍黄門様出水へ御初地入被遊、御帰城後帖佐山田之

正田院快誉法印被召出、出水へ祈願寺御建立有之、快

誉可被召移多宝寺・成願寺両寺之間可然地見合可致言

上旨 上意有之、成願寺之地可然由達 貴聞、慶長五

年庚子八月御再興、以成願寺為祈願寺、高八拾斛被召

付、快誉住職相勤罷居候、然処元和年間寺高三ヶ二被

召上、二十六石相成候、且又寛永十五年戌寅正月依火

災記録等焼失仕候、

一宝乘院殿寂照日到大居士

宝曆十一年巳八月廿九日

故巡撫西国神保带刀灰塚位牌安置

錢五拾貫本末、一式百六拾四文、仏餉料として被下置候、

一利性院殿念置勇大居士

寛政元己酉七月廿四日

西国巡見土屋忠次郎平利置灰塚位牌安置

錢六拾七貫四拾壹文、仏餉料として被付置候、

一同百貫文

右幸善寺四世覚盈為仏餉料寄附、

一 中興開山快誉法印

一 二代快盛

一 四代快伝

一 六代光照

一 八代光皎

一 十代宥恵

一 十二代覚邦

一 十四代宥榮

一 十六代快誉

一 十八代憲恵

一 廿代覚仁

一 達磨山

一 高拾石

龍光禪寺

右龍光禪寺者福昌寺四世在天一派之本寺也、御家八代久豊公義天之御子 忠国之御舍弟用久松夫之御菩提所也、其故者 忠国以御意用久被成御大将、出水郡被成御安堵、其後御息国久為御祝父松夫当寺建立也、其時住持者上方佐々木氏之高僧東月和尚也、望入唐於福昌寺舟待候、福昌寺在天和尚遮而被成御留、福昌寺可有御讓由有御契約、御法孫相統候、然処ニ能登<sup>(総)</sup>惣持寺之住福昌寺へ相当、在天和尚御上之砌、東月和尚被成御伴候、在天和尚於石州被成御遷化、東月和尚伝授相統之故、惣持寺之住一回相勤、当国へ下着之刻、福昌寺者信岩和尚被成住之由被聞召、帰京之時節出水表多宝寺へ一宿也、其比国久多宝寺へ御意候ハ、可然僧於有之者松夫之菩提所可有建立之由節々就被仰聞、可然客僧此表御通之由言上候、則以御使者御留候、然時東月和尚御返事、某事福昌寺五代目之法孫無紛候、雖然此節信岩和尚被成住某失手持、依夫企帰京、乍去福昌寺へ不相劣七堂伽藍之寺於御建立者可留由言上候、從其七堂伽藍有御建立、山号達磨山、寺号ハ龍光寺、開山者福昌寺在天和尚也、法之坊主之故、勸請而在天一派

之本寺也、当寺へ道元和尚虎兪之拄杖・龜毛扠子、通<sup>(幻)</sup>初和尚法衣袈裟、福昌寺三代仲翁和尚度量器、其外諸道具有之、是ハ元来雖為福昌寺之住物、在天和尚惣持寺之住へ御持之故、直ニ龍光寺住物と罷成候、

一龍光寺事ハ松夫存公之御為ニ、御息国久公長祿三年建立被成候、忠辰迄七代御檀那也、開山ハ福昌寺四代在天和尚、其時知行十二町相付候、然処ニ京儀勘落以後、出水代官京衆青木紀伊守殿京都へ申、百石可被相付候由ニ而、先当住為勘忍分高拾石被付置候、其知行ニ式十石從鹿兒島御加増被成、慶長十三年正月より三拾石罷成候、雖然先年廿石被召上、于今高拾石也、寺地ハ前代より野山ニ而候、近比春嶺和尚開地被仕候、  
右神社仏閣帳

出水  
達磨山 西来院 龍光寺

本尊聖觀音 座像高廿壹尺五寸定朝之作

開山福昌寺四世在天但俗姓長谷場氏、長祿元年丁丑三月廿八日遷化、

中興東月文明十一年己亥六月十一日遷化、生国上方

人佐々木氏高僧也、有入唐望於福昌寺船待有之、在天遮而被留、福昌住職可有讓由契約ニ而伝法相続也、然処丹波之永沢寺或能登総持寺ともいふ住番福昌寺へ次来、在天上洛之折節於途中石州遷化、東月永沢寺住一回相勸、薩摩へ下向砌、福昌寺者信岩被住由及聞、不幸哉入唐之縁無之福昌寺住難成不及力、出水表婦郷刻祈願所多宝寺江一宿也、其比桂林様多宝寺へ被仰候ハ、

可然僧於有之者菩提所建立可有之由、就仰客僧此表

通道之由申上候得ハ、則使を以御留被成候、然ハ東

月返答、某事福昌寺五世法孫無紛候、雖然此節信岩

被住由、依之企婦郷候、雖然不劣福昌寺伽藍建立有

之候者可相留由、依之桂林様伽藍建立約有之候、

一寛正二年辛巳当山七堂伽藍建立、東月為開基在天者

法之師故勸請称開山、実当寺ハ在天一派之為本寺者

也、於当寺道元和尚虎刎拄杖・龜毛弘子、通知和尙

之法衣、福昌寺三世竹翁仲応量器有之、如上之宝器ハ

元来雖為福昌寺之什物、在天永沢寺総持寺之住之時

所持給也、故東月於当寺秘藏之為什物也、

一龍光寺殿松夫存公大居士、長祿三己卯二月廿九日御

逝去、御当家九代忠國大岳公御舍弟用久御菩提所也、其

故ハ大岳様以御意松夫大将ニ而出水郡被成御安堵、

其後御息桂林様為御親父存公建立也、前代所領拾貳

町有之、御当代三十石御寄付、其後貳拾石者被召上、

只今者拾石を以如先例法規相勸来候事、

右元祿十五壬午十二月書出、

一義勝院殿禪心良雄大居士

寛政元西七月廿日位牌安置

故西国巡見御使番小笠原主膳源長知 錢九拾九貫文、

仏餉料として被付置候、

一錢百四拾九貫文

一真米四斗

一真粃貳拾表

一赤粃七表

右四行当寺代々之先師并檀方中仏餉料として寄付、

一昌巖松繁庵主 山田民部少輔有榮

〔永敷〕寛文八年申九月二日

一（難山忠助）大翁忠宏庵主

慶長十四年 酉五月十三日

一 雄山良英居士

寛永二年 丑九月廿八日

右式行樺山家先祖之由申伝候、

一 喜翁清歛庵主

寛永十五年 戊寅 正月初一日、鹿兒島住人野元源左衛

門肥州於島原遂戰死、死骸持渡此所へ葬之也、

右四行龍光寺へ墓有之候、

一 大檀那薩州家初代用久公

龍光寺殿松夫道存大居士

長祿三年 己卯 二月廿九日

一 右同二代国久公 一三代成久

一 四代忠興 一五代実久(久意)

一 六代義虎 一七代忠辰

用久より七代墳墓龍光寺(久)塔(久)有之、

一 高拾石

右龍光寺寺高二被付置候、

一 開山在天景龍和尚

一 二代東月承珊、、、

一 三代真間公総、、、

一 四代南善儒方、、、

一 五代太朝雪宗、、、

一 六代蓮嘯從同(國)、、、

一 七代石雲龍從、、、

一 八代春岩文甫、、、

一 九代円心春芳、、、

一 十代春嶺瀬香、、、

一 十一代日山盛晋、、、

一 十二代終天英甫、、、

一 十三代一安英鋪、、、

一 十四代利岩芳禪、、、

一 十五代通峰知微、、、

一 十六代大鼻宗育、、、

一 十七代一天龍峰、、、

一 十八代雪岑養禪、、、

一 十九代無到貫徹、、、

一 二十代円山梅富、、、

一 廿一代正天龍州、、、

一廿二代光山徹明、  
一廿三代

達磨山

龍光寺

開山在天 開基年月不知

高拾石施主薩州国久

右要用集しらへ

出水  
行法山

時宗

專修寺

右御当家八代 久豊之御息用久松夫より四代目忠興之

御息了淵菩提所也、永正七年初祖一遍上人<sup>〔知蓮下毛〕</sup>之末流遊行

二十一世上人<sup>〔知蓮下毛〕</sup>当所御修行之砌、忠興之御息実久当寺御

建立候、開山ハ遊行之二寮其阿弥陀仏、其時知行八町

相付候、当時無之、

31 一当寺仏法興隆之事、尤以神妙也、弥可奉抽宝祚延長之

懇祈之由者、

天幸所候也、仍執達如件、

永祿六年七月十日

左大弁判

專修寺弥阿上人御房  
〔右上包〕  
專修寺慶秀上人御房左大弁淳光  
〔後〕

〔本文書ハ「旧記雜録後編二」二五八号文書ト同一文書ナルベシ〕

32 一当寺之事、可号 勅願所之由被聞召畢、然者弥令專仏

法興隆之沙汰、可奉抽国家安泰国郡無為之懇祈之由者、

天幸所候也、仍執達如件、

正月五日

右中弁判

專修寺弥阿上人

專修寺弥阿上人

右中  
〔此下二字不明〕  
〔弁淳光〕

〔本文書ハ「旧記雜録後編二」九〇二号文書ト同一文書ナルベシ〕

一当寺勅願所之事、実久御息義虎御代、当寺二世柏原氏

阿弥陀仏之時、天正三年近衛殿御下向之刻、至当寺

被遊御貴宿御越年候、其砌可被任勅願所之由被仰出、

同四年之三月勅書頂戴候、

33 今度寄宿之処、種々馳走神妙候、然者当寺之儀、向後

相定勅願所、可為家来之状如件、

▽  
⑩「天正四年」△  
三月三日

御判

▽  
⑩「上包」  
專修寺上人

謹上△專修寺上人 御判有之

(本文書ハ「旧記雜録後編」二八三ノ号文書ト同「文書ナルベシ」)

出水

行法山 一心院

專修寺

本尊三体

阿弥陀 古仏作不知

観音 春日作と申伝候、

勢至 右同断

34 一去天正三年乙亥十二月廿五日関白殿前久様御下向之刻、

一天正三年乙亥十二月近衛関白公前久公なり当国江御下向之

至專修寺被成尊宿、翌年三月十七日鹿兒島江被成、同

節当寺へ被遊尊宿、翌年八月御帰洛之後、同六年被任

七月二日還御之砌、又当寺へ被寄高駕、同八月廿二日

勅願所候、其節御書付有之、且忠興より三代義虎代之

及御帰洛、御滞在中万事被抽馳走之旨、依高感当寺可

故、義虎より之添書有之、

被任勅願所御一翰頂戴之儀、前代未聞、到我等茂大祝

一境内除地竪五十八間 横四十三間 御免地

不過之候、然ハ今年戊寅八月廿二日御備旨被下贈之段

但境内三竿相総反畦相究右之通、

珍重候、右之趣為祝言進此書候、恐々謹言、

一中屋敷卅間 五十三間 六反式歩

天正六年  
八月吉日

(高津)  
藤原義虎

一墓原廿間 五間 壹反六畦廿歩

專修寺

一園山四間 五十四間 七畦六分

右包紙表 專修寺 藤原義虎とあり

一年貢地上田竪廿壹間半 横十三間 九畦拾歩

裏書薩摩守与あり

糶六表壹斗六升、高二して式石三斗五升五合、

(本文書ハ「旧記雜録後編」二九九七号文書ト同「文書ナルベシ」)

右元禄十五年四月專修寺了漢申出、

右神社仏閣帳

行法山 一心院

時祭宗  
遊行上人直末寺  
專修寺

高老石七斗六升四勺三才

正徳二辰年当寺持留高ニ奉願御免被仰置候、

永正七年開基

忠時公御二男前久公御法名  
一專修寺殿了淵善阿弥陀仏

俗名等不相知大隅守

一前久公御石塔当寺江有之候、

一当寺之儀（美）前久公開基年間之儀不相知

一開山遊行上人二之寮其阿上人と号候、

一天正三年近衛前久公当国御下向之砌、当寺之儀被任勅

願所、勅書格護仕候、尤其砌義虎公より住持江為祝言

被成下候御書有之候、

一当寺十二代住持住職之砌、近衛公より六字之名号頂戴

仕候、尤桜井三位殿（氏教）御添簡有之候、

一遊行上人巡国之砌ハ止宿之地ニ罷成候、

右寛保 戌五月書出、

35

先度到和泉越之刻、懇意之儀喜悅候、殊二親之弔以下  
無油断馳走之趣、專修寺雜談候、誠ニ頼母敷令祝着候、  
弥頼入候、明日三日及上洛候条、御約束之事則相調、

以好便專修寺迄可差下候、相応之儀尚以不可有疎意候  
也、状如件、

霜月二日

東光寺上人

御判

36

猶々此面々去年拙者氣遣之刻、成忠節候付無疎意候  
間、与風其意候、对筌我衆も取成専一ニ候、

久不能書信候、仍此沙門衆其方逗留中指南可為祝着候、

将又去年已来天下之成下不辺之次第候、委曲彼口上ニ

可在之候、能々可被尋候、急候条一紙如此候也、穴賢

々、

二月廿日

御判

東光寺

專修寺

37

猶々不得御疎敷候、逗留中懇意之儀共更ニ無忘脚候、  
自然似合之用心不可有疎意候、

芳札令披見候、仍彼兩寺之事則調下候、尤珍重ニ候、

将又此一包如書中相届候、懇志之到祝着候、次愚身事

右符不混自余別而入魂之儀候、於時宜可心易候、猶委曲貞知可申越候也、

卯月

御判

東光寺

專修寺

尚々<sup>(輪)</sup>倫旨之儀、色々拙者令苦勞相調下候、先々目出度存候、申度儀千万如此候、已上、

預珍札拜見本望ニ存候、誠其後者不申承候、御上洛已後以御使可被仰処ニ、今程海陸共ニ以通路無之故、不及是非候、其許へ御滯座之刻、別而御馳走之事更各無<sup>(又)</sup>忘脚事候、抑被仰上候一ヶ条之事、則唯今申調下申候、珍重ニ存候、口宣事柳原中納言<sup>(淨光)</sup>殿被遊出候条、以後便御札可然候、次

<sup>(近衛朝久)</sup>御家門様之御事、位長別而御馳走候之条可御心易候、自然於爰許相応之御用等可被仰上候、先々金御弁目御進上候、必御書付致披露候、被寄思召御祝着之由可申進候、猶何形左ニ申合候間不能詳候、恐々謹言、

貞知判

四月七日

伊勢因幡守

專修寺

東光寺

高答

39

御狀之旨具令披露候、誠去年者不慮ニ御家門様被成御下国候処、種々御馳走御祝着候、就其勅願所之事内々被仰入候、只今左様之儀被相濟処ニ、去十二日□公様被成御元服、明日御参内之儀ニ付、公私万端御取詔之儀候条、以後便可被仰下候、殊ニ御二親御石塔被立候旨、重々御懇之儀共難被仰尽候由、能々可申由候、右ニ如申無正体取詔如此候、猶期後音時候、恐々謹言、<sup>(天正五年)</sup>閏七月十九日

伊勢因幡守

專修寺

貞知判

東光寺

回章

40

去天正三年乙亥十二月廿五日到当所和泉庄、関白殿前久様御下向之刻、貴寺江被成尊宿之处、種々被抽御馳走候、依尊感專修寺之事可被任勅願所之段被仰出、

41

今年天正六戊寅 (補) 御倫旨御頂戴之儀御前代未聞、其身之御規模永代之龜鑑後臨候、仍從殿様為御悅被成御書候、彼是御大慶奉察候、万賀以参上可申入候、猶可得其意候、恐惶謹言、

天正六戊寅

八月吉日

(市来)  
家諸判

則武判

忠雄判

専修寺

参御同宿中

(本文書ハ一田記雜録後編一〇九九六号文書ト同一文書ナルベシ)

右上包宛書専修寺参御同宿中忠雄と有之候、右上包裏書(佐多)大和守・寄田内記允・市来(家語)加賀守、右三人名書あり、

関白殿様御下向之事、天正三年乙亥十二月廿五日、御名乗前久と奉申、御供之人數

伊勢因幡守殿

貞知

因州被官

湯浅掃部助

小者岩松

竹田竹松殿

小者三郎

福寿軒

小者吉六

二俣左馬助殿

倉光主水助殿

森弥十郎殿

大塚新二郎殿

関白殿様御中間

与左衛門尉

天正四年三月十七日ニ鹿兒島へ御下向候、同年七月二日從鹿兒島御上候而、同年八月廿二日如八代之御上候、天正四年二月十四日之夜於川原被召出、殿様御面を以高城下之坊被下候、御前ニ市来加賀守殿御座候而御承候、関白殿様御下向、前代未聞ニ候、御寄宿被成候御事、到寺家後代可相殘為証拠、下坊被仰付候由 上

意候、

天正四年十月末（伊集院久造）二抱節八代、江被召候而罷上、霜月初罷

下候、（近衛前久）関白殿様より瀬崎川原毛御馬被下候、於八代

之事也、抱節も御刀一腰・御馬一疋 御家門様へ致進

上候、又 御家門様より御書被成下候事、鹿見島・八

代・豊州、又従京都数々之御書令頂戴候、

（本文書ハ、「旧記雜録後編」二八二五号文書ト同一文書ナルベシ）

右書付、其節書留おかれ候由ニ而、

（繪） 偷旨箱ニ入付有之候、

一六字名号近衛禪閣基熙公御筆一幅

右御先祖様当寺ニ付、段々由緒有之候訳を以御染筆

為被遊候由ニ候、添状式通有之候付、左ニ書写上

候、

先年遊行上人貴国修行之砌、拙寺随逐候而其寺逗留候

間、古来之御文書有之、珍重拝見之上写取帰洛候後、

内縁ニ付 近衛禪閣備高覽候処、六字名号御染筆被成

下候、御名之字脇付奉願置候内、御異例故無其儀残念

奉存候、尤無疑滯物候得共、猶為後代桜井三位殿御添

翰申受、今度乍延引幸便候条差下候、貴刹御納候様令

存如是御座候、御頂戴可有之候也、

八月 日

法国寺

覚阿判

専修寺

弥阿御房

43

六字名号禪閣基熙公御筆

右遂一覽候処、正筆無狐疑候也、頓首々々、

二月廿一日

（桜井） 氏敦

右御状捻ニ而、宛書弥阿房氏敦と有之候、

天正四年十一月十日マコ 惠雲院殿准三空太閤天大円大禪定門

（近衛種家） 高源院殿天正四年十一月十日 二位芳巖妙誉大禪定尼

（三下七） 以上都而明和八年卯四月書出シ、

要用集しらへ 開山其阿上人永正七年創建

正親町院勅願所 御目見等被仰付寺格ニ而無御座候、

一 当寺開山より六世迄不相知

一 七世阿弥陀仏

一 八世相阿弥仏

一 九世覚阿弥仏

一 十世但阿弥仏

一 十一世興隆院其阿廓天

一 十二世外龍軒相阿通外

一 十三世洞雲院其阿上人実応

一 十四世東陽院其阿上人天順

一 十五世興徳院覚阿觀興

一 十六世常住庵惟天

一 十七世常住庵円頭太融

一 十八世寺司董阿興龍

一 十九世文阿見哲

一 二十世常住庵相阿元昌

無量山

浄土宗白旗之末流  
浄円寺

寺地御免

一文祿三年甲午中秋、筑後国稷津之正学院住持上蓮社雲

誉上人者、隅州帖佐之願成寺為見舞当国下向、其比願

成寺蓮誉所々結寺院浄土宗門建立有之時節故、正学院

雲誉者願成寺蓮誉之叶素意、今依建立浄円寺、開山蓮

社雲誉上人、中興上蓮社雲誉上人、

一本尊中将姫縫阿弥陀一幅

寛文五年乙巳十一月、浄円寺七代之住持晧誉代霊像堂

修造仕度、右阿弥陀之縁起申立、御分國中奉加之御訴

詔申上、左之通被仰付候、

一 銀子壹枚

薩摩守様

一 青銅三百疋

一 同二百疋

一 鳥目壹貫四百七拾文

一 同二貫百七拾文

一 銀子拾式匁 御台所・御子様方・御女房衆齋銭

右之外御大名方并諸

一 錢百貫文

右仏餉料として檀下より寄附、

一三世澄譽 一四世雲譽

一五世岳譽 一六世讚譽

一七世曉譽 一八世樂譽

一九世親譽 一十世欣譽

一十一世勇譽 一十二世海譽

一十三世光譽 一十四世際譽

一十五世勇譽 一十六世眼譽

一十七世晉譽 一十八世海譽

一十九世進譽 一廿世承譽

右文化十一 戌十二月書出、

安置可致旨誓願ニ依て罷下、則杉本寺造立仕候而覚盈

隠居仕罷居候、其後 継豊公御病中ニ鹿兒島へ被召寄、

於文殊院御祈禱仕候様被仰付、御祈禱仕申候、其上先

年妙心院様加紫久利御参詣之節、当寺へ御入有之難有

被仰付候、右ニ而 宥邦院様 慈徳院様尊牌御安置申

上度奉願候処、勝手次第可仕旨被仰渡、則奉安置候、

一 錢六百貫文

右尊牌御仏餉料として覚盈寄附、

一同百貫文

右前々より仏餉料として寄附、

一 中興覚盈法印

一 二世覚真 一 三世覚長

一 四世憲 一 五世覚鎮

右文化十一 戌十二月書出、

大平山 龍光寺末 大通寺

開山龍光八世春岩

慶長三丙申八月十三日遷化

当寺大檀那薩州家六代義虎大通亥広庵主 位牌所

龜伏山 医王院 杉本寺

寺地御免

開山安明法印

開基年月等不知

一 中興開山幸善寺四世覚盈、右寺地永々破壊ニ而候故、

延享年間覚盈江戸護摩所詰之節、宗信公御庖瘡被遊

御祈願可仕旨被仰渡刻御祈願仕、御庖瘡御無難ニ而成

就仕候、右之節願望成就候ハ、寺家一字建立仕、諸仏

天正十三年酉七月廿五日

一薩州家七代忠辰

通津宗要大居士

年号不知三月廿八日

一義虎繪像壹幅有之

一米式石

右義虎菩提所之故、為施餓鬼米手形を以年々御物よ

り被成下候、

一錢百七拾貫文

右代々先師并檀方中より仏餉料として寄附ニ而候、

一寺地御免

一開山春岩文甫和尚

一二代円応春峰、、、

一三代体月舜真、、、

一四代松有学在

一五代松岩永現首座

一六代涼室全竟和尚

一七代散海法円和尚

一八代寛海慧仁蔵司

一九代唱独吼(ア、イ)和尚

右文化十一戌十二月書出、

神社仏閣帳

太平山

龍光寺末

大通寺

米式石ハ毎年被給候、

右者古來依為義虎菩提所、忠辰天正十五年建立、

龍光寺末

見性庵

開基月浦文公記室禪師、明応七年戊午霜月廿六日遷化、

二代仙叟 四代芳林

一中興開山終天甫但龍光寺十二世也、寛文七年丁未二月

廿一日遷化、

一見性庵殿巨海妙性大姉御牌所也、文明十一年己亥蜡月

十二日御逝去、

一檀那梅室定香庵主

御牌所也、但俗名島津常陸守殿、号野田若宮大明神、

年号不知七月八日逝去也、

一花春妙香大姉御牌

但竜伯様御簾中

十一月十八日御逝去

一 寺地御免

龍光寺末

報恩寺

開山龍光七代石雲從

七月十一日遷化年号不知

一 施主檀那無之、

龍光寺末

源久院

開山龍光寺六世蓮囃固

永祿四年辛酉四月廿三日遷化

一 源久院殿昌嶽久公大禪伯

(馬津久意)

義虎之御親父也、天文二年壬丑七月廿二日御逝去也、

右同

福全寺

中興開山龍光十三代一安甫、延宝七己未十月朔日遷化、

一 福全寺殿雲峰妙朝大姉

義虎公之御懷也、忌日七月十一日年号不知、

右同

長松寺

開山龍光九世円応方

(芳力)

慶長十三年丙未八月六日遷化

(馬津忠興)

一 長松寺殿隆嶽興公大禪定門

薩州四代目之御牌所也、忌日三月十九日年号不知、

一 前代ハ高五町被召付置候と申伝候、

一 長松寺事前寺院、元祿元年丁卯四月上旬寺地山野ヲ

申受、寺地御免地ニ而候事、

龍光寺末

永福寺

中興開山龍光五世太朝宗

永祿六年癸亥正月十八日遷化

一 檀那松夫存公大居士

長祿三年己卯二月廿九日死去

一 苗護山永福寺事

加支久利大明神御菩提所と申伝候、其来由ハ大明神為

御懷御建立之由候、自古于今毎年二月三日加支久利大

明神ニ而打植之御祭ニ從永福寺山苗柴取来申候、依其

山号苗護山と申来候、

右同

桂山寺

開山龍光十世春嶺香

遷化九月廿七日年号不知

(馬津忠隣)

一 檀那桂山昌久大禪定門

義虎之御子息と申伝候、

以上都而元禄十四己未二月書出、

脇元  
江月山

伊集院広濟寺末  
円通寺

開山交甫寛文十一辛亥九月十五日示寂

前住以来至現住守潭六世

右享保六丑十二月書出、

出水

御目見地

幸善寺

真言京都知積院末御免地  
高百九十八石御物御修甫

御成川寺

幸善寺末御免地

金龍院

右同末御免地

成願寺

右同末御免地高三拾壹石  
寺社方合力

杉本寺

成願寺末御免地

愛染院

右同

御目見地  
竜光寺

曹洞福昌寺末御免地  
高拾石寺社方合力

大通寺

竜光寺末御免地

見性庵

右同御免地

源久院

右同

長松寺

右同

永福寺

右同

福禪寺

右同

桂山寺

右同

報恩寺

右同

専修寺

時衆藤沢山末御免地無高寺社方合力

円通寺

臨濟広濟寺末御免地

浄円寺

帖佐願成寺末御免地

(以下「鹿児島県史料旧記雜録拾遺」神社調三へ続ぐ)



文  
書  
目  
録

## 例言

- 一 本巻に収めた「神社調 薩摩国之部二六」に収載の文書に、それぞれ掲載順に通し番号を付して収録した。
- 一 本目録は、文書その他、棟札・金石文等を記載した。
- 一 掲載史料には、番号その他、年月日、名称を記載した。
- 一 掲載史料の年月日については、原史料記載の年紀はそのままとし、補筆の年紀は「」で囲んだ。また疑義の示されているものは「」で囲んで区別した。
- 一 年紀を欠くものうち、推定しうるものは（）で示した。
- 一 月の異称は数字に改めたが、正月、朔日、晦日等はそのまま残した。
- 一 原則として『鹿児島県史料 旧記雑録』及び『同 旧記雑録拾遺』にならない文書等の名称を付けた。
- 一 重複により本文を省略した文書等には※印を付した。

番号	年	月	日	文書名	番号	年	月	日	文書名	
薩摩国之部二										
日置郡										
伊集院郷										
竹林山無量寿院龍泉寺(時宗藤沢山末寺)										
一	天文十八年	四月	廿六日	龍泉寺棟札	一六	元和	六年	六月	廿六日 松齡貞庵主弘一周忌 之塔婆銘	
千秋山雪窓院(田布施常珠寺末)										
二	永禄	十年	十二月	吉日	雪窓院棟札	一七	元和	七年	六月	廿五日 三年忌之塔婆銘
三				雪窓院鐘由緒書	伊城山円通庵(妙円寺末)					
四				宝莊嚴寺鱧口銘	一八	嘉永	四年	三月	廿四日 円通庵文書	
大勝山聖御院宝莊嚴寺(大乘院末)										
五	嘉靖卅八年	正月	十一日	中山王書状	1	応永	四年	十一月	二日 伊集院久氏寄進状	
六	天正十五年	時正	吉日	梅岳寺在隣添状	2	応永	四年	十一月	二日 伊集院久氏寄進状	
七	寛永	元年	九月	十七日	3	応永	二年	六月	十八日 伊集院觀了氏讓状	
八	寛文	十年	四月	十一日	4	応永	二年	十一月	廿日 伊集院觀了氏讓状	
九	寛文	十年	十二月	廿四日	5	応永	七年	二月	三日 伊集院道心寄進状	
一〇	寛文	十年	十二月	廿四日	6	応永	七年	八月	十八日 伊集院道心寄進状	
一一	寛文	十年	十二月	廿四日	7	応永	七年	二月	三日 伊集院道心寄進状	
法智山妙円寺(福昌寺門中 曹洞宗丹州永沢寺末寺)										
一二	寛永	八年	十月	廿三日	8	「正平十五年」 二月十一日 伊集院道忍國書状				
一三	寛永	三年	十月	吉日	9	応安	七年	十一月	廿三日 伊集院觀了氏讓状	
一四	慶長	九年	十一月	廿七日	10	永享	六年	十二月	十五日 伊集院熙久寄進状	
一五				惟新義追悼記	11	永享	八年	四月	十六日 伊集院熙久寄進状	
※										
二〇	永禄	十三年	正月	十一日	泰定山広濟寺(臨濟宗五山派・京都瑞竜山大平興國南禪寺末)					
二一	天正	廿年	九月	六日	広濟寺由緒書					
二二	天正	廿年	九月	六日	島津義久袖加判町田久倍書状					
二三	慶長	十八年	十月	廿三日	島津義久袖加判広濟寺領目録					
伊勢貞昌・三原重種連署書状										

二四	十一月 五日	伊勢貞昌書狀	10	應永十一年	八月廿二日	伊集院熙久・頼久連署 寄進狀
二五	正月十一日	島津義久公帖	11	應永十五年	四月十三日	伊集院頼久寄進狀
二六	三月 一日	島津伯圃久書狀	12	應永廿五年	十二月十三日	伊集院道応頼寄進狀
二七	三月 二日	島津義久書狀	13	應永廿五年	十二月十三日	伊集院道応頼寄進狀
二八	三月 一日	村田経定書狀	14	應永廿九年	八月十八日	伊集院道応頼久寄進狀
二九	三月 一日	伊集院忠金書狀	15	應永卅一年	十二月十八日	久重証狀
三〇	三月 一日	川上意釣忠書狀	16	正長 二年	八月廿二日	伊集院熙久・住定山桃 隱連署定書
三一	六月廿七日	中山王書狀	17	永享 六年	六月廿六日	伊集院為久熙証狀
三二		廣濟寺由緒書	18	永享 六年	九月 廿日	沙弥天用寄進狀
三三		廣濟寺由緒書	19	永享 六年	十月 五日	伊集院熙久寄進狀
三四	二月 六日	島津忠恒書狀	20	永享 六年	十月廿九日	伊集院熙久寄進狀
三五	六月 十日	新納四郎外二名連署達 書	21	永享十一年	二月 五日	伊集院熙久禁制
三六	十月 十日	廣濟寺文書	22	永享十一年	三月 二日	藤原久景寄進狀
	三月十五日	沙弥某下文	23	嘉吉 元年	十二月十三日	伊集院熙久証狀
1	三月十五日	伊集院助久書下	24	嘉吉 三年	八月廿八日	伊集院熙久書狀
2	十一月廿七日	伊集院道忍国外三名連 署寄進狀	25		十月 五日	伊集院熙久書狀
3	五月 六日	伊集院頼久・久氏連署 宛行狀	26		九月廿七日	伊集院熙久書狀
4	八月十七日	廣濟寺釈迦本尊銘	27	長祿 四年	十二月廿九日	島津忠国公帖
5	九月十四日	清久・有久連署寄進狀	28		十月 二日	島津義久等詠草
6	正月十一日	伊集院頼久・久勝連署 寄進狀	29	寬正 五年	八月吉祥日	廣濟寺鐘銘
7	十二月廿六日	廣濟寺仏殿兩牌銘				
8	四月十三日	伊集院頼久讓狀				
9	十二月廿七日					

三七八 寬永 三年 七月十八日  
 諏訪大明神社  
 多賀大明神社(内田坊境内)

三九 永禄 元年 二月 吉日 島津貴久寄進状

薩摩国之部三  
日置郡

市来郷

一 市来寺地改

稻荷大明神

二 応永卅三年 正月下体吉日 稻荷大明神鐘銘

三 天正 十年 八月 吉日 稻荷大明神棟札

四 市来郷神社仏閣書出

法城山龍雲寺(心岩派)

五 応永廿三年 九月 吉日 龍雲寺鐘銘

六 寛正 三年 十一月十九日 島津立久寄進状

七 文明 五年 八月十五日 島津立久寄進状

八 天文十七年 三月 朔日 島津貴久寄進状

九 天文 廿年 七月 十日 島津貴久寄進状

一〇 文明 三年 七月廿一日 島津立久制札

※ 弥陀山来迎寺

一一 天文十七年 三月 朔日 島津貴久寄進状

一二 万年山金鐘寺(曹洞宗能州総持寺末)

一三 寛文 二年 九月 六日 金鐘寺建立訴訟書

一四 永禄 六年 四月十一日 金鐘寺棟札

串木野郷

一五 東嶽熊野権現 三月 七日 能州総持寺五院申状

寛永廿一年 四月 二日 東嶽三所大権現棟札

西嶽熊野権現

一六 慶安 四年 三月吉辰日 西嶽三所大権現棟札

冠嶽山頂峰院鎮国寺(真言宗)

一七 慶安 四年 八月 吉日 冠嶽山持仏堂棟札

一八 八月廿四日 頂峰院文書

1 正応 五年 十二月廿一日 島津忠宗施行状

2 永仁 五年 十月廿八日 大江景遠外二名連署奉免状

3 嘉元 三年後十二月十五日 島津道義宗書下

4 康安 二年 八月廿五日 島津師久補任状

5 貞治 六年 七月廿四日 島津氏久立願文

6 応安 六年 九月廿四日 島津玄久氏書状

7 至徳 二年 三月十二日 島津伊久補任状

8 応永十四年 十月十一日 島津孝久寄進状

9 応永十四年 二月 九日 島津忠朝寄進状

10 応永十四年 八月廿一日 島津忠朝立願文

11 応永十九年 二月廿八日 島津道世朝安堵状

12 長禄 三年 八月 六日 伊集院熙久寄進状

岩水山良福寺(禪宗曹洞派・本寺備中国道祖児村永祥寺末寺)

一九 享和 二年 八月十三日 廻勤寺社方取次東郷次郎作調書

二〇 良福寺古書留

1 「元禄 四年」 八月十八日 良福寺書付

2 明和 六年 四月廿三日 心翁寺康天書付

3 天明 三年 十一月十一日 良福寺春耕書付

二一 享和 二年 八月十六日 串木野郷郷士年寄書付

薩摩郡 二二 串木野寺地改

百次郷 二三 百次寺地改

山田郷 二四 山田寺地改

薩摩国之部四

薩摩郡 隈之城郷

川内山福寿院称名寺(相州藤沢山清浄光寺末)

一 享保十八年 二月廿一日 覚眼申状

二 隈之城寺地改

高江郷 三 高江寺地改

平佐郷 四 (九月廿六日) 原田市兵衛届書

五 文政 五年 三月 内藤仲左衛門届書

六 平佐寺地改

伊佐郡 佐志郷 七 佐志寺地改

黒木郷 八 黒木寺地改

薩摩郡 樋脇郷

入来郷 九 樋脇寺地改

一〇 入来寺地改

重来明神 承応 四年 二月吉曜日 神祇管領長上吉田兼起 宗源宣旨

一一 寛文十二年 四月廿三日 快運祝詞

一二 明暦 元年 二月 吉日 重来明神棟札写

一三 明暦 元年 二月 吉日 重来明神額裏書

一四 享保 廿年 二月廿四日 重来明神棟札

一五 若宮明神 弘治 三年 十二月 五日 若宮大明神棟札

一六 伊佐郡 蘭牟田郷 一七 蘭牟田寺地改

一八 大村郷 大村寺地改

一九 薩摩郡 中郷 享保十六年 四月吉辰日 大村下手村石塔銘

二〇 東郷 中郷寺地改

森蔵山西前寺(時衆宗) 慶長 四年 三月 二日 西前寺棟札

二一 伊佐郡 東郷寺地改

二二 伊佐郡 東郷寺地改

鶴田郷

諏方上下大明神

二三 元和 五年 九月 吉日 諏方上下大明神棟札

紫尾三所権現

二四 慶長十四年 十一月 吉日 紫尾三所権現棟札

二五 慶長十一年 八月 朔日 島津忠長・樺山久高連署書下

古紫尾大明神

二六 延宝 三年 九月 吉祥日 古紫尾大明神棟札

二七 鶴田寺地改

宮之城郷

二八 宮之城寺地改

愛宕大権現

二九 慶長 三年 十一月 八日 愛宕大権現棟札

陽広山曇秀寺

三〇 応永卅五年 十二月 廿四日 曇秀寺鐘銘

少林山大道寺

三一 正保 元年 八月 時正日 大道寺鐘銘

高城郡

水引郷

三二 水引寺地改

三三 文化十一年 六月 廿八日 御陵由来

三四 八幡新田宮(龜山) 慶長 七年 九月 廿八日 新田八幡宮棟札

三五 慶長 十七年 八月 吉日 新田八幡宮棟札

三六 慶長 七年 二月 六日 新田八幡宮太刀目録

三七

慶長 六年

八月 廿四日

新田八幡宮太刀金具物目録

薩摩国之部五  
高城郡

水引郷

八幡新田宮(龜山)

一 慶長 七年 四月 三日 藤崎善介覚書

二 天正 二年 十一月 十七日 権執印良慶・宗盛言上

三 建久 八年 十二月 廿四日 内裏大番役支配注文

四 永仁 二年 七月 卅日 島津忠宗警固番役覆勘状

五 永仁 三年 四月 十六日 島津忠宗警固番役覆勘状

六 建武 三年 三月 廿八日 足利尊氏御教書

七 建武 三年 四月 廿八日 執印友雄着到状

八 曆応 三年 五月 十五日 島津貞久軍勢催促状

九 観応 二年 十月 二日 尾張義冬書下

一〇 観応 三年 六月 五日 足利義詮軍勢催促状

一一 文和 二年 三月 十日 足利義詮御教書

一二 文和 二年 四月 廿六日 一色直氏軍勢催促状

一三 文和 四年 三月 三日 島津師久書下

一四 貞治 七年 二月 三日 島津氏久契状

一五 貞治 七年 六月 十七日 島津氏久書状

一六 慶長 六年 正月 五日 島津忠国書状

一七 慶長 六年 八月 廿四日 島津惟新義願文

一八 慶長 六年 正月 十二日 島津家久書状

一八	正月 元日	樺山久高書狀	三六	文明 二年	十月 九日	島津国久書下
二〇	四月 八日	島津吉貴寄進狀	三六	弘治 三年	十二月 吉日	島津陽久 <small>義</small> 書狀
二一	七月 廿六日	島津吉貴太刀寄進狀	三七		十一月廿四日	島津忠国書狀
二二	十二月 三日	前右大將家政所下文	三八		正月十七日	島津国久書狀
二三	八月 十五日	酒匂久景注進狀	三九		五月 四日	島津忠国書狀
二四	四月 廿七日	九鬼嘉隆外三名連署禁制	四〇		正月十二日	島津忠国書狀
天満宮	国分寺		四一		二月 三日	島津忠国書狀
二五	延享 四年	薩摩国天満宮・国分寺所司神官等申狀抄	四二		二月 三日	蓮花寺置文
二六	四月 廿七日	田村岩右衛門申狀	四三	元龜 三年	九月 五日	足利義昭公帖
医王山正智院泰平寺(真言宗)			四四	永祿 七年	四月 二日	足利義輝公帖
二七	曆応 一年	足利直義御教書	四五	永祿 二年	四月廿三日	足利義輝公帖
二八	八月 十八日	足利直義寄進狀	四六	寛永 六年	十月廿六日	渋谷良重奉書
二九	九月 三日	島津義久袖加判町田久倍書狀	四七	寛文十二年	二月 七日	島津家久公帖
三〇	九月 三日	島津義久袖加判泰平寺領目錄	四八	昌岳庵(蓮華寺末)	十一月廿八日	島津光久公帖
三一	十二月 八日	島津惟新 <small>義</small> 寄進狀	四九	弘治 三年	十二月 吉日	島津陽久 <small>義</small> 書狀
三二	五月 十二日	泰平寺薬師堂棟札	五〇	永正 十年	十月 吉日	阿久根院水田坪付
三三	二月 八日	泰平寺薬師堂推鐘銘	五一	永正十七年	六月 四日	大同寺坪付
高城郷			五二			阿久根水田坪付
出水郡			松向山西安寺(帖佐願成寺末)			
三三			五三	慶長十三年	二月 三日	島津忠長・比志島国貞連署書下
阿久根郷			五四		十二月 二日	渋谷重将書狀
瑞香山蓮華寺(臨濟宗五山派・伊集院広濟寺末寺)			五五	元祿 十年	二月十三日	阿久根諸寺添書
			五六			阿久根寺地改

文書目録

野田郷

宝寿山極楽寺（感応寺末）

五七 正月十一日 島津道鑑貞久書狀

五八 鎮国山感応寺（臨濟宗五山派・京都東福寺末）

五九 貞治 三年 五月十五日 足利義詮公帖

六〇 応安 五年 九月 四日 足利義滿御教書

六一 康暦 二年 九月 四日 足利義滿御教書

六二 六月 朔日 室町將軍家御教書

六三 六月 朔日 島津氏久祭文

六四 六月 朔日 足利義滿公帖

六五 六月 朔日 室町將軍家御教書

六六 六月 朔日 島津久世証狀

六七 六月 晦日 足利義持公帖

六八 嘉吉 二年 八月十三日 伊作久清寄進狀目録

六九 文明 二年 二月十五日 島津国久寄進狀

七〇 明応 七年 十二月十四日 藏人左少弁藤原某奉口宣案

七一 明応 五年 十月廿九日 室町將軍家御教書

七二 永正十六年 五月十五日 足利義植公帖

七三 享祿 三年 十月十七日 足利義晴公帖

七四 天文 五年 八月十二日 足利義晴公帖

七五 天文 九年 十一月十六日 島津実久公帖

七六 天文十六年 五月 七日 足利義晴公帖

七七 七月 晦日 足利義晴公帖

七八 「永祿十三年」 六月 廿日 中山王書狀

七九

八〇

1 元祿 三年 八月十一日 島津久元外二名連署書狀

2 康永 三年 十月 五日 感応寺文書并公文等写

3 嘉吉 二年 九月 廿日 雲山和尚像讚

4 (嘉吉 二年 七月) 感応寺文書目録

5 嘉吉 二年 七月 千手觀音莊嚴勸進帳抄

6 嘉吉 二年 七月 感応寺大般若修覆勸進帳抄

7 嘉吉 二年 七月 帳抄

8 嘉吉 二年 七月 帳抄

9 嘉吉 二年 七月 帳抄

10 嘉吉 二年 七月 帳抄

11 嘉吉 二年 七月 帳抄

12 嘉吉 二年 七月 帳抄

13 嘉吉 二年 七月 帳抄

14 嘉吉 二年 七月 帳抄

15 嘉吉 二年 七月 帳抄

16 嘉吉 二年 七月 帳抄

17 嘉吉 二年 七月 帳抄

18 嘉吉 二年 七月 帳抄

19 嘉吉 二年 七月 帳抄

20 嘉吉 二年 七月 帳抄

21 嘉吉 二年 七月 帳抄

22 嘉吉 二年 七月 帳抄

23 嘉吉 二年 七月 帳抄

24 嘉吉 二年 七月 帳抄

25 嘉吉 二年 七月 帳抄

26 嘉吉 二年 七月 帳抄

27 嘉吉 二年 七月 帳抄

28 嘉吉 二年 七月 帳抄

※ 八三 応仁 二年 十一月十五日 沙汰道仙寄進状

※ 八四 文明 二年 二月時正日 坪久田嘉紹寄進状

※ 八五 文明 十年 十月十五日 島津国久寄進状

※ 八六 延徳 四年 彼岸月 吉日 徹堂証状

八七 弘治 三年 二月 九日 円覚光璞・高城良真連署書下

八八 四月十六日 中正書状

八九 三月十七日 中正書状

九〇 頓頼送別詩

九一 某坪付

※ 九二 (文明十五年) 六月十七日 某坪付

※ 九三 十月 吉日 感応寺田帳之日記

九四 六月 廿日 中山王書状

九五 元和 五年 三月十三日 樺山久高知行名寄目録

※ 九六 龜翁山西性院山内寺(天台宗江州比叡山延曆寺止観院末寺) 十一月廿八日 島津得仏守寄進状

※ 九七 九六 応永十三年 六月廿八日 山内寺院主某讓状

※ 九七 正月十一日 島津道鑑<sup>貞</sup>書状

薩摩国之部六

出水郡

野田郷

一 野田寺地改

高尾野郷

二 高尾野寺地改

出水郷

箱崎八幡宮

三 永祿 五年 九月十五日 箱崎八幡宮棟札

四 永祿 六年 九月 廿日 箱崎八幡宮棟札

五 慶長 十七年 九月 吉日 箱崎八幡宮棟札

六 正保 元年 四月 吉祥日 箱崎八幡宮棟札

七 寛文 九年 九月 吉日 箱崎八幡宮棟札

八 貞享 五年 三月 二日 箱崎八幡宮棟札

九 加志久利大明神 五月廿一日 本田甚次覚書

一〇 寛永 二年 正月 種子島久基申渡状

一一 正保 三年 九月 廿六日 加紫久利大明神棟札

一二 寛文 三年 七月 廿三日 加紫久利大明神棟札

一三 寛文 六年 三月 廿八日 加紫久利大明神棟札

一四 貞享 三年 八月 十九日 加紫久利大明神棟札

一五 諏方上下大明神(武元村之内麓 杉) 八月 廿八日 諏訪上下大明神上宮棟札

一六 応仁 二年 二月 廿八日 諏訪上下大明神下宮棟札

一七 元和 七年 七月 廿八日 諏訪上下大明神棟札

一八 寛永 十三年 八月 大吉日 諏訪上下大明神若宮棟札

八幡宮(知識村之内名護浦)

一九 天明 六年 八月 廿四日 八幡宮棟札

天満大自在天神(山崎)

二〇 「天正十八年」 八月 吉日 天満大自在天神神体鏡銘

住吉

文書目録

二一	永禄 九年	八月彼岸日	天神・住吉両社棟札	三九	(天正 五年) 閏七月十九日	伊勢貞知書状
山崎天神						
二二	元禄 七年	二月 吉日	天神社三拾六歌仙裏銘	四〇	天正 六年 八月 吉日	市来家諸外二名連署書
天満大自在天神(小松)						
二三	慶長十六年	五月吉祥日	天満天神宮棟札	四一		専修寺住持覚書
山之神(栗毛野)				四二	八月	法国寺覚阿添状
二四	「天正 九年」十一月廿五日		山之神社棟札	四三	二月廿一日	桜井氏敦書状
薬師(杉)				四四		出水寺地改
二五	「応永十二年」	九月 八日	医王寺薬師如来宝前鰐口銘			
二六	慶長 七年	四月 吉日	薬師如来宝前鰐口銘			
加志久利山惣持院幸善寺(真言宗京都智積院末寺)						
二七	享保 六年 十一月		直末寺証文写			
二八	天明 八年 八月		島津久邦申渡状			
東光寺						
二九		八月 十日	某書下			
三〇		八月十三日	某書下			
行法山専修寺(時宗)						
三一	永禄 六年	七月 十日	正親町天皇繪旨			
三二		正月 五日	正親町天皇繪旨			
三三	(天正 四年)	三月 三日	近衛前久書下			
三四	天正 六年	八月 吉日	島津義虎書状			
三五		十一月 二日	近衛前久書下			
三六		二月 廿日	近衛前久書状			
三七		四月 二日	近衛前久書状			
三八		四月 七日	伊勢貞知書状			

鹿児島県史料編さん関係者

史料編さん 東京大学  
顧問 史料編纂所所長 本郷 恵子

東京大学名誉教授 保谷 徹

九州大学名誉教授 安藤 保

志学館大学教授 原口 泉

委員 三木 靖 日隈 正守

丹羽 謙治 佐藤 宏之

塩満 郁夫 尾口 義男

堂満 幸子

鹿児島県歴史・美術センター黎明館

館長 鎮寺 裕人

副館長 小村 浩信

調査史料室長 栗林 文夫

学芸専門員 市村 哲二

資料調査員 藤崎 光穂 山橋 元正 樹

原田 紗代子

鹿児島県史料

旧記雑録拾遺 神社調二

令和 5 年 3 月 10 日 発行

非売品

編集 鹿児島県歴史・美術センター黎明館

発行 鹿児島県

印刷 株式会社 ぎょうせい

